

癌の治療法は完成していた

At last you can read ---- **THE RIFE REPORT**

THE CANCER CURE THAT WORKED!

FIFTY YEARS OF SUPPRESSION

Written by **BARRY LYNES**

"A fascinating account" — Alan Cantwell, M.D.
"Masterpiece of journalism" — Roy Kupsinel, M.D.
"This book is superb" — Florence B. Seibert, Ph.D.

50年間封印されてきた
ライフのガンの治療法の研究の報告がついに、
解禁された。

Written by **BARRY LYNES**

バリーLYNES 著 三上 皓也訳

「驚くべき報告」—アラン・カントウエル医学博士
「ジャーナリズムの傑作」—ロイ Kupsinel 医学博士
「この本は素晴らしい」—フローレンス B.サイバート Ph.D。

ガンの治療法の研究の発見と封印！

隠れた献身的な科学的天才の魅力的な報告

彼は、人間のガンのための原因と療法を発見した

そしてその男の人生と彼の研究を破壊しようとした強力な権力者の話

" 「ガン細菌」の著者アラン・カントウェル博士
「バリーLynes は、我が国で最も正義感のあるなレポーターの1人である。
ロイライフの長年の友人ジョンクレーンの助けを借りて、バリーは傑作を書いた....
人類へのプレゼントとして 1930 年代に知られていたガンの原因と良い治療法の全ては、こ
れらの年月、医学医薬カルテルによって隠蔽された。
バリーは我々がライフの研究の復活を促進するのを助ける

ヘルスコンシャスネスジャーナルの編集者

「Roy Kupsinell 医学博士、

「私は、この本は素晴らしいと思います

そして、我々科学者の偉大な先輩とでも書くことができます

しばらく前まで、私にはライフの顕微鏡の知識がありませんでした。

私には、この顕微鏡が破壊され失われていないことはとてもよろこばしいことです。

それによってこの研究を支持することが可能になり、すべての人を勇気づけます。

ライフの報告を書いた著者に何度も感謝します」

フローレンス B.サイバート、博士

TB 皮膚テストの作成者

そして、N.Y.女性科学者栄誉殿堂に入った

ライフの研究は、必ず、公正に「新しい」知識に照らして再調査されなければならない

この、「古い、知識は、確認済みだが人が使用するようにはならなかった。

ライフの天才が作り出した製品は、時期尚早であった、

そして、ライフの考えたことに、重要な情報、または全ての答えが含まれているだろう」

コロラド州立大学-ジョン W.マッティングリーの前書きから

ISBN 0-919951-30-9 90000 ISBN 0-919951-30-9

9 780919 951303

カバーby Doris Diehl)

THE CANCER CURE THAT WORKED!

著作権バリーLynes 1987

著作権所有。

この出版部分が出版者の前の書面による同意なしで、どんな形でも使用すること、または、電子的に、機械的に送信されて、写真複写すること、レコーディングまたはその他複写、検索システムで保存することは、著作権法違反になります

1987年5月第1版

1989年1月第2版

1989年8月第3版

1992年4月第4版

1994年8月第5版

1997年10月第6版

1999年6月第7版

2000年8月第8版

Published in Canada by Marcus Books,
カナダのマーカス書店によって出版される、

P.O.Box 327, Queensville, Ontario,
私書箱 327、Queensville、オンタリオ、

Canada LOG 1 R0.

カナダ LOG 1 R0

ファックス(905) 478-8338

電話 (905) 478-2201

カバーデザイン

ドリス・ディール

ISBN 0-919951-30-9t 3

人々の健康は、本当に人生の基本である
国民の幸福と全ての基礎となるパワーは、人々の健康による

Benjamin Disraeli

ベンジャミン・ Дизレーリ

真実は明るみに出、殺人は隠すことはできない。

シェークスピア

人々がこの本を作らせた

ロイヤル R. ライフは、1888 年に生まれて、20 世紀の偉大な科学的な天才のうちの 1 人であった。

彼は 1920 年にガンのための治療法を研究することを開始し、そして、1932 年までに、彼は癌ウイルスを分離した。

彼は実験室の培養組織で癌ウイルスを破壊する方法を学んで、動物でのガンの治療に進んだ。

1934 年に、彼はクリニックを開き 3 ヶ月以内に 16 の症例のうちの 16 人を完治させた。南カリフォルニアから医者を連れていくこととともに、アメリカで最つも尊敬された研究者と研究し、彼は、患者の癌ウイルスを電子的に破壊し患者自身の免疫系を健全にした。南カリフォルニア大学の特別研究委員会は、1930 年代の終りまで、研究所の研究と実験的な治療を監督した。

クリニックによって指導された U.S.C. 医学委員会の委員長は、1934 年に引き続いて 1935 年、1936 年と 1937 年と、クリニックの結果を確かめた：

その装置を利用した独立系の医者は毎日 40 人もの人々の治療にあたり、この協力者の治療に成功した。

硬化ガンと他の致死的な病気に加えて、白内障のような退行性の状況も、回復させた。

ライフは病原体に対する正確な電気周波数を確定することができ、それはガン、ヘルペス、結核と他の病気に関係する個々の微生物を破壊した。

そして彼の成果が科学雑誌（医学専門誌）に書かれた後、スミソニアン協会の年報が、報告した。

残念なことに、ライフの科学的な理論と治療方法は、正統的見解と衝突した。

彼の研究は止められ、そして、研究と治療は強制的に非公認の地下のものとなった。

1934 年の最初の成功の後、クリニックは常に医学界と政府権威筋からの反対にあったが医者は、ひそかに 22 年間継続して、がん患者を治療した。

しかし、1950 年から 1980 年代中頃まで、何人かの、独立して研究していた研究者はライフの 1930 年代の臨床治療の根拠となる科学的な原則をゆっくり確認していた。

50 年前、ライフによってデモンストレーションをされた最初のガンの論文は現在科学的な証拠が具体的に確認され、圧倒的に支持され明晰に話されている。

これには、現代のエイズ研究者も含まれる。

1950 年代のジョン・クレーンは、エンジニア、機械工学、研究所アナリスト、医学研究者、発明家で、ライフの共同研究者であった。

クレーンは 1915 年に生れ、1950 から 1971 年にライフが死ぬまでライフと研究していた。

この間に、彼はライフのガン療法の全ての秘密、そしてその封印の全ての詳細な過程を学んだ。

一緒に、2人は、新しい優れた器材を設計し、造った。

そして、新世代の医者に正真正銘可能性がある領域として、興味を起こさせるように資料を管理してきた。

そして、また、機会あるたびに権威ある者たちは攻撃しクレーンは投獄され、器材は壊され、記録は破壊された。

その封印させる動機は、いつも同じであった。

クレーンは長いあいだ隠された事実をライフと共有してきた、そして1930年代から所持された、何千もの文書とともに、完全に経過を話すことが出来た。

著者バリーLynes（1942年に生まれた）は、カリフォルニアに住んでいる調査リポーターである。

彼の研究分野と、書く記事と書く本の主題は、経済理論、気候の変化、歴史、米国とソビエトとの関係といった問題の他に、代替医療が含まれている。

1986年前半に、彼はジョン・クレーンを知り、『ライフの全てを、彼から直接聞き、Lynesは初め懐疑的であったが、クレーンの所有する文書の価値を調べた後、彼の心を変えた。

ライフの研究の隠蔽と破壊の不正に憤慨したLynesは、この本に書かれたことを知らせることに決めた。

あなたは、今その結果を読もうとしている。

前書き

量子力学は、観察する対象から観察者を切り離すことが不可能であることを示したが古典的な科学的方法の支持者は、この問題を嫌悪している。

そして、日常的な科学的実践において、この現象と同じ性質の問題については、実際的な方法で対処すべきなのに、何も行われていない。

この状況は、おそらく驚くべきではない。

科学的作業は、人間の視界と認識の問題を単純に考えることで、その視界が多様に見えることからくる不明瞭な確定できない苦しみを継続させている。

進行中の新しい発見に対する先入観と同様に、その視界は、なんらかの画一的な自然法則に基づいてできあがった間違っただけの仮説でゆがみ、いつも科学的な論争ひきおこす。

実際人間という種の中にある多様性のように、人間の視界には、多様な、その人固有の見え方があることは自然な法則である。この自然な法則は変わることができない。

しかし、その特性の問題は、科学研究での実践的に認識の質を向上させようとすれば、明快に理解されなければならない。

個人個人の5感はずべて違っており、量的にも違って感知される。

.例えば、我々の何人かは眼鏡なしで見、または、補聴器なしで、聞く。微妙な味、においを鋭く、またはその性質をよく感じるができる。

.さらに、そのことの意味は、既に得ている知識の性質または個人の経験によっても変化する。世界の認識、我々の存在、我々の意識のあり方は、相対的で、多くの混乱の一因となる。心の回路は、それ自身変化するものなのである。

脳に損傷を受けた患者の研究の中で、心理学者は、帽子が妻だと思い続けている症例を見つけ出した。

このようなケースが、我々や、さらには科学者の間にないと言いきれるだろうか？

この感覚の気まぐれな性質の引き起こす錯誤は、人間にとって、最も影響力の大きい部分なのだが、我々は不思議なことにこの問題にほとんど注意を払わない。

我々の間の誰が、マゼランの航海日誌に出てくる原地の人と同じことなどしないと絶対に言えるだろうか。

「マゼランが探検で最初にテラデル **Fuego** に着いたとき、

Fuegians の人は何世紀もの間、他から孤立して生きてきたカヌー文化だったので、船が湾に停泊していても、それを船として見るができなかった。

彼らの経験からは大きな船の存在は、考えることも出来ないものであった。

その船の大きさにもかかわらず、完全に地平線がまっすぐ続いているとしか見えなかった：船は、視野の中にはいってこなかったのだ。

この事例は、この地域のこの後の探検方法に関して注意すべきこととして学ばれた。

Fuegians の人の報告では最初シャーマンが、村民に何かえたいの知らないものが、到達し

たことを、伝えたと書いてある。これは信じがたいことだが、人が慎重に見たならば、船がきている事実を、確認できたことを示している。

なぜ彼らは船が見れなかったのかと、人は聞くだらう。

これらの船はとても明白に存在しており、きわめて現実的存在であった。

どうしてこのあまりにも明白な物事を、他の者は、見れなかったのかと、聞くだらう。

この問題と同じように、顕微鏡の中にある世界を視界的に認識することは、厄介でむずかしい。

近年、医療評論家が、100年前は、顕微鏡が不可解な混乱を引き起こす装置であったと述べた。

それはその時代では疑いなくそうだろうが、しかし、今日でも、まだ不可解な混乱を引き起こす装置である。

この装置には固有の複雑さがあり、この道具と技術は基本的に無限に多様で、人間の視野を非常に拡大させ発展させてきた。

顕微鏡は、それ自体に、レンズ構成、拡大倍率、焦点と照明といった変数が含まれる。

何千もの染色料と染色法は長年かけて完全に発展し、顕微鏡の技術を複雑化する重要な一因となっている。

顕微鏡の使用者が未知の領域の中で、これらの固有の変数を決定しようとするとき、これらは依然としてとても厄介な要素である。

顕微鏡は小さな物を簡単に見える大きさに拡大し、特に見本が生きているか、かつて生きていたものならば、生命プロセスの流量と形体といった複雑な世界を心の眼に届ける。

しかし宇宙旅行者は、こうした顕微鏡を使う細菌学者よりも優れた方法と手段を所持している。

顕微鏡はとても素晴らしい道具ではあるが、観察する人間一人一人で違う-認識力と、視界における変化の要素を考慮してはいないので、一見際限のない混乱が蓄積する。

間違いなく、我々は真実をみるために、畏怖の中で進行し、立たなければならない。

しかし、我々は長くこのように立ちつづけることができない。

古くからの健康の問題はもっと深刻になり、新しい病気はほとんど毎日出現している。

ロイヤルレイモンドライフの話は、新旧の知識の両方に焦点をあて、その関係を理解させる重要な情報を含んでいる。

顕微鏡と微生物学の歴史の中で起きた、いくつかの事件は、ライフの発見と彼の自然を洞察しようとした苦労の価値を信用すべきものにさせる。

1870年頃、アントワヌベシヤンは、彼の顕微鏡で、彼が「microzymas」という名前をつけた小さい運動型の組織体を見つけた。

最初に、20世紀の最初ガンサーEnderleinは、これらの組織体を見て、それらを「内生生物と呼んだ」

ウィルヘルム・ライヒは、1930年代後期に、似た物を見つけて、同一の組織体とまではい

えないが「バイオン」という名前をつけた。

この時代に、他の人も同じものを見つけていた。

今日スウェーデンで、そして、カナダで、これらの同じ生きた粒子の特性は、研究者自身の想像力によってつけられた名前前で研究されている。(訳者注 弾圧されたカナダのガストンネサンのソマチッドサイクルの研究もこの考えの発展と考えられる。後半の付録参照)

この研究者のグループのメンバーによって進められたいろいろな理論は、拒絶されるか、主に忘れられている。

不思議なことに、これらの研究者の全ては、よく知られてはいるが、まれにしか使われないダークフィールドコンデンサーを使っている。

微生物学では、特異な観察方法で得られた発見の価値は、たとえ真実だとしても、他の者に確信させることはきわめて難しい

顕微鏡に 1930 年のライフのような照明システムを用いることは今日のように、知られていず、それはただ単にまれな方法であるだけでなく、未知の方法であった。

ライフの解明した生物学的発見と顕微鏡についての基本的な技術は、最大の攻撃と破壊の対象となった。

未知なるものへの恐れは、単に不慣れなことからくる恐れより大きい。

科学者でも、この人間の本能に免疫があるわけではない。

ライフの顕微鏡で使われている前例のない照明方法に抵抗を示さなかった 2、3 の人が、いた。

しかし、彼らはライフの研究を見て、次の問題にぶつかった。自身のドグマから見ると単なる光学顕微鏡でそのような高倍率と分解能が達成可能であったことは理解不可能だと言ひ、観ているものを信じなかった。ライフは、不正直で、目の上にベールをかけて見ており、青空に雲を引き入れて本来明確にみえるものを厄介なものにしていると逆に攻めたてた。

理論は必要不可欠だが、しばしば、人はあまりに長くその固定概念にとらわれることとなる。最近、このライフの発見は生物物理学で再確認された。

その発見は、ライフの顕微鏡のもつ驚異的倍率と従来の光学顕微鏡を超えた分解能によってもたらされ、顕微鏡で対象を見るときを原理をライフが考え直すことで可能になった。

意外なことに、これらの「新しい」発見の背後にある基本的な問題は、世紀の変わり目の直前に心理学者から物理学者になったギュスタブ Le ボンによって書かれた。

その時点では、現在のように、学問分野の境界を越える能力のある人は存在しなかった。

今日の生物物理学者は、自然の中に生命物質と光子の間の重要な交互作用が存在することを明らかにしている。

このプロセスは、細胞 (バクテリア) レベルで測定可能である。

他の研究は生体系がとても低いエネルギー電磁波にとっても敏感であることを、実証した。

この研究はまた、各々の細胞または微生物は固有の振動数の電磁スペクトルと交互作用す

る性質があると言っている。

ライフの顕微鏡システムはいろいろな手段で、人の視覚に影響を与えるよう光の周波数を調節する。

いくつかの洞察によって、彼は光と対象との「共鳴」、または「フィードバック・ループ」をつくる原因となるよう、対象になっている微生物の固有振動数に光の周波数を「調律する」ことが可能なことを知った。

実質的に、この共鳴状態をつくることで、微生物それ自体を照明したとも言える。

特別な視覚的才能をもったことで、見れたというわけではなく、彼が非常に熟練した顕微鏡

使用者の目から、生命物質の電磁特性を新たに発見したことによるのではないだろうか？
ウィルヘルム・ライヒは、自身の理論的防衛力に基づき、他の研究者が彼の顕微鏡を使用出来ない原因を理解したとして— 優れた顕微鏡は標本に共鳴することを学ばなければならないと言った。

ノーベル賞を獲得した穀物遺伝学者バーバラ・マックリントックは、「有機体には感覚がある」と説明した。（普通では見えないものを彼女が見ることが出来たために、その人は他の人に理解させるのに長年苦労した）

おそらくライフには視覚力と洞察力という二つの才能があり、さらに生命のミステリーを完全に見ることを可能にする装置を造ろうとした。

彼の装置は作動した、しかし、世界はこのミステリーを見る目がないままであった。

ライフは彼の照明テクニックから推定して、特別の電磁周波数には、特定の細菌の型に対する殺菌効果があることを理解したと思われる。

そんなライフ自身の仮説の正しさを、勇気ある少数派のために知覚的に明確に見せようとして実証したことは疑いない！

ライフは生物物理学だけでなく同様に照明の原則について新しい発見をしており、これは同時にバクテリアの選択的な破壊方法を発見させることとなった。

後者の現象は超音波洗浄と似ているが、波形と周波数を細かくデリケートに選択するところが大きく異なる。

近年、調査結果が封印されてしまった研究者の報告によれば、マウスの群れに同じように電磁波を確実に照射することで、ガンの原因を、治療した。

ライフの研究は、これよりはるかに洗練されたものであった。

彼は特別な顕微鏡で目標を選択し、実際に、目標が炸裂するのを確認した。ライフの研究ではバクテリアが単一形態 **monomorphic**. というよりは、むしろ多形態 **pleomorphic** なものとして実験した。

この実験は権威ある科学の政治的管理者に、他の誰よりも最悪の怒りを引き起こした。

彼の特別な多形態理論に基づく病因論は、生物学の権威ある基本的学説を強力に否定した。

『(病気の原因を病原菌とする説を否定した)』

今は誰でも、色々な病気が特徴ある細菌が原因であることを知っている。

これは、コッホの原則と予防接種の成功によって完全に証明された。

しかし、かつてアントワーヌベシヤンは、**microzyma** 論を唱え、全生体とかつて生きていた有機体の中に、バクテリアになる前の小さな粒子を見つけ出し、その粒子から、特徴のあるいろいろなバクテリアの型が呼び起こされて発生し、様々な病気の状態になると言ったことを誰もが忘れていてる。

アントワーヌベシヤンは 1800 年代後半の間、バクテリアは多形態であることを主張し、広範囲にデモンストレーションしたが、科学を政治的に管理する人々には具合の悪いことであつた。(訳者注 このベシヤンの **microzyma** はライヒの「バイオン」カナダの学者ネサーンの「ソマチッドサイクル」と共通の考え方である。ともに学会から奇妙にも無視され、ライヒにいたっては獄中で死んでいる。)

ベシヤンの理論においては、バクテリアは病気の最終原因というよりむしろ徴候である。ベシヤンの時代からバクテリアの多形態性と内因性の原因は、繰り返しデモンストレーションされてきたが、今日の生物学者はこの概念を理解しようとしなない。

おそらく、古くからある病気も新しく発現してくる病気にも、今日の医学が完全に対応できず、失敗の連続である原因は、この権威ある伝統的な細菌説が不完全であることを理解させないよう、圧力かけられているせいだろう。

1800 年代後半の間に、医学の細菌学の発展方向は、主に営利的考えによって設定された。感染症に関して科学者にはいくつかの答えがあつたが、1つの答えだけが正しいとすることは優れて政治的、商業的意味があつた。

ベシヤンの考えはただ単に奇妙なものであるだけでなく、主流派には複雑で不愉快なだけであつた。

実際、ベシヤンの理論は多分伝染性の病気だけでなく、多くの変性疾患に関連するだろう。

(特別な原因もないのに神経細胞や神経組織が崩壊してしまう疾患のことをいう。アルツハイマー病、パーキンソン病、ピック病、ハンチントン病などがこれに含まれる。)そして、このベシヤンの生きていた時代より、今、この多くの変性疾患の患者数は増大し、たいへんな関心事になっている。

予防接種の本当の有効性と長期の効果は現在疑われているが、一応それは機能してきた。細菌説自体は比較的明白で、病気の原因を特定することによって、市民を安心させることは簡単で、しかも細菌は見えないし、身体の外から来るものであつた。

これは、人に病気の「原因」への、距離感を与えた。

病気の「原因」から少しでも距離があることは、病気の性質がとてもミステリアスであつた時代には慰めとなつた。細菌説は、人々にホッとさせたため息とともに受け入れられ、説明できないよりはましであつた。

ライフと、彼の有能な仲間、権威あるこの細菌説のドグマの色調を変えることは出来なかつた。

今日、細菌が多様な形態をもつ事実は、病気の原因が明確には分からないことに同意する細菌学者の少数のグループによって、静かに認められている。

この少数の研究者は、他の自明の生物学的現象、例えば進化と微生物の共棲などとともに、

理論が未完成である事実そのものに立ち帰って考え始めている。

多形態性のプロセスは、理解不可能なほど複雑である。

それが存在する事より、むしろその変化のプロセスが問題であった。

細菌学者は、生きた標本をめったに見ないので、このプロセスを理解することは困難だった。

染料と染色法に心を奪われて、電子顕微鏡を使って夢中になって見るが、彼らはすでに死んだ標本を観察しているだけだった。

生きた標本を見るライフの顕微鏡がライフの批判者を混乱させたことは、ほぼ疑いがない。それは彼らの確信を否定するとして強烈な対立心をおこさせた。そんなわけで、彼らは細菌の多形態性の証人にはならなかった。

細菌の多形態性を実際に生きた状態で観察し、理解することは、免疫系と変性疾患のミステリーを解明するには必要である。

伝統的な微生物学の外へ 1 歩でるならば、全ての論争と、悲劇的要素に支配された視界から自分を何とか隔絶することができ、おそらく、この問題に新しい光を当てることができる。

多形態性が意味することはシンプルである。

「一つの有機体、または種には、いろいろな異なった型があること、または、2 つ以上の型に結晶する特性がある」という仮説 (Dorland のイラスト医学辞典より) :

あるいは :

1、ライフサイクルで 2 つ以上の型が発生する(植物の)

2. 同じ動物にも多くの型があること」(ウェブスター)

長期間でも比較的短期間でも、命は多くの形態に変化する。

生命を長期間で見たならば、どうだろうか？

現在少なくとも命が 34 億年前から地球上に存在したという確実な証拠が、ある。

今日地球上で生命自体が絶滅したとしても、これまでに非常に長いライフサイクルを経験してきており、それは孤立した単一細胞から無限に種類のある複雑な生命型式に変化してきた。

この意味で命は無限で、命は多形態である。

我々人間は、お腹の中にいる比較的短期間に種自身が発展してきた形をひとまとめに、発現させ、命の無限の広がり全体を経験しつつ、その変化を再現して、不滅のものにさせる。

つまり我々は、出生時から比較的短期間で、植物、動物、鳥といった、多形態の生命の変遷を、すなわち分、時間、日、週、月、年といった単位と、数十年、世紀にわたる変化を、周期的な型で発現させてゆく。

性的な方法で命を複製してゆくタイプは、内部の異なる器官を形成するため、同一の細胞が特別な細胞に変化し、群れを作り始め、それぞれの器官となり、それらの共生と協力によって人間や動物のような複雑な生命を構築してゆく。

受精した卵から出生までの間に、胚は成長して多くの型に変化する。

成熟した動物は「多様に変化した多くの型」のなかの 1 つの型で、さらにこうした観点から言えば人間の知性も多形態な性質をもつと言えるだろう。

この観点で考えることが、許されるならば、教育と経験はその「生命の型」を変えるためのものである。

英語で、「トートロジー同語反復」ということば（概念が）が、あるが、これは

「ことばや、フレーズ、または命題、考えの、冗長な言い換えや、不必要な繰り返しをいう。または「プレオナズム」、これは同じことを意味なく、違う表現で言うことを意味するが、こうした概念は生命がいつも変奏曲のように「形」を変えていこうとする本能的な欲求を示しているのではないか？

その意味で、多形態性は共生と進化といった特性と同じように、生体の重要な性質である。バクテリアは、生きものである。

これらバクテリアは、多形態性で、共生的で、進化しようとして絶えず変化する。

数年前に、性能の向上した光学顕微鏡が各種出てくると共に、生きた標本が見られる顕微鏡に対する興味が、初めて生まれた。

これらの性能の向上した革新的な方法による新しい顕微鏡は、ウルトラバイオレットか「ウルトラバイオレットに近い光源」からの、光の通路を、単独で、または、いくつか組み合わせ、用いる。

しかし、ウルトラバイオレットの光源は、ほとんど全てのバクテリアに強い否定的な効果がある。

生きた状態を見るという点から見ると、絶望的な、この妥協的方法は、否定的な効果を考えずに使用されている。

新しい顕微鏡の多くは、コンピュータで、画像処理し強調する。これは微生物学的に克明に認識させるか、かえってかけ離れたものにするかもしれない技術である。

また、染色することによって、多くの複雑な要因を導入する。

もちろん、最低線は、細菌学者が共に同意できる「生きた生命の標本の基準」を構築することである。このためには長大な研究時間が前途に立ちほだかり、装置は複雑になり、操作も難しくなる。

ライフの顕微鏡が、比較的単純で、生きた生命の標本を観察するのに適していて、直接的で理想的なことが思い出される。

この新しく作られた光学顕微鏡のどれもが、ライフ顕微鏡の拡大倍率と、分解能力に近づくことができなかった。

1960 年代にフランスで発展したほとんど知られてない装置が一つあるだけだった。

これはライフに近いものである。

今日、この顕微鏡は、150 オングストロームという信じ難いほどの分解能力で、拡大倍率 4500 倍で稼働する。

暗視野集光器を付けた普通の高品質の研究装置のように見える。

そして、光源はウルトラバイオレットの近辺と、レーザーの混合物から成り両方の周波数は明らかにされていない。操作の原則は、ライフの方法に近いものだろう。

個人的ノート：

初めて私自身(ジョン W.マッティングリー)の研究用顕微鏡（暗視野集光器を付けている）で、私自身の目で、無処置の新しい人間の血液の標本で、細菌の多様な形態のプロセスを見た時、何を見ようとしているか私が「知らなかった」ならば、これを「見ることは出来なかった」。

ベシャン、ライフ、ライヒその他を研究し、そして、完全に 25 年間現象を研究した、才能ある顕微鏡使用者が私のパーソナルな指導者だったので、何を探すべきか教えてくれた。

この本の著者バリーLynes は、ライフの研究と、彼の顕微鏡と、特にライフの仲間がガンの臨床治療において、電磁周波数発生器を複製して使い、成功した症例を力強く報告している。

これは非常に望ましいことで、ライフの研究は、必ず、「新しい」知識を考慮し、公正に再調査されなければならないからである。

これらの「新しい」知識には、定義済みではあるが、まだ答えられていない多くの疑問がある。ライフの穏やかな才能の所産は時期尚早であったが、これらには重要な情報または全ての答えが含まれているだろう。

John W. Mattingly

ジョン W.マッティングリー

コロラド州立大学

第 1 章ガンの治療法

1934 年夏に、南カリフォルニア大学の後援で、アメリカの細菌学者と医者に指導されたグループは、カリフォルニアに最初にガン・クリニックを開き、癌の治療に成功した。

その結果は、微生物がガンの原因となることを示していた。

病状が末期的な癌患者で痛みを伴わず原因と思われる微生物を、破壊することが出来、同時に病気の症状を、完全に無くすことが出来た。

この技術的な発見はガンの治療法として発展し、1931 年の科学雑誌に発表された。

1934 年の臨床成功に続く 10 年間に、このテクノロジーとその間の癌患者の治療の成功例は、医学会議で議論された。医学雑誌は慎重に報道し、大きな新聞も専門的に報告し、スミソニアン協会年次報告に発表し、技術的にも説明した。

しかし、このガンの治療法は、何人かの科学者、医者と財政的な権益を脅かすため、隠蔽するよう誘導された。

この新技術を使って治療していた医者は、廃棄するよう強制された。

その後スミソニアン協会年次報告の記事の著者は、車を運転している間に、銃撃された。

彼は、二度とこの問題を書かなかった。

治療法を記載した全てのレポートは、主要な医学専門誌と AMA (アメリカ医学協会 American Medical Association) の上部によって検閲された。

政府の研究所による装置の科学的な評価は、阻止された。

この細菌学とテクノロジーの分野での新しい科学的な見解を支持した有名な研究者は、軽蔑され、嘲笑され、面前でうそつきと呼ばれた。

結局、このガン治療法については、数十年間、長い、真っ暗な闇の中に放置された。

この期間、この治療法は極めて不満足なもので、「神話」だとレッテルを貼られた。

しかし、現在入手できる文書は臨床試験で 13 人は成功したことが明らかにされており、その治療法が有効であることを証明している。

実際は、その後もこの治療法は長い間ひそかに使われ、他の病気と同様にガンの治療に使用された。

この発表禁止処置は医者と研究者にこの治療法を知らせ、医学を向上させることを、阻害した。

この発表禁止処置にもかかわらず、他の科学的な研究者は、基本的な原則の確認を続けた。

10 年早く行なっていたカリフォルニア・グループの研究を知らずに、1940 年代後期から 1950 年代初期に、ニュージャージーの病院研究所とペンシルバニアの研究所に協力していた研究者は、これに類似した発見をした。

1950 年、これらの研究者はニューヨーク科学アカデミーの前でプレゼンテーションをする

準備ができていた。

しかし、また、政治勢力が介入して、シンポジウムは中止された。

1953年に、この問題の基礎科学を確認したカリフォルニア・グループの理論は、イタリアローマでの国際微生物学会議で、ニュージャージー・グループによって紹介された。

ニューヨークタイムズとワシントン・ポストは、この発見を報告した。

しかし、このグループがアメリカに戻ると、1950年にアメリカで発表を阻止したのと同じ、強力な勢力がひそかにニュージャージー研究所の資金源をストップしていた。

このグループを指導していた研究者は、カリフォルニアへ引っ越して、新たに出発することを強いられた。

その同じ年の12月、カリフォルニア・グループのリーダーと1930年代に成功したガンの治療に対して、最も責任ある医師は長年の沈黙をやぶって、ガンの治療結果とその治療方法の説明を出版した。

ワシントンD.C.の政府直属の国立癌研究所の権威は、ワシントンD.C.郊外のベセズダ、メリーランド米国医学図書館で、その本を受け取った。しかし、彼らは無視した。

図書館スタッフは責任をもって本を保存し、閲覧可能にしたが、癌研の究方針を確定している当局がそのレポートを見れば、その方針が誤っており、彼らのガンとの戦いの方針に、真正面から反対しているのが理解された。

今までと同じように、カリフォルニア・グループの研究プロセスを続け、再発見した新しい研究者が、何度も舞台に登場した。

1950年代後期に、国際会議がヨーロッパで持たれた。話題は、カリフォルニアグループが1930年代に挑戦し、ガン治療法で重要な成果を得たのと同じ話題であった。

1959年に、もう一人のガン研究者は、彼女自身でガン微生物を検査した！

そして、ガンを成長させた。

しかし、この事件はガンの研究プログラムを管理している権威ある科学的な階層には、ほとんど影響がなかった。

ペンシルバニア・グループの研究は、1967年の終わりにニューヨーク科学アカデミーの年間報告で、発表された。

1969年には、ニュージャージー・グループはその調査結果をニューヨーク科学アカデミーに掲載した、そして、再プリントの要請が押し寄せた。

依然として、ガンの権威は公的な研究もプライベートな研究にもそして治療に関しても、資金供給の決定に関与しており、その時代の科学的な発見（研究所で再現可能な事実）を再び無視しようとした。

1974年には、細菌学の分野の重大な研究が、発表された。

1930年代カリフォルニア・クリニックに関与した細菌学者の主張がこの後の数十年間にもこのように、確認されてきたかを示した。

カリフォルニア・グループの研究所の1930年代の証拠と、その後にも出てきた研究所の証

拠は、癌をウイルスとバクテリアの方向から研究することを否定してきた、ガンの正統的な理論に基づく 1930 年代 1940 年代、1950 年代そして 1960 年代のガン治療法の全てが、理論と同様に、基本的に間違っていることを納得いくように実証した。

1976 年には、カリフォルニア・グループの治療装置と 30 年間の臨床結果を記述した最初の記事は、大衆的な雑誌に発表された。

記事は、ボストン、マサチューセッツで出されているニュー・エイジ・ジャーナルに掲載された。

その記事はガンの権威者による 40 年間の怠慢と弾圧を概説した。

この雑誌は現在は全国に毎月出されているが、その時は、小量配布されていた。

しかし、また、何も起こらなかった。

公認された医学の専門家ではない者達は、20 世紀に確認された「ガンの痛くない治療法」の医学的ストーリーを追いかけて、1980 年に、2 人のフランスの研究者は、カリフォルニア・グループのオリジナルな発見が国際的な科学的事実であることを示す本を出版した。

保守的な医学権威は研究所の実験と直接矛盾する理論を信じ続けたが、まったく新しい癌研究と治療のアプローチの基礎は科学的な現実として確認された。

1986 年に、この分野の権威は、以下の通りに現在の状況をまとめた：

「細菌学者は、2-4 年後に生きている微生物に関心をもつようになったが、実際生きている微生物を本当に観察し始めると、目の前で起こっている多様な変化のプロセスの問題で頭は混乱した。彼らに何を見ているか教えなければならなかった。

「ここには彼らが知っていると思っていたのと全く異なる世界があった。」

昨年、ヨーロッパの指導的科学者は、1930 年代にガンを治療したカリフォルニア・グループの研究と主張を再検査した。

彼は結論を出した、「この原理は、完全である」

この続きは、抜群の科学的な才能と意欲のある何人かの研究者の織り成す、複雑な物語である。

悲しいことに、この物語は科学的な無知と、欺瞞と、権力の濫用と犯罪行為の話でもある。

公的な信用がこれ以上侵食されたくなければ、議会、メディアと科学的なコミュニティはこれらの問題を公的に調査しなければならないはずだ。

ガンで毎日 1,200 人以上のアメリカ人が死に、ほぼ毎分、1 人死んでいる。

そのガンによる死はただ単に、苦しみが止まる時間でしかない。

第2章

バクテリアとウイルス

19世紀のフランスで、科学界で2人の巨人が、対立していた。

それらのうちの1人は、現在世界的に有名なL・パスツールである。

他の1人は、現在基本的に忘れられたピエール・ベシャン **Bechamp** である。その人から、パスツールは彼の最も価値のある考えの多くを盗んだ。しかも、その考え方で見ていくと、免疫システムと食習慣と健康との関係は良く理解され、医学知識の発展が可能になる。

こうした点から見ると、今や、ベシャン(**Bechamp**)は、パスツールより重要な人と認められるべきなのだ。

「ベシャン **Bechamp** かパスツールか」の著者 E.ダグラス・ヒュームはパスツールの考えた理論は不完全な科学であったと主張する。そして、それは彼の公的な立場と結びついている。パスツールは20世紀の医学全般、治療法と注射と化学薬品といったところから、培養組織において病原菌が1つの種からもう一つの種へ変化する実験の確認方法まで決定した。

ヒュームによると、ベシャン(**Bechamp**)の研究は当然、公的に支持されるべきであったが、そうなったならば、現在の治療方法は非常に異なるものになったはずだという。

現在パスツールはいくつかの基本的な問題に関して、誤りがあったと広く認められている。パスツールとベシャン(**Bechamp**)が議論した多くの領域のなかの1つは、有機体の一つのライフサイクルで複数の異なった型に変化すること、つまり、今日知られている多形態性のバクテリアの発生に関係する。

ベシャン(**Bechamp**)は、バクテリアが型を変える可能性があると主張した。

ロッド形のバクテリアは回転楕円体、その他の形になる可能性がある。パスツールはこれに同意しなかった。

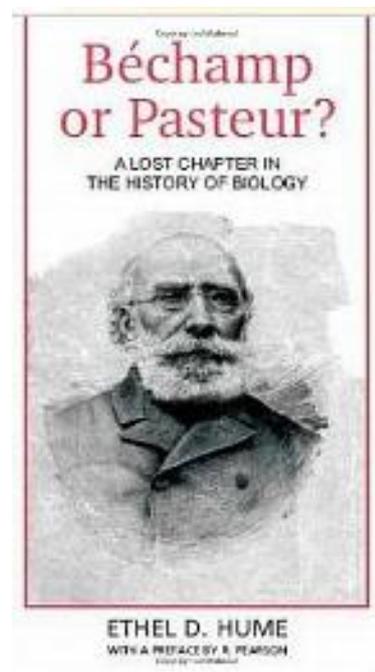
1914年でも、パスツール研究所のV・アンリ夫人はベシャン(**Bechamp**)が正しいことを確認していた。パスツールは誤っていた。

しかも、ベシャン **Bechamp** は多形態性についての彼の論証をさらに進めていった。

彼はバクテリアがより小さな、目に見えない型式に「変化する可能性がある」と主張した、彼はそれを「マイクロジミア **microzymia** と呼んだ。

言い換えると、**Bechamp** は生命の時間の流れの中での変化を視点にいれて研究し、理論を発展させた。

微生物は彼らの形と同様に彼らの基本的大きさが変化する可能性がある。そして、それは



微生物が住みつき、生きている場所の状態、つまり有機体の健康状態などによって変化する。

これを 20 世紀の、保守的な医学権威とされている人たちの多くは直ちに、否定した近年の研究所の調査では、ベシヤン Bechamp の概念の確証が提供されている。

パスツールの不完全な考えに基づいて組み立てられた、公的な権力と商業的な権威が優位を占めなかったならば、20 世紀の治療法と科学研究の全ては異なっていたかもしれない。1980 年に、フランスの細菌学者ソリン・ソニエとモーリス・Panisset は、「新しい細菌学」という本を発表した。

この本の中心テーマは、細菌の多形態性は科学的な事実だということだった。

彼らは述べた。「バクテリアの異なるタイプは、バクテリアのライフサイクルの総体の中で異なる一面が出現しただけだった。

この一見難解な科学的な論争は、枝葉の問題でなくアカデミックな団体の体質の問題でもあった。

多形態性の否定は、20 世紀の医学研究とガン治療の基礎となった考え方の 1 つであった。

20 世紀前半に多形態性の理論が受理されれば、ガンで苦しんで、死ぬことから、何百万ものアメリカ人を救ったかもしれない。

今世紀が初まって 3 分の 1 が過ぎるまで、ろ過できるバクテリアは存在するとする人と、ろ過できないバクテリアしかいない人との間で、熱い議論が、続いた。

正統的な見方は、バクテリアより小さなものはフィルターで遮蔽出来ないとした。

「完全にフィルタを通過するバクテリアが存在する証拠」があったとしても、バクテリアでなく、ウイルスといった何か他の種類のものとされた：

標準的な教科書は、今日も、バクテリアとウイルスの間のこの基本的な相違を書いている。

「典型的」バクテリアは大きさにおいて 1 ミクロンほどの大きさ、あるいは、1/25,000 インチの大きさである。

ウイルスは、10 ミリミクロン (1 ミクロンの 10/1000) から 300 ミリミクロン (1 ミクロンの 300/1000) までの大きさで並んでいる。

このように、最大のウイルスでも、正統な見解によれば平均的バクテリアの、4 分の 1 から 3 分の 1 の大きさである。

300 ミリミクロンは光学顕微鏡の解像度の限界なので、この測定値は重要である。

ウイルスを見るには電子顕微鏡が必要だが、電子顕微鏡は標本を殺してしまう。

非常に大きな天然痘ウイルスだけが、光学顕微鏡で見ることができる。

300 ミリミクロンより大きい、フィルタの孔をウイルスは完全に通り抜けるので、ウイルスは「濾過性病原体」と呼ばれるときもあった。結局、「ろ過できる」という条件は「ウイルス」の定義の、基本になった。

正統的な見解では、バクテリアは、とても小さな、初期の段階でもフィルターを通過する

ことは出来ない。

ここで、多形態性についての重大な論争が、起こった。

ウイルスのもう一つの基準は、ウイルスのもととなる複写能力をもつ生きた細胞が存在しなければならない。

バクテリアとウイルスの間のこの基本的な相違点は、1926年12月にアメリカ細菌学者協会で、ロックフェラー研究所のトーマス・リバー博士によって発表された。

これによって幅広い微生物学の分野と、ウイルス学の専門家としての彼の経歴の基礎が確立された。

やがて、ロックフェラー研究所を通しての彼の裁量権と、彼の科学的な評判、彼の喧嘩早い個性と巨大な財源のため、リバーはアメリカの微生物学で恐るべき最強の権力をもつ男の1人になった。

1937年から1955年のロックフェラー病院の院長として、そして、1953年からはロックフェラー研究所副議長として、病気で死ぬまで、アメリカの医学会で、権威ある地位にいた。それだけでなく彼の考え方は、次世代のウイルス研究者に影響し、しかも、1ダース以上の彼の個人的に薫陶を受けた者が1970年代と1980年代の研究の優先順位の決定過程で重大な影響力をもった。

残念なことに、トーマス・リバー博士は、ろ過できるバクテリアについては間違っていた。リバーの死後の1962年の細菌学ジャーナルの中に書かれたリチャード・ショープ博士の論文の引用をみると、誰もがリバーには同意できなくなるような洞察が書かれている。

「リバー博士をよく知っていた人々の多くは、彼が、とても美しい絵のような論証を届けることができたと思った。我々の中の少数の人しか、彼の反対側に立ってこれを『打倒するために』気力をもって公然と、議論『しない』。しかし、勇気を持ってリバーに挑戦した気骨ある1人は、彼の時代の有名な細菌学者のアーサー・ケンダル博士(1877~1959)であった。ケンダルは、保守的な貴族からの承認とか、大衆の称賛といったことだけで見れば、リバーによって完全に打ち負かされたが、Bechamp とパスツールとの初期の交戦のように、後世の人々の科学的見地から見れば、真の名誉を彼に与えるべきだと、再評価されるはずだ。

1904年、アーサー・ケンダル博士は、国立衛生研究所の前身であったパナマ運河委員会の衛生研究所長だった。

1906年になると、ケンダルはロックフェラー研究所の細菌学者になった。

この後、ハーバード大学医科大学(1909~1912)の専任講師として、3年間続け、1912年に、ケンダルはアメリカのノースウェスト大学細菌学部の学部長になり、初めて完全に独立した立場になった。

1916年には、彼は医学学校の学部長に指名された。



トーマス・リバー博士の
病院での回診風景 1933年5月29日

1924 年になると、ケンダルはミズーリ州セントルイスのワシントン大学の細菌学と環境衛生の教授になった。

1928 年にノースウェスタンに行き、その後まもなく彼はカリフォルニア・グループとともに活動を開始し、1934 年に最初のガン・クリニックを指導し成功に導いた。

1942 年に、ノースウェスト大学を退職したが、それまでに 100 以上の論文が発表された。1931 年 12 月 11 日、科学雑誌に、ケンダル博士は、きわめて目の小さな型式のフィルターでもバクテリアが通過し、このちいさな微生物が、彼の造り出した培養液で、生きていたという科学ニュースを報告した。

彼の造り出した「K 培養基」を使った実験は、常識を破って、チフス菌をろ過できるタイプに分類した。

そのうえ彼は、特別な顕微鏡を使って、それを見ることを可能にした：

- (1) 今まで通りのフルサイズの桿菌は、ろ過できないことに変わらない。
- (2) 他の桿菌はろ過できる段階と、ろ過できない段階の間の中間段階の相がある。
- (3) その他は、非常に小さなターコイズブルーのもので、最小の桿菌型であると確認された。この最小の型はウイルスの大きさであったが、これは依然としてバクテリアであった！これはリバー博士と既存の権威への挑戦であった。

カリフォルニア医学協会はこれを公式公表し、これを 1931 年 12 月科学雑誌「カリフォルニアと西洋の医学療法」は、驚くべきニュースとして発表した。

そしてアメリカの医学協会がケンダル博士を招いたとき、リバーは拒絶反応を示した。

彼はケンダルが会で話すことを最初キャンセルした。そのキャンセルが会のスポンサーによって拒否されたとき、リバーはハーヴァード大学の H・ジンサー博士と自分が、この内容について意見を述べることも許可されるべきだと主張した。

ケンダルが 1932 年 5 月 20 日に協会でプレゼンテーションをした後、ジンサーとリバーは公的にケンダルを糞みそに批判した。

すなわち、ケンダルの実験結果は再現することができない、ケンダルは嘘をついていると述べた。

最初はリバーとジンサーによって出された反対意見の支持者は少数で、当時の医者はむしろケンダルを支持していた。

ケンダルは、権威ある学校のバクテリアの大きさのものは「濾過」出来ないとする、正統的な前提を取り下げることこそできなかったが、彼の特別な技術によって行われた実験による、彼の発見は確認された。

反対グループは、それを学ぶことを望まなかった。

1974 年に、ウェイン州立大学、生物学部のリダ H. Mattman は、「細胞壁が不十分な型」を出版した。

その出版を、オーソドックスな学校は無視し続けたが、多形態性は現象として証明された。

「現在の細菌学は、極めて単純に、各々のバクテリアの種には 1 つの型だけがあると依然

として確信している。これに対して、筆者は、慎重に用意した純粋培養基を使用して、バクテリアがその存在を終えるまで、著しく異なる形態に段階的に変化していくことを確認した。」と Mattman は書いた。

ケンダールの時代の後、30 年以上にわたる努力によって、Mattman は、現代の研究分野のドアを開けた。

既存のガンの権威は、その事実が自身の信条と自身の権益に衝突するため、無視するだけでなく、否定するか、抑圧している。

Mattman は研究者の立場を守り、どちらかといえばオーソドックスな考え方に立って書いたが、1930 年代初期のケンダールの貢献と、遠回しにケンダルへの攻撃を誤った考えとして批判した：

「1920 年代にケンダルによって、重要な『濾過の学校』が、確立されたウィリアム H. ウェルチは全体的にはこの問題について、ほぼ懐疑的立場で通してきたが、ケンダールの研究については明瞭な前進だとして認めていた。

これは Kleiberger とジエンが、「ろ過できる有機体は固形培養基の上で成長させることが出来、これらは多様な形態に、転換してゆく過程が続く」ことを明らかにした実験前のことで、残念なことに学会では孤立した主張であった。Kleiberger とジエンは、1930 年代中頃に彼らの最初の研究結果を発表した。

ケンダルは、それより 2、3 年早かった。

しかし、Kleiberger とジエンは、他に影響を与えなかった。彼らはその時、他の研究者から離れて、基本的な問題を研究し、実験していた。

ケンダルはリバーの考え方に疑問を呈するだけでなく、他の研究者に対して権威を次第に確立し、知らずに知らずに医学的権威を脅かす存在になっていた。

1982 年に、チューレーン大学医学部のジェラルド J Donigie は、「細胞壁が不足しているバクテリア」を発表し、50 年にわたるケンダールの研究の封印を、解くことになった。

Domingue は、書いた：

細胞壁が不足しているバクテリアが、病気の原因となるという概念を支えるかなり多くの実験的で客観的な証拠があるが、これまで公表されなかった。

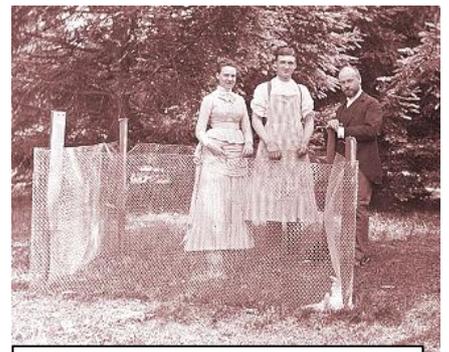
現在出版されているこの分野の本にも、その事実はない。

主要な焦点は、これらの異常な有機体がつ、臨床的重要性にある。

病気の中でこれらの有機体の果たす役割は、医学的研究分野で最大の盲点である。

このように、ケンダールの発見の 50 年後でも重要な価値ある証拠があっても、正統的見解は、これを無視する誤った医学理論が、癌研究とガンの治療を支配している。

ケンダールの有名な支持者の 1 人は、メイヨー・クリニックのエドワード Rosenow 博士であ



小児麻痺の研究用のウサギを見るウィリアム・ウェルチ 1887 年

った。

Rosenow は、対立するロックフェラー研究所のトーマス・リバーによって、意地悪く攻撃された。

1976年ニュー・エイジ・ジャーナルの記事で報告されたように、Rosenow の息子、エドワード C. Rosenow, Jr 博士は、アメリカの医学団体の主任管理スタッフであったが彼の父はロックフェラー研究所の大物によって、実験的な不正を非難されたと主張している。

Rosenow は、息子に「彼らは、まったく聞こうとしなかった」と話していた。

「Rosenow の息子が後で話したことだが、ジンサーの学生としてハーヴァード大学医学部にいたとき、ジンサーは Rosenow の息子とわかっていたが、Rosenow 卿の培養液の複製品は使わず、Rosenow の試験結果も、非難したという。

この医学界の大物は、明らかに彼ら自身の仲間の1人の考えを聞こうとしなかった。

1911年に、ロックフェラー研究所のペイトン・ラウスは、最初にウイルスがガンの原因となる可能性があるという証拠を提出した。

それでも、正統的な見方は、何十年も、ガンは「身体細胞の突然変異が原因である」「遺伝子は欠陥を発展させ、細胞機能を混乱させる。」という見方以外になかった。1974年に発表されたウイルスについての本の著者、デイビッド・ロックは、20世紀半ばに、ロックフェラー研究所の通路でペイトン・ラウスに呼び戻され、微生物がガンの原因である可能性があることを知ってショックを受ける。

ロックは書いた、「1940年代と1950年代は、身体細胞の突然変異説の絶頂期であった。

その時は、ガンが感染因子によって発生するのではなく、突然変異が原因で細胞に独特な変形がおこるとする科学的ドグマ」が支配していた。

1966年にペイトン・ラウスは彼のガンウイルスの発見でついにノーベル賞を受け、表彰された。彼はその時、86歳で、彼の発見から55年過ぎていた。

ペイトン・ラウスの発見したラウス・ウイルスは長い間、広く知られていたが、慎重に秘密にされてきた。

しかし1974年の、リダ Mattman の本に書かれたことでは、ラウス「ウイルス」は古典的なバクテリアであることが発見されている。

Mattman はエリノア・アレキサンダー・ジャクソン博士の研究を引用して、ラウス・ウイルスが RNA と DNA が片方だけある様に生み出していると説明した。

つまりラウス・ウイルスには、おそらく DNA だけ、または RNA だけが含まれている。(両方が中に存在しない。したがって DNA と RNA の2つで複製を繰り返す一般的なウイルスではない)。

正統的なウイルス学校では、ほとんど知られてないが、「古典的な」ウイルスが疑う余地なく、実は「ろ過できるバクテリアであるという事実が皆に理解されていないところに、難点がある。

1969年ニューヨーク科学アカデミーに存在する論文で、ヴァージニア・リヴィングストン

博士とエリノア・アレキサンダー・ジャクソン博士は、ガンの病原体となる微生物が存在すると断言した。

彼らは、多くのガン研究者が見つけれない理由が型を変えるからだと言った。

リヴィングストンとアレキサンダー・ジャクソンは、断言した：

「有機体のミステリーの秘密の鍵を解明した、一つはその注目に値する多形態性と、もう一つは他の微生物からの刺激である。

そのいろいろな変形過程で、ウイルス、球状細菌、ジフテリア菌 *diphtheroids*、細菌と菌類といったものに分類されると思われる。」

ペンシルベニア大学生化学名誉教授フローレンス・サイバート、そして、フィラデルフィア癌研究学会のアイリーン・ディラー博士は 1967 年にニューヨーク科学アカデミーに基本的に同じ論証を提出した

サイバートの本「科学者の丘の上の小石」（1968 年）には以下の部分が含まれている：

「我々は、腫瘍のあらゆる部分とあらゆる深刻な白血病の血液試料から細菌を分離した。」

これは、ニューヨーク科学アカデミーの年次報告に発表された。

サイバートも、ガンが治療されることになるならば、明らかに多形態性が理解されなければならず、この現象は根底にある科学的な現実であると認めた：

「これらの細菌で最大の面白い特性の 1 つは、その変幻自在な多形態性にある。

たとえば、これらはまとまった球菌からすぐに細長いロッドに、そして、さらに事情によって長い糸のようなフィラメントに形が変化する。

これらは培養基の上で成長し、そして、とても長いものに成長する。

これらの細菌のライフサイクルの中に濾過形があるという事実は、さらに面白い；つまり、これらは細菌用のフィルタを完全に通すほど小さくなることができ、また細菌に戻ることもある。

この濾過可能な特性はウイルスの性質で、ウイルスの主な判定条件の 1 つである。この性質によって細菌と異なるものとして分離される。

本来ウイルスは、細菌のような人工の培養基では生きられない。

しかし我々の確認した濾過可能なこの形は、普通の人工の細菌の培養基の上で再び成長することができ、この上で拡大成長する。」

治療に成功したケンダルのガン・クリニックの予備的段階で働いた、「メイヨー・クリニックのエドワード Rosenow 博士は 1914 年という早い時期に「感染症ジャーナル」に次のように書いた。

「もはや感染症は単に細菌の侵入した場所だけに焦点をあててみるだけではいけないようだ。その場所の状況は、感染症の特性が発現するのに、好都合な構造があるため、その部分に広範囲にわたる類似性を与える。

この考えは、身体が、病原性の細菌になる微生物の棲む場所を生み出し、逆

に、組織体の内部環境を向上させると、バクテリアを無害なものにし、さらに役に立つ、「ミクロジミア *microzymia*」に変化させることが出来るという、19世紀のベシャン *Bechamp* の結論と同じものでもあった。

E.ダグラス・ヒュームは書いた、「ベシャン *Bechamp* は身体の混乱状態とその身体に内在する生物粒子の混乱状態の間の関係を明らかにした。

身体の環境が悪化すると同時に、健全なミクロジミア *microzymas* の通常の増殖が妨げられ、従って、様々な形の有機体（バクテリアとして知られている）が成長しやすい。

ベシャン *Bechamp* の見解によればこの環境が改善されると、移行型のバクテリアは、ミクロジミア *microzymian* の状態に戻る、しかも、当初より非常に小さく、非常に多くなる。

1971年の末に、議会は国家ガン対策法案を通過させた。

.この後1983年にロビンとデイビッド・ニコラスは次のように書いた。（ウイルス学、情報プロフィール）、

"1970年代、特にウイルス研究の原動力となった米国では、ガンウイルスの役割の研究は、特別な重要性を与えられたが、いろいろな型式のバクテリアは、無視された。さらに1986年に、研究者がガンの原因としてバクテリアに言及すると、「専門家によって解雇された。大学で責任ある人は1934年のガン療法についてのレポートを読むのを止められ、たまたま、バクテリアの説明を聞いても、バクテリアはガンの原因としては重要でなく、ウイルスがガンの原因であったと確信させるよう洗脳された。

1986年までには、ウイルス研究で大きな発見があったが、多くの人々が、依然としてガンで死んでいた。

微生物の多形態性研究を指導する組織と多形態性に基づくアメリカのガンの治療法に、依然反対している、世界最大の非営利の癌研究センター、スローン-ケッタリング記念癌センターは1985年に460,000人のアメリカ人が、ガンで死んでいるので1986年に、基金調達を訴えた。

（1975年スローン-ケッタリングは、全ガン血液検査で多形態のバクテリア・ウイルスがいるのを見せられたが、自身の研究所の研究結果を殺にした。）

1974年に、「我々はどのように研究するか十分に理解してないので、ガンを攻撃する方法を知らず、まして征服出来ない。」と、ロックフェラー大学のノーマン *Zinder* 博士が認めた。しかしその時でさえ、「答え」は科学アカデミーのレポート、本、古い新聞、そして科学雑誌の中に存在していた。

意義深い研究に資金が投資されず、全ての関連した論文を相互に参照しないようにしたとすれば、なぜそうしたのか？

1980年代になっても、ガン研究の権威者は、何十年前と同じように正統的でない研究者の多形態性原因論と治療法についての議論と考えを検閲している。

保守的な臨床試験の傾向と資金の流れは、単形性ウイルスの研究に向かい、化学的な治療法は癌細胞を殺すことを目指すだけで、血流の中にある全身を攻撃する微生物を標的にし

なかった。

基本的にたとえ一流の有名科学者だとしても、具合の悪い主張を繰り返さない者にだけ、研究資金が支給された。

スローン-ケッタリング記念癌センターの前のアシスタントディレクターのラルフ・W・モス、は 1980 年の本「ガンシンドローム」で助成金の申請の障壁について説明した：

「新しい許可申請は、したがって、多種多様な科学者と、官僚とビジネスマンに承認されなければならない。そしてこれらの多くの人の間の意見の同意がなければ承認されない。そして、定義上ほとんどそのような申請応用例は、従来の科学の範囲内で良いものでなければならない。

これらの『厄介な制約』によって、革新的な新しい考えが、NCI「(国立癌研究所 =NCI)の承認を得ることはありえないとまでは言えないとしても、かなり困難である。」

この「革新的な新しい考え」の中に、1934 年のカリフォルニア・クリニックでのガン治療が含まれるかもしれない。

その翌年には、ほぼ 460,000 人のアメリカ人が無駄死にすると予測される中で、税金を新しいクリニックに資金供給するが、まるで新しい考え方と革新的テクノロジーを長期間秘密にするために使っているかのように見える。

フランク J.ラウシャー, Jr. (国立癌研究所の所長) は 1975 年に、含みを持たせて「我々、納税者のお金を何に使っているのですか？」と質問した、

権威ある誰もが正直には答えたくない質問であった

ガンの治療法の隠蔽の恐ろしい結果は、あまりによく知られている。

1970 年から現在の(1986 年)までの犠牲者数は 600 万人以上である。そして、これはナチの大虐殺の数と同じである。

1934 年から 1970 年までに死んだ人々を死者数に含めれば、被害者の数はもっと増大する。

ガンの治療法の隠蔽は、アメリカにおける大虐殺となった。

アメリカ人の多数が真実を知れば政治的な猛火が噴出するだろう。

第3章

アメリカでの癌の治療法について

最初 1934 年に使われて成功したガンの治療法の隠蔽は、いくつかの特殊な、要素の組み合わせで起きた。

これらの、要素は次のものであった：

米国医師会の中にある、非学問的で非現実的な個人的な原則へのこだわり、そして科学的なライバル意識、組織のプライドと傲慢、スローン-ケッタリング記念財団の責任者の権力欲、異なる見解を押しつぶしてでも、自身のガンの治療法が知られるようにする。そして既得権をもつ製薬会社が、アメリカのガン治療法の方角性を決定するためと、医学管理のため政治的なメディアの支配権をゆっくりと獲得していったことにあった。

1934 年以降、様々な情勢が、あった。

重要な立場の人が 1 人でも勇敢に行動したならば、20 世紀の治療法的全歴史は、変わる可能性があった。

しかし、何も起こらなかった。

生命のコストと資産の損失は、数え切れない金額であった。

1934 年のガン治療法を隠蔽し、鎮圧し、そして、評価することを先延ばししたことは、我々の歴史上で、何にもものにもまさるアメリカの大災害であった。これは誇張ではない。

たとえ 1934 年の療法が 1980 年代後期に実現されたとしても、すでに起きた不毛な恐怖の歴史を偽ることはできない。

米国医師会は、1846 年につくられたが、1901 年までは、アメリカ国内で行われる治療法の大枠を決定する権力を持つほど、再編出来なかった。

しかし医者には、国立医学協会の会員になることを強制し、その国立医学協会に入るためには自分の住んでいる州の医学会に属さねばならないようにした。

こうして、大多数の医者はすぐに、AMA 米国医師会に加入し、その会員数を増やしていった。

同時に、医学部は公認の基準に基づくものにし、医師の標準業務を確定した。従うことを拒否した人々は、医師免許を失った。

1912 年に、AMA 米国医師会はその「医師協同組合」広報部を造った。

AMA 米国医師会のシカゴ本部は誰が国家医学専門誌に広告できるか決定するだけでなく、製品が米国医師会に「承認される」ために、広告主が広告料を支払うように求めた。

「モリス・フィッシュバインは、1920 年代中頃から、1949 年 6 月 6 日にアトランティックシティの米国医師会協定によって追い出されるまで、AMA の事実上の独裁者であった。

何箇所かの州の医者代表団の反乱のため、彼が権力の位置から引退した後でさえ、彼の設定した方針は、長年継続していた。

彼は、1970年代初期に死んだ。

1922年という早い時期にイリノイ医学会は、起きていることに対して警告した。

しかし、少数の人しか注意を払わず、この傾向に反対することをあえてしなかった：

「AMA 米国医師会は、まるで個人の支配下にある組織で、アメリカ合衆国の全医業は、1人の男性の意のままだ。アメリカ医学専門ジャーナルは、全資金を支配している。

「1つの例として、AMAの広告の認可の「不正」がどんな具合だったか報告する。

「素晴らしい薬の話」と「医学ムツソリーニ」の2冊の本の著者モリス A ビール、によると、ロサンゼルスの C.ギルドナーは、Maelum と呼ばれている製品を配信するために、キングの研究所と契約した。キングの研究所は、その製品のために AMA による、認可を要請した。

1931年10月27日に、AMAの責任者フィッシュバインは、承認されたと書いた

1931年11月10日になって、ギルドナーは全国の AMA ジャーナルまたは 42 州にある医学専門誌に広告を出さないかとフィッシュバインに言われ、ギルドナーは、それを拒否した。

フィッシュバインは1週間後 1931年11月16日に、AMAの食品委員会を通して、AMAの承認を取り消した。ビールによると、この手順は、よくあることだった。

製品は、その健全性と効果について、テストされず、広告収益だけが考えられていた。

要するに、AMAは長年広告主を差配するほどの権力を濫用してきた。

更に悪いことに、製品が安全でなく、不健全であった広告主にも、製品認可のお墨付きを金で与えた。

実質的に同じことが、AMAの「認可された製品」と「認可されなかった」製品のリストにも見られる。唯一の相違点はこれらのメーカーが、AMAのジャーナルの広告を掲載したかどうかだけが唯一の相違点であった。

この状況を作り出した責任あるこの男を AP 通信科学ライター・ハワード・ブレイクスリーは、「モリス・フィッシュバインはアメリカの医学の中枢である」といった。

フィッシュバインは、AMAのシカゴ本部で働いていた。

ガン・クリニックは 1934 年には成功していたが、数年後に、クリニックに参加しなかった R. T.ハーマー博士は、南カリフォルニアで治療にライフ装置を使い始めた。

ベンジャミン・カレンによると、R. T.ハーマー博士はアイデアから実現までガン治療法の全ての発展を観察してきた。

フィッシュバインはハーマー博士本人を見つけ出して、「買収しよう」とした

彼から拒絶されると、フィッシュバインは、ハーマー博士のライフのガン治療装置を破壊するために、AMAから人を派遣した。

カレンが思い出したことによれば：「ハーマー博士は1日平均40人治療した

彼は、2人のオペレーターを雇わなければならなかった。
彼はオペレーターを訓練し、非常に綿密に見守った。
治療のケースヒストリーは、急速に増えていった。
それらの中に、シカゴから来た老人が、いた。
彼には、彼の首と顔のあたり一面に悪性腫瘍があった。
むごたらしいかたまりであった。
ものすごくおそろしい状態であった。赤くただれた塊であった。
彼の顔の至る所を切除した。目の底からまぶたまで切除し、耳の下部から耳たぶの底まで切除し、頬の部分と、鼻とあごまで進んだ。
彼は、それをずっと見ていた。
しかし、そのようなものすべてが6ヵ月で、彼の顔の端に少し暗い影だけが残るだけになって、その状態は消えた。
その人は82才であった、
私は、今までそのような治療経過を決して見たことはなかった。
再び美しい赤ちゃんの皮膚のような清らかな皮膜があることの楽しみが戻っていた。
「彼はシカゴに帰ろうとした。
フィッシュバインは普通では、今まで通り生きる可能性はなかったので治療について聞こうとした。
フィッシュバインは、老人を呼び老人は彼と話したが、寡黙に話を聞いていた。
フィッシュバインは彼を気前よくもてなし、最終的には、フィッシュバインはサンディエゴ・クリニックでのハーマー博士による癌の治療を知った。
「すぐに、ロサンゼルスから別の男がやってきて、我々とも何回か会うことになり専門的な話になった。
ついに、その男は夕食を我々ととって、買収についての話しを切り出した。
我々はそれに応じなかった。
名声は広がったが、大きな広告は出さなかった
しかし、もちろん、それらは、ハーマー博士の治療歴になった。
ハーマー博士は、この時代で最大の素晴らしい発展だと言った。
彼の治療歴は、全く素晴らしいものであったが、「フィッシュバインは、会社の共同経営者を買収した。
結果的に、我々は認可なしに稼働させたとして裁判所に断定された。
1939年に、地元の医師会からのプレッシャーの下で私は、1年後に、一文無しになった。」
R. T.ハーマー博士は、この治療法を捨てた。
彼は、この話の中で、1人だけのヒーローではない。
このように、1934年から1939年の、短い数年間に、ガンの治療法は、臨床的にデモンストラクションされ、他の医者によって他の病気の治療にも使用され、拡大していったが、

AMA(全米医学協会)のモリス・フィッシュバインの買収に応じなかったときに、終了した。

「彼の実践は結果的にこの技術を凍結させることとなった。そしてこの全米医学協会の決定で何百万人もの死ななくてもよいアメリカ人が、醜く死んでいった。これは人類史上前例のない貪欲な犯罪的行為であった。これは全米医学協会がおこなった最大の恥ずべき行為である。

何年もたったあと、AMA 全米医学協会に対して巨額の損害賠償の対象となる訴訟の引き金がひかれれば、アメリカの法律の施行の歴史のなかで未曾有の大事件になるかもしれない。連邦政府は、この時に（1938～1939）、どこで、なにをしていたのだろうか？

衛生研究所の組織は 1930 年にアメリカ国立衛生研究所に再編され、1938 年に、メリーランド、ワシントン D.C.郊外のベセズダへ移動したが、その時点では、アメリカ国立衛生研究所は、まだ小さな組織であった。

国立癌研究所は、1937 年に初めて作られた。

ガンの治療法の政府認可制度が開始されたところであった。

そして、1938 年に、フィッシュバインはワシントン D.C.でルーズベルトの最初の国民健康法案を停止させるためのロビー活動をしていた。

健康ビジネスの収益を国家から守ることと、ガン患者を「極寒の中で外に出す」ような治療法が永続的に行なえるよう、部外者からガードすること、といった他に、医療の独占支配がその目的であった。

黒幕にいる権力者には、プライベートな研究センターと製薬会社の 2 つのグループがあった。

ポール・スタンは、彼の 1984 年のピューリツァー賞をもらった本（「治療法の社会的変化」）で状況を説明した：

「1900～1940 年の、医学研究の主要資金は、プライベートなものから支給されていた。

個人的な基金と大学は、主要スポンサーで、基礎研究の主人であった。

最も豊かに資金が提供されている研究センターはロックフェラー医学研究所で、1902 年に設立され、1928 年までに養老基金として 6500 万ドル、ジョン・D・ロックフェラーから受け取っていた。

他の大きな「プライベートなスポンサーは製薬会社であった。そして、それは 1920 年代後半から、急速に拡大した。

個人基金と、大学と研究所が併せて 2500 万ドル支出したのと比較して、1945 年の製薬会社の研究支出の予想は 4000 万ドルであった」

1930～1950 年の未開発の癌研究の分野でもう一つの「権威」ある重要な団体は、アメリカの最初のガン専門病院として 1884 年に設立されたニューヨークのスローン-ケッタリング記念癌センターであった。

1940 から 1950 年代中頃のスローン-ケッタリング記念財団は、製薬会社のための最大の医薬品試験センターであった。

コーネリアス P.ローズ(その人はロックフェラー研究所で1930年代を働いて過ごした)は、1939年にスローン・ケッタリング記念財団の責任者になった。

彼は、1959年に耳が遠くなるまでその位置にいた。

ローズは、1943年から1945年まで太平洋戦争の化学戦術部門の責任者であった、そして、その後、国の癌化学療法での第一人者として、指導的立場についていた。

ヴァージニア・リヴィングストン・ホイラー博士によると、「ローズ博士は、全ての国のガンの治療方針を決定し命じた。

「1950年、Irene ディラー博士のガン微生物の発見をニューヨーク科学アカデミーで発表することを阻止したのはローズ博士であった。

彼女が1953年ローマで同じ発見を発表したあと、Casper博士のニュージャージー研究所の資金がキャンセルされるよう取り決めたのも、このローズ博士であった。

そして、誰であるかは未確認ではあるが、強力なニューヨークのガンの権威者達によって扇動された国税局の研究所への調査は、彼女の惨めさを倍加させた。こうして研究所は、終了した。

スローン・ケッタリング記念財団は、米国癌学会と密接に連携していた。

米国癌学会は、ジョン・D・ロックフェラー、Jrと彼の仕事仲間によって1913年に設立された。

戦争の後、再編成された米国癌学会の権力は、製薬会社の経営陣、広告業界、スローン・ケッタリング記念財団理事と他の保守的な治療の支持者によって維持されていた。

米国癌学会の公的な発言は、高額の研究費を生み出すのでガン学界には、非常な影響力がある。

スローン・ケッタリング記念癌センターの前の公共問題公式アシスタントディレクターのラルフ・W・モスは明言した。

「協会は、現在、その権力の拡大方向を支持する人々に何千万ドルも配布し、反対する人々には、逆に資金を不足させる多くの強力なコネクションがある」

米国癌学会の自由にできた全ての富が多く年月使われ、その目的は、ガンの根絶であったはずだが、1934年に治療を始めたガン微生物研究のパイオニアと医者は、その後も密かに治療を続けてはいたが、科学的に孤立させられ、ガン微生物研究の科学者と医者は目立たないよう社会的に抹殺された。

これは不運であったとか、無能であったとか、または、何かそういったたぐいのことなのだろうか？

この、ガンの研究分野に重大な権力をもつ関係者は、医者、プライベートな研究機関、製薬会社、米国癌学会、更には国立癌研究所、研究団体とFDA(食品・医薬品局)を通して働くアメリカ政府の役人といった者達である。(恐れられていたFDAは研究者を急襲し、法的いやがらせと費用のかかる試験を強制するといった処置によってこの権力の部外者を守勢に立たせた)

これらの団体と特に政治的な統括者は、専門的職業意識と、専門知識に基づく公共の福祉への献身を高らかに宣言する。

結果は、こうした専門的職業意識の目的とは非常に異なる話となる。

ラルフ・モスは、本「ガン症候群」からスローン-ケッタリング記念財団化学治療医の故デイビッド・カルノフスキーの言った言葉を引用して、ガンの権威者の致命的な弱点をあげている。:

「治療の型式を調査し、治療の優劣を決める際、問題はその支持者の評判ではない、彼の理論の説得力と卓越性と、その患者からの証拠、または治療についての公的な議論の内容である、しかも、治療が簡単に行えるかという点だ」

もし現在も、リバー、フィッシュバイン、ローズ、そして官僚、製薬スポークスマンといった懐疑的な研究姿勢の科学者だけが大勢を占めていたとしても、慈善家と他の医師免許を持ったプロが、このカルノフスキーの考え方の科学的な正しさを道義的に誇りをもって主張すべきだと思ったら、ガンに対する治療法は、何十年も抑圧されてこなかったかもしれない。そして、今日、すばやい認可テストと実現のチャンスが来ていたのかもしれない。デイビッド M. ロックは同じように、Katnofsky カルノフスキーの本「ウイルス」から引用した:

「シカゴ大学の偉大なガン研究者でノーベル賞受賞者(チャールズ B. ハギンズ)の言葉は、以下の通りである。

「がんは治せる病気である。」

第4章

ガンの治療法を発見した男

1913年に、機械への愛着と科学への好奇心をもつ男性は、ニューヨークから、サンディエゴに到着した。

彼はネブラスカの Elkhorn で生まれた、そして 25 歳に幸せな結婚をした

彼は、新しい人生のスタートにつき、未来に続く医学の道を志した。

彼の名前はロイヤル・レイモンド・ライフであった。そして、親友は彼をロイと呼んだ。

親友は彼の才能に畏敬の念を覚え、彼の優しさと謙遜がとても好きであった。

ロイヤル R. ライフは、細菌学、顕微鏡と電子工学に魅了された

次の 7 年間は、第一次世界大戦の間で、アメリカ政府のため、外国の研究所の調査の目的でヨーロッパに滞在していた海軍でのミステリアスな時期が含まれる。

彼は考え、いろいろな分野で実験をし、装置を造るのに必要な機械技術をマスターした。

これらは、1920 年代の世界がこれまで想像したことのないようなものであった。

彼の人生で最高のアイデアが浮かんだときは 1920 年代であった、

ロイヤル・ライフは、それを完成させようとした。

ジャーナリスト・ニューアル・ジョーンズは、1938 年 5 月 6 日の夕方サンディエゴのイブニングニュースに、歴史的な出来事を解説した：

「サンディエゴに住むこの人物には本当に豊かな才能がある。様々な重要なことを広く研究し、実験し、信じられないほど多数の問題について、発見し発明している。」

これらの探求分野は、弾道学からレース用の自動車の製作、光学部品といったことにおよび、これらに関して、多くの深遠な科学を研究してきた。

そして、1920 年に、彼は病気を電氣的に治療する方法が可能であるか研究していった。

「その時、病気の有機体の化学的構成要素に個性的な違いがあることに気がつき、電氣的特性を観察した。(有機体の電氣的極性を観察した)

「ランダムな推測を繰り返す中で、彼の心に突然驚くべき、考えがうまれた。

『これらの有機体に異なる電氣周波数を放射するならば、何が起こるだろうか？』、彼は疑問に思った。」それで、その実験をするために必要な器具を集め始めた：

顕微鏡、電子器材、蛍光管、細菌学用装置、モルモットのためのおり、カメラと彼自身のデザインで造った機械といったものであった。

2 人のサンディエゴの製造業者-ティムケン・ローラー・ベアリングカンパニー・アンドブリッジのオーナーのティムケンと、ブリッジズ・キャリーズ・カンパニーの所有者ブリッジズから、ライフ研究所の設立資金が提供され、融資が得られた。

1920年代後期までには、彼の仕事の第一段階は、完了した。

既存の原則を破った最初の顕微鏡が造られ、病原体となる微生物を電子的に破壊できるよう造られた特別な装置が、生まれた。

彼はそれに続く年に、この初期モデルを向上させ、完成させた。

全くユニークな方法で微生物の原因となる病気を確認し、これらの病原体となる微生物の正確な M.O.R、つまり致死的な振動率を割り出し分類した。

(「病原体となる微生物を爆破する」正確な周波数である)

それから、Rosenow とケンダルのような細菌学者を指導し医者と協同してガンと他の病気の治療にあたった。

あらゆるステップは、独創的なもので、時間がかかり困難に充ち、論争的となり、反対は、強力であった。

当時の権威ある人たちは、彼と協力した多くの人々を弾圧したが、結局、ライフ以前には無かった顕微鏡、電子周波数装置、そして、痛くない、薬のいらぬ新しい治療方法を後の時代の人々が確立することを可能にした。

このサンディエゴの天才に会って 45 年後の 1958 年に、思い出を語ってくれたライフの同僚が一人いる、

「彼は長年の分析と解明から最終的に 1 つのことを理解した

つまり、これらの濾過可能な形の微生物の精製によって、2 週間でモルモットにガンを生み出すことが出来ることを理解した。

彼は、ネズミ、モルモットとウサギでやってみたが、目標物をモルモットと白ネズミでついでに見つけ出した。

彼のペットは全くひどい状態になっていた。

彼は、かつて誰も見たことのないような最大限の注意を払ってその手術を行った。

医者は、誰も彼に近づくことはできなかった。

大きな強力な拡大鏡を使わなければならなかった。

これまで見た中で最も素晴らしい手術を彼は、行った。

腸からあらゆる触手を完全に根絶し、縫いあげた。良くなると、完全にその事がわからないうようになった。

同じことを 1 度でなく数百回も、行った。

『それは何度も何度もおこなわれた。

私の願いはこのことを発表することであった。

私は、彼がしたことが偉業だと思ったので、この発展させた技術の詳細なすべての情報を発表することは私の願いでした。

「彼は、これらの培養組織をスライドで保存した。

彼はこれによって、ろ過性病原体を見ることを可能にし、完全に運動能力があつて、積極的にまわりを泳ぐのを確認することができた。

その時、彼は『これを見てください』と言って周波数ランプに点灯した。

病原体を破壊する周波数に設定して、ものすごいパワーの流れを部屋に解放した。

そのパワーで小さな病原菌は即死した。

「彼は、自分で顕微鏡を造り、自分で顕微鏡の微妙なミクロの動きを可能にする操作装置を造った。そして、他にもミクロ用の解剖器具など多くの装置を造った。

私は、いつもロイライフが不動の姿勢でその魔法の席に座りつづけるのを見ていた。

周波数を変化させ、スライドに写されたウイルスの死滅するとき時が、いつ来るかを観察し続けていた。24時間は、彼にとって何でもなかった。

彼は、しばしば48時間ぶっ続けで行っていた。

動くことなくそこに座っていた。

少しの水以外は、何も口に入れなかった。神経は、まるで冷たい、鋼のようだった。

彼は、決して動かず、彼の手は、決してふるえなかった。

「もちろん、彼は前もって訓練を受け、その後も、何度も自身を鍛え上げるために、非常に慎重に訓練していた。

それは、人間の自己コントロール力と持久力で得られた最大の素晴らしい映像の1つと云うべきものであった。

「私は、癌ウイルス見、ポリオウイルスを見、TBウイルスを見た。

多くの異なる性質のウイルス、特に致死的な3つの病気、TBウイルス、ポリオとガンのウイルスを一般の人々と、医者にも見せ、確認させた男が、ここにいた。

この時、これを見た医師の何人かは、その後、再三再四誇るべき発見をしていった。

彼らは、ガンウイルスの1つを分離抽出させ、ポリオウイルスの一つを分離抽出した。

ライフがやったことが、世界最大の途方もない出来事の1つだという理由は、35年前に、ロイ・ライフは、これを映像として初めて見せ、証明したということである。

アメリカ医学協会の強引で、正義を無視した、完全に狂った行動にもかかわらず、これらの機械はガンの治療が可能であることを実証した。

権威ある者達は、ロイライフの書いた本の何ページかを見ることができ、世界で悪性の病気と疾患の治療ために多くの優れた行為ができたはずだった。

すでに亡くなった数100万の人々がライフ装置の治療で、病気から回復することも出来たはずだった。

「私は、ロイライフが好きでした。

私は、私の理想としてロイを常に記憶しております

彼には、学んだことを記憶しておくかなりの能力と、かなりの知識量がありました。

彼は、確かに私の理想でした。

彼は多くの領域の科学的な知識を持っていたので、100人の医者をまとめても、年とったテディ・ルーズベルトの以外に、彼より利口な男性を知らない。

彼には、それほど多くの知恵があった。

必要ならば数 100 万ドルを得ることが出来、何百万ドルも儲けることが出来たと思う。
そして、それは、本来人類のためになるものであり、さまざまな騒ぎに関係なく、なにしろ、ライフ光線マシンと呼ぶ実績あるものを造った。

「私の推定では、ロイは私がかって会ったとても穏やかな、上品な、控え目な、道徳的な紳士のうちの 1 人であった。

私が、研究室に通ったおよそ 30 年間の間、1 度として不愉快なことばを聞いたことはなかった。

「多くの医者が、ライフの研究室のドアを叩いて通った研究室は、なんとも美しいものでした。中は美しく配置され器材は、正確におかれていた。;

彼の研究は、素晴らしいもので、その記念となる場所でした、そして、その雰囲気はどこにも再現することは出来ません。」

第 5 章

1920 年代

結核の原因となる微生物を破壊可能な電子特性の研究は 1920 年に、始められた。

それは最初にオリジナルな電磁波周波数装置が造られた年であった。

微生物を殺す周波数は知られていなかったのもので、ライフは試行錯誤で進めた。

ライフと彼の仲間はテストを繰り返した。

ついに、彼は成功を収めた、しかし、成功はより多くの問題を生み出した。

微生物は殺されたが、いくつかのケースでは、モルモットは毒素型の食中毒で死んだ。

答えを見つけ出すのに 3 年間かかった。

彼は、死んだバクテリアから出たウイルスが原因であると推測した。

彼は、豚を傷つけることなく、そのウイルスを殺す周波数を正確に確定し、純粋にウイルスだけを殺す方法を考案しなければならなかった。

ライフは最初の顕微鏡を 1917 年に造り始めて、1920 年に完成した。

1920 年から 1925 年まで、約 20,000 の病理学的組織が切断されて、着色された。

しかし、顕微鏡を最高のパワーにしても、未知のバクテリアまたは外来進入物質を示すことに失敗した。

ライフはウイルスを見る方法を向上させるための研究を続けた。

ライフは、Voghn とその後のロバート・コッホの 19 世紀の仕事を知っていた。

コッホは、ワクチンと、抗毒素でロッドの形の結核バクテリアを破壊できたが、残された実験動物は死んでしまった。

ライフは周波数装置で結核菌を破壊したが、結核バクテリアを殺すことでウイルスを体の中に放散させたと推理した。

彼がウイルスを見ることが出来、その周波数を確定出来ない限り、彼の方法では、結核を完治させることは出来ない。

だが、彼の顕微鏡のある研究室で結核の細菌と、ウイルス性の型のものを見る事が出来るならば、2 つ別々の周波数を確定することが出来、それら両方を同時に殺すことが出来る。

微細なウイルスはアニリン染料や既存の酸で着色することは不可能だとライフは信じた。

彼は、別の方法を見つけ出さねばならないと考えた。

彼は、途中でしばしば大きな科学的発見につながる直観的なジャンプをした。

その時彼は、ウイルスを光で染色する方法についての最初のアイデアを得た。

彼は、光の周波数が観察中の粒子または微生物の化学構成要素に正確に照準が合うことを可能にする顕微鏡を造り始めた。

後で、ライフはどのようにこの成功につながるジャンプができたか、リポーターに説明した。

1929年11月3日のサンディエゴ・ユニオンは1面の記事で、ライフを伝えた。

「1人は何をすべきか知っている細菌学者で、もう一人は試作する機械技師ならば、うまくいくでしょう、しかし、彼らはゆっくり、そして、不完全に試行錯誤を続けるでしょう。しかし、2人が同じ1人の人ならば、彼は両方の角度から作成方法を考えていけます；その時、繊細さ、正確さ、機械の技術、適当な記録を持ち続けたいという意欲、発明の才と失敗から学ぶ我慢強さが付け加わるならば、たとえ何があっても、問題の解決と必要な装置の完成の方へと向かっていけます。」こうして、ライフの2番目の顕微鏡は1929年に完成した。

1931年12月27日のロサンゼルスタイムズ誌の記事は、この顕微鏡の優れた照明方法について、市民に報告した：

「天文学者が望遠鏡で星から来る光りで、正確に星を研究したように、細菌もこのように、その対象から来る光りで研究されるでしょう。研究される細菌は、生きています、傷つき殺された死骸を観察しているのではないのです。」

その時、ライフはまた、ほとんど同じ時期に、ガンの原因となる微生物を破壊する方法を研究していた。

彼の癌研究は1922年に開始した。

彼が単純に「BX ウイルス」という名前を後でつけたガンの原因となる微生物を分離するのに、1932年までかかった。

1920年代はライフが純粋に研究に、とり組んでいた年であった。

彼のドアに尋ねてくる有名な微生物学者はなく、彼の周波数装置を患者に使用しようとする医者もなく、顕微鏡の専門家から彼の発明品について学びたいとする要請もなく、医学的委員会が、研究所の結果と臨床結果を合せて確認しようとすることもなかった。

研究室で彼の研究を邪魔する有名なガンの専門家もなく、彼の発見を認可手続きの過程に入れようとするガンの研究財団もなかった。

しかし、1929年に顕微鏡の存在が報告されたすぐ後から、科学界と隔離されていた生活は全て終わった。

ライフは、実験の実演と、手紙と会議のために時間を作らなければならなかった。

彼は、より多くの人々に説明しなければならず、更に、彼だけがその方法を知っており、彼だけがすることができた疲れる研究時間を確保しなければならなかった。

他の者が手助けしたが、結局邪魔になった。

彼の研究を盗もうとする、商売人と医者がいた。

そしてライフの発見は、名声と権威ある科学者への、挑戦となるので、反対された。

そして、モリス・フィッシュバインによる強力な邪魔が入った。

そして全米医学協会は「買収する」ことが出来なかったため、奇跡的な治療を作り出した

男を社会的に抹殺しようとした。

振り返ってみれば 1920 年代はライフの人生で最も静かな、雌伏の年であったが、「純粋に科学的」な意味では彼の人生の黄金期であった。

1929 年 11 月 3 日に、サンディエゴ・ユニオン紙は 1 面に

「サンディエゴに住むこの人は微生物の生命の神秘を明かにした」という題の記事を書いた。

記事は、ライフの驚くべき新しい顕微鏡が達成したことを説明した。

この記事はライフの「光による染色」方法が、完成に近づいていることを発表した。

記事は次のように説明した：

「彼は、組織の特徴を取り出すため、強い酸で染色すると、スライド化のために必要な複雑な処理と同様に、観察対象が無効なものに変化するとした。

「科学者は顕微鏡の下で細菌をピンで確定したと思っているが、化学的染色それ自体がまさしくその細菌を滅ぼし変化させてしまうことに気付いていない。

「それで、彼は化学薬品を使わない新しい方法を発展させた。

今までは、顕微鏡で観察する前に塩水につけた、組織の部分へ、5 日間の苛酷な準備が必要だったが、3 分以内に、染色用の薬が投与されない、あるがままの病気にかかった観察対象のスライスが用意できるようになった。

今までの方法では、おそらく顕微鏡の、観察対象としては、すでに役に立たなくなっていた。

彼は一旦これが完成したならば、このプロセスの生み出す可能性は、果てしないものだと思っていた。この過程を、ただ乗り越えるだけで、多くの人間的な苦しみが終結するかもしれなかった。これを探求している間も、医療研究者はすべて、まさに発見し求めている対象を破壊していた。

騒々しい 20 年代は終わっていった。

彼の最初の新聞記事の 2 週間前に、株式市場は大暴落した

ここからアメリカの 10 年続く不況が、前にひかえていた。

このライフの素晴らしい発見と、発明と医療の奇跡は、専門家の科学的な懐疑論と戦う必要があっただけでなく、国家的な経済危機の中で、これからの医療産業の方向を決定する力を持ち、なかなか理解されない挑戦と困難な研究課題にも融資可能な、強力な医学界とも戦わなければならなかった。

それでも、彼の第一の目標は、完了した。

ガン微生物は分離され破壊された。

病状は末期がんの患者を、治療し、彼らは治った。

ライフは目標を完成させた。

彼の研究が認められる数十年前のことであった。

彼が達成した「純粋科学」は、致死的な BX ガン微生物で苦しんでいる人々の痛みを、その

効果で「爆破する」ことを意味していた。

第 6 章

1930 年代初期

1931 年に 2 人の男が、ロイヤル R ライフの人生で一番強力なプロフェッショナルな支援を提供した。

アーサー・L・ ケンドール博士は、イリノイのサウスイースト大学医学部の医学研究部長であった。

ミルバンク・ジョンソン博士は、カルフォルニアのパサデナ病院とロサンゼルス医学界に影響力と権力をもつ責任者であった。

ライフと、ケンダルとジョンソンは、一緒に、ゆっくり慎重に、彼らの時代の科学的医学理論に対して攻撃を開始した。

おそらくサンディエゴ・ユニオンの 1929 年 11 月 3 日のニュース記事でケンダル博士は、ライフの奇跡の顕微鏡を知った。

彼は、そのような顕微鏡が本当に存在するかどうか、ロサンゼルス友人ジョンソン博士に質問した。

ジョンソン博士とアルヴィン G. Foord 博士（パサデナ病院の病理学者（その後、アメリカン病理学協会の会長））は、他の 2 人の先生とともにサンディエゴに旅行した。

このように Foord が最初からこの件にかかわっていた事実は、後になって、彼の大変な科学的な努力と協力を、やったことはないと言ったために、重要な証拠となる。

1950 年代にカリフォルニア州環境衛生とアメリカ医師協会はライフのガン治療をつぶすように動く。

このガンの治療法はこうして禁止されたので、その時以来何百万もの多くの人々が死に、装置を使って成功した医者は排除された。そして、文書と個人の証言が示すように、この作られた悪い評判は文字通り「まっかな嘘」であった。

しかし、1931 年にジョンソンと Foord とライフが最初に会ったとき、ライフの素晴らしい顕微鏡によって医学の将来は際限のない進歩だけがあるように見えた。この時は 4 人の医者は、まだ弾圧されていなかった。

ロサンゼルスに戻ったジョンソンは、シカゴのケンダルに、ライフについての報告を打電した。

ケンダルは、電報で返事をおくった、「土曜日の夜の、カリフォルニアの星に、期待します」ケンダル博士は、バクテリアの「濾過性病原毒」部分を分離させ、複写の継続を可能にするタンパク質培養基を発明した。（その発明者の名前から後に「K 培養基——ケンダル培養基」と呼ばれる）

この主張は、ウイルスが再生のために生きた組織を必要とすると、頑固に主張するロック

フェラー研究所の1926年のトーマス・リバー博士の説に真っ向から、対立した。ライフと、ケンダルその他は1年以内に人工的にウイルスを培養することが出来ることを証明することになっていた。

この無知で頑固なリバーには、歴史上最大の医学知識の進歩の1つを抑制した、責任がある。

リバーは1932年にケンダルに反対し、ボルチモアのアメリカの医者協会で、彼に会ったとき、うそつきと呼んだが、リバーにはライフの顕微鏡で「K 培養基」に存在するウイルスを見たことはなかった。

他のトップの細菌学者が同じ結果を得た後でさえ、リバーはライフ顕微鏡について知ろうともしなかった。

1980年代の今でもこのリバーの誤った概念は、正統的な学会の「原則」である。

ケンダルは1931年11月中旬にカリフォルニアに到着し、ジョンソンがケンダルをライフに会うために案内した。

ライフは、ケンダルに彼の顕微鏡を持ってきて、ケンダルはライフに彼の「K 培養基」を持ってきた。この日、記念すべき歴史的に重要な会合が、行われた。

入手できる最高品質のフィルタによって3重にフィルターした、腸チフス細菌を「K 培養基」に置き、ライフの顕微鏡で結果を観察した。

それによってターコイズブルーの光で着色されたウイルスの小さい、鮮明な組織体が、見えた。

ケンダルは、自ら発見した証拠が、ライフが作り出した装置によってデモンストレーションするのを「見る事が出来た」。

科学の歴史で2つの記念すべき進展が、起きた

ウイルス組織が「K 培養基」で成長するのが確認された。

ウイルスは、光で染色されて、ライフのユニークな顕微鏡で彼ら自身の色によって確定された。

後になってスミソニアン研究所の年報に最初の、生きた状態で致死的なウイルスを見ることを可能にした男についてと、ライフ顕微鏡の技術的なヒントを書いたレポートを出した。:(最近の電子顕微鏡は、その標本を殺してしまう)

「濾過性病原体の型のチフス菌をライフ顕微鏡で検査した時、それは青色スペクトル・カラーを出しており、プリズムの偏光面がプラス4.8度逸脱する原因となっていた。

そこで反対の偏光プリズムの屈折角をマイナス4.8度に合わせ、ウイルスの培養組織を、単色の光線で照明し、腸チフス菌の化学構成要素に合わせた。

静止した無色の培養基の破片との高いコントラストで、小さな、卵形の、活発な運動型の、明るいターコイズブルーの体が、5000倍の倍率で観察された。」

「このテストは、結果を確認するために、18回、繰り返された。」

この成功で、ミルバンク・ジョンソン博士は2人の男の発見の榮譽を記すためと、議論出

来るよう、発表することをすぐに決定した。

ロサンゼルスで最も著名な医者、病理学者と細菌学者の 30 人以上が、1931 年 11 月 20 日の、この歴史的な事件となる夕食会に参加した。20 年後に、アルヴィン G. Foord 博士はライフの発見とジョージ Dock 博士など知らないとして、反対するグループへ「行く」が、当時は南カリフォルニア大学の特別研究委員会に属し、客観的な評価作業を監督しており、この夕方の医学集会にも出席していたことを写真は如実に示している。

1931 年 11 月 22 日のロサンゼルスタイムズはこの重要な医学集会の科学的な重要性を報告した

細菌学者と病理学者が列席した、この金曜日の医学界の夕食会でミルバンク・ジョンソン博士は、サンディエゴのロイヤル R. ライフ博士が 14 年間の努力で、最近完成した世界で最強の顕微鏡と、今回の最大の科学的発見について次のように述べ、ライフ博士と A.I. ケンダル博士に栄誉を与えた。

「ケンダル博士は名士達の集会で、フィルターで遮蔽することの出来ないチフス菌を、彼の発明した新しい『K 培養基』の上で成長させた研究について話した。そして、一般の顕微鏡でも簡単に見えるまで、十分大きく成長させて確認した。

— ケンダル博士が、言った — 『中程度の K 培養基』を用いることで、普通の顕微鏡では見れない大きさに変わり、極めて微細な、ろ過できるほどの小さな有機体になる。それはまた、微細ではあるが、ろ過できない型に戻すことが出来る。

「普通の顕微鏡の能力が 2000 倍であるのと比較して、17,000 倍まで拡大倍率があると言われる、ライフ博士の強力な顕微鏡を用いることにより、ケンダル博士は、かつては見えなかった、ろ過できる段階の腸チフス菌を見ることが出来るようになったと言った。これは多分ろ過できる（ウイルス）有機体が目で確認された、世界最初の出来事となるだろう。

「現在一般的に使用されている最強の顕微鏡でも、2000 から 2500 倍の間に拡大するのが限界です。しかし、ライフ博士は、まったく新しい光学的原理に基づいて、装着したレンズを巧妙に配置し、二重の水晶プリズムと強力な照明のための光源を導入することで、最も低い拡大倍率で 5,000 倍、最大拡大倍率 17,000 倍の顕微鏡を考案した。

「科学者は新しい顕微鏡を使って、新しい重要な発見を証明していくと予測している。ジョンソン博士の招待客は率直に言って、今までの顕微鏡の持っていた限界をはるかに越えた顕微鏡の完成については半信半疑だったが、視覚的な実演を見てライフ博士とケンダル博士に心から同意し、喜んで、医学界で最も注目すべき存在としての栄誉を与えた。

5 日後に、ロサンゼルスタイムズはライフの顕微鏡とケンダルの写真を発表した。

スーパー顕微鏡の写真が公的になったのはそれが初めてであった。

新聞の見出しは、「世界で最も強力な顕微鏡」であった。一方「ライフとケンダルは、雑誌



Dr. Avin G. Foord M.D.

「カリフォルニアと西洋の医学療法」の1931年12月号の記事の準備をすることになった。ライフとケンダルが何を行い、見たかを「ろ過できる状態のチフス菌の所見」という記事を書いた。

この雑誌に掲載されることは、カリフォルニアと、ネバダとユタ州の医学協会の公式公表と同じであった。

この評判が高い科学誌は、その時、全国の科学界に対して注意を喚起した。

1931年12月11日の雑誌「サイエンスニュース」は、次の題をつけた記事を載せた。

「ライフの顕微鏡で濾過性の組織体が見られた」

記事はケンダルの濾過性の培養基と、腸チフス菌の濾過される型式であったターコイズブルーの組織体と、ライフの顕微鏡について書いた。

以下のように説明した：

「ライフ博士の顕微鏡で使われる光は分極化している。つまり1つの特定の振動数の光以外の全ての光線を通過させない結晶で、光を分極化して特定の振動数に正確に合わせて振動させ、結晶を完全に通過させる。

装置に組み入れられた二重の反射プリズムによって、対象となる小さな物体への照明を正確にコントロールし、このプリズムの振動面を移動することで希望する方向を照明することも、可能である。

1931年12月27日に、ライフは250人の科学者の会議で顕微鏡をデモンストレーションしたとロサンゼルスタイムズは報じた。

記事は説明した — 「これは今まで顕微鏡を支配してきた原則にあてはまらない新しいタイプの拡大鏡である。

ライフ博士は顕微鏡を改良発展させた。それは、検査方法に革命をもたらし、ケンダル博士のような細菌学者が、未知の50の病気を生み出す原因となった細菌を特定したように、人類のさまざまな病気をひきおこす病原菌に対して予防接種の方法を見つけ出すことが可能にする装置であった。

「ケンダルはすぐに、アメリカの医師協会の前でそれを報告するよう誘われる。

1932年5月3日から4日にかけて、ボルチモアのジョンホプキンス大学でプレゼンテーションをした。

それを見て、トーマス・リバー博士とハーツ・ジンサーは、この顕微鏡を科学的に認証しなかった。

このいやがらせは、ライフの発見成果の発展が遅くなることを意味した

ライフとケンダルの切り開いたものは今は荒削りだとしても、新開地かもしれないのに、専門の細菌学者は、可能性を認めることに用心深い態度を固持していた。

そしてこの時代の不況は、最悪であった。

ロックフェラー研究所は資金の源であるだけでなく、専門家として認知されるための登竜門としても強力な権威をもっていた。

リバーとジンサーの無知で、容赦のない非科学的な行為は、結果としてたいへんな犯罪であった。

ライフの発見によって、臨床治療が変わり、まったく新しい医療制度が「起こる可能性があり」その研究の連鎖反応を爆発的に誘発する可能性があったために、その勢いは削がれる必要があった。

1932年が終わるまでに、ライフは培養組織と、実験動物で、発疹チフス・バクテリア、ポリオウイルス、ヘルペスウイルス、癌ウイルスと他のウイルスを死滅させることが出来た。人間を対象としての治療まで、わずか1歩のところまでできていた。

1932年のリバーとジンサーのいやがらせは、20世紀の治療法の歴史に破壊的な影響があった。

(ジンサーの細菌学の更新されたバージョンは、依然として今でも標準的な教科書である)残念なことに、リバーに畏敬と畏怖の念を覚えず、自分をつらぬく尊敬すべき細菌学者は、いなかった。

しかし、この凡庸な羊の群れのなかで2人の例外がいた。

クリストファー・バードの記事「何が、ライフ顕微鏡に起こったか？」は1976年3月のニュー・エイジ・ジャーナルに出たがそのなかで、:

悪意と痛烈な罵倒の最中に、ケンダルの救援に来たただ一人の研究支援者は、アメリカ合衆国の細菌学の大御所で、なによりも医学会で尊敬すべき先生、詩人のウィリアム H. ウェルチ博士、であった。その人は、なんらかの関係からケンダルの研究を見た。

ウェルチは、アメリカでその当時の最高の病理学者であった。

ジョンホプキンス大学の医学図書館は、彼の名をとって名づけられている。

彼は立ち上がって、言った、

「ケンダルの所見は、今までほとんどまともなことをやってこなかった治療法を改善し、前進すべき方向を明確に示している。」

当時この分野でリバーとジンサーは最大の権力者であった。

ケンダルのもう一人の支持者はメイヨー・クリニックの細菌学実験部門のエドワード C. Rosenow 博士であった。

(メイヨー・クリニックは今日でも世界で非常に優れた研究と治療をするクリニックの一つである。1987年1月6日のワシントン・ポストは書いた、「医学コミュニティの多くにとって、メイヨー・クリニックは理想とすべき『標準』で、他の医療センターはそれによって審査されるべき基準である。」)

医師協会でのケンダルの公的な屈辱体験の2ヵ月後の1932年7月5~7日に

メイヨー・クリニックの Rosenow は、シカゴのノースウェスタン大学医科大学で、ケンダル研究所の主催者ケンダルとライフに会った。

Rosenow は「メイヨー・クリニックのスタッフ・ミーティング」で卵形の、運動型、ターコイズブルーの物体が、紛れもなくデモンストレーションされ、この時、ヘルペスのウイ



Hans Zinsser

ジンサー博士

ルスが見られたと断言した、(1932年7月13日ミネソタ州ロチェスター、)

1932年8月26日の、サイエンスマガジンは Rosenow のレポートを発表した

「ライフの顕微鏡でフィルタを通す微生物の型についての所見」という記事で、Rosenow は述べた：

「ろ過できるターコイズブルーの組織体が間違いなく存在することがケンダルによって解説された。

これらは、普通の照明と普通の拡大倍率の方法によっては見えない。

ライフ顕微鏡を使用した、普通の顕微鏡でも見える対象物も含めた標本試験で、微粒子物質の正確な映像が高い拡大倍率で直接観察されることは疑いない。(対象物は8,000倍の倍率になると計算される)。

ライフがシカゴから去った3日後に、Rosenow は、メイヨー・クリニックからライフに書いた：

「ケンダル博士の研究所であなたの素晴らしい顕微鏡で今まで研究してきたものを見た忘れがたい3日間、顕微鏡で見る間、熱心にあなたが述べたことの重要性を考えていましたが、あなたがどのようにして物理学者がありえないと考えたものを完成できたか解説していただけないでしょうか。

この問題を考えると、あなたの巧妙な、激しい単色の光線による照明方法は単なる高い拡大倍率よりもたいへんな重要性があります。」

Rosenow は、正しかった。

独特の「色の周波数による」染色方法は、たいへん画期的であった

何年か後にテレビジョンが普及したので、故ライフの当時の同僚は、次のように説明した。

「テレビジョン受像機の中で色が調整されるように、ウイルスは光の周波数で染色された。」

しかしこれに関する説明としては最も非技術的な説明であった。

ライフは、1932年には、Rosenow が期待したような、彼の顕微鏡の物理学を説明する科学的な論文を書くことには関心はなかった。

ケンダルはライフとの会談のあとライフに「K培養基を提供した。

そして、ライフはケンダールが何を行いたいか知った。

ケンダールは、癌ウイルスを見つけ出したかったのだ。

しかしそれは、正確にライフが1932年に行ったことだった。

第7章

「BX」-ガンのウイルス

ライフは癌ウイルスの研究で 1931 年からケンダルの「K 培養基」を使い始めた。

1931年に、彼はカリフォルニアシティのパラダイス・バレー・国立サナトリウムから悪性であることが確認された非潰瘍性乳がんの組織を多数得た。

しかし、最初のガン培養組織では、彼が求めたウイルスの発生に失敗した。

その時、偶然に思いがけない出来事が起こった。

後になって、1938年5月11日のサンディアゴトリビューンは、そこで何が起きたかを次のように報告している：

「ライフがガンウイルスを見つけ、フィルタを通す有機体を見ようとしたが、培養基も顕微鏡も、その時は十分に機能しなかったように見えた」と、彼は説明した。

ついに彼はこれに関連して、治療法を偶然に発見した。

彼はその時、電流によって活性化したアルゴン・ガスで満たされた管状リングの蛍光管の輪の中央にガン培養組織を置いて、テストしていた。彼は電子的な放射によって、病原体の破壊実験をしていた。

アルゴン・ガスを入れた蛍光管に電流を流し、ガン培養組織に 24 時間あてると顕微鏡の下でその様子が変わることに気がついた

彼は、繰り返しこの現象を研究し、テストし、フィルタを通す癌ウイルスと、培養組織の中の赤い紫顆粒の発見を確かめた。

この後、アルゴンガスで満たした蛍光管に 5000 ボルトの電流を 24 時間流し続けて彼は「K 培養基」のガン組織の治療技術を完成させた。

その時、少しあたたかい温水に入れた 2 インチの真空管は、摂氏 37.5 度で 24 時間暖めておくよう設定されていた。

ライフは、ガス入り蛍光管がガン培養組織をイオン化することが原因かとも思ったが、これは真空管の中の空気の入っていない水の酸化作用によって打ち消されていた。

有機体のいくつかの化学構成要素はガス入り蛍光管の放射する波動によって、変化し、ライフの顕微鏡によってその変化が可視スペクトルで見れるようになった。

BX 癌ウイルスは、紫がかったどぎつい赤であった。

ライフは癌の濾過性病源性毒素を分離させることに成功した

1932年11月20日のライフの研究所で書かれたノートには癌ウイルスの特性の最初の説明がある。

彼のライフ顕微鏡を使って確定させる方法は、屈折角を 12 と 3/10 度にするのと、光の化学的屈折によって赤紫色に色をつけるという 2 つの点がユニークであった。

ライフが 1953 年に彼の発見を著作権で保護したとき、この角度は 12 と 3/16 度が変わっていた。

おそらく、それは彼の意図と目的について、急いで最初にノートに書いたものであった。

癌ウイルスの大きさは、本当に小さなものであった。

長さは、1/15 ミクロン、幅は、1/20 ミクロンであった。

1980 年代の普通の光学顕微鏡では、癌ウイルスを見ることはできない。

ライフと、彼の実験助手 E. S.フリーは、彼の発見の確認にとりかかった。

彼らは、同一の方法を繰り返し、104 回連続して同じ結果を得た。

ライフはガン微生物には 4 つの型式があることを証明することができた。:

1) BX (癌腫 carcinoma)

2) BY (BX より大きい肉腫 sarcoma)

3) がん患者の血液の 90%にほぼ存在する単一球状型の単核細胞

きちんと染色されるとき、この存在は標準的な研究用顕微鏡ですぐに見ることができる。

4)、淡紫色の多形態の菌類(cryptomyces pleomorphia)。これは、形態学的にランとキノコの菌と同一であるとライフは 1953 年の彼の本で書いた :

「これらの、型のものが 36 時間内に『BX』へ変わることができ、そして病理学的に全く健康な実験動物の新しい生物組織で典型的な腫瘍を生み出し、そこから、『BX』微生物を再び再生させることができた。

この完璧なプロセスは 300 回繰り返し確認され、同一の有効な結果が完全に再現された。

ライフは実験を継続した :

「我々は同じ休止中の cryptomyces pleomorphis 多形態性菌類の保存株から 1 年後に、採取し、それ自身をアスパラガスをベースにした培養基に戻した

もはや cryptomyces 菌類から採った多形態性菌類は、そこにはみられず、血液で見つけ出される単一球状型有機体もなく、『BX』または『BY』様態もないが、直接非潰瘍性の人間の乳房のしこりから分離された最初の癌ウイルスが存在していた。このように多形態性菌類の保存株から人間の癌ウイルスに変化したことを確認した。

今までの研究所の分析と検査方法では大腸菌の細菌も存在しているのにチェックを過ぎてしまうことは、知られていない。

ライフは、多形態性を証明した。

環境に従い、彼は癌ウイルスがどんな具合に型を変えるか教えた。

彼は、ベシヤン Bechamp、ケンダル、Rosenow、ウェルチの作業を確かめた、そして、大勢の多形態主義者の細菌学者が彼の後に来て、リバーと彼の多数の支持者の誤った正統的な法則と戦って、その研究結果を確かめた。

ライフは言った — 「実際は、病気を生み出すのは、バクテリア自体ではない、これらの微生物の化学構成物質によって人体の細胞に片寄った細胞代謝が起こることによる。人体の代謝が全くバランスが保たれているか、落ち着いているならば、病気にかかりにくいと

思っている」

しかし、ライフには理論について議論する時間はなかった。

彼は、他の研究をするためにそこを去った。

癌ウイルスを分離させた後に、次の目標は、それを破壊することであった。

彼は、何度も何度も彼の周波数装置で実験した。

それから、実験動物で行い、それらに予防接種をし、腫瘍が成長するのを観察し、それから、この組織体のウイルスを殺すために周波数装置を「BX」の周波数と同じ周波数にして使用した。

ライフは 1953 年に宣言し：

「癌と肉腫の人間の症例に関してこの周波数を使う試みがされる前に、実験動物で 400 回のテストに完全に成功した」

1934 年までに、ライフは人間で彼の周波数装置を使う準備をし、ガンの治療法の準備をした。

注：

ケンダルの「K 培養基」はそこでウイルスが成長するのが発見された後、科学者によって癌ウイルスを成長させるために使われた、そして、X線その他の電離放射線はウイルスの毒性を強め、腫瘍は1ヶ月でなく数週間で成長した。

渦巻き状に巻いた「アルゴン・ガス・ループ」蛍光管での培養組織のテストは、一度に 24 時間された。

少量の塩が加えられたきれいに乾燥した豚の腸で (tyrode) 解答が得られた

ライフは癌ウイルスが豚肉とキノコで成長するので、これが、ガンの自然な原因となるのを、発見した。

ライフは淡紫色の癌ウイルスを発見した。

第 8 章

前進

1933-1934 年

ライフは癌ウイルスを分離させた、しかし、彼は難題に直面した。

発見したものが、濾過性であるか、非濾過性であるかの議論がおこり、細菌学の分野からライフ、ケンダルと Rosenow に反論が突きつけられた。

細菌学者は口論をしても、懐疑的で、日和見をきめこんで、風がどちらに吹くか見ていた。顕微鏡の専門家も、傍観するだけだった。

彼らは新しいライフ顕微鏡を手にとり、その記事を読んだ、しかし、ライフとケンダルに 1 台ずつしかなかった。そして、少数の者しか、ケンダルのシカゴ研究所の中に顕微鏡が存在することを知らなかった。

ライフは、専門家のために多くの情報を用意しなかった。

ライフは、彼の癌ウイルスを確認し、テストし、再び確認するだけだった
ただその時、彼には前から望んでいた、新しい、より強力な顕微鏡が出来ていた。

ジョンソンとその他の医師は、ライフに会うため、手紙を書き、実演を頼んだ。

ライフはその時、礼儀正しく、有能だったが、しばしば返事を出さなかった。

ガンの治療の科学的な問題は、毎日彼に細心の完璧な注意を要求した。

1933 年、外からの圧力が続いていたが、ライフは 3 つの重大な偉業を達成した。

彼は、将来の細菌学者のために確固とした展望を与える論文を書いた。

ケンダルの培養組織と何百のモルモットで癌研究を発展させた。

そして、彼は新しい、スーパー顕微鏡を造った。

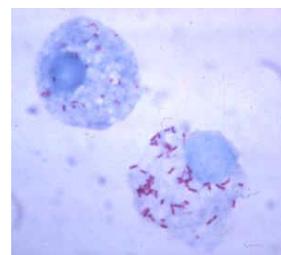
ライフの 1933 年の短い論文は、「ある種の病気の原因としてのウイルスとリケッチア」という題がつけられた。ここから 2、3 の重要な文を引用すると：

「ウイルスに関する既存の理論は、まったく不満足な説明でしかなく、悲しいことに全貌の理解が欠けている。

したがって、他の研究者が我々の所見を確認する誘因となるように、十分基本的な事実を確認可能にしたいという願いから、我々の理論を初めて説明しようと思う。

「筆者は、人工の培養基の上でウイルスを培養することが可能であるという仮説を長く受け入れてきた。

我々の最初の実験で得られた成功結果は、ケンダル博士と私自身による共著で記録した。



(訳者注

リケッチア (Rickettsia) は、*Rickettsia* 属の菌の総称。約 25 種を含む。細胞外で増殖できない偏性細胞内寄生菌である。)

その研究の重要性は、後に E. C. Rosenow 博士によるレポートで示された。

このレポートには、シカゴのノースウェスタン大学医科大学のケンダル博士の研究所で 1932 年 7 月 3 日、5 日、6 日と 7 日に得られた極めて重要な所見が、記録されている。

実験結果は、ケンダル博士、Rosenow 博士と私自身で集約された。

研究の過程と作業の重要な性質のために、各々が、一步ごとに、得られた結果を確認した
「上述のレポートは、2つの重要な事実を確立した。

1つはウイルスの人工的な培養組織が可能であること、

そして、2つ目は、そのウイルスが、ライフのユニバーサル顕微鏡で明らかに確認されたことである。」

彼が 1933 年に造った顕微鏡は、今まで作った 5 つの中で最も大きく、最も強力なものだった。

1つは 1920 年にできた。そして、1929 年にもう一つ。「ユニバーサル」のものは 1933 年に公式に完成したが、1932 年にはまだ未完成の型のものが使われていた。

上記のレポートが示唆したように、もう一つの顕微鏡は 1934 年に 1つ 1937 年 1つあって、それは 1952 年に最終的に完成した。

既存のいくつかの部分は、後の製品のために使われた。

1929 年に使われていた他の全ての商業的な顕微鏡と「スーパー」顕微鏡を比較すると、一般に売られているものは、拡大倍率は 5,000 倍と 17,000 倍の間であるが、1933 年のユニバーサル顕微鏡は 31,000 倍の拡大倍率から 60,000 倍の拡大倍率という性能を得ていた。(当時の条件で)

例えば 1944 年のスミソニアン報告は他の光学顕微鏡と比較してライフ顕微鏡の力強いパワーと明快さを伝えている：

「医者グループの前で、別の小さなライフ顕微鏡のデモンストレーションを最近おこなった (1942 年 5 月 16 日)

最初 1.8 の厚さのドライレンズと 10 倍の接眼レンズを備えた普通の市販の顕微鏡のツァイスが決めた回折格子を確認し比較した。

(回折格子 (かいせつこうし) とは、格子状のパターンによる回折を利用して干渉縞を作るために使用される光学素子の総称)

市販装置では 50 本のラインが現れ色彩と球形の両方にかかなりの変形があるのに対して、ライフの顕微鏡では 5 本のラインだけが見られ、この 5 本のラインは明晰にどんな異常もなしに非常に拡大されて全領域をカバーする。

続いてこの同じ 2 種類の顕微鏡で汚れのない普通の血液フィルムを回折グリッド検査で観察した。

市販の顕微鏡装置の視野の中の場合には 100 の細胞が、至る所に点在して見られた。

しかし、ライフの顕微鏡の視野には 10 の細胞だけがあった。」



American Bacteriologist,
Dr. Edward C. Rosenow

E. C. Rosenow 博士



Dr. Arthur Isaac Kendall

ライフが研究している間、これらを実演して見せることは、ミルバンク・ジョンソン博士の役割であった。

この時はまだ、ジョンソンは、ライフとケンダルと、一緒に夕食会の発起人となって、その他の雑用も含めて後援するといった単なる端役のような役割だった。

1933年の始めになると、ジョンソンは研究を始め、組織をつくっていった。

彼は、手紙を書き重要な医者を起こっていることを知らせた。

そして、彼はガン患者の治療計画を実施し始めた。

ライフは、純粋な科学者で疑う余地のない第一級の天才であったが、

これに対してミルバンク・ジョンソンは、実際的な意味で最高の医者であった。

彼は、世慣れた人で、こうした活動を止めることの出来ない実行力の人であった。

ガンの治療法を見つけ出し世界に持ってきたことで科学的な栄誉を最終的に授けるならば、Milbakh ジョンソン博士は、第一候補に挙げられるはずだ。

ジョンソンは、この数年間にライフに多数の手紙を送り、彼に知らせ、教え、議論し、訪問し、そして、人を連れて来た。そして、微妙にライフを刺激し推進した。

たとえライフがジョンソンを止めようとしても、おそらくそれは出来ないほど力強いものであった（彼はもちろんそんなことはしなかったが）

ジョンソンは、独立して自分自身の道を歩む、山をも動かす社会的エネルギーの巨大な力であった。

後になって、病理学者の、アルヴィン Foord は、ジョンソン博士とほとんど接触はなく 1930年代に起こったことは、知らなかったと主張したが、ジョンソンの手紙は、彼が個人的に深く関与していたことを示している。

ジョンソンは 1933年7月に、サンフランシスコのカリフォルニア大学のフーパー医学研究基金の責任者カール・マイヤー博士に会った。

後になるとマイヤーは、1934年に開かれたガン・クリニックと、あとに続く他のクリニックも支援した南カリフォルニア大学特別医学研究委員会で働くことになる。

何年も後になって、マイヤーは一回だけライフを訪問し、彼の顕微鏡を確認したと公的に言ったが、何を見たかははっきりしない。しかし、記録では、明らかにこれとは非常に異なっている。

1934年2月にジョンソンは、ライフに会うために、サンディエゴにマイヤーを連れていった。ジョンソンは、この後、マイヤーの反応についてライフとケンダルに書いた。ケンダルに：マイヤー博士の意見はとても率直だった。次のようなことばで言った。

『決定的だ』、『最も説得力がある』、『彼は、魔法使いだ』、そして、『彼は、天才である。』

「あなたはマイヤー博士に大変な印象を与えた、そして、私はろ過できるバクテリアと顕微鏡の全ての問題が進展したと思う。



ケンダル博士



フーパー基金本部

「1934年5月に、マイヤーはライフに書いている。

「私は、先日の土曜日にあなたが見せてくれた多くの事を、今でも『夢で見えています』私自身はすこしこれで混乱したが、すぐに、この事を受け入れ、病気を生み出す作用物質について考えている。

来年には、フーパー基金で、独自のライフ顕微鏡が用意され、サンフランシスコの外科医からガン培養組織が得られ、フーパー基金の私の下で研究している E. L.ウォーカー博士から、運動型のカラー組織体（「おそらくあなたの BX」）について、ジョンソン博士に報告されるでしょう。」

このように書いていたマイヤーは、AMA(アメリカ医師協会)と政府から圧力をかけられたもう一人の転向した黒きヒーローであった。

彼は後になって、ロックフェラー研究所のリバー博士と AMA(アメリカ医師協会)の Morns フィッシュバインと全国医学委員会で働いた。

しかし、その時以来、彼が 1930 年代に関与した癌研究についてはまさに沈黙で通した。

1933 年と 1934 年に、マイヤーは成長拡大している有力な医師のサークルの一人であり、マイヤーはガンの治療を監督する資格認定委員会を組織し、その制度を世界に広める準備をしていたので、ジョンソンと親交を深めていた。

ジョンソンはまた、濾過可能な細菌が存在する説を積極的に弁護していた。

そのときミズーリ大学のウィリアム J.ロビンス博士は、科学ニュース・レターでウイルスについて、1つの不安にさせる質問を報告した。

それは「本当に、これらは生きている有機体なのか、そうではないか」というもので、ある。

ジョンソンは、彼に返事を書き、ケンダルとライフ、Rosenow の論文を渡した。

ロビンス博士は、その後彼自身で次のように書いている。:

「私は、カリフォルニア大学のカール・マイヤー博士とともに、豚コレラ、おうむ病、そして、鶏ののどに影響を及ぼす非常に

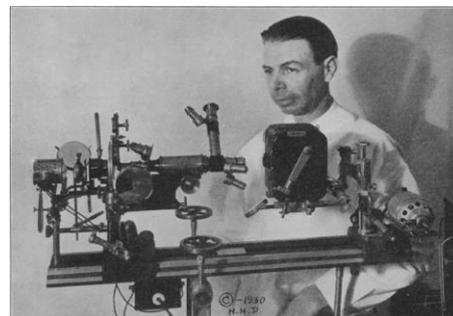
強い伝染性の病気がフィルタを通す型であることを確認した。この他の病原体も、最初の段階でフィルタを通す有機体を生みださないと考えることは、私には不自然に思える。

そして、これに続いて 2 番目の段階で、フィルタを通す大きさのものを簡単に得られるとき、これらフィルタを通すものが存在するのはほぼ疑いがない。

あなたの住む場所に一番近い、シカゴのケンダル博士のところに、ライフ顕微鏡がある。私が言うことを確認してもらうために、あなた自身でこれらを見てもらいたいと本当に思っている」

ジョンソンは濾過する細菌の存在をめぐる戦争の最前線で、兵士として奉仕していたが、彼の本当の役割はガン戦争での軍の指揮官であった。

彼は 1934 年の春に、スクリップス海洋学学会で有名なスクリップス家一族の「牧場」を借



ライフ博士

りた。

このサンディエゴ郊外のラ・ホーヤの牧場は、ライフ周波数装置を使ったガン患者の最初の治療クリニックとして使われた。

ジョンソンは各分野に働きかけ、推進した。

彼は、1934年4月2日にケンダルに書いた。

「私は、あなたとガートルードが今年ラオラ Laolla で休暇を過ごすことができたらと思っている。私はライフと、ケンダルの発明の才によって得たものを全て獲得しようと思っている。私自身のような小者で才能の貧しい医学博士は、この問題の核心を明確に言えるよう最後まで手伝うのみです。我々が10マイルの高さから落ちなければならないとしてもこの事を言うつもりです。」

その時、ジョンソンは彼自身を駆りたてている動機を思わず吐露している：

「少しでも救助されるかもしれないガンで死にそうな、落胆し、絶望し、苦しんでいる何万の人々を私の心の眼は絶えず見ているので、私がこの提案の全ての場面でこの姿勢を維持し続けることを苛酷に強いられることを、あなたは知らないでしょう。

もちろん、私はあなた(ケンダール)とライフが純粋な科学的見地からこの事に関心を持っていることを知っています。しかし、残念なことに、私の受けた教育の中には人文科学も多分に入っており、苦しみを見ると吐き気を催させ、本当に、この恐ろしい病気の被害者の絶望を感じてしまうのです。」これを書くと同時に、ジョンソンはライフのクリニックの「準備」を開始した。

ガン・クリニックが始まる2、3ヵ月前の1934年4月の初めに出されたライフへの手紙の2ページ目に、ジョンソンはたぶん医学史で不滅のパラグラフとなるものを書いた：

「ちなみに、私は6月15日から9月15日までにラ・ホーヤの家を得ようと考えています。

その頃になれば、あなたの研究の意に沿うような結果が十分得られるでしょう。

あなたの治療方法を人間で行ない、その結果をみたいのです。」

1934年4月30日に、再びジョンソンはライフに書いた：

「次の土曜日にラ・ホーヤで11:30頃に私と会うことができますか。

この夏、我々のクリニックの場所となるスクリップス・クリニックで人々に私が何か言う前に、図書館のビルを見せて、あなたの意見を聞きたいのです。



ジョンソン博士



カルル・フリードリヒ・マイヤー
(1884~1974)

カルル・フリードリヒ・マイヤー (1884~1974) KARL FRIEDRICH MEYER

カール F.マイヤー (彼は科学的な世界に知られた) は、バーゼル、スイスで 1884 年に生まれたバーゼルの学校で、古典とギリシア語、ラテン語、フランス語、英語と彼の自国語 (ドイツ) といった言語で幅広い教育を受けた。バーゼル大学に入って、生物学と動物学を研究しチューリッヒ大学を卒業した。

彼は医薬品の比較研究の分野に入った。そして、その時獣医学者として知られた。

マイヤーは彼の時代の多くの若い科学者のように、動物の研究学者 (例えばパスツール、コッホとレフラー) の影響を受けた。

1905 年に、マイヤーは何種類かの伝染病を研究しにミュンヘン大学医学部へ移った。彼は、1909 年ベルンの獣医学校でカリキュラムを完了するために、スイスに戻った。彼は、アカデミックな研究を遂行するよう、彼の先生によって強く勇気づけられた彼は原生動物学と疫学での彼の背景を広げるために、南アフリカで獣医として細菌研究所に進んだ。

マラリアを研究している間、彼は疾患にかかってサルバルサン *salvars*、で治療した

彼は 1910 年にスイスに戻った、彼の回復期の間、彼は米国に行く英国大使に会った。大使は、若いマイヤーがアメリカの大学にいく約束を得るのを最後まで手伝うと申し出てくれた。

彼は、獣医学の病理学と細菌学で教員資格を得、ペンシルベニア大学に就職した。マイヤーは医学細菌学の先生として好評で、30 歳までに教授となっていた。

濾過性ウイルスの彼の最初の記事を 1914 年に出した。彼の、ウマ脳炎の原因の研究の足跡を残した。

彼はウイルスを脳炎で死んだ馬から分離した、しかし、エージェントはウサギの移動において失われていた。

動物間流行病は国民の懸念だった、しかし、原因はカリフォルニア大学でマイヤーと彼の仲間によって 1930 年に見つけ出されるまでわからない。

次の 40 年間にわたって、マイヤーは動物病と公衆衛生で世界で最も多大な量の論文を書いた研究者のうちの 1 人になった。

1915 年に、彼はジョージ H.ホイップルのフーパー財団でパルナツソスの医学研究所のため集められた能力を結集した

彼の最初の研究課題のうちの 1 つとして、マイヤーは腸チフスの問題に関して研究するように電話をされた。

夕食会で教会で出されるスパゲッティ・パイは、100 人のピープルに毒を入れた原因となった。

マイヤーは、パイを作った女性が 6 年先んじてかかり、多くの人達に腸チフスを与えたことを見つけ出した。

この経験は、公衆衛生での疫学の重要性を悟らせた。また彼に腸チフスのキャリアーの研究に対して関心を持たせもした。

彼は、実験動物に感染させることによって腸チフスのキャリアーの現象が再現されることができるとをデモンストレーションした。フーパー基金の業務も指示する間、マイヤーは UC で細菌学部を組織し、パークレーの科学と文学の専門学校の両方で部門会長として奉仕した。1948 年まで、ジョージ・ホイップルが 1921 年にフーパー研究所を去ったとき、マイヤーは役員として、

1954 年の引退までその位置にいた。その時、彼の重要な研究と出版に、濾過性ウイルス (マラリア、スポロトリウム症と炭疽菌と同様に) の彼の継続された関心が、反映した。1918-1919 年のインフルエンザ世界的流行病の間、彼は疾患の原因を研究した。

1919 年に、彼はボツリヌス菌中毒に対する彼の研究を開始した。次の 10 年はカン詰めボツリヌス菌中毒の予防を指導した。

実験動物のブルセラ病のマイヤーの研究は、1930 年代を通して継続した。彼は、パークレー・キャンパスで社会健康医学のカリキュラムを考えた。カリキュラムは、基本的に前任の U. C. 学校の社会健康医学であった。

彼の疫学的研究は、カリフォルニアでコクシジオイデス症の伝染性の性質をデモンストレーションをした。

後で、彼は *psittachosis* を調査した、そして、七面鳥の中のテトラサイクリンで実用向きのものを供給する

第二次世界大戦の間に、彼の興味は、黄熱とウイルス性肝炎の流行、に向けられた。

彼は、彼の貢献のための 1951 年に、ラスカー賞を授与された

「学生の 2 世代の人々、完全に研究の 3 世代の人々。」

さらに 70 歳の 1954 年の彼の定年以後、彼は最大の科学者が生涯で行うより科学的な記事を生み出した

彼は、89 歳で 1974 年に死んだ

第9章

ガンの治療法は完成した！

1934年のガン・クリニックの全容は、あまり知られてない。

ライフが数年後に愚かにもアーサー・エール博士にそれらを貸したとき、ライフの記録は失われたからだ。

エールは彼自身のクリニックを始めたので、ライフと確かな情報を交換したかったと思われる。しかしライフが、エール博士が周波数装置を勝手に変え、治療成果を得ることに失敗していることを知ったあと、ライフとエールは永久に関係を断つたとみられる証拠がある。

もっと、当惑させたことはAMA(全米医師協会)が周波数装置を作成する製作会社に対して法的プレッシャーをかけたあと、関与した医者の多くは非常に用心深くなった。

そして、ミルバンク・ジョンソンが死んだあと、南カリフォルニア大学の記録は不思議なことに消えた。

「しかし、証拠の一部が存在し、カルテは無くなっていた

が、仰天するほどの治療効果があった、そして、

特別な医学研究委員会は存在し続けたことが分かる十分な記録があった。

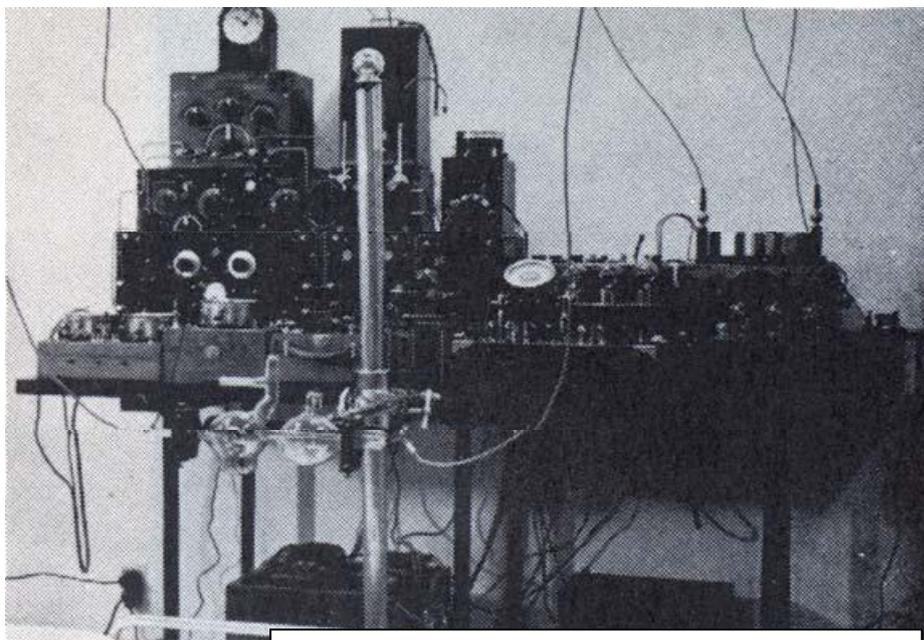
1944年から45年の名簿リストに以下のようにミルバンク・ジョンソンという名前が、含まれている：(ジョンソンは、1944年10月3日に死んだ)

「南カリフォルニア大学1897～1901年の臨床医学と生理学の教授、大学の現在の特別医学研究委員会の委員長

1944年のジョンソンの死まで、彼は引き続き委員会で活動していた委員長である。

1934年の創立から10年間、ジョンソンのいた南カリフォルニア大学医学研究委員会は存在した。

ジョンソンは1935年から1938年まで彼自身のクリニックを開き、何が起こったか述べた証拠が存在し、その事実も存在するのでAMAとカリフォルニア州衛生行政機関が1934年の周波数装置を使ったガンの治療法が成功していたことは、神話だというのが、それを信じる理由はない。



1934年のクリニックで使用された1934年 Rife Ray 装置 #3

記録文書は、クリニックが存在し、ガンの治療が続いていたことを示している。

1934年に完成した周波数装置をがんの治療に使った患者が、最近サインしたレポートにみるように、医者は重病の人々の治療を続け、成功してきたことは本当の話だ。

ジョンソンは、結局サンディエゴのジェームズ Couche 博士に、完全に彼の権限をゆだねた。しかし Couche はジョンソンのように、カリフォルニア医学界で、ヘビー級の交渉力はなかった。

もし、ライフの新しい治癒技術の承認と広範囲にわたる使用にむけて、医学界を動かすことが目標ならば、これはよい選択ではなかった。

結果は、完全な失敗だった。

しかし、責任感のある男性を選ぶという意味ならば、Couche は正しい選択であった。

その人は決してやめないし、AMA.に降服しなかった。

Couche は、22年間周波数装置を使いそして、記録し報告した。

一時的だけだとしても、ライフが人々の中にいる病理学的微生物を破壊すると主張した通りに、調整した周波数装置の成功は、続いた。

しかし、多くのことが前方で待ち受けていた。

1934年夏、16人の末期がんの人々と、他の病気の人を、スクリップスの牧場に連れてきた。そこで、ライフと他の医者は、初めて、人間で、この治療技術を使って研究を続け、彼らは多くを学んだ。

初期の患者は、わずか3分間、特定の周波数で露光された。

しかし、ライフはすぐに、毎日治療が続くと、死んだ微生物からの毒素を組織体が消去するより速く、毒素が蓄積してゆくことを学んだ。

彼が3日おきに3分間の治療をするように変えたとき、患者は急速に治癒し始めた。

1953年にライフの本が著作権で保護されたとき、初めて彼は1934年に本当に起きたことを報告した。

彼の人生を調べた誰もが、微生物の濾過を研究する際の彼の正確さ、忍耐力、彼の科学的な考え方に感動する。

(ライフの明らかにしたことは、ライフの名前を今まで決して聞かなかった現在の細菌学者によっても確認されている)

その意味で、1934年のガン・クリニックの彼自身の科学的な報告の重みをもっと考えなければならぬ。

彼は、書いた：

「周波数装置治療で、体の組織は破壊されません、痛みも感じられません、不快な雑音は発生しません、そして、知覚の混乱は見られません。

発光管は明るくなり、そして、3分後に、治療は完了する。

ウイルスまたは細菌は死滅し、そして、組織体はその時自然にウイルスまたはバク



M.D. Dr. James B. Couche

テリアの毒の作用からそれ自体を回復させます。

いくつかの病気は、同時に治療されるでしょう。」

「ガンに関する最初の臨床研究は、南カリフォルニア大学の特別な医学研究委員会の下に置かれたミルバンク・ジョンソン博士の管理下で完了した。

多くの種類の悪性腫瘍を発症した 16 人のケースは、クリニックで治療された。

3 ヶ月後に、これらのいわゆる絶望的な末期的症例のうち、14 人は、治療が終了し、5 人の医者とアルヴィン G. Foord 病理学博士のスタッフによって臨床的に治ったとしてサインされた。

周波数装置を使った治療は、『BX』またはガンウィルスの致死的な振動率に設定され（3 日の間隔を置いて）3 分間の照射から成った。

毎日治療した症例より、間隔を置いた治療は、より優れた結果に到達することが判明した。

これは、『BX』ウイルスの無気力にされ死んだ粒子によって生み出される有毒な物質を吸収し、リンパ系に、排泄する機会を与える。

これらの症例で体温は標準を越えて上がらないことが認識された。

または周波数装置による治療の後、この臨床研究のために特別食は、全く使われなかったが、病人のために考えられた正確な治療食は、利点があることは当然である。

日付：1953 年 12 月 1 日に — R. R. ライフによって書かれた

クリニックの他メンバーは、

サンタフェ鉄道 チーフ外科医ウェイレン・モリソン

国際的に有名なジョージ C. Dock 博士

ニューヨーク、子供病院ジョージ C. フィッシャー博士

アーサー I. ケンダル博士、

シカゴ大学の病理学教授 Zite 医学博士、

ルーファス B. フォン クライン・シュミット南カリフォルニア大学学長

Couche 医師と

現在でもそうであるサンフランシスコのフーパー基金の細菌学研究部長カール・マイヤー医学博士と

ラ・ホーヤの代謝クリニックの Kopps 博士は、14 人のレポートと彼の個人的観察から得たすべてにサインした。

クリニックが終わった 1 週後に、ケンダルはライフの最初のスポンサーであった人の妻、ブリッジズ夫人に書いた：

「今日の午後（1934 年 9 月 20 日）、私はハーディン氏（大学の評議会の会長）と会います。

彼はロイのすばらしい研究に非常に興味があります、そして、私が、カリフォルニアに実際に行って見てきて、報告するよう頼まれるでしょう。

多くの人と違ってハーディン氏は、非常に親しみやすく、研究の適切な見方を心得ています：

これまでは実験的で、決定された原則もなしに、行われており、小さな出力用に設計された機械なので、したがってその完全な価値を、示すことができません。

私は古い装置で学んだ事を基に、新しい機械に改良すべきであることを理解しています。そして、その出力が要求されたように出るよう、もっと丈夫に造られなければならないのです。

私は、ジョンソン博士に1人の症例について報告しています。

私は、Tom Knight トム、ナイトについて明確に報告することが可能です：

ロイ・ライフも、トムについて次のように報告している。：

「トム、ナイトは、私には全ての症例の中で最も重要な症例である。

腫瘍が頬にあったので、症状を見ることができ、治療の最初から終わりまで測定し観察した。

私は、実際の測定値と、治療と、病理学的試験の詳細を記録した。」

1年後の、1935年9月18日にミルバンク・ジョンソンは、トーマス・バーガー博士とサンディエゴのC.Ray Launsberry 博士に書いた：

「あなたにトーマス・ナイト氏のことを紹介します。

彼は、左頬の頬骨の上に癌があった男ですが昨年ラ・ホーヤのクリニックで治療した。」

1956年に、ジェームズ Couche 博士は、次の宣言をした：

「ロイヤル R.ライフの周波数装置の「周波数」の治療効果の驚くべき科学的な奇跡の歴史を記録したい。

約22年前、スクリップス研究所別館の近くにあったエレン・スクリップス邸で、私がライフ博士と彼の周波数装置のことを話したとき

私は理解されるよう、その治療経過をみせた。ライフ博士の関わったそのケースは非常に興味をもたれた。私がすぐに示した例は、胃がんの男性患者でした。

ライフはその時ミルバンク・ジョンソン博士 (M.D.) と関係があった。

ジョンソン博士はその時ロサンゼルス医師会の会長で、非常に裕福な、全米最大のロサンゼルス医学界で誰もが知っている人であった。

その夏、彼はこのデモンストレーションのためにこの別館を提供してくれた。

その期間に私は、多くの事例を見たが、最も私に感銘を与えたものは、その患者でした。

その人は診察台の上にぐらつきよろめいて座り、ほぼガンの末期で、骨と皮だけになっていた。彼が診察台に横たわった時、ライフ博士とジョンソン博士は言った — 『ちょっとこの患者の胃にさわってください。』そこで、私は手でお腹のところにある空洞に触れた。胃があったところはとてもやせていて、ほとんど空洞でした。

彼の背中と胃袋は、ほとんどくっつきそうだった。

そして、とてもやせていたのでほとんど空洞だった；

「私は、彼の胃のあたりに手を触れて、1つの硬い塊を確認した。

それはまさに私の手の大きさぐらいで、ハート形をしており、完全にかたくなっていた！

私は愕然として何も、もう治療する手立てはないと考えた。

しかしライフ周波数装置によって 6 週間から～2 ヶ月間のコースで、治療をすると、驚いたことに、完全に回復しました。

彼は、とても良くなって、EI Centro エルセントロにいけるかと聞いた。そこには自分の農場があり、種株の手配の確認をしたかった。

ライフ博士は『今のあなたには EI Centro エルセントロに行くほど、元気になってません』と言った、「彼は『そうですか』と、答えていた。

そう答えていたが、実は患者は自分で車を運転してそこに抜け出した。

そこには病気の牛がいたので、エルセントロに行き、一晩中牛と一緒にいた。

その翌日、彼は寝ないで運転して戻ってきた。どれほど元気になったかわかるかと思う。

「他にも私に興味を起こさせたケースがあった。

それで、私も周波数装置と同じものが欲しくなった。ついにこれらの周波数装置の 1 つを買って、オフィスに置くことにした。

私は、20 年間の中で何回か非常に注目に値する完全な効果を見た。

私には、メキシコ人の男の子 (9 才) の患者がいた

かれには、脚に骨髄炎があった。

少年はかかりつけの医師によって、救急病院で治療されていた。

彼らは、毎週、骨をこすり落した。

医師は痛み止めを何も与えなかったので、少年はものすごい痛みで苦しんでいた;

彼らは、中をつつつき、そして、外側をきれいにするのだが、その恐怖は、ひどいものだった。彼は股に副木を着けていた。

家族は、私の診療室に少年をつれてきた

彼は、他の医者に行われたことを覚えているで、私が骨を突つくことを恐れた

彼を安心させるために、私自身の手で装置を使って痛くないことを示した。

今まで通り治療の進行中は包帯と副木が与えられた。

2 週間未満の治療で、傷は完全に癒やされて、彼は副木をとって、投げ捨てた。

彼は現在は元気で、たいへん大きく成長し、骨髄炎が再発することはこれまでなかった。

彼は、完全に治った。

そこではこのような多くのケースがあった」

1935 年 12 月に、ジョンソン博士は、ミルドレッド・シュラム博士 (フィラデルフィアの国際癌研究基金の秘書) に、秘密の手紙を書いた。

その手紙で、ジョンソンはおおまかかに 1934 年のガン・クリニックの記録について説明した:

「ライフ光線が試験管内と同様に生体内で病原菌を破壊するかどうかに関係なく、クリニックは個人的に私が確認するために開かれ、私によって運営されてきた。

我々は開いてからその後も、繰り返し、研究所で確認した。

私が友人に勧める前に、私には、研究を繰り返した後の、当然の結論と言えるような、決定的な情報がなければならなかった。

ラ・ホーヤのクリニックには看護婦も、秘書もいないので、正確な記録は、多少断片的です。

そして この問題に詳しい科学者による慎重で詳細な調査もされていない。

あなたに話したように、この研究を始めたときは、完全に終わりまで資金が供給される予定でした。

私が受けると期待していた援助の中で、唯一の援助は、顕微鏡と光線治療器と他の医者から受けた協力だけでした。

我々が遠慮会釈のないやり方で他のたくさんの人を納得させなければならない今、我々は新しいページをめくらなければならない、我々の研究課題を、他の人による検査で客観的に確認しなければならない。

1934年のサクセス・ストーリーが、真実であることを保証するものとして、ライフによって書かれた記録や、Couche の患者であった農場主の驚くべき回復の話や、ケンダル・ジョンソンと、頸部腫瘍の患者との文通といった資料があったとしても、これらは他の科学者に客観的な医学レポートを提出するという観点からは不満足なものであった。

1934年のクリニックは、暫定的で、最初の実験的なものでした。

彼らは、治療が3日ごとに与えられるのが最もよいことを知った。

彼らは、もっと優れた正確な記録を持たなければならないことを理解していた。

彼らは、周波数装置の性能が向上しなければならないことを認めていた。

しかし、彼らはガンを完治させた。

そして、放射線療法には、その貧弱な効果にもかかわらず、急速に資金が供給され、病院に多数の放射線療法の機械が置かれていることを理解するとき、ライフの周波数装置の大量生産のために資金供給がされないことの悲劇のとてつもない恐しさが理解できる。

ミルバンク・ジョンソンは1930年代に苦しんでいる何万の人を考えると胸が痛むと書いたが、現在、毎年、毎年460,000人のアメリカ人は死んでおり毎年、900,000人のアメリカ人がガンであるということを知るならば、彼はもっと当惑するはずだ。

そして、彼は化学療法、放射線療法と手術しかないとする「治療」方針に胸が痛む。

ライフが示したように、ガンBXは型を変える。

全てのその型が破壊されないならば、ガン微生物は、別の環境を見つけ出す可能性があり弱くなっている組織体で新たに再生し始める。

パストールと一緒にいたベシヤン Bechamp の排斥と、リバーによるライフとケンドールの排斥の悲劇の後に残された負の遺産によって、人類は、再び厳しい現実と直面させられている。

第 10 章

1935 年

山に登る

1935 年 10 月 15 日付けのガン基金への手紙で、ミルバンク・ジョンソン博士は、基金が求めるように、研究と特別な実験確認を中止することは、なぜできないか説明した：

「私が、言ったことが原因であなたの言うように、中止の方向に行くという結論に飛躍して欲しくはない。

私は、あなたの側にある問題に興味はないが、限られた手段しかないとしても、この興味深い研究の最大の山場で、我々の計画を止めることは好ましくない。

あなたは、山に登るとき、優れた登り方は常に愚直に進むことしかないと知っていると思う。

立ち止まって、ちょっと前に戻ったりすれば、気が散漫になって、エネルギーを浪費し、頂上には決して到達できない。

これは、私がライフ氏と問題について完全に話し合うまで、私が言えるすべてである。」

1935 年は本当に苦しい山登りのような 1 年であった。

ライフは、新しい精密な周波数装置を造った。

彼はまた、新しい研究所の計画を開始し、多くの可能性をもつ小さな顕微鏡を造った。

研究は続き、2 番目のクリニックが開かれた。

サンフランシスコのフーパー財団のマイヤー博士の同僚を養成し、またガン財団の代表者でもある有名なガン専門家が単独で訪れて、ライフの実験を、確認出来るよう準備しなければならなかった。

しかも、調査結果を発表することに対して、常に圧力が、かけられた。

サンディエゴイブニングトリビューンのニューアル・ジョーンズが 1934 年にガン・クリニックで何が起きているか知ったあと、1934 年 9 月にジョーンズはライフに手紙を書き、電話でも話しを聞いた。

彼は、ライフから慎重に話を聞いた後、話が前に進展するよう計画すると約束した。

ジョーンズは、ライフが何を行ったか知って、その重要性を完全に理解した。

ジョーンズは書いた：

「あなたの研究が成功したならば、言うまでもなく医学と科学界への注目に値する貢献となるだけでなく、自ずと全人類にとって重要な、すばらしいニュースとなる。

当然、この物語は成功裡に展開すると思った。

しかし「ジョーンズは、3 年半待たなければならなかった。それでもやっと 1938 年 5 月になってライフの発見について、彼は最も明確な説明の記事を書いて新聞に出した。

1935 年 5 月の初めに、ジョンソンはフィラデルフィアの国際癌研究基金から問い合わせの

手紙を受け取った。

そこで、研究所の写真と顕微鏡の写真をつけ、彼らからの返事を求める多くの質問に、答えを書いて出した。そこから、一連の話し合いと、提案と訪問が始まったが、相互の意見は最終的に平行線のままで、不毛に終わった。

思い出すと、不調に終わった部分は、単純な人間的な誤解と見ることもできるが、次の一年半にわたる徒労となった時間は、国際がん研究財団、特にその頑固な秘書、ミルドレッド・シュラム博士の側の傲慢と、偏狭な誤りが原因だとみることもできる。

国際がん研究財団基金は、医療の大きな前進となるライフの治療法が、速く普及できる資金を供給する立場にあった。

彼らは現実的な資金供給よりも、さして重要でないテスト結果を論じ続けた。

権威ある世界では、部外者でしかない偉大な科学者は、「当局」からの「証明書」というお墨付きが無いことで排斥され、無視された。

「ガンを治療する」という目標は、二番目のものだった。

彼らは、ライフの研究時間を浪費した。

ライフはその翌年、フィラデルフィアで実演し、それを示したが、治療技術に関して同意をえられなかった。権威ある世界はその技術を否定し、その治療法の代わりに、彼ら自身の治療法の正当性を主張した。

こうした例は今でも、研究のジレンマの1つである。

権威ある専門家には、彼ら自身のやり方がある。

権威ある世界の部外者である偉大な科学者は、「当局」からの「証明書」が無いことでその価値は低く見られる。

「ガンを治療するという目標は、先送りされ、権威ある既存の手順が、優先される。

ジョンソンと国際がん研究財団との間でのやりとりには、組織特有の困難さが見られ

それは、現代の科学者も同じように縛っている。

毎年、460,000人のアメリカ人がガンで死にそうになるのだから、ガン治療の多様性が、許され勇気づけられねばならない。

残念なことに、新しい計画は、専門化のテリトリーと、確立された「専門家の財政収入を侵略することになる。

1935年6月に、国際ガン基金はジョンソンに基金が認可を与えるならば、4つの保険会社がライフへの資金供給に関心があると報告した。

基金は、ライフの研究所の視察のために代表を送った。

基金の秘書ミルドレッド・シュラム博士が、到着した

1935年7月の終わりであった。しかし、彼女は西海岸の他のところにも行く計画があつて、慌しい訪問に終わった。

9月にジョンソンは、彼女に書いた：

「次に来るときは、我々の世界に集中して注視できるように、他の仕事を入れないように

してください。

前に来たウォーカーは従来のやり方の中では専門家だが、3週間いて、我々の技術と、顕微鏡を、自身で確認した。あなたの滞在したような短い時間では、我々のことを少しは理解できたとしても、多くを理解することは不可能です。」

シュラムは、これに答えてライフのために買った病気のマウスで確認してほしいとライフにお願いしてきた。

彼らは試験をパスさせるつもりにも見えた！

新しい周波数装置を完成していたジョンソンは、「長い間、人間の癌ウイルスに集中してきたので、基金の期待するように、人間と異なるマウスでガン微生物を特定する研究をしても、保証することは期待できない」と返事を書いた。

ジョンソンは宣言した。

「奇妙な細菌を培養し、悪性組織でそれらを確認することは当然困難で退屈な作業です。人は、やりがいのある仕事だと思えば、中断しないでやり遂げる。こんな特別な時に、たとえ我々がその必要性を理解したとしても、あなたの命令と要求で動くことは出来ません」

しかし、ウィリアム H.ドーマー（国際癌研究基金の会長）はライフと、彼の発見に「ひどく関心を持つ」ようになった。

そこで、シュラムはジョンソンに会った。とはいっても、依然彼女は自分の設計したテストをするよう主張した。

1935年10月中旬ジョンソンは再び説明しようとした：

「私は培養組織の3つの未知の有機体の意味を、あなたが本当に評価できるとは思いません。そこに多くのものがいたとして、その各々に適合するM.O.R周波数（正確に一致させた振動数）を照射させることで動物の中にいる各種の有機体を死滅させたことを後で確認してください。

御存知の通り、我々の研究は、これまでもっぱら人間のガンに捧げられた。

そして、この時まで人間がガンにかかる常の一つの有機体が存在するのを見つけ出した。手がかかる極めて多くの時間をかけて、その有機体の生命の歴史とライフサイクルを研究してきた。

ライフ氏または我々の委員会は、その研究をやめ、人間と異なるマウスで、異なるタイプの増殖と腫瘍を研究し、それが人間の癌に対して関係があるのか、ないのかといった非常に困難な問題に取り掛かることを願うとは思えません。

「ジョンソンは — 基金の会長ウィリアム・ドーマーがバミューダまたはフロリダに行く代わりにサンディエゴで冬の休暇をとると教えられた。しかし、ドーマーは医者でも細菌学者でもなかった。彼は、鉄鋼業の役員、銀行理事と会社の大物であった。

シュラムが、実質的に基金の専門的な領域での権力者であった。シュラムは、基金がなんらかの金銭を用意するには、自分のテストが必要だとすぐに強行に書いてよこした

彼女は強行に、自分の指定した方式で、テストしなければいけないと主張した。

1935年12月になると、シュラムはジョンソンの許可要請に関して許可が延期されたと知らせた。しかし、それでも彼女は自分のテスト方法にこだわり、それを緩和させようとした。

医者、顕微鏡の専門家、細菌学者といった多くの専門家のライフの研究に関する話から、ライフの治療法の可能性を総合的に考えると、この彼女の個人的な出来心で起きた許可申請の棄却はあまりに重要な出来事だった。

彼女は、自分のテスト方式を実施する代わりに、1934年のガン・クリニックの詳細について質問してきた。ジョンソンは特別研究委員会にいる、有名なドック博士を説明のために派遣すると主張した。

彼女は提供された資料が十分ならば許可は、手近に受けられるかもしれないと、いった。その時、彼女は、一旦許可が出されたならば、彼女の要求したテストは本当は必要ではないことを認めた。

つまり、ライフらは、形式的に許可を得るためだけに、以前からテストが要求されてきたのだ！

正確に9ヵ月過ぎた。その大部分の時間が心の狭いシュラムによって、手続き上の正確さが要求されることで、無駄になった。ジョンソンのいら立ちは、彼の返事が示している。彼は、実証するカルテは存在するので、基金の代表が、ライフの研究所に2、3週間いればよいことだ。それが一番単純な解決方法だと説明した。

ジョンソン：

「あなたが資金を不毛な活動に使用することを避けようとするのは正しい
しかし、私はきちんとした資格のある科学者または臨床医が1年間文通によって確認するより、自身が物事を実際にみることで2週間で確認出来ると今でも思っています」
とはいっても、ジョンソンはなんとかライフ周波数装置の報告文書を書き、説明を成し遂げた。

そして、彼は南カリフォルニア大学の医学研究委員会の会議を特別に招集した。

しかしこの1週間後にDock博士は、世界一周旅行に行こうとした。

これはDockを含む全委員会が、ジョンソンに同意して、基金は、研究費の支給を認可すべきだという意見を表明したためにおきた、圧力かと、思われる。

この後、文通と会議がもう一年続いたが、こうした努力からは何も生じなかった。

1935年の国際がん研究所とジョンソンと、ライフの対話は、まれに見る「困難な登山」とも言えるような、苦行であった。

しかしモントリオールの有名なガン研究者O.キャメロン・グラナーの訪問は、はるかに重要な意味をもっていた。

ケンダルが1931年に発見したちょうどその時、グラナーも、彼自身同じものを発見していた。

ライフはグラナーの発見を確認し、ケンダルと自分とグラナーの発見を一緒に結合した。その結果は、前のものより画期的なものになった。

グラナーは彼のがん患者の血液から採取したものを、アスパラガス培養基に置いて、真菌を成長させた。

ライフはグラナー博士の真菌を「K 培養基」に置き、その時フィルターに通すと、ライフ自身の「BX」ウイルスになった。

また、ライフは、グラナーのアスパラガス媒養基に以前に採取した BX を置き、グラナーの真菌をその上に置いた。するとガン微生物のもう一つの型である、真菌となって分離された！

ライフは、その時多形態性の確固とした基盤を得た。

BX ウイルスが、人工の培養基の上で生きる可能性があるだけでなく、BX は血液の中で、もう一つの型に変わる可能性がある。

ほぼ癌患者の 90%の血液にある単球のモノ球状型になり、

それから、さらに別の形の *cryptomyces pleomorphia* 多形態性真菌になる。

ライフは 1953 年の彼の報告で決定的に述べる：

「この BX ウイルスは、培養基で大きく成長し、そのライフサイクルの中で異なる形に、すぐに変化する。」

1937 年に、ミルバンク・ジョンソンは、グラナー博士とライフが 1935 年 5 月～6 月に発見したことを説明する書面を書いた：

「グラナー博士は全実験に立ち会い、そして、我々と同意した。我々の BX と異なる型ではあるが、彼が血液から得たものは、我々の得た有機体と BX と全く同一であることに疑いはない。」

したがってそれは適切な培養組織で、まるで 3 つの型のどれか一つが、自由に生み出されることが理解された。

国際がん研究所のシュラム博士は、この発見を知っていた。

提案された許可条件の中に、1年間グラナー博士をライフのそばで研究するためにサンディエゴに連れてくるという条項があった。

シュラムは、1通の手紙で「Gruner-Johnson-Rife 有機体」と書いた。ジョンソンとライフの実験とグラナー博士の癌研究と発見の科学界での評判を考えると、シュラムが認可を引き伸ばす理由として上げた、今日稼働している「システム」がどれほど有効かといった、彼女のテスト方式の実施にこだわることは重要な問題ではなくなったと、彼女は、後で認めた。

単なる個人的な優先順位でしかないものが、専門家の必要条件として偽装されていた。

1935 年 5 月に、ジョンソンは新しいクリニックのためにロサンゼルスで場所を探し始めた。新しい周波数装置のための電流は 60 サイクルでなければならなかったもので、問題が少しあった。

ついに、ロサンゼルス東の6番目の通りの角、南セント・ルイス通り610のサンタフェ病院が、選ばれた。

クリニックは、1935年11月の最初の週にジョンソンが責任者となって開かれた。

治療は1週につき2日行われ、そして、今度は、ジョンソンは慎重にカルテを保存した。

新しい周波数装置は、1935年9月に完成した

ライフの、以前からのアシスタントのジャックフリーそして、ミルバンク・ジョンソンと、彼の新しいアシスタント、フィリップ Hoyland は、1935年に、新しい装置の運転に入った。

ジョンソンは、新しい装置のプロセスを説明した：

「ライフの新しい放射装置は古い機械で確認された M.O.R(振動周波数)と完全に一致する周波数を発生させるように製作され、そのために精巧なテストがされなければならなかった。

現在、我々は正確に新しい機械で14,000種の周波数が設定可能な設計図を作成することに必死に取り組んでいる。

我々の次のプロセスは、来週開始され、障害の異なる深さによって異なる照射時間が要求されるので、その浸透度をテストすることになっている。

おそらく近年、基金から、ライフの周波数装置の簡単な説明を提供するよう要請されると思われるために、こんなことで、我々はイチゴをとるクマと同じように忙しく働いていると思ってください。」

「この装置の基本的な原則は、希望する周波数』を自由に出せるようなコントロールする機能を持つことです。

これらの周波数は治療する有機体で異なり、周波数は最初発振器をコントロールして設定され、次に、6つの増幅過程を通り、最後の段階で50ワットの出力管から出ます。

「標準的なエックス線管に類似した出力管には『標準的なエックス線管とは異なる不活性ガスが入れてあり、そこから出る搬送波の周波数は変化が可能です

このチューブは、指向性アンテナの働きをする。

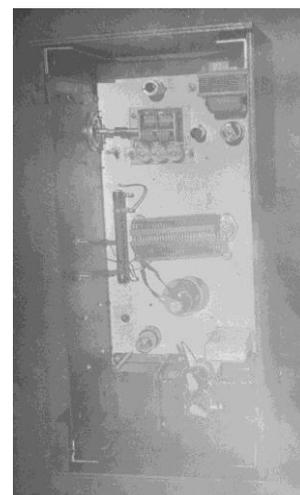
「これらの周波数が可変的にコントロール可能になったことの重要性は、各々の病原性有機体に、異なる分子振動率を伝える結果、破壊され、良性の化学的成分になることにある。

それぞれの異なる状況で、これらを破壊するためには、異なる周波数または振動率が要求される」新しい装置には、500ワットの放射光線の出力があった。

さらにまた、2つの異なる周波数の光線を同時に、両方を変化させて届ける能力があった。

この装置は、明らかに少ししか失敗の要素はなく、より効率的であることがわかった。

また前より小さな顕微鏡を作ることによって彼の人生はライフも驚くような良い方向に



1937年

Hoyland /

ビームレイマシンの内部

動き、他の全ても、解決されるように見えた。

ジョンソンによると、1933年の「ユニバーサル」顕微鏡を造るコストが30,000ドルから35,000ドルの間だったが、1935年の顕微鏡の売値は理論的には1,000ドルまたはそれ以下だった。

目的は、研究所が入手できるような低価格で小さな顕微鏡をたくさん作ることだった。

新しい顕微鏡は、その時点で入手できる「最高の」光学顕微鏡の性能を越えており、今までよりはるかに高い10,000倍から、15,000倍の倍率であった。

ウォーカー博士は訓練のため研究所を3週間訪問した。

これは1935年6月28日に彼の上司であるカール・マイヤー博士がライフを訪問したとき、観察方法などの訓練を受ける部署を設置した後の、8月であった。

ウォーカーは、「BX」ウイルス（癌）と「BY」ウイルス（肉腫）、についての検査法と、ライフ顕微鏡について学んだ。

彼はその後フーパー基金のカール・マイヤー博士と研究するために、サンフランシスコに戻った。彼はこの後、自身のためにライフ顕微鏡が提供された。

1935年10月ウォーカー博士は書いた：

「ライフ光線による腸チフス菌へのテスト結果の再現実験は、組織の中に生きるこれらの有機体を殺す実効性を決定的に証明したように見える。光線が他の病原性微生物を殺す際も、等しく効果的であることがわかれば、治療法の歴史で最大の発見になるでしょう。」

その後ウォーカーはやってみると当初想像していたより、ライフの研究の再現がはるかに難しいことをすぐに理解した。

彼は結局、ライフから提供された古い時代遅れの器材で、一人でBXを分離させたが、彼は手助けが欠けていることで、努力が無駄になるショックを経験する前に、彼は同僚を迎えた。

1935年後半の彼の手紙の1通は、彼が雇った人について書いている。

もう一つの手紙はサンフランシスコの外科医がどんな具合に非協力的か伝えている。

「彼らはガンの組織を提供してくれません！」

1934年から1935年までの間ずっと、ジョンソンはガン・クリニックの患者の何人かから、目が離せなくなっていた。

5月に、彼はライフに手紙を書いて、癌が治癒したトムナイトを訪ねるよう彼に伝えている。

（アーサー・ケンダルはその治癒に深い感銘を受けたので、ケンダルは患者の腫瘍をとっても慎重に測定した）

ジョンソンからライフへ：

「あなたがもっている、症例記録のコピーで、トムの住所がを見つけ出せませす。

私は、あなた自身で年をとったトムを見てみて、顔、あるいは、腺で、または、彼の唇でガンの再発があるかどうか見て欲しいのです。

「10月に、ジョンソンはライフのアシスタントに1934年の患者であったウェイン・グレ

ーソの治療に使用した M.O.R(周波数)を調べるように、書いた。

ジョンソンはアシスタントにこの患者のカルテがあるはずだと伝えた。しかし、アシスタントは治療時に M.O.R(周波数)を記録していなかった。

年が終わってから、事態の進行を分析するために南カリフォルニア大学の特別医学研究委員会の会合があった。

会合は、ロサンゼルスで 1936 年 12 月 26 日に開かれ、本当に素晴らしい性能の新しい周波数装置、新しい顕微鏡、進行中の第 2 のクリニック、モントリオールのグラナー博士と一緒に行なわれた歴史的な発見、サンフランシスコのウォーカー博士の訓練の進行といったことが報告された。

ライフ、ジョンソンと彼らの仲間は、次第に岩壁がせまってくる山を「常に、愚直に進み」登っていったが、国際癌研究基金による後世に残る大失態はそれを邪魔するだけだった。

第 11 章

1936 年:

1936 年前半に国際がん研究財団会長ウィリアムドーマーは、クリニックの結果に「仰天して」ライフと、ジョンソンを訪問する。彼は見たものに感動して、フィラデルフィアの彼の同僚にもそれを見せようとした。ライフは、春にアメリカ東部を旅して、彼らに BX 癌ウイルスを濾過する方法を見せることに同意した。

1936 年前半、ジョンソンと、最初からのスポンサーヘンリー・ティムケンも以前から構想されていたライフの素晴らしい研究所を建設することに同意した。しかし 4 月になると、この基盤となるものは、壊れたので、ライフは 7 月の後半には別の目標に向かって動いていた。

ライフと電子工学者フィリップ Hoyland は、1936 年の初めに周波数装置の改良を始め、エレクトロニクスの最近の進歩によって時代遅れになった部分を廃棄した。

彼らはその年の夏の間、希望する周波数を生み出すまったく新しい方法を生み出した。この新しい装置によってテストする間に、彼らがつくった器具は、高感度の 9 インチの陰極線オシログラフであった。

異なる振動数の波動形態の写真を撮ってフィルム写真で示す目的で造られた。

これは、まったく新しい方向で多数の波動を明確に識別分類する研究を進展させた。

ライフは 4 月に、ウォーカー博士のテスト技法を洗練させるためサンフランシスコに旅行した。

ライフは 5 月 1 日にはシカゴの電子工学会議に出席するためそこを去った。

ライフはそこから、ルイビルへ旅行し、そこで眼科医に検診してもらった。

その結果、彼の毎日の顕微鏡の使用は 2 時間に制限された。

1936 年 5 月 9 日、彼は国際癌研究財団との宿命的な会議のためフィラデルフィアに到着した。これに続いて起きたことは、国際癌研究財団の悲劇的な大失態といったものだった。

次の年 1937 年の 2 月に、ジョンソンはカナダで最も有名なガンの専門医で 1935 年の春にライフと協力したグラナー博士の同僚のエドワード・アーチボールド博士に、手紙を書いた。

ジョンソンはアーチボールド博士にライフの 1936 年 5 月のフィラデルフィアでの公開実験で、起きたことを報告した。

ライフは全くどんな病理学的レポートもなしに、6 人または 7 人の腫瘍患者が彼に提供されたと伝えた。

彼は顕微鏡でそれら全てを調べ、そのうちの三人は X 線でかなり放射されたか、ラジウムで治療されたことを見つけた。

治療されなかった 3 人はアルゴンガス入りの放射管を設置し、我々の技術によって、光線治療を受けた。

ライフはそれぞれの患者で、異なる、特徴のある BX(癌ウィルス)を得た。

公開実験に立ち会った彼らの何人かは、資料となるので BX を保存すると主張した。

そして、彼らは、自身で動物にガンをはきおこすと言った。

彼らがそれを行なったとしても、結果は我々にはこれまで知らされていない。

ライフ氏自身感じた雰囲気は、極度の懐疑論といったものであった。

彼らは、最初に我々の技術を、実際の経験で学習せず、実験を再現してみようとしなかった。しかし、それでも自分達の方法で前に進むことを固く決心していた。

そんなことから、彼らがそれをして、多分機能しなかっただろう。

1936 年 5 月 22 日に、国際癌研究財団会長ウィリアム・ドナーは、ジョンソンに手紙を書いた。そして少なくとも 100 日ぐらいたっても、認可は、来ないと彼に告げた。

会長のドナーがジョンソンとライフに年の初めに与えた、見込みは、破られた。

5 月 27 日のジョンソンの基金への返事は、カナダのグラナー博士への資金援助を求める苦しみの訴えである。

資金不足で苦しむサンディエゴのライフ側はフィラデルフィアの未熟な臨床医に支払う代わりに、しばらくの間、ライフの技法を再現することに専念していた。

資金援助の嘆願は耳を傾けられなかったが、その嘆願は引用に値する。

「基金が研究目標を達成する際に、重要なことは、権威づけられた専門知識に基づく威信で慎重に判断するより、その人がどれほど、クリアに考えるかがもっとも重要なことを例証する。」(今の例で言えばジョンソン本人の明晰な報告を見てほしいということだが)

ジョンソンは、国際癌研究財団会長に書いた：

あなたが冬にライフ氏が人間の癌から取り出した BX と、その有機体が大きくなる方法をあなたの部下に示すことができるならば、我々は即時の認可が望めるだろうと、約束していたので、あなたの手紙は、私をたいへん失望させた。

もしもライフ氏が、成功し、それでもあなたの委員会がガンの細菌の起源を信じず、認可する気がないならば、代償にあなた自身 1 年間グラナー博士に奉仕するとも言うべきではないかと、強く思っている。

「あなたは、ドッジ博士がいる。彼は、アメリカで最も優れた、真菌学者の 1 人であることに私は同意する。

彼はライフ氏と一緒に、毎分 1 つ 1 つを丁寧に研究していき、研究のあらゆる詳細は毎日ノートにとった。これらのノートは毎日ドッジ博士とライフ氏によって署名されている。

これは、ライフ氏がまったく率直にドッジ博士にプロセスのあらゆる段階を明らかにしたことを示している。

「これと同じ有機体が我々によって、そのうえ、シカゴのアーサー I. ケンダル博士によって繰り返し確認され、そして、フィラデルフィアのあなたの審議会でも、ガンの唯一の原因

とまではいかないが、癌という病気に、少なくとも絶えずそれが存在していると仮定することができたはずだ。

我々が知る限り、他のいかなる研究グループも、ここまで到達していない。」

「10月までの資金の遅れは、研究のこの段階では、ほとんど悲劇的だ。

グラナー博士には、どこかほかの研究所に来ないかとの誘いもあったが、彼は我々が他のどの研究グループよりもはるか先まで進展していると思っており、我々の研究が許可を得る可能性があるかどうか見ていた。」

「資金が10月まで遅れるならば、あなたに、研究機関で正規の仕事でなく、ただ働きしてもらおうようなことになるが、これは法外な要求だろうか？

我々は、更なる研究なしではこれらを証明することができない。

そして、すでに所定の認可された組織は、単なる名だけの研究機関であることは常に理解されている。」

「あなたはドッジ博士が不在の間、フィラデルフィアで採取するための患者を選んで、人間のガンから微生物を発育させると言うが、おそらく、それが確認出来るライフ顕微鏡なしでは、バクテリアのフィルタを通過する形を取り扱うことは、不可能なことを認識していない。

この手段によってのみ、研究は日々きちんと確認することができる。」

「この研究を行うためには、こうした点に注意を払わなければならないことは疑う余地がない。フィラデルフィアで雇用を決定する人は、ライフ氏と彼の顕微鏡を操作する者と、ここで研究しているグラナー博士自身を雇用する気はないのだろうか？

グラナー博士には、あらゆる研究施設を持つ可能性とあらゆる成功の可能性がある。

3年以上前のことを、思い起こしてもらいたい。

ノースウエスト医学部のアーサー・ケンダル博士は、フィルタを通過する微生物について彼の画期的な研究を発表した。

その時から、多数の科学者が彼の実験を繰り返したが無駄であった。

ニューヨーク公園の男とハーヴァード大のジンサーのような人は、彼らの試みに失敗して、これらのフィルタを通す有機体の存在を騒々しく否定した。

どうして誤ったのか会長自身、知っていると思う。

「ケンダル培養基以外では、これらの微生物を育てる方法がないことを彼らは知らない。

そして、ケンダル・培養基が他の科学者に供給されたときでも、彼らはそれを損ねることなく培養基を消毒することができなかった。

私には、会長がこれらの独特な状況を考慮して、賢くこの問題を避け、あらゆることに信頼可能な誰かを選び、その人をライフの研究所の仕事場に送り出すことが必要であるように思われる。

会長は、実際にフィルタを通り過ぎる微生物が成長し、それらを見ることができ、認めることができる誰かがいるべきだとはおもわないだろうか？

会長が我々にグラナー博士を与える気がないならば、会長が選んだ人を送ってもらえないだろうか？

「私には、フィルタを通過する微生物を取り扱う経験がない人、またはライフの顕微鏡を使用したことのない人や、最低限 100 日ほどしか経験していない人などが成功できるとは思えない。

「会長と我々は、この恐ろしい人間の呪いを征服しようとしている。

私は、ガンとその他の多数の病気の原因に関する我々の意見が一般的に承認されると現在の病気の概念に完全に革命をもたらすと認識している。

したがって、我々が少なくとも新しい考え方を歓迎することで起きる相当な対立を避けようとするならば、一つ一つの段階で常に、大きな配慮が、されなければならない。

こうした理由のために、我々は調査結果を極端に慎重にチェックしようとしているが、これらをチェックするとしても、技術的な専門知識に関する問題があるので、未熟な人によってチェックしてもらいたくない。」

「会長が私を支持していただけることを願い、根気よく各々の立場を考えてこの手紙を、お出しします。

私は、非常に真剣にあなたのものである、ミルバンク・ジョンソンより」

1936年6月2日に、国際癌研究財団会長ウィリアム、ドーマーは、ミルバンク ジョンソンの嘆願を拒絶した。

国際がん研究所は、彼ら自身でテストを行った。

9月の末に、国際がん研究所の最高権力者の1人ミルドレッド・シュラム女史はライフに書いた。そして、彼らが実験を完了したので、ライフのアドバイスを頼んだ。

10月に、会長のドーマーはライフに書いた。

ライフはそれらに答えるのを拒否した。

11月に、会長のドーマーはジョンソンに電報を打った。その時、再びライフにアドバイスをお願いした。

しかし、ライフはこれまでに十分時間を浪費していた。

基金が彼らと同意していた約束を破る間、ライフは、ガンを治療していた。

未熟な権威ある人々は自分達の治療法の正しさを主張したが、初めからライフの成し遂げていた人間のガンの治療という大きな目標を無視して進行することで、悲劇的運命をうみだした。

1936年の春に、ジョンソンはサンタフェ病院での彼のクリニックを終了した。

結果はとてすばらしいものだったが、彼は周波数装置で得られる成果を改善するため、一時休止し、1936年の秋に3回目のクリニックを再開したかった。

1936年4月28日に、ハリー・グッドマン博士（眼科医）は、ジョンソンにジュリア M. ガウディ夫人に使用した周波数装置の効果を書いてきた。

彼女は、5月23日以前に検査された。

1 ヶ月以上後に、彼女の視界は1つの目で 29%、他の目で 10%向上していた。

「彼女は電話帳を読むのも難しかったが、現在は、彼女はむしろ速く数字を読みとれます」と、グッドマンは報告してきた。

9月にサンディエゴのジェームズ **Couche** 博士は 1934 年に開かれたスクリップス牧場の最初のガン・クリニックを視察した。

Couche 博士はライフのアシスタントのジャック・フリーの助けを借りて、クリニックをやり始めた。彼らは、ガンと老人性の白内障を治療した。

記録は不完全だが、最初の 3 人はがん患者で、**Couche** のノートと一致している。(記録では全て完全に回復している)

9月に、ミルバンク・ジョンソン博士は、彼の3番目のパサデナ老人ホームでクリニックを開いた。クリニックは 1937 年の 5 月まで、続いた。

ジョンソンはその年が終わる直前に、彼の成功と驚くべき医学事件の説明をした彼の手紙を、カナダのグラナー博士に、そして、サンフランシスコのマイヤー博士に送った。そのコピーをジョンソンが持っていたことがこの証拠となった。

グラナーに、ジョンソンは書いた。

「火曜日、木曜日、土曜日と、クリニックは1週につき3日、朝開かれた。

昨日、私には 18 人の患者がいた。

それらの間に、肺結核の 2 人の症例と 3 人の癌の症例、2 人の脚の慢性静脈瘤性の潰瘍の症例、そして、他の多少不確かな感染症起源のいろいろなケースが、あった。

あなたは我々が何を行っているか、知っているの、私はあなたに鋭く指摘されることを怖れています。それでより確かなものにするため、あなたが私とここで研究するよう願っています。

それに、私は、あなた自身で実際にそれらを見ることなく、このクリニックで起こっていることに関して、いくつかの、信じられないような私の見聞談を、あなたに話さなければならぬのです。

ジョンソンはマイヤー博士に、報告した。:

時々、光線の効果は、全く仰天するほどです

光線は内部からか、外部からか分からないが、傷の瞬間的な殺菌効果の原因となっている。

しかし南カリフォルニア大学の特別医学研究委員会は今まで通り、こうしたことに関して管理を続けていた。そして、手順が確実になるまで、彼らは発表に関して、しっかりと留め金を閉め続けていた。

1936 年 4 月、最初にライフがフィラデルフィアを訪問したとき、ジョンソンは、財団の特にドーマー **Dormer** 会長はすべての事実の証人となれるが、ごく内密にしていると伝えた。

ジョンソンは主張した

「南カリフォルニア大学の特別医学研究委員会の同意なしで、この実演に参加する出版社もいかなる広告もない。

我々は、完全に証明される前に早過ぎる出版と、嘘の希望が立ち上がるのを阻止するためにこうしている。

12月の初めに、ジョンソンは、メイヤーズに彼が所要でロサンゼルスに来るとき、委員会の会議を開くことを予定するよう書いて頼んだ。

報告すべき多くのことがあった。

それから、クリスマスの10日前に、ジョンソンとライフは、クリスマス・プレゼントをサンフランシスコで受けとった。

E. L. ウォーカー博士(フーパー基金のマイヤーの協力者)は、1936年6月にガン *cryptomyces* 多形態型の真菌型を分離し特定させた。

(彼はライフからは独立して研究していた。)

12月に、彼はガンのウイルスを乳房から分離し、ライフの顕微鏡の下で動いている染色した組織体はおそらくライフの BX であると報告した。

第 12 章

1937 年:

金銭的苦難と遅れ

1937 年は、フラストレーションの状態の 1 年であった。

ジョンソンと、ライフはモントリオールのグラナー博士に、彼のいる研究所がライフに協力してくれるよう頼んだ。

南カリフォルニア大学の特別研究委員会は、「ガンの病因論に関して年末までに発表することを望んでいた。

「彼らは、どのように、ウイルスは型を変えるか、どんな具合にガンに発展したかを発表することだけに限定すると決定した。

彼らは、市民に治療法を話す予定はなかった。

彼らは、どんな具合にガンが発展するかそして、他の研究者が、なぜ「細菌を分離させることができなかつたか理由を述べれば、猛烈な科学的な反対があることを知っていた。

それで、彼らはユニークな周波数装置療法を発表する前に、ガンの病因論を確立しなければならぬと結論を出した。

彼らが癌を治療したこと、顕微鏡には反対の主張への反証能力があることを、カルテで知ることが出来るので、この慎重さは、疑う余地なく今までのなかで最悪の決定であった。彼らは、財政的、科学的な、医学界の反対についてナイーブであった。

ライフの発見はいかに医学界の強力な利益を脅かすか、そして医学界の 3 人の最上位の専門家の男が、ライフを押しつぶし、ガンの治療法を長期にわたって弾圧する方向に進むのを、2、3 年以内に、つぶさに見ることになる。

しかし、1937 年には、単に彼らが保守的であるだけとも思えた。

彼らは、最終的には保守主義者も彼らの目標を認めると思っていた。

これは、致命的な誤りであった。公的にアメリカ人がついにライフの科学的な奇跡を学ぶまで、ほぼ 50 年経過した。

特別研究委員会の国際的に有名なメンバー、ジョージ・ドック博士はその時委員会の仕事でジョンソンと活発に働いており、他の著名な人にも注目されていた。

A BIOGRAPHY OF CANCER



By
O. Cameron Gruner
M.D. Lond

グラナー博士の本
「がんの伝記」の表紙

後に彼は AMA に味方する。そして、静かに鎮圧をする立場に転向してゆく。

そして、AMA の最も高い賞を受けることになるが、1937 年の段階では、彼はジョンソンと、戦線の最前線にいた。

1936 年 12 月と 1937 年前半の遅くに、ジョンソン博士とドック博士は、モンリオールのマギル大学の前の学部長シャルル・マルタン博士と長く話した。

彼らの目的は、グラナー博士がライフと一緒に研究しなければならないと彼に確信させることだった。

マルタン博士は、ジョンソンとドックと話した後、カナダに戻った。

マルタン博士は、数カ月間ライフ研究室で働くグラナーのために、給与を払ってもらおうマギル大学に頼んだ。

しかし、マルタン博士は失敗した。

不況は、1937~38 年に恐怖の第二段に進んでいた。

どこもお金の支払いは、制限されていた。

そして、グラナーの研究結果に反対だったモンリオールの医療人は、財政的にプロジェクトを支える気がなかった。

それはグラナーの研究結果に対する彼らの反感に多くの理由があったようだ。

グラナーは、後になると、病原菌は単一形態「**monomorphists**(単一形態 訳者注)であると確信している 2 つの研究所に配属された。彼の研究は本来は病原菌の多形態性を証明しており、実際に妨害されたとまでは言えないが、この特別重要なガンの病因論は世に出ないようにされた。

ライフの研究に関与した人の多くは医者や研究者だったことを知っておくことは重要で、彼らには、政治的な戦いを戦った経験はなかった

そして、様々な点で決定力を持つ政治権力によって彼らが難詰された時、彼らは粉碎された。

彼らは、真実を明らかにしようとする、科学的手順が優先的に進行することを信じていた。

1980 年代中頃の今日でも、似たような善意の研究者達は、純真に研究手順を指導されている。

物理学、顕微鏡と癌研究のトップの地位にあるそのような人々とライフの癌の治療について議論すると、「1930 年代のガン治療法の鎮圧などは、ありえない」として、共通に同じように反論する。

しかし、科学者は、いつまでも隠していることは出来ないことを知ると思う。本当は、ガンの治療法は、完全に隠されてきた。

そして、関連分野の科学者と同様にガンの研究者の純真さは、現代まで根強く続いている。

問題は、現在、彼らがこのレポートで事実を学ぶとき、彼らが何を行うかということだ？

関連する問題は、アメリカのフリーな出版社がどれほど勇敢かということもある？

しかしそれが一般的に話されることは時間の問題である。

『1937年2月、サンディエゴヘグラナー博士が転任できるように働きかけているとき、ジョンソンはカナダで最も尊敬されたガン研究者、エドワード・アーチボルド博士に書いた。アーチボルドはジョンソンに、委員会の沈黙と、マーティン博士の発表を渋るマギルの怠慢に関して質問してきていた。その時の長い返事で、ジョンソンは、委員会の公表しない理由を説明した。

ジョンソンはこのように書いた：

「我々は、医学界のガンの病因論についての態度は過去2、3年間で、見た目でも明確に変化したのを理解しています。

我々の発表は相当な懐疑論に会うと予想されますので、発表する前に、確実に二重に確証を得なければなりません。

「我々は、グラナー博士が、ライフ研究所に来ることと、最終報告で我々と協力してもらうように、あなたが強く思うあまりに、様々な働きかけをしないよう望みます。

あなたとグラナー博士がこれに同意するならば、おそらく、我々は1937年の終わりにガンの病因論に関して世界に本当の貢献を与えることができます。

「委員会は、我々の方法で治療が可能であると発表する前に、最初にガンの病因論が確立されるのが必要と決定しました。

したがって、この最大の重要な仕事が行われるまで、ライフ光線装置は休ませるようになる予定です」

委員会は、すでに治療されたガン患者がいる治療法については沈黙するほうを選んだ。

用心深い医者は適切に慎重に、議論の余地のないガンの病因論を展開するように選択した。

委員会の群集心理が非常に安全にという方向でふるまう間にも、人々は死んでゆく。

それは無意味で、おそらく不道德な決定であった。

特に彼らがグラナー博士を迎い入れるのに失敗したとき、このように病因論を証明する重要な機会を失い、挑戦できなくなった。

新しい治療法を進んで発表し、懐疑論者を現場に連れてきて、臨床で、毎日の奇跡を見せることが最善の選択であった。

しかし、彼らは行わなかった。

馬鹿など、人は、言うだろうがこれが実態であった。これは代々引き続き行なわれてきた誤りである。さらに今日でも、その同じ間違いを繰り返している。

彼らは、ライフの治療を何度も何度もテストしたい、そして、慎重な科学的な研究の1、2年後に、明白に、「発表する」と言って引き伸ばす。

シェークスピアが生きていたら、そのような愚かな男のまわりで起きた現代悲劇を書くだろう。

「1937年、5月31日、

モントリオールのディーンマギル大学医学部オフィス、C. I. マーティン、

ジョンソン博士への報告

当面はグラナー博士を派遣することはできません。」

と、グラナー博士と彼の妻がイタリアに休暇で去った時に、マーティンは、書いた。

ガンのための治療法の公開は、待つ必要があった。

こうして、残念なことに、グラナーは決してサンディエゴに行くことができなかった。

しかしライフはグラナー博士と連絡を続けた。

そして、後でジョンソンはグラナー博士にその時存在する見事な装置のうちの 1 つであった彼自身の周波数装置を送った。

しかし、それは AMA 全米医学協会が大部分の治療施設を閉鎖させたあとであった。

しかしグラナー博士は、使うにはあまりにおびえていた。

彼は、聖職者に周波数装置を与えた。

その人は短波ハムの通信者だった。

そして、20 世紀で最も貴重なテクノロジーのうちの 1 つは、結局短波ラジオのための予備部品として使われることになった！

一方、困難な状況は始まった

再び 1937 年 5 月にライフは継続している目の病気の治療のためケンタッキーのルイビルを訪問しなければならなかった。

4 月に、フーパー基金から派遣されたウォーカー博士は、病気のため、研究をやめなければならなかった。

もう一人の医者が割り当てられた。しかし、彼は何も達成しなかった。

サンフランシスコの研究は、1937 年中頃には基本的に終わった。

ジョンソンは、報告した。

「サンフランシスコの外科医は、全く非協力的なことが明らかになった」

ウォーカーが研究していた一年半の間、彼は、「彼の外科的部門の同僚から 5 人または 6 人だけ腫瘍の患者を受け入れることができただけだった。

1937 年 5 月 28 日に、ミルバンク・ジョンソン博士は、3 番目のクリニックを終了した。

6 月 1 日、彼は、彼の友人の（ケンタッキー）ルイビルの眼科医ジョセフ D.ハイトガー博士に次のように書き送った。彼はそれをライフにも送った：「私は 8 ヶ月間装置を動かし 5 月 28 日に私のクリニックを終えた。

我々はこの冬、特別な努力で他の伝染性の病状を治療していたが、白内障にも効いた。今まで通り、我々の原理は、目にも作用した。（これは白内障が感染症であるとしての話ですが）、

「ライフ光線の装置を目の機能の、視覚の相関関係を完全に回復させること、つまり、レンズの不透明度からくる視覚障害の回復のために、多数のケースで、使った。

なぜそうなるのか、私は知らない。しかし、上記の事は実際の事実である。そして、現在多くのケースで確認されている。」

「私は我々が集まって、この機能を進展させたいと願っている。

私は、専門家の白内障の治療法の画期的な変化になると思っている」

ジョンソンは1937年夏をサンディエゴ郊外のラ・ホーヤで過ごした。そこで周波数装置を使った治療を継続していた Couche 博士と働いた。

1937年の秋に、ジョンソンは、ライフにエンジニアのフィル Hoyland を紹介し、他の3人と共に周波数装置を製造し、商業的に販売するためサンディエゴへ行った。

同社は「ビームレイ」と名づけられた。

AMA 全米医学協会がライフのガン治療法を、破壊する際、それは重要な中心部分であった。AMA が舞台裏で医者に周波数装置を使うのを止めるか、医療を営む彼らの免許を失うように圧力をかけた時、Hoyland は AMA のエージェントになり、高額な費用をかけてロサンゼルス検事を雇って、ビームレイを訴えた。

この裁判によって、アルコール中毒と、あたかもガンによる死のような、年ごとに増してゆく鬱的状況の中、ライフの悪化する人生の長い道のりが始まった。

ジョンソンは、ライフの研究にフィリップ Hoyland と治療プログラムを導入するがこれは、疑う余地なく彼の最大で深刻な誤算であった。

Hoyland は有能な電気技師で、ジョンソンはその才能を見たが、男の性格は見なかった。

ジョンソンのこの失敗は、1944年の疑わしい自らの死の一因となり、そして、もし何年か先にこの災難がなく、今まで通りであれば、特別研究委員会はガンと他の感染症のための治療法が発見されたと、世界に発表する直前まで来ていたのだが、終ってしまった。

1937年の秋にジョンソンはロサンゼルスに戻って、再び周波数装置での治療を開始した。

1937年の障害と逆流にもかかわらず、装置の発達とともにには発展が続いた。

いろいろな地域の科学者に、関心が生まれた。

将来は、有望に見えた。しかし、この楽観主義は蜃気楼であった。

嵐は高まって、すぐにサンディエゴのこの流れは完全に破壊される。

第 13 章

1938 年

ビームレイ

フィリップ Hoyland がロサンゼルスからサンディエゴへ移った後、1937 年にビーム・レイという会社は創立された。

フィリップ Hoyland は電気技師でライフと働いて、そして、周波数装置の改善の一因となった。

ライフは彼を、サンディエゴのオルコット通り、ポイント・ロマのライフ研究所に、連れてきた

Hoyland は、商業的に周波数装置を製造するアイデアを出したハッチソンという名のプロモーターに会った。

ビームレイの一緒の共同経営者は 1913 年にサンディエゴに到着した時からのライフの旧友ベン・カレンと、もう一人は、しばらくの間、周波数装置で患者を治療していたサンディエゴ医師ジェームズ Couche でした。

彼らは、アイデアをもってライフに接近した。

その時、ライフは考え、2 つの制約の下で彼らに、製造許可を与えた。

1. オリジナルの周波数装置の基本的な原則を厳守すること
2. 各々の、周波数装置はその殺菌力を本当に確認するために、交付の前に完全に病原菌への効果がテストされること。

そして 14 個の周波数装置がビームレイによって製造された。

2 個は、イングランドへ、3 個目はハーマー博士に 4 個目はアーサー・エール博士が持って行った。

もう 2 個はアリゾナの医者に行き、残っていた 8 個は南カリフォルニアの医者を持って行った。

1938 年 5 月、これに関して B・ウィンター・Gonin 医師と、W. V. ブルーエットという、名前の方が、イングランドから到着した。

彼らはライフから顕微鏡の販売権を獲得することに同意し、彼らはロンドンから世界にライフ顕微鏡を売却することを議論した。

彼らもビームレイの人たちに行って、彼らが製造する前に最初 2 つの周波数装置を得た。

しかし、2 台の装置が 7 月と 8 月に送られたとき、これにはコードが接続されていなかった。

Hoyland は、イングランドへくるよう求められた。



Royal Rife と Philip
Hoyland t 1938 年に撮影

3人のイギリス人は、怒っていた。

装置を送ったときに、ライフはサンディエゴから外に出かけていた。

このような状況だったので、彼らはレイビームとの間で同意されていた約束であった、ライフによる検査を受けずに発送した。

イギリス人との手紙でのやりとりの後、ライフは年末に彼を補佐していたヘンリー・サイナーをイングランドに送ることに同意した。

サイナーは顕微鏡を持って行って、イギリス人が研究所を確立するのを最後まで手伝った。

ライフは続けて、イギリス人に注文されていた顕微鏡を1939年中頃に、持っていった。

一方、Couche博士は、サンディエゴの大部分の医者が治療不可能だった患者を治した。

このことで、装置の治癒力のことは、人々に広がった。

パラダイス・バレー・サナトリウムのリチャード・ハーマー博士は、3つめのビームレイ周波数装置を借りて、サナトリウムに設置した。

しかし、他の医者の方がハーマーに取られ始めるとすぐに、ハーマーは周波数装置を撤去するよう命令された。

そこで、彼とアシスタントは、ナショナルシティにオフィスを開いた。

ベン・カレン (Beam Ray, の責任者) は、後でハーマー博士自身のオフィスで起こったことを思い出した：

「ハーマーは、彼の治療所で1日平均40人治療した。

彼は、2人のオペレーターを雇わなければならなかった。

彼は訓練を受けたオペレーターを、細かい配慮のもとに見守り、ハーマーは、太平洋沿岸の町で非常に有名になった。

彼のケースヒストリーは、全く素晴らしいものであった。

「そこまで行きますので、息子の直腸ガンを見てください。こう言ってそこにいき、治療を始めた。すると彼は、完全に、きれいにそれらを治した。

たとえば患者の中には、治療を意識しないで梅毒にかかっていた人も、そこへ来たが成長したガン以外に、梅毒または淋病なども、その場で見つけ出した。

そしてまあなんということか、彼は完全にそれら全てをきれいに治してしまった。

惨めな血でただれた痕跡は全くなかった。

臨床的にも治癒していた。

「私はハーマー博士には負けます、彼は苦心して隠された患者の病歴を外へ引っ張りだし、その患者の誰もが日々改善していく」

ハーマー博士によってされた、シカゴから来た82歳前の男性の治療はシカゴAMA全米医学協会の責任者モリス・フィッシュバインが周波数装置を知るきっかけになった。

フィッシュバインは、その時、全米医師会ロサンゼルス代表の手で「買収」しようとした。

この申し入れが拒否されたとき、フィリップ Hoyland の裁判闘争のために助けてくれる、費用のかかるロサンゼルスからの弁護士が突然得られた。

ライフと研究してきた Hoyland は、装置を造る際に、彼が正当に扱われていないと感じていた。Hoyland はカレン、Couche 博士とプロモーターのハッチソンを自分より下に 見始めた。カレンは、会社をつくるため自分の金を使った。各々のメンバーは、6,000 人の患者を受け入れた。

しかし、Hoyland は周波数に関する情報を持ち、装置を使ってより多くのお金を得ようとした。Hoyland が持っていた共同経営者としての不満と意見の相違から、彼はビームレイを破壊するか、買収しようとする AMA 全米医師会に、力を貸すようになった。

彼の引き起こした、裁判沙汰は、ビームレイに対する支配力を得るための露骨な操作であった。

ビームレイを所有することによって、彼はフィッシュバインまたは他の買いとろうとする部外者とも交渉する立場になった。

1939 年の裁判でライフは 負け、ビームレイの営業停止が指示され、ガンと他の病気を癒やしていた特別研究委員会の慎重に発展させたプログラムは止められ、臨床研究の大部分は終了した。

第 14 章

1939:年

嵐が吹き荒れた

ライフと彼の仲間が未来の科学を創っていたとき、過去の科学的な世界に生きる権威ある人たちは、ライフらとは非常に別の方向を向いており、医学研究において神を嘲るゴリアテのような巨大な存在となっていた。

そして、それらは今でも戦後の社会を統治している。

これらは、広く強大な財政的な権益をもつ巨大企業に関係していた。

ライフが設計した装置の特性の発展は、広範囲に及ぶ投資家と、その背後にある政治帝国を威嚇した。

これはまた、ライフの研究と発見に対立する、「細菌の単一形態論」を指導している科学的権威に対しても威嚇することになった。

ここにあげた 2 つの例は、百万都市の健康とその背後にある大きな財政投資、医者 of 連合組織を管理する大きな権力、政府の医学研究への政治的介入といったものに、ライフが、知らずに疑問をさしはさむことになり、ライフの誠実に小さな研究にあけくれる世界との間に、大きな違いがあることを示す、歴史的にも価値ある図柄を提供した。

ライフのアシスタント、ヘンリー・サイナーは、1939 年 1 月ニューヨークを経由して英国へ行き、そこで、ライフの顕微鏡をデモンストレーションし、ライフのような英国の研究所を援助しようとした。

ニューヨークにいる間に、彼は Carscarden 博士を訪ね、そこでメディカルセンターを、見た

サイナーはメディカルセンターの壮大さに畏敬の念にうたれた。しかし、彼は細菌学が今まで通り石器時代にいる事実を目を開かされた。

サイナーからライフへの手紙がある：

「私は Carscarden 博士に会った後、メディカルセンターから戻って、フィルターを改めて彼に届け、そのフィルターの能力と使用法に関して彼に教えました。

Carscarden 博士は私が今まで会ったことがないようなとても立派な男です、そして彼の考えた研究方針はあなたのものにとってもよく似ており、あなたと彼が有名になると私は確信しています。

Carscarden 博士は外科医なので、彼は私の細菌学研究を知っていました。

そこで、私はフィルタを通過する、病原性微生物の神秘を研究している人々と非常に面白い議論をしました。

「私はこの時、非常に矛盾している光景に深い感銘を受けました。

少なくとも驚くべき 10 の建物の高い方の部分は、まるで雲の果てまで聳え立ち、メディカルセンターとして知られる施設が棟を連なって作り上げられています。看護婦、患者、その他は、ちりのように微細な存在で、巨大な神の殿堂を、狂った人たちの家であるかのよう動いており、私は、巨大な規模の構造に畏敬の念にうたれました。

そして、5階の、小さな人目につかない部屋に行き、私は細菌学部（研究室）を見ました。ライフ博士の、全ての研究所が、我々の今いるこの真っ暗な部屋にうまく収まり、それでもまだ、十分場所が残っているほどの広さだったので、私は悪態をつきました。なんて狭いところで我々は研究していたのだと。

そして私に、あなたが、何回も、重要な研究がひどく怠慢に行なわれていると言ったことを思い出させました。

「研究室の人々は、契約で何かの予防接種のための基礎研究をしており、受精した鶏卵で仕事中でした。

しかし話をする時間は十分ありました。彼らは、風邪と『風邪のウイルスに取り組んでいました。

ここで、Carscarden 博士は、私が英国に、風邪のウイルスの型が確認可能な機能をもつ顕微鏡を運んできた、と発表しました。

主要な技術者のうちの 1 人は、そのような事は、神話だ、または、そういったたぐいのたわごとだ、と即座に言っただけでした。

しかし、私はケンダル博士の細菌学のコピーが机に置いてあるのに気がつきました。私はそれを取り上げて、そこに集った人々がその本の著者について何か知っているか、質問しました。

そしてすぐに、「カリフォルニア アンド ウェスタンメディシアン」に掲載された、ケンダルと、ライフの記事が再度印刷されたものを広げました。

「グループのうちの 1 人が、記事を声を出して読んだあと、その場の空気は全く変わりました。そして、彼ら全員が私と他の者が、何を言うか聞こうとして、活動を完全に中止したことに気がつきました。

私がいたその場の中のだれ一人として、この顕微鏡を片目で、ほんの少しでも見た者はいませんでした。私は、今は不可能だが、たぶん我々がイングランドから戻ればそれは用意できずと説明しました。」

その同じ年の後半に、カナダのグラナー博士は、ミルバンク・ジョンソンにカナダを支配している権威あるニューヨークのロックフェラー研究所と、ワシントン研究所を支配する正統的な科学的思考法について、彼の不満を書いた。

「全ての問題の核心は、『ウイルス』の識別にある。言い換えると他の物質と混ざりもする『BX』それ自体の性質をどう解明するかの問題である。

BX は、『基本小体』という名で呼ばれるものに変化する。

論争の中心は、現在、それらの組織体が何であるかという問題にある。

私は、私自身、『基本小体』は BX と同じであると考える。

さて先日、話題に上ったように、アーチボルド博士と私自身がロックフェラーのラウス博士を訪ねたとき、シヨープのウイルスと、『基本小体』の概念の研究を見た。そのとき、私の撮った『私』の e-b の写真を示した。彼は、私が見つけ出したことに非常に驚いたようだった」(注：ラウスは 1911 年に最初の発癌性「ウイルス」を見つけ出したが、彼が 86 歳の 1966 年になるまでノーベル賞を与えられなかった)

「その後、グラヴァー有機体の問題が話題になった、そして、我々はその有機体についての研究を見るためにワシントンに行った。

考察を長く延々と続けた後、私のみつけた部分は、グラヴァー有機体の極微の段階と、同じだと結論を出した。

しかし BX と『e-b』は、もちろん非常に異なるものではないかという疑問も生まれる。

(言い換えると、この極微の段階のものが球菌と細菌に発展していくことができるのではないかとも考えられた)

ワシントンの環境衛生部はグラヴァー有機体の研究をまさに役に立たないものとして停止することを決定し、管理責任者を変更した。

「これとほぼ同じ時の 3 週間前に、権威ある細菌学の教授とアーチボルド博士によって、ガン細菌の存在に対して強い偏見をもつよう教育され、認定された細菌学者と免疫学者が、私の研究を全てチェックするよう上から指示された。

その時から、ほぼ 9 ヶ月間、実質的に研究は、中断された。

「私は、これらの人たちの BX の作動に関する慎重な解説を『認める可能性はなく』それに関わることは時間の無駄であった。

これらの権威ある人たちと我々との間にあった忘れがたい出来事以来、このテーマに関する多くの主張は、科学を装った『フェージ』な逃げと考えられ、大学の研究のテーマとしては、ほとんどふさわしくないものと私は考えている。

しかし、この『突然変異』の概念、『多形態性』、『バクテリアの発達のサイクル』はアーチボルド博士と私の論争のなかで最も重要なテーマであった。

この戦いは、『monomorph-ists 単一形態』と『pleomorphists 多形態』.の概念の間であった。

『私にとって、細菌学は現在のアカデミックな見解の下では不毛な残骸または死に体のものでしかない。

それに対して、アカデミックのものでない、もう一つの概念は我々が自然の中で見る多くのことを説明するだけでなく、実は教科書に掲載されている顕微鏡写真自体でも証明されている。

教科書の著者自身がこれらの写真をこれまで理解していなかったことは明白で、でなければ、彼らは球菌が細菌になっている写真を常に掲載してはいないはずだ！

「ライフ博士はもちろん理解している、もちろん証拠を得るために、欠くことのできない

装置も所持していた。

今日まで、光学器械の製作者は彼が行ったことは不可能だと言う。

私が昨年取材したロンドンの人々は非常に軽蔑的な態度で、波長についての長年の議論を持ち出した。

(それをアーチボルド博士は、それみたことかと喜ぶだろうと思って私は静かに、聞いていた; 私はまるで中世ガリレオのようです)

BX は、『極微ではないが、使用する光が露光しないので、見るができない
ライフ博士はその時、彼の研究所でそれを実演した。

「こういうことは、全て、私自身がライフの発見を強く支持させる要因だ。

私は、依然として、彼の装置は最高の価値があるものと思っている。

しかし、たとえ多くの場所で顕微鏡が入手できたとしても、ライフらの研究した事を精細に調べてくださいと頼む人はいない..

我々は、一部の例外を除いて、ウイルスを研究する人たちが決して顕微鏡で彼らの素材を見ていないことを確認している;

彼らは通常の haematoxylin 領域以外に、これらの腫瘍を決して見ていない;

彼らは、確実に生きている組織を決して調べていない。

さらに Lewises の素晴らしいシネマトグラフの写真は我々が病因になると思っている粒子が含まれ、そして、これらはまったくいたる所で踊っているのに、誰も決して気がつかない

BX としか思われぬそのダンスは、かれらには興味を起こさせない!

何が正しいか「理解」できないことが、ガン研究者がガンの原因を見つけ出すのに失敗した理由の1つである

(他の理由は、政治的活動の関与である)

1983年に、彼女の遺伝子研究のためノーベル賞がバーバラ・マックリントックに与えられた。

「有機体の感覚」とタイトルをつけられたイーヴリン・F・ケラーのマックリントックの伝記は、マックリントックがどのように特別な方法で見ることを学んだか述べている。

これは基本的に、カナダのグラナー博士が1939年に書いていることだ。

ケラーはライフの研究を確認しただけでなく、ライフの意図した目的を持たずに、類似したものを発見した他の無数の研究者の証人ともなった。

ケラーは、ノーベル賞受賞者マックリントックと他の第一級の科学者がどんな具合に直視して、特別な方法で「見たか」を述べた:

「私たちの、世界の概念は、我々が眼で見ることを基にして出来ており、その眼で見るという行為は我々が考えていることを基にして行なっている。したがって

我々がより多く知って、考えられれば、より多くのことを見る事が出来る。

「結局、この特殊な「見る」方法が、個々の科学者に、生産的な論文を書かせることに、関係があるのではないか?

遺伝学のみステリーを彼女の同僚より心から深く追求し、見るよう何が、マックリントックにさせたのか？

「彼女の答えは、単純である。

何度も何度も、彼女は我々に話した。

人は、観察のために最良の時間を惜しみなく使わなければならない。

『素材が言おうとしていることを、我慢して聞きとり、オープンに皆のところへ届くようにする。それだけのことだ。』

『とりわけ有機体との長年の緊密な関係で可能となった感覚と、個人的知識とがなければならぬ』。そして彼女がそれを長く研究したことは、並外れた眼力のための必要条件である。

『私が、穀物植物を、見るとき、すぐにそれらの言葉を通訳できるようになり、文字通りに、そして、比喩的にも、彼女の『有機体の感覚』は、彼女の視野を拡大した。48 時間、ライフは彼の椅子に動くことなく座り、顕微鏡で長くデモンストレーションし、「この視覚のプロセスに没頭した。

そして、これに比較すると多くの微生物学者は、明白にものを見ているとは思えない。

(カナダのグラナー博士が注意したように)

ライフの反対者は自分の家の芝生を守ろうとするだけだ。

そして、ロックフェラー研究所とたハーヴァードの彼らの強力な地位を使って反論する。今になってみると、ケンダルまたはライフを攻撃し連中は、質の悪い科学者だと言える：**Rosenow** の息子は、彼の父が結局、リバーとジンサーのような質の悪い科学者については、哲学的にあきらめるようになったと筆者に話した。

Rosenow の父は、彼の息子に言った、「エドワード、どんなに苛酷であっても、私は他の人を確信させようとしたが、たまたま心が開いて、聞く気がおこらない限り、何も起きません」

(これに対してライフの場合は、自らの内心の心の声にうながされて目を開いていった) さて、今まで書いてきたこの小さい前書きは、1939 年の裁判のための準備でしかない。そこには 2 人の人間がおり、1 人は 対象を科学的に見ることが出来る科学者でライフといい、他は、政治権力の大好きな人間で、その科学的な経歴も、平凡で、商業的倫理も、控え目に言っても、良い人物ではないことは推測できた。これはフィッシュバインのことである。

モリス・フィッシュバインは、あわただしく医学部を卒業した。

彼はわずか 6 ヶ月間インターンになっただけで、彼は人生で 1 日とて、医者としての業務を営んだことはない。

彼を教えたシンプソンという名の先生は、また、ラッシュ医科大学の出身であった。

AMA ジャーナルの責任者シンプソンは、AMA 全米医学協会が独裁者の思ったままに統治することが可能になるよう便利なシステムに、発展させた。

1922年に、シンプソンは訴訟事件で彼の妻が精神病棟に不正にコミットしたことが明らかになった後、辞任するよう強制された。

彼の妻は反撃し、シンプソンが彼女を薬物常用者にしたことを明確に示した。

シンプソンは、初期のAMAの背後の創設者で、この時代では基本的に二流の医者が権力を得、金を得るために、組織を使った。

公益は、二番目であった。

1970年代のフィッシュバインのニューヨークタイムズの死亡記事は

彼が、青年の時、医者が「権力」をもつことを知って、医者になった。

権力は、彼の個人的動機を駆りたてる目標で、患者の治療が第一の目的ではなかったと、報告している。

彼の自叙伝は、全て彼の人生で会った有名な人々について書いた自己中心的な伝記にしかすぎない。

フィッシュバインはAMA全米医学協会を監督し、どんなに悪いことでも彼の行動が見咎められずに、実質的に独裁体制で進めるまでにし、そのうえ新聞社と他の団体を脅迫した。

残念なことに、状況は今日も、あまり変わらない。

国中の一団のがん患者はバハマのガン・クリニックについてのAMAジャーナルの記事が不正確であることに抗議したが、メディアは本当の事実を公表することができないので、メディアの何人かの人々は患者のグループに謝罪した。

(これはなんと、1985年である!) その原因は?

「無力なジャーナリストは彼らの第一情報源と地代を確保するために、AMAジャーナルへの反論を没にしている。

患者のグループの責任者、ミシガン州カラマズーのジャックリンクは、ジャーナリストが「すでに完全に無力である」と結論を出した。

それは、1939年の裁判の間、ライフが直面した、強力な権力をもつ医学組合組織である。

それは、それ自身のルールによって行い、法律を無視し、不健康な製品を宣伝し、報道機関、政治家と医学研究者を脅迫し、米国民の基本的な原則を残念なことに、ゆがめてきた。

ライフが召喚されたとき、ライフは1939年5月にイングランドに行っていた。

エドワード・ケリー判事が議長となって裁判は、1939年6月12日に開かれた。

1方の側の、フィリップ Hoyland は高額な報酬を支払われた法律の専門家達によって支援されていた。

それに対して、こちらはサンディエゴ地方検事のバート Comperet 一人が立っていた。

ライフに対抗する弁護士は、法廷手続きの点で決して経験豊かでないライフを錯乱させ追い詰めた。

彼の神経を錯乱させた。

医者は、彼が落ちつくために飲物を飲むよう勧めた。



フィッシュバイ

こうしてライフのアルコール中毒が始った。

ライフのアシスタントのベン・カレンの、この期間の記憶は、以下のようだ。:

「ライフは2、3回の法廷での証言のために、たびたび呼ばれた。

ケリー判事は素晴らしい人だった。しかし、これまでライフは裁判所に行ったことはなかったのに神経質にしり込みし、馬鹿のようになった。落ちつこうとしても、耐えられず、手は木の葉のように、震えた。

彼は、前は吸わなかったが大量にタバコを吸い始めた。

とにかく、医者薬の常用を強いることなく、神経過敏を止める方法が何もないので、酒を飲むように進めた。

ついに、彼は酒が無いと耐えられないようになった。

「その後、彼が酒に酔っていない明晰な時間には、彼は、仕事をするように努力したが、毎日確実に出てくる惨めな時間に、彼の車から小壘を出してひとくち飲むともうそれで終りであった。

訴訟事件が行われている間と、その後も AMA は、ライフに関与した全ての医者を訪ねた。周波数装置を使うのを止めなかった人々は、彼らの医学的な認可を失った。

ハーマー博士は、すばやく彼の装置を返却した。

特別研究委員にも、様々な種類のプレッシャーがかけられた。

ミルバンク・ジョンソンは、絶対に譲歩しなかった。

ジョンソンは1942年にカナダのグラナー博士に彼自身の周波数装置を送り、今まで通りなんらかの形で、新しいガンの治療法として宣言できるように、国際的な確認を求めていくことは、ジョンソンには議論の余地のないことだった。

しかし、こうした圧力への恐れから、グラナー博士は周波数装置を使わなかったことでジョンソンを失望させた。

1944年「現在」の紳士録のジョンソンの情報では、彼は今まで通り南カリフォルニア大学特別研究委員会の委員長であることが記載されている。

彼は、今まで通り、ライフの発見を世界に持ってくるために戦った。

しかし、大部分の他の人は、急に逃げだし、退却した。

1944年のジョンソンの死後、委員会の記録は、破壊された。

カレンは、記憶していた:

「それはとても論争の的となった

南カリフォルニア大学の彼らは、ジョンソンの死を覆う神秘が、死ぬほどこわかった。

1つの噂は、彼が入院する直前に、ジョンソンはガンの治療法を発表する準備をしていた。彼が沈黙させられたという疑いが存在する。しかし、これは状況証拠である。

しかし、2人の連邦検査官は、1950年代後期から1960年代初期に彼の病院記録を調べた。

彼らは、ジョンソンが毒を入れられたらしいと結論を出した。

1944~46年の時期に、ライフの研究所の新入りの技術者は重要な水晶プリズムのうちの1

つをユニバーサル顕微鏡から盗んだ。そして、使用不可能にした。

盗まれる前に、レイモンド・サイデル博士は、顕微鏡の設計図をスミソニアン年次報告に発表している。

このレポートは、「殺菌可能な周波数が確実に照射されるとき、癌ウイルスの数が圧倒的に少なくなっていくのが見られる事を述べた。」これはライフの反対者が否定できない決定的ニュースであった。

スミソニアン報告の出版は、検閲の壁にあいた危険な割れ目であった。

サイデルはこの出版が原因で起きたことにすぐに気がついた。

彼が運転しているとき、弾丸が自動車フロントガラスに打ち込まれた。

Couche 博士は、1950年代中頃まで周波数装置を使うことを続けた。

彼はAMAに逆らったので、会員資格は取り消された。

ウィスコンシン州ミルウォーキーの **Nutritional Research** のリー財団のロイヤル・リー博士はロイヤルライフと何回も週末を過ごした。

リー博士は、後で **Fishbein** とライフの悲劇についての小さなレポートを発表した。

このレポートには以下の部分が含まれている：

「これまで、どの医学雑誌にもライフの研究レポートは掲載が許可されなかった。

フランクリン研究所による検閲官によって却下された。

この組織は、一般的な科学的活動を支えたとしても、医学のためのものではない。

もしこの誤った方針が今すぐ修正されなければ、ライフの画期的な発見は一般知識として今まで通り、出てこない。

また、フィッシュバインの鉄のカーテンの存在も、効果的であった...

我々は、こうした厳しい検閲機関のいろいろな問題のリストを出すことができる。

化学合成薬による病気の治療だけが、慎重に報告されている。

漢方薬などの植物性薬品は没にされる。

医学的治療法の公式定義では食品による治療法は、ライフの研究と同じようにタブーである。

自動的にビタミン、栄養的なミネラルまたは酵素も除外している...

「ビームレイ」は、フィリップ **Hoyland** からの訴訟に勝った。

ケリー裁判官は裁判の終わりに述べた — 「裁判所は、この装置による治療法の有効性を許可するよう求めません。

しかし、この法廷にいる人々は、この強力な装置によるたいへん確実性がある治療で金銭を得ている。

" ケリー裁判官は正確に **Hoyland** の性格を審査した。

ケリー裁判官：

「私は、これらの業務において彼の潔白な性格を確信出来ません。裁判所に正当さを主張してもらうため、裁判所にいると見られる。

彼は孤立し、会社の責任者と対立した。

裁判所は、会社の責任者達の正直さと完全性を確認している。

私は、原告（Hoyland）の主張が正当と認めない。

私は、彼の要求を拒否する。

彼は、あらゆる業務で彼自身の利益を中心において考えたので私は主張を信じない。

この人は、助けを頼んだが、その主張に妥当性はなく、それゆえ私は彼の主張を認めないと再度言い渡す。

"AMA 全米医学協会は舞台裏の役割だったので法廷にはやって来なかった。

ケリー裁判官は、学んだにちがいない。

裁判が完全に終わった時、AMA に対して新たな訴訟を立ち上げた際に、ケリーは、ビームレイを代表すると申し出た。

しかし、ビームレイのベン・カレンは一文無しになっていた。

彼は、さらに家も失っていた。カレンは、ガンの治療法を離れ、仕事を得て、他の場所に行った。

ライフは 1946 年まで彼の研究所を無傷に維持し続けた、しかし、結局酒を飲んでいる彼は一つずつ金目の物を売却することを強いられていった。

こうして、AMA はビームレイに対する訴訟事件には負けたが、この戦争には勝った。

しかし、何 10 年間もの間にガンで苦しんでいる何百万人ものアメリカ人が亡くなっていった。この筆者の意見では、1939 年のフィッシュバインの行動は、アメリカの歴史上で最悪の大量殺人者の行為と同じである。

注：

ちょうど 1939 年の春の、ライフへの AMA の攻撃が始まる前に、不思議なことに他に類がないアメリカで唯一の「電子治療法研究室」は、火事によって崩壊した。

ニュージャージーの J. C.バーネットが提供してくれた研究室は 15 年間、「人体と電子エネルギーの関係の記録をとり続ける研究を続けていた。

250,000 ドルの研究室と 400 エーカーの土地と研究に投資された 500,000 ドル以上（1924 年のドル価値で）は、バーネットの妻（ティムケンローラーベアリングのコーラ B.ティムケンの前の家族）によって資金提供された。

Rife に最初の資金供給したのは彼女の西海岸の親族であった。

バーネットと彼の妻がカリフォルニアでライフを訪問した時に、研究室が、全焼した、重要な 1939 年に、奇妙なことに一致して暗い事件が発生した！

15 章

顕微鏡、そして、周波数装置

1980 年代中頃から見ると、1930 年代からの長い試練の中で、最大の戦術的間違いは多分 1932 年 5 月 3~4 日ボルチモアでアメリカの医者協会でケンダルが演説したときに起きた。待ちかまえて、激しく反論するために参加した 2 人の聴衆は、トーマス・リバー博士とジンサー博士であった。

どちらの博士もケンダルが示した、彼の「K 培養基」を使って可能だとする効果を再現することができなかった。

しかし、その観衆の中にはウィリアム・ウェルチのようなたいへん能力あるライフへの協力者もいた。

ケンダルには、彼の業績を誇る権利があったが、彼の判断の破滅的な誤りは、リバーとジンサーが彼をうそつきだと言った後、防衛し反論するためにライフの顕微鏡による確証のことを話さなかったことだった。

すでにケンダルはライフと一緒に、彼らの 2 人の業績を説明し公表していた。

彼が行わなければならなかったことは、単に、極めて高性能の新しい顕微鏡でフィルタを通す型式のバクテリアを目に見えるようにすることだった。

顕微鏡を持っていない、リバーとジンサーには、反論が出来ないはずだった。

しかし、ケンダルはライフのことを書かなかった。

彼がそれをしたならば、後で 1932 年夏の AMA ジャーナルで会議の報告を読んだ全研究者は「単形性」対「多形態性」の論戦の代わりに、この高性能の顕微鏡に議論が集中しただろう。

1932 年というかなり昔のことだが、AMA ジャーナルがライフの発見を公表したならば、AMA-全米医学協会の権力への威嚇となり、最近までの医療の歴史は変わっていただろう。ライフ顕微鏡の能力が広く多くの人に知られていなかったのも、ライフの権威は 7 年後に苛酷な攻撃にあい、彼のガン除去装置も訴訟問題で攻撃された。

しかし、ケンダルは自身のために、栄光を得ようとして、迂回しすぎた。

彼には敵の攻撃を急速に沈黙させる武器があったため、逆に、残忍な攻撃の対象になった。

後でケンダル自身が、大型の銃による攻撃の餌食になっていった。

その攻撃は新しいガンの治療法の記憶をぬぐい去るため、1940 年代に行なわれた。

彼の、「K 培養基」はライフの発見にとって重要なもので、彼はその権威者であった。

しかしライフのアシスタント、ベン・カレンのメモには、ケンダルのすばらしい経歴の中にある、嘆かわしい出来事が書かれている。

「私は、ケンダルは 200,000 ドルもらったと思っている。

ケンダルはメキシコに心から喜んで行った、彼はその話に乗って、牧場を買い、そして、

メキシコ人は彼をすっからかんにした。

1958年には、彼は義理の息子から離れてラ・ホーヤで生きようとした。

「次の年に、ガンの治療クリニックが1934年にはじめて出来たその町でケンダルは死んだ。この本の後に出てくるヴァージニア・リヴィングストン・ホイラー博士の話に要約されるように、新しいガン治療法に関連した人々がラ・ホーヤにいきつくという、奇妙な、ミステリアスな事があった。

ボルチモアのケンダル博士の突然の沈黙は、アメリカの微生物学者の間の愚かな「単一形」対「多形態性」の議論に不透明な影が忍び込んでくる。

ライフの顕微鏡が示したものに対する関心は、今でも依然としてあるが、それでも、少数の人しかそれを見ようとしなない。

1932年夏メイヨー・クリニック出版と、サイエンスマガジンから、メイヨー・クリニックの細菌学実験部門のRosenowは2つのレポートで、明確で重要な事実を科学界に提供した。

1932年8月26日のRosenowの科学記事は：

「ライフ顕微鏡での標本試験は、この装置の非常に高い拡大倍率（8,000倍と計算される）によって、普通の顕微鏡で見える物も含めて、直接物体または微粒子物質の正確な視覚化が可能になるので、疑問はありません。」

他の科学者は単にこれを見ない。

カナダのグラナー博士の1939年の手紙が明らかにしたように、顕微鏡の権威はそのような顕微鏡があることを原理的に考えたくない。

1980年代中頃に顕微鏡使用者と物理学者にライフの顕微鏡について話すと、古くからある「光の周波数」の議論が持ち上がり、ライフの顕微鏡は、今まで通りのものに、見られてしまう。

ライフの顕微鏡は、専門家が今まできわめて大事にしてきた信条を否定した。

電子顕微鏡が1940-41年に導入され始めたとき、ライフはドイツへ旅行をした。

彼は、自分で1929年に造ったものは質が悪かったことをすぐに認めた。

しかし、彼の顕微鏡は、生きている有機体を見ることができる。

電子顕微鏡は、その見本を殺してしまう。

1986年に1人の専門家がこの「生きている」微生物対「死んだ」微生物の問題を議論する際に注意したように、既存の権威は、もう一度すべてを「見る」ことから学びなおさねばならない。

今の科学者の人々は、電子顕微鏡で成長した。

生きている微生物の世界は、それらと全く相容れない。

ライフの顕微鏡とライフの周波数装置は、無知な男の支配力や、公的な責任を無視した、いかなる権力と手段によっても抑えようとしても抑えきれものではない。

人は、ライフの2つの偉大な発見を、同時代の科学者が発展させることが許されたならば、



American Bacteriologist,
Dr. Edward C. Rosenow

Roseno

致死的な微生物についての新しい知識が得られ、ライフ装置の痛みのない微生物の破壊方法が人間の幸福をいかに拡大させることが出来たか想像することができる。

ライフのことは1938年に、

サンディエゴイブニングトリビューン（5月6日と5月11日）のニューアル・ジョーンズによって書かれた2つの記事で、人々に伝えられた。

ライフは言った、

「我々は、この時点で、ガンまたは何か他の病気を『治療した』と主張しようと思わない。しかし、我々はこれらの波動、または、光線、周波数と呼ばれるものは、異なる有機体ごとの、正確な波長または周波数に合わせると、病気にする有機体を無気力にし、それらを『殺す』パワーを所有することが示されたと言うことができる」

これは、病気でない状態のものと同様に確実に病気の有機体と、両方に当てることが出来る

「1953年になると、ライフは昔ほど防衛的ではなかった。

この時には、ライフの研究と発見の説明は、著作権を得て保護されており、BXガンの周波数で3日目ごと3分間それに照射されたとき、ガンと他の病気の16人の症例のうち14人が1934年に治療されたと述べている。

（他2人は、クリニックが終わった1ヵ月後に治療したと言われている。）

サンディエゴ・ニュース報道の4年後の1942年に、

レイモンドE.サイデル博士は、記事に書かれた顕微鏡の調査を開始した。

彼はライフの研究所で3週間かかって調査した。

1944年2月にフランクリン研究所ジャーナルに記事が掲載された。

その年の、スミソニアン協会の年次報告にも、再度掲載された。

サイデルが医学博士で顕微鏡の専門家でなかったのも、彼の説明は心の狭い顕微鏡の権威者が習慣的に使う専門用語のものではなかった。

1980年代の顕微鏡の専門家は、専門的な語彙が欠けていたのであざ笑った。

とはいっても、心が開かれている専門家は、その時も今も、彼のレポートに興奮する。

その記事の出版の4年後になっても同じように、研究所から、その情報を求める多くの手紙が、ライフに届いた。

残念なことに、その時ライフによって、研究所は閉じられていた。そして、ライフは食べるために金目の物を一つずつゆっくり売却していた。

サイデル博士はユニバーサル顕微鏡の5,682の部分に言及し、どんな具合に普通の顕微鏡と異なるか述べた：

「くさび形にされた石英結晶プリズムは、光源と標本との、2つの間で光を弧を描いて循環させ、標本に光を通り抜けさせ、分極化する目的で置く。

分極化は理論の実際的な応用で、光波は、その伝達方向に対して全ての面で垂直に振動する。

したがって、光は偏光プリズムに触れ、分裂し、2つの光線に分れる。

光線は、ある大きさに屈折し、プリズムの外側に反映し、プリズムを通して第 2 の光線となり、考えられないほど大きく曲がる。こうしてプリズムを通して標本を照明することが可能になる...

そのとき、標本に到達する特定のスペクトルの部分が、有機体のカラー・帯域に正確に一致していて共鳴して振動すると、特徴のあるスペクトルが、有機体から発せられる。

「現在の、普通の顕微鏡のように、平行したチューブで光線を進ませるやり方の代わりに、最終的に互いに交差させることで増大させた光が、かなり距離が離れた接眼レンズまで到達する

ユニバーサルチューブの光線は互いに平行して出るが、ライフの場合はその時、クロスさせる。

特製のクォーツ・プリズムが挿入され、再び平行して外へ引き出すために置かれる。

もう一つのプリズムが挿入されるが、それは光線を、交差させるためである...

真空か空気で満たされた普通の顕微鏡のチューブの場合のように

どんな媒体を通してでも、たとえば石英とか空気を通してでも、同じ映像が 30 ミリメートル、160、180 または 190 ミリメートルの大きな距離で投影される。つまり倍率が高くすることが可能になる。

「ライフのユニバーサル顕微鏡で結核、ガン、肉腫、連鎖球菌、腸チフス、ブドウ球菌、ハンセン病、口蹄疫病や、その他の病原体が、個々の有機体に特有の確実に死に至らしめる周波数の光線によって広範囲にわたって照射されるとき、動かなくなるのが見られるだろう。

これには、カメラの付属品と映画カメラは装置に組み入れてないが、『今まで通り』多くの、顕微鏡写真と、数百フィートの映画が同様に撮影することができ、有機体の完璧な生命サイクルの多数の証拠を得ることが出来る。

そして、常に、同じ有機体は、同じ色で屈折することが、強調されなければならない。

ライフのユニバーサル顕微鏡でモノクロの光線の照明で染められるとき、培養基での成長状態に関係なくバチルス属 *ryphosus* のウイルスは、常にターコイズブルーである。

常に大腸菌のバチルス属はマホガニー色である、常にハンセン菌はルビーシェイドの色である、フィルタを通る型の結核菌、またはウイルスは常にエメラルドグリーンである。そして、ガンのウイルスは常に紫がかった赤とその他の色である。

「1953 年著作権で保護されたライフの特許要旨の説明では、以下の通りにユニバーサル顕微鏡の独特のデザインを説明している：

「主な特許提出理由は、病気とウイルスの関係は本当の形態でこれまで観察されてこなかった。標準的な最高の研究用顕微鏡がそれを示すことができなかつたからである。

まず最初に、十分な倍率が欠けていたこと、2 番目にこれらが微細な粒子のためである。

そしてまた、標本を酸またはアニリン染料染色剤を使う既知の方法、またはこうした技術で着色するために、生きた状態を観察することが不可能であったことにある。

この目的のために、代りの染色剤が見つげ出された。

観察中のウイルスは、その粒子または微生物の化学構成要素に一致する光の周波数で染色された。

「光の周波数を、モノクロの光を可變的に使用することで変化させる。

つまり、粒子の化学構成要素に一致するように調整する。

ウイルスまたは微生物の粒子は、特許を受けたライフの顕微鏡のランプから中心に向けてあてるビームの使用法で可視化され、観察される、それはライフのユニバーサル顕微鏡の一連の回転クォーツ・プリズムを通して、標本を含むスライドと、接眼部分に照明を与える

クォーツ・プリズムの光線の回転は光の周波数の増加または減少をコントロールする。

照明装置の完璧なコントロール力で、観察中のウイルスの化学構成要素に一致する周波数が、創られる。そのことで正確な化学屈折率でウイルスを観察することが可能である。

ユニバーサル顕微鏡の照明のコントロール力は、病原性微生物のウイルスを視覚化する上で大変重要な要素である。

これは、従来照明源によっては出来るはずがない。

この点で、他の研究グループが、なぜガン・ウイルスを見つけ出すのに失敗したか指摘できる。周波数装置は、1920年の初期のバージョンから1934-38年の臨床バージョンへと、性能が着実に向上していった。

1950年代になると、Rifeが原理的に主張した点は、性能として再び適切に向上した。

「これらは単純で絶対確実に、稼働する。

「サンディエゴの1928年5月6日のイブニングトリビューンは、周波数装置が何を行うか述べた：

「この光線が病気の原因となる微生物有機体を無気力にすることはまだ知られていない。各々の微生物有機体が異なる波長を要求するので、人の中のこれらの小さな殺害者に起こることは、近くで叩いたフォークから発した音波によって音叉が振動する現象と同じだろう。

「ライフはこの音波のように、微生物有機体自体のもつ周波数に波動を設定して照射すれば、人体にあるいろいろな病気をその周波数の波動が破壊すると考えた。

この説明によれば、ライフ光線は多分、ちょうど振動で割れるガラスの花瓶のように人体の病気の原因を崩壊させるか、部分的に崩壊させる原因となることを意味する、いくつかの証拠は、これが正確に起きていることを示している...

「微生物に光線を照射するとき、これらが非常に不思議にふるまうことが見られる；ある種の性質のものは、文字通り崩壊する、そして、他のものはのたうち苦しみ、最終的に収縮して、一緒に死んだようになって不動の一群となる。

「目標へ周波数を正確に合わせて照射すると、致命的な反応があると、ライフはコメント

した。いくつかの微生物有機体では、数秒で起こる。

..研究所の報告は「微生物有機体が攻撃されたあと これらは、死んでいることを示していた。

これらは無気力にされ、もはや生きていない。これらのもつ毒性は伝達されない、そして、実験動物の組織体に入れても、病気を生み出さない。

「ライフは報告した — 多くの微生物有機体の致命的な振動率は見つけ出され、記録された。そして、細菌の記録された周波数に光線を正確に合わせ、その微生物有機体に照射すると有機体は死んだと断言できる。

2年間のアルコール依存症のリハビリテーション施設(---刑務所のような施設---)

を含む4年間の空白の後、1950年に彼はついにそこから出て、ライフは彼の偉大な研究に戻った。

1953年に、彼のガン研究の報告として、「ガンそして、他のウイルス、バクテリア、菌類の成功した治療法の開発の歴史」が発表された、

3年後、1956年に、彼は周波数装置の安全性、更にその先進的な発展を記載した手紙を書いた：

「私は、1921年から『周波数装置』を稼働させた

私は、エレクトロニクスの進歩による機能とスタイルの進歩を見守ってきた。

「私がこの研究で多くの年月、この装置を使ったが、これまで患者が怪我または悪影響で苦しんだことはない。

私は、この機能が信頼でき、効果は効率的であるのを見つけ出した。

最近のモデルは絶対に確実で、稼働も単純である。

第 16 章

1946 年-1986 年の間:

ライフの理論は特許庁に受理されていた、しかしライフは、1940 年代中頃からその後も、決して出版されないし、科学的なレポートでも言及されなかった。

彼が何を行ったか、たまたま知った人々だけが、知るだけだった。

さらに非常に後で、自身の研究でライフと同じことを発見し、確認しようとした者が、ライフは、すでに他の者が発見者として登録されないよう防止していることを個人的に知った。

しばしば科学者は「真実の勇敢な探求者」と言われている。しかし、彼ら自身の経歴と信憑性が境界線上にあるときは、仕事上、しばしば用心深い沈黙を示す。

ライフは、1971 年の彼の死まで癌研究の分野で正に、隠れた沈黙の人であった。

それでも、彼の周波数装置は、2、3 の勇敢な医者によってひそかに使われ続けてきた。

そして、英雄的な医者は、その奇跡的な効果について時折意見を述べた。

とはいっても、1940 年代初期に、絶対必要な医者同士の治療経験の相互参照が止められたので、その影響で 1930 年代後期からのライフのガンの治療の発展は、終わった。

周波数装置は、ライフによって改良され、そして、1950 年代の彼の新しい仲間によって、完成した。

しかし、熱心な最高の医者（科学者）と、病理学者の委員会による分析的で、オープンなライフ光線の試験は決してされなかった。

社会の環境衛生保護を錦の御旗にして、偽装する政治的な権益は、客観的評価を阻止した。

それよりも、ライフの仕事の確認は、別の方向から、つまりバクテリアの研究で、フィルタを通す形態が、段階的に確認されたことから来た。

すでに後の世代には、ライフの顕微鏡または周波数装置はなかった。

しかし、後の世代の彼らにも癌ウイルスが存在する、型を変えることができる、そして、破壊されることができるということを証明した。

そのアプローチは、ワクチンと食事療法であった。

それは、ライフの簡単な 3 分間の周波数治療より、非常に費用のかかるもので、もっと難しい治療法になった。

しかし、「承認された手術による治療」が失敗し、代わりに、本物の治療法として置かれたガンの放射線と化学療法も、結局はゴールは同じことであった。

ガン微生物の発見で同時代の重要な人は、ヴァージニア Wuerthele-Caspe 博士であった。

（彼女の結婚前の名前は Wuerthe で彼女の最初の夫の姓が Caspe であった）

彼女の再婚はリヴィングストン博士で、彼女は彼女の名前をヴァージニア Wuerthele-Caspe-リヴィングストン博士に変えた。

彼女の3回目の結婚の後、彼女はヴァージニア・リヴィングストン-ホイーラー博士として知られた。

混乱を防止するために、たとえ時に、前の名前で引用されることがあったとしても、ここではヴァージニア・リヴィングストン-ホイーラー博士の名前を使う。

リヴィングストン-ホイーラー博士は1947年夏から続けて、その年の終わりまでライフの研究所にいたが、その後イーストコーストで暮らし、腫瘍を研究することを開始し、全部に同じ有機体を見つけ出した。

1948年に、リヴィングストン-ホイーラー博士はエリノア・アレキサンダー-ジャクソン博士の結節バシラスが、多くの形態に変化していくことを実証した研究に出くわした。

(これはケンダルと、**Rosenow** とライフが1930年代初期に示したのと同じ発見だったが、これは忘れられてしまった。) リヴィングストン-ホイーラー博士は細菌が「ひどく多様な形態になる可能性がある」ことに魅了された。そして、彼女はガン有機体でも同じ変化があるとして探求を始めた。

リヴィングストン-ホイーラー博士は、顕微鏡の専門家でもあるロイ M アレン博士と一緒に、1948年5月のシンポジウムで、彼女の研究結果を発表した。

1948年8月に、ニューヨーク・マイクロスコピカルソサイティ、ブリテンは、論文を出版した。

そこには以下の文が含まれていた：

「結論として、多様な腫瘍に、確かにミコバクテリウムが共通して観察されると言えるでしょう。それは腫瘍細胞の中にも患者の血液の中と同じくらいあり、病気は、再現することが出来る。」

1948年の終わりに、ヴァージニア・リヴィングストン-ホイーラー博士とエリノア・アレキサンダー-ジャクソン博士は、証拠を得ることが出来た。

ラウス癌ウイルスは、実際には多形態性の菌であった。

1949年に、ニューヨークでこの2人の医者が、ガンに関連するウイルスの発表をし、それを聞いた後、ジェームズ **Couche** 博士は、カナダのモントリオールに報告するために旅立ちグラナー博士を訪ねた。その後1949年7月31日サンディエゴ・ユニオンで、カナダのグラナー博士は最新の発見と意見を報告した：

「グラナーは、**Couche** 博士にライフ博士の大きな顕微鏡でウイルスの存在が確認できたことを話した。彼は納得した。

Couche 博士は、サンディエゴのポイント・ローマ研究所で彼とライフと行った研究がカナダのマギル大学でさらに研究が続けられ、サンディエゴで発見されたウイルスで腫瘍状の生長物が生み出されることが明確に確認されたと言った。

「グラナーは、50年の間、悪性の生長物を研究していたもう一人のガンの専門医、ウィンザーの **J. E. Hett** 博士と研究していたことを明らかにした。そして **Hett** 博士は、ウイルスから発展させた血清で注目に値する治療効果を得るのに成功した。

「昨日サンディエゴで、ライフ博士は、ニューヨークで報告された癌ウイルスと Hett 博士によって発展したウイルスが、ライフがサンディエゴで分離させたのと同じウイルスである可能性を認めた。

ライフ博士は言った、『私は、成長の1段階で患者の血液にウイルス有機体が見られるのを発見した。

「Couche 博士は言った...

ガンが血液の病気ならば、血流で組織体の全ての部分に運ばれる。

そして、手術はほとんど使えない...

ウイルスがこの恐ろしい病気の原因で、関係する主たる実体とわかるならばサンディエゴの研究者、ライフ博士はきっと患者のためにたいへんな榮譽を受ける。

1949年6月リビングストンホイラー博士はニュージャージー州ニューアークのラトガーズ-長老教会派の会員研究所の責任者になった。

1950年に、ガン学会のアイリーン・コーリー・ディラー博士のフィラデルフィアでの研究は、動物のがん腫瘍から真菌エージェントを取り出し分離した。

ライフはガンの被害者の血液からカナダのグラナー博士の真菌を得て、彼の BX に変えて、その過程を逆にして、彼の BX をグラナーの真菌に変化させた。

このことを知らずに、ディラーは、独立して、ライフとグラナーの研究の基本的な前提を確認していた。

1950年に、ディラー博士は、彼女の発見を発表するためにニューヨークでシンポジウムを開こうとした。

しかしスローン-ケッタリング記念癌センターの強力な責任者の、コーネリアス P.ローズ博士によって潰された。

ローズは、ガンが癌細胞を殺すことで治療可能なことを証明しようとしていた。

何らかの微生物がガンの原因となると暗示し、全身を免疫しなければならないとすれば、ガン細胞に対して何千もの化学薬品療法を成長発展させてきた製薬産業の被害に言及しなくとも、ローズの権威と名声と、ガンの治療方針を直接威嚇していた。

1955年までは、これらの大部分の新しい制癌剤は、スローン-ケッタリング記念がん研究所でテストされていた。

同じ年に、プリンストン、N. J の RCA 研究室のジェームス・ヒルマン博士が電子顕微鏡を使うことによって、Livingston-Wheeler リビングストンホイラー博士のガン細菌の「多形態性」の確証がえられた

彼は、「濾過される」小さな型のガン細菌を見た。

1950年12月（アメリカン医科学ジャーナル）にリビングストン-ホイラー博士の記事が発表され、人間と動物から得られたガン培養組織がどんな具合に実験動物で類似した病気を生み出したかを述べた。

その時、新たに病気を生み出す培養組織が、特定された。

これらは、一致していた。

コッホの原則として知られる細菌学の基本的原則に、当てはまっていた。

ガンは、バクテリアに帰着する可能性がある！

このことはリバーとウイルス学者の大勢の軍団によって無視され、この主張が彼らに具合が悪いことが示していた。

残念なことに、Livingston-Wheeler 博士の発見はほとんどこの治療方針に影響を与えなかった。

ガンの貴族達にはそれ自身が決定した治療プログラムがあった。そして、数 100 万人が苦しみぬく中、アメリカはそのまま 35 年間過ぎていった。

この後、ディナー博士は、リヴィングストン-ホイーラー博士の説を確かめた。

細菌は、標準細胞を異常な細胞に変えた。

1953 年に、ディナー博士はついに「悪性腫瘍に見つけ出される真菌様の型式の研究」という題で真菌の発見について発表した。1953 年、博士リヴィングストン-ホイーラーと彼女のチームはローマでの 6 回目の微生物学インターナショナル会議で、彼らの発見を発表した。

彼女のグループにジョージ・クラーク博士がいた

その人はグラヴァー・ウイルスについてワシントン D.C.で 8 年間研究したが、彼の研究結果を発表することは許されなかった。

モンリオールのグラナー博士は、グラヴァー・ウイルスを評価するために 1930 年代後期にワシントンへ旅立って、BX であるとの結論を出した

ワシントンの厚生省の官僚には、結局、この研究を無視し隠そうとする古い人達があった。

今日まで彼らの後継者が他の多形態微生物で、この研究を継続している。

1953 年 9 月 10 日のワシントン・ポストは、グループの調査結果を報告した：

「9 月 9 日ローマ

アメリカの研究グループは今日感染症として（結核または梅毒のようなものとして）ガンを説明した。小さな有機体が原因であるとした。

メンバーは、彼らが病気に感染している動物の組織体から抗血清を得て、抗血清が発癌性の有機体を弱め、時々滅ぼすと報告した。

ヴァージニア・リヴィングストン-ホイーラー博士、エリノア・アレキサンダー・ジャクソン、W・J・スミスと N.J ニュージャージー州ニューアーク、の長老派教会の病院の G. A クラーク、彼らはヨーロッパハツカネズミの白子とモルモットでガンの誘発の研究をし、『単独に分離された腫瘍からは、ガンが出来ないという概念を導いた。』

それよりも、彼らは人間の有機体の血流が原因となる全身性の病気として描いた。レポートはたいへん注目を受けたがニューヨーク医療学校はすぐに発表を無視した」。

1953 年のワシントン・ポストは、おとなしく正統的な見解を受け入れ、医学分野において現代で最も興味深い話を無視し続けた。（ワシントン・ポストは後でウォーターゲートを掘り出し、最終的に暴き出し、20 世紀で最高のジャーナリストの 1 つとなったというのに）

これは何度も繰り返されたパターンであった。

アメリカのガン・治療プログラムを支配しているかれらは、公的なアメリカ人がガンについて新聞などで読むことができる記事について、完全に検閲していた。

リヴィングストン・ホイラー博士のグループがアメリカに戻ったとき、スローン・ケッタリング記念癌センターのローズ博士がラトガーズ長老派教会員病院研究所への資金供給を停止したことを知った。研究所は、終わった。

リヴィングストン・ホイラー博士は失業した。そして、どこも、彼女を採用する研究組織はイーストコーストの中になかった。彼女は隠された男一ライフのようになった。

ガンの原因となった微生物とガンを阻止するのに有望なワクチンは、権威ある医学界には邪魔であった。

彼らが生きた 1987 年は、手術、放射線療法と化学療法が「承認された」研究領域であった。

そこで、ヴァージニア・リヴィングストン・ホイラー博士はロサンゼルスに移動し、ロサンゼルス地域病院で働いた。彼女は、南カリフォルニア大学医科大学に職を求めた。

この後、この物語の糸はもつれ始め、しかも、小さく固まる。

彼女の父、Wuerthele 博士は、退職し、サンディエゴへ引っ越した。

1955 年に、彼の娘は、父に続きサンディエゴへ引っ越した。

まもなく、彼女の夫 Caspe 博士は、死んだ。

リヴィングストン・ホイール博士は、ほぼ 50 歳であった。未亡人になった彼女には、サポートする娘がいた。ホイール博士は、サンディエゴ・クリニックで仕事を得た。

未亡人になっていた彼女は 1 年以内に、リヴィングストン博士に会って、1957 年に彼と結婚した。

しかし 1958 年に、彼女は国際的なガン・シーンに再び現れた。

1958 年 7 月 14 日に、ガンと白血病の微生物学のための最初の国際会議は、アントワープで開かれた。

リヴィングストン・ホイール博士は副会長で、最初のスピーカーの名誉を与えられた。

彼女は、たとえアメリカで無視されたとしても、多形態性癌生因説がヨーロッパでは広く受け入れられていることを発見した。

決定的な免疫学的治療を見つけ出す努力は、ヨーロッパでつづけられていた。

ヴァージニアリヴィングストン・ホイール博士が書いた 1983 年の本「ガンの征服」によれば：

「これらの優秀な科学者は全て、1958 年の原点に戻ってガンの生物学的な免疫学的治療の重大な研究を長い間やり続けてきた。

今まで通りの、米国の正統的な治療法を乗り越えるための研究を始めた。

米国癌学会、米国医師会、そして FDR 食品医薬品局、の抑圧行為のため、我々米国の研究者には、ヨーロッパの研究の長所がなかった。

「絶対的に強力な個人が、使い方を決定する豊かな研究費に支えられて、彼らは

研究の独裁者になることができ、彼らの利益にならず、彼らの名門に対する威嚇を示すような全ての研究が抑えられる中、この研究も無視された。」

1959年に、ミラノのクララ Fonti 博士は、自身にガンの細菌の培養組織を接種した。

クララ Fonti 博士は、自分の体で腫瘍を成長させた。

そして外科的に除去した。

全ての研究所の培養組織で、または、動物で見られた真菌はヒトの血液から人間のガンの組織へ移ることが人間のテストで示された。

そして、1959-1960年に、リヴィングストン・ホイラー博士は、サンディエゴのロイヤル R. ライフの隣人になった。

彼女は国を横断し、何年間か続けて癌研究の「見えない隠れた人」に会っていた。

運命のいくつかの変な気まぐれは、ガンの治療に最初に、成功したクリニックが、あったサンディエゴ郊外の場所ラ・ホーヤに、彼女を連れていった。

1959年～60年リヴィングストン・ホイラー博士は、しばしばライフの新しい研究所を訪問した。

彼女はフィラデルフィアの癌研究学会でライフと、彼の新しい仲間のためにマウスを提供するよう差配した。

これは、ライフの、フィラデルフィアの国際癌研究基金との初期の関係が不成功だったことから見ると、奇妙な関係であった。

多形態性についてのライフの考えは、密接に、リヴィングストン・ホイラー博士が得たものと一致していた。

唯一の違いは、ライフが彼のライフ光線の下で BX が崩壊することを知っていたのに対してリヴィングストン・ホイラー博士は血清を改良発展させようとしたことであった。

かれらは別々の方法で進んだ。そしてガン医学界の権力側からの反対にもかかわらずリヴィングストン・ホイラー博士は、エリートの科学者の聴衆の前で論文を発表した。

そしてライフは、彼の仲間が FDA の嫌がらせと裁判所による審理によって侵略されるのを見守った。AMA 全米医学協会の表明は、1934年のガン・クリニックが「神話」であったとする方針をまだ継続していた。

1962年に、リヴィングストン・ホイラー博士は、心臓発作を起こし、1965年まで基本的に静かにしていた。

しかし、1965年になると、彼女は彼女の古くからの同僚のエリノア Alexander-Jackson 博士と、論文を共同執筆した。

1966年に、彼ら二人は「アリゾナで科学ライターのためのアメリカのガン・セミナー」に出席した。

しかし、背後の権力は、今まで通り、2人の女性が報告してきたことを喜ばなかった。

アレキサンダー・ジャクソン博士がコロンビア大学に戻ったとき、彼女は職場から解雇されていた。

1966年5月、ライフと彼の仲間はフィラデルフィアでの周波数装置と癌の研究学会に関心をもった。しかし、学会は、彼らから離れ去った。

ライフは、今まで通り、決して存在しなかった治療法にかかわる「隠れた人」であった。

1966年に、ペイトン・ラウスは1911年のウイルスの発見でノーベル賞を与えられた。

それはヴァージニア・リヴィングストン・ホイラー博士とエリノア・アレキサンダー・ジャクソン博士が、それが古典的なバクテリアの濾過される型式であることを証明した時から、18年もたっていた。

1960年代に、リヴィングストン・ホイラー博士は、年に一度、ワクチンを投与する方法で彼女自身のガン进行治疗することにとりかかった。

1967年に、アイリーン・ディラー博士とフローレンス・サイバート博士は、ニューヨーク科学学校の年代記に、あらゆる腫瘍からバクテリアを分離した記録を公表した。

1968年に、博士リヴィングストン・ホイラーと彼女の二番目の夫の・リヴィングストン博士は、ガン・クリニックをサンディエゴに開いた。そこは昔、南カリフォルニア大学特別研究委員会が、初期の周波数装置を使って最初のガン・クリニックを開き16人の患者の14人は70日間で治癒し、他の2人は90日間で治癒したところであった。

1968年から1983年まで、完全に、10,000人のがん患者は、新しいクリニックで治療された。リヴィングストン・ホイラー博士は、患者の80%の成功率があったと報告した。

1969年11月5~8日、ニューヨーク・アカデミーはリヴィングストン・ホイラー博士とエリノア・アレキサンダー・ジャクソン博士を歓迎した。

2人はサンディエゴのカリフォルニア大学に来て、フィラデルフィアの癌研究所からのアイリーン・ディラー博士とフロリダのバイン湾の復員軍人研究所のフローレンス・サイバート博士の両方に会った。

彼らの話題は、「悪性腫瘍に関係する微生物」でした

そして、診断ニュースは、3つの、別々の施設で癌が進行している患者の血液と、さまざまな人間と動物の腫瘍で「非常に多形態 pleomorphic である有機体を見つけ出した研究者のことを報告した。

1970年10月30日に、アカデミーは彼らのレポートを公表した。

それはライフ、ジョンソン、ケンダル、Rosenow とグラナーが書くのと、同じ視点のものであった。

それは1930年代からのこだまのように、ガンについて、確定的な事実を述べていた。

それは正統的なガン研究機関の見解に、挑戦的に疑問を呈していた：

「いろいろな種類の微生物が、観察され、動物と人間の腫瘍からウイルス、バクテリアと菌類を含めて分離された。

しかし、1種類ではあるが、非常に多形態 pleomorphic の微生物が、そこにある。

それは過去20年間、あらゆる、多様な人間と、動物の悪性腫瘍から、一貫して入手可能で、我々によって絶えず観察され、分離されてきたものである。

一つはその注目に値する多形態性と、微生物からの十分な刺激によって起こる、有機体の病変のミステリーが機密扱いではなくなったことである。

そのいろいろな段階は、ウイルス、球状細菌、**diphtheroids**、細菌と菌類としてあるだろう。」

1971年に、ロイヤル R. ライフは、死んだ。

1971年12月23日に、「ガンとの戦い」のための16億ドルの法案に大統領リチャード・ニクソンはサインした。

米国癌学会の貪欲な業者、AMA 全米医学協会、いろいろな恵まれた学会と大学の研究者、国立癌研究所の厚生官僚と政治家の誰もが豪華な食事の饗宴に招かれるために一列に並んだ：

1985年までに、国立癌研究所は毎年12億ドル使っていた。...

そして、そこで発表された研究結果はほとんど何も効果がなかった。

1972年に、リヴィングストン・ホイール博士は、彼女の最初の本（ガンの新しい突破口）を出版した；

彼女は1948年のニューヨーク顕微鏡学会での、プレゼンテーションで、「ガンによって毎年170,000人の人が死んでいる」と言った。

1972年には、死者数はもっと悪く「毎年350,000の死亡」であった：

1986年には、毎年460,000人が不必要に死んでいった。

そして、エイズの急速な広がりの中で、リヴィングストン・ホイラー博士とライフの仲間はこの病気は治療できると主張した。

1986年後半に米国科学アカデミーは、「国民健康危機」を避けるために、1年につき20億ドルを求めた。

1990年代に、エイズによって1年で60,000人の死亡が、予測された。

リヴィングストン・ホイラー博士は1972年の本で、お金の不正使用のため国立癌研究所を非難した。

公的な医療制度の監督責任の放棄と腐敗であるとした。

その計画は特別利益のために癌患者を「手術・放射線療法・化学療法」のためのモルモットとして人々を利用することを命じている。

彼女の過去に書いた公然たる非難は、1972年から1986年まで将来の悪化する「ガン戦争」を正しく書いている：

「13年で、NCIは5億ドルを使って、ガンとの戦いで、患者に使用可能かどうか見つけるため170,000種の毒薬を検査した。

2、3のまれな種類のガン以外は、結果は0であった。

100,000人以上のがん患者は、彼らの十分な知識と告知に基づく同意もなく、モルモットとして使用された。」

1974年に、リダ Mattman は、「細胞壁が不足している形態」を発表し、決定的に多形態のバクテリアの存在を示し、ケンダルによって確立された「濾過の学校」の初期の研究に関

連づけた。そして、今まで隠されてきたロイヤル R.ライフの承認の暗示は、正統的な科学文献でついに出現した。

1974年10月「電気と生体系の相互作用」を議論するために、ニューヨーク科学アカデミーに集まった世界の、医者と科学者の中にいた、1人の医者は、1994年までに、「電気療法」が化学療法と同じくらい非常に使われると予測した。

彼は、現在の医学生が電気工学を教えられていないという事実を嘆いた。(その学生達は次の40年間医者として生きてゆくというのに)

30年前には、「電子治療法」の著名なプロの中に、1人も、ライフの臨床結果の認識はなかった。

1975年、リヴィングストン博士は死に、リヴィングストン・ホイーラー博士は、再び未亡人になった。

1976年に、2つの奇妙な事件が起こった。

そしてそれは全て人たちを招き寄せる大団円のようなようだった。

クリストファー・バードは、1940年代以来隠されてきたライフが最初に出現するための、記事を書いた。

1976年5月のニュー・エイジ・ジャーナルに「何が、ライフ顕微鏡に起きたか？」という記事が出た。

そして、その同じ年、ヴァージニア・リヴィングストン・ホイーラー博士は、オーエン・ホイーラー博士(サンディエゴの医学教育病院の創始者のうちの1人)と結婚した。

リヴィングストン・クリニックは、リヴィングストン・ホイーラー・クリニックになった。

ホイーラー博士は、青年の時の、レイモンド R.ライフを知っており、そして、ライフ研究所で彼の側にいたので、42年間のサークルが、ここで完了した。

1980年、2人のフランスの科学者ソリンソニアとモーリス Panisset は「新しい細菌学」を発表した。

細菌の多形態性は、この「新しい」細菌学の鍵であった。

1984年にヴァージニア・リヴィングストン・ホイール博士は、「ガンの征服」を発表した

彼女は、彼女の読者にチキンまたは卵を食べないように警告した：

「長年の研究の後、私はほぼ 100 パーセント、チキンがガンの原因となる可能性があると考えている

アメリカの食卓の上に上る大部分の鶏は、人間には、転換不可能と主張する病原性の微生物がある。

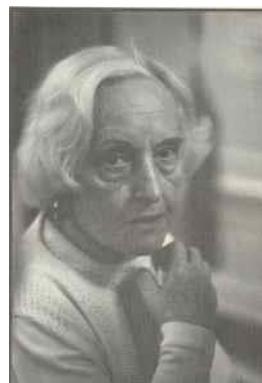
「彼女は、制癌血清を牛と鶏に予防接種をすることを要求した。

ライフは、鶏と肉で BX を殺すためにライフ光線を使うことを長く心に描いた。

ライフも、特にその BX ウイルス(ガン)が豚とキノコで育つと警告した。

車輪は、回り、回り続けた。

それを認識した時、病気を生じさせる食糧の微生物の活力を奪うことができる。
まったく、病院血液銀行の血は、同じように浄化される必要があるかもしれない。
ライフの発見の隠蔽はその真の悲劇の規模を見ることを可能にする。
リビングストーン・ホイール博士も、あらゆる子供の出生のすぐ後に、ガンの免疫強化を要求した。(血清は、尿サンプルから得ることができる)
彼女は、誰もが気にするならば、至る所に見られるガン異常発生の兆候を知っていた。
彼女も、ガンは10年で永久に無くなる可能性があるとは断言した。
ライフは、それを行う方法を知っていた...
毎年ガンのために600億ドルが使われる国なので、マサチューセッツのパークシャーの1つの小さい病院が「最新技術の」放射線装置のための200万ドルも使うことができる。
それは全て、ガン「専門家」の経済を満足させるために存在するのは明白である。そして、彼らの恐ろしい不正犯罪を隠蔽し守りぬくつもりである。
Livingston-Wheeler 博士の本は、ラ・ホーヤで1983年7月23日に完成した。
ラ・ホーヤのスクリップス牧場の49歳の若さの、男性はとてもひどいガンで診療台の上に着くまで、医者が彼の胃にさわったとき、彼らが彼の背骨にほとんどさわることができた。
2、3ヶ月の時間で、彼は彼の車を運転して、病気の牛と徹夜していた。
ガンは治る可能性がある。
ガンは完治することが出来ていたのだ。



Livingston-Wheeler 博士

第 17 章

被害者

おそらく、被害者である癌患者について書くことは、絶対必要なはずだ。

統計値は、個々の人間が苦しんだ実話を告げない

ロイ、ライフの発見は、抑圧され、AMA 全米医学協会がそのポケット版を目に触れないように守っており、製薬会社が利益のために「化学療法」を推進し、米国癌学会の大きな金による広報は偽物で、FDA がガン独占企業によって所有されているのでメディアは、ただ沈黙、沈黙、沈黙であった。

2つの物語を報告する。

これらの話は、数 100 万人と数 100 万を掛け算したものになる。

マサチューセッツドーチェスターのドロシー・リンチはガンで死んだ。

彼女が、代替療法を学ぶには困難であった。

しかし、ガンの権威は、彼女に全て従来の方法で押し進めた。

ドロシーは、ガン病棟を通る長く、恐ろしい道のりに関する本を書いた。

彼女の夫ユージン・リチャーズは彼女の写真をとり、更には同じ地獄の進路にいる他の者達の試練の写真をとった。

怒りで炸裂するほどに、全ての命あるものが、告発すべき人として指し示す明確な肖像画は、米国癌学会のボスであるフィッシュバイン博士、トーマス・リバー博士、ローズ博士である。

このことを知れば、すべての臆病者が、立ちあがったかもしれないし、殺されなかったし、役に立たなくもされなかった。

ガンとアメリカの大虐殺の証拠について書かれた本は他にもある。

「惑星で起きた一大スキャンダルと他の話 The Great Planet Swap and Other Stories」である。

ウィスコンシン州のラクロスに住む 9 歳のガンの男の子マーク・ジョンソンによって書かれた、彼がついに家に帰るまでの、病院で経験した話が含まれている。

マークだけは、生きては家に帰れなかった。

彼は、白血病と化学療法で 4 年間「戦った」後、死んだ。

その物語の I の 5 章「toobs」の注射と放射線治療の物語は、おそらくアンネ・フランクの日記のアメリカ版である。

これらの死は、起こる必要はなかった。

ドロシーと幼いマークには、通常の、幸せな人生に案内されることが出来た。

1953 年に、海軍士官はロイ・ライフを知っていたが、そのとき青年であった士官はサンディエゴで成長し、前に見知っていた、ライフに手紙を書いた。

海軍士官は、どんな具合に彼の軍人生活で部下の医者と細菌学者の部隊に命じたか説明した。

この手紙は、ライフ悲劇を伝えるのにぴったりの墓碑銘である：

「私は、あなたの研究の話をあなた自身の口から聞いて知った時、非常に特権的に思えた。

あなたは、私に 2000 年の科学の重みを垣間見させてくれた。

しかし、しばしば、あなたが人々に与えようとしたものを理解し、認めるのに困難で、奮闘しなければならないことを理解するとき、少し悲しいのです。そして、あなただけが答えられる多くの問題を見るとき、さらに悲しくなります。

私が現在の電子顕微鏡で撮られた写真を見るとき、あなたの研究所で廊下に飾られていた、もっと多くのことを詳細に示す優れた写真を記憶しているために、私は笑ってしまいます。私が数年前、遺伝学と進化、または細菌学の分野についての『研究』レポートを読んだとき、『科学者』は答えを提供されていたのに、『科学者』は贈り物を拒否したことを知って私は笑わずにはいられなかった！

あなたの思いと意志とエネルギーの集中は、全ての同時代の人々全てを飛び越すほど、稀なものでした。

世界には、あなたの研究がとても必要です。

「おそらく、世界はいつか振り向いて、かつてあった最大の贈り物の 1 つを再発見します。

いつか、我々はライフ光線マシンに類似した器材を発展させるでしょう。

もしそんなことが起きる時は、我々の問題は解決されます。

人類には必要とする量よりも、多くの食物と、建築素材が存在するようになり、

初めて、戦争が起こる経済的理由は、存在なくなります。

その時、AMA 全米医学協会は病気と病原体の除去のためにそれを使用することを強制されます。

人は、より健全で、より幸せで、もっと長い人生を送ります。

「私の人生でその幸福な時代 **millenium** に到達したならば、私に、その不幸な記憶が思い出されるでしょう。

彼の名前は人間の幸せと永久に関係のある男として最もふさわしいものでしたが、忘れられたのです。

彼のライフワークは彼の時代の『認められた』権威ある科学者と、アメリカ医学協会との闘いで失われ、むしろ新しいアプローチを通して入手され、そして、再発見され、ライフ・光線は新しい名前が与えられるでしょう。

第 18 章

まとめと説明

10 年前に、私は今読んでいるこの本を書いた。(最初に出版してから 10 年後の 1997 年に加筆している)。

その時、ライフは医学界のボス、科学的なエリートと政府厚生省に半世紀の間、封印されてきたが、私は、さらに 10 年後までその封印が続くとは決して想像しなかった。

しかし、変化の風は吹いている。たとえ保守派の「ガンの専門家」のバリケードが恐るべきまま存在するとしても、他の医療への大きな運動は進行中である。

現在の従来のガン治療を疑わない、罪のない、基本的に洗脳されたがん患者が、市場で課される損害についての圧倒的証拠がある。

「非常に凶悪な、非常に頑固なシステムによって多くのお金が、得られている。

「化学者はデータを解釈する訓練を受けているので、化学療法が効能よりも非常に多くの危害があることの明確な証拠を医者が無視できることが理解できない。」

これはアラン C. Ivixon 博士、過去のアメリカ化学学会の会長、ラルフ・モス著「化学療法への疑問」からの引用である。

ライフの素晴らしい、ユニークな顕微鏡と、彼の創始した「エネルギー療法」の発見または「波動療法」または「共鳴療法」(全て現代の概念)は 21 世紀の非常に異なるタイプの医療として、考えられている。

私は、ライフは結局確実に医学の歴史で彼が受けるのが当然な位置に置かれ、「ベルリンの壁」のように今の正統的なガン治療の流れを崩壊させると確信している。

それが起こるまでに、私は保守的な科学者と(医者)の中にある 2、3 の誤解を解いておくのは重要であると思っている。

官僚によるライフの認可を拒否する通告は、たいへんな影響力がある。

しかし時代の流れの中で、いつまでも真実を抹殺することはできない。

そして、最初に発明した男として彼の影響は数世紀もの間、まさに繰り返し注目されるであろう。ポール・ブラントン(Paul Brunton)

ライフは彼の顕微鏡で何を見たのか。

すべてのガンの原因とまではいかないとしても原因の 1 つが細菌であると特定した。

ガン細菌のことを覚えておいてほしい。

明日の医学のため、そのたいへんな成果と意味ある結果を理解することはとっても重要である。

細菌は、どんな条件にも変化可能である。

我々は、以前と同じように、ライフの BX が何であったか、知らない。

ウイルスであろうか？

「小型の」バクテリアなのか？

いくつもの型に移行し変化するものとは何なのか？

1990年代の科学者は、ウイルスが依然として生きているものかどうか確信がもてない。

これらには、現在「通常の」ウイルスと同様にウイロイド（ウイロイド (Viroid) は塩基数が 200～400 程度と短い環状の一本鎖 RNA のみで構成され、維管束植物に対して感染性を持つもの。分子内で塩基対を形成し、多くは生体内で棒状の構造をとると考えられる。）と P-ウイルスがある。

その存在を、馬鹿にしないでほしい。

あなたがライフを即座に否定する者に遭遇するならば、ガン療法における現代の科学が無能であることを逆に聞き返してほしい。

それは重要な問題である。

他のすべてのことは、ペテンである。

全ての物それ自身の周波数でおきる共鳴現象は、地球上のすべての物が持つ特性である。なぜライフのガンの治療法が可能であるかということ、ウイルスと、「細菌大の細菌がただ小さくなったもの」、またはそれらの間で変化する何かが癌の原因であると理解したからである！

細菌は単細胞有機体である。そして、その多くは恐ろしい病気の原因となる。

抗生物質は、細菌の細胞壁を突破することによって、細菌を攻撃する。

しかし、多くの細菌は、突然変異して、耐性菌になる。

医者は抗生物質の過剰投与を濫用し、そのことで古くからある細菌が原因の病気が、新しいものすごく恐ろしい病気となり、人を絶え間なく威嚇する危険な場所へ、世界の住民を導いている。正直な医者は、これを認めている！

その大きさは：

「…典型的細菌の測定では 1 インチの 1/25,000、…

…大きなウイルスでは…その大きさは 1/4 である。…

一つのウイルスは、.01 から直径.3 ミクロンまであり、小さなものは直径わずか 100 万分の 2 インチである。1991 年にピーター Itadetsky の書いた、「見えない侵入者」、によればウイルスは、タンパク質外殻によって囲まれた多量の DNA またはリボゾームリボ核酸である。公式科学によれば、細菌はウイルスに、またはその逆に変化することはできない。

公式科学によれば、そうだろう。

しかし、それは決定的な結論ではない。

ライフが見つけたガン細菌は、ガンの原因となっており、マウスで、そして人間で、ライフの言う 4 種の BX と、真菌、そして、大きなまとまった球状型式のガン細菌で、これを痛みなしに滅ぼして、ライフは治療した。

(彼は、証明するために、コッホの歴史的に有名な仮定を使った！)

ライフの「本格的な」ガン治療の研究を見て見ぬふりをし、拒絶することは、この世紀のたいへんな犯罪の一つである。

「同時代の研究は主に金銭的意味だけに真剣になっている」

「検死で何が見えるか What autopsies show」(アン・G・フェットナー、科学の Ytruses、1990、117 ページ) より :

「死の 1 週間前に大量の抗生物質で治療された患者を私は検死し、そして研究した、…ここでは抗生物質は、ガン細菌を殺すのに失敗していた。

私は、大量の放射線をあてられ火傷した組織に細菌を見た...私は、化学療法で処置されたガン組織に育つ細菌を見た。癌細胞は破壊された、しかし、...細菌は残った！

ガン細菌は減らせなかった :

「手術、放射線療法、抗生物質、化学療法...」(アラン・カントウェル(Alan Cantwell)、Jr、M. D.、ガン細菌、1990、115 ページより

何をライフは行ったのか :

「ロイヤルライフは

...彼が設計・構築した光学顕微鏡でガンを調べた。

...彼が、その時設計した確実な周波数に調整可能な電気装置は、彼の顕微鏡で結果を観察しているのだから明らかにウイルスを崩壊させている。

ハーヴァードで訓練を受けた病理学者ピーター・マッコーマー博士、そして、前の実験的病理学の副主任でワシントン DC にある W・リード軍病理学研究所の医者タウンゼンド・レバー (1994 年 10 月) によって、弾圧は継続された :

1960 年代中頃には、公式科学でも、ライフの M.O.R 周波数治療のアプローチと、スーパー顕微鏡との、共同作業で、それを破壊できたことが「何を意味するか」認められていた。

しかし、それでも FDA、国立癌研究所、AMA、「メジャー」なガン病院と研究大学の正統的な治療法の推進者、ニューイングランド医学ジャーナルや、メディアの全権力とアメリカ合衆国議会はもう 30 年以上、ライフの発見を絶望的ながん患者に隠し続けている。

このことはこれらの団体と当局にとって、後世まで残る不名誉な事実である。

1960 年代中頃の本の中にある細菌についての以下の説明を今のものと比較してほしい。

(「細菌の世界」、アラン・デロネーの編集、ダブルデイ出版社.1965 年、43 ページ)

30 年以前にライフが行った結果は優れたもので、ガンの病気が直っている :

病巣には、実際 100 万分の 1 ミリメートルと測定される『小型の』(非常に小さな dimensions) と呼んだ粒状組織が現れるようだ...

この小ささのため、むしろとても弱く、非常に特別な特性をもつようである。

これは、通常の細菌が通りぬけられない、フィルタの壁の目を通ることができる。

実験者が、培養組織に個体を加えると、通常の状態であるはずの細菌がフィルターで塞ぐことができない小さなものに変化し、分裂によって複製する性質のものに変化することができる。それらは全く異なるメカニズムで複製される。

個人的なノート :

ガンの治療法に対する支配力をもつ人々が、今日も単純で、時間のかからないガンの治療

法を普及させないことを理解するのに、何年も、私がかかった。

それは彼らの経済的な権益の問題ではなかった。

彼らは、新しいガンの治療法が許可される前に、専門家の分析と、集団による会議、論文提出、議論、研究認可と何年間にわたる臨床試験を課し、複雑な病気症候群への適用テストと装置の使用技術をすべて明らかにすることを課した。

たいへん、有利な立場の「専門家」が行っている、この「内部」のためだけに奉仕するゲームは、恐ろしい犯罪である。

ライフの治療法、フルダ・クラークのもの、ミルドレッド・ネルソンのもの、レネ Caisse のもの、ケリーのもの、グレゴリーのもの、オゾンまたはその他のたくさんの治療法に問題はない。

一方で、彼らは、医学的にも「始末に困る無用な物」を造るため何トンものお金が、山のように浪費している。

「それは建物のことですか」、その通りである！

そこでは何百万人ものがん患者のために、ガンの治療法を正直に科学的に試験しているのではないのか？

いいえ！

「ニューヨーク州の病院は、国の中でも、財政的にも最悪である。...

それなのに数年で、これらの同じ病院は建築ブームにわいた。

入院患者のために空に輝く宮殿を建設するために、彼らは何億ドルものコストがかかる巨大なプロジェクトを追いかけている。

「(Lucette Lagnado、ウォールストリート・ジャーナル、1996年11月22日、1ページ) 1939-1940年までに、「公式」科学は電子顕微鏡でウイルスを見るのを可能にした。

1949年に、ジョン・エンダーズは、研究所の組織培養でウイルスを培養する方法を発見し「ウイルスの時代」を開いた。

世界で研究の爆発は続いたがライフは数十年前からこれらを研究してきた！

こうした流れの中で、ガン細菌が作動できなくするライフのエネルギー療法によるアプローチは、1950年代に再び試みられた...

良いでしょう、この本は初版が1987年に出版されたので、第19章でもう一度この悲劇的な物語をとりあげてみよう。...

フルダ・クラーク博士

フルダ・R・クラーク博士は、カナダ・サスカチュワン・Rosthern、で1928年10月18日に生まれた。

彼女はカナダのサスカチュワン大学で生物学の研究を始めた、そこで、1950年、優秀な成績で学士号を与えられた。

サスカチュワン大学大学院から、クラーク博士は、修士号を与えられた。

マギル大学の2年の研究の後、クラーク博士は、1958年ミネソタ大学によって生理学の博士号を与えられた。

クラーク博士の研究は、生物物理学と細胞生理学にずっと集中していた。

クラーク博士は、インディアナ大学での研究の傍ら、1960年代後期に、栄養的な相談に応じはじめた。

政府研究資金が停止されたとき、1974年に、彼女はプライベートにフルタイムで栄養的な相談を始めた。

彼女は、ナチュラルヘルス・クレイトン・カレッジで、自然療法の資格を得た。

クラーク博士は、人間の疾患、特にガンの全面的な相談に応じながら、独立して研究し続けた。

彼女は、寄生虫、バクテリア、ウイルスと真菌の研究から重金属、溶媒と最近の放射能まで多くの研究に取り掛かった;

彼女は、人間の体の細胞がどんな具合にこれらの侵入者に反応するか観察した。

彼女は、我々の組織体からこれらの侵入者を除くために、多くの解決案を創り出した。

クラーク博士は、ハーブ、エッセンシャル・オイル、分子矯正医学と周波数療法の使用を研究した。

彼女は、日常的な環境要素の認識と同様に歯科衛生の重要性に集中した。

彼女の最大の発見は、**マイクロ波駆除装置----zapper**であった。

長い間、彼女はまた病原体を「消す」ために病原微生物を電気で殺し消去する方法として、周波数生成器を使用した。

1994年に、彼女の息子は、手で持てるサイズの、バッテリー方式の、精密な周波数生成器を作った。

目的は、腸の寄生虫類を殺すことだった。

しかし、彼女はその時、バッテリー方式の**マイクロ波駆除装置**が特別の周波数を設定しなくても、全ての病原体を殺すことに気がついた。

これは、たいへんな時間の節約であった

クラーク博士のもう一つの重要な発明品は、**Syncrometer シンクロメーター**である。

その音声振動回路は、聞きたい局の周波数にあわせるラジオ・チューナーと同じ様に、体の中に一致する響きを見つかる。

体の中の物質、器官、化学製品またはウイルスを走査することは可能か？**Syncrometer シンクロメーター**は、すべてのものに特徴的な周波数があり、振動数が設定できることに基づいている。

クラーク博士は**シンクロメーター-Syncrometer**を使って、研究に着手し、ガン、HIVと他の「不可解な」疾患の原因を調査した。

彼女のアプローチは、全く単純であった

Syncrometer シンクロメーターを使って、彼女は疾患の原因（例えば毒素、病原体）を捜し出し、各々の症例の、苦しみを（例えばガンのような）取り除いた。

クラーク博士は科学的発見をしたと考え、従来の独立した研究所の分析で彼女の重要な調査結果の確認を依頼した。

シンクロメーター-Syncrometerの性能は良く、研究所の分析能力以上のものを見つかるので、確認はしばしば難しかった。

クラーク博士は、7冊の本を書き、そのうち5冊はガンについてであった

それらの中で、クラーク博士はすべての読者に彼女の方法と結果と結論を伝えた。

後期に書いた本では、**ザッピングプレート**(プレート型**マイクロ波駆除装置**)とホメオグラフィ homeography のような彼女の最新の周波数技術に基づく装置を詳細に解説した

そのうえ、各々のガンの本は、他の本にはない、癌と戦う方法とガンという病気の全体的な見方が書かれていた。

クラーク博士は、自己の健康を維持する方法を伝えることで、世界中の無数の人に関係した。

その人たちは彼女に提供された知識で彼ら自身を救うことができた。

クラーク博士は政府と、専門家の敵からの厳しい襲撃に耐えた。

それでも、彼女は、健康と人類のために彼女の知識を提供し続けた。

我々は、**Clark** 博士の無私な献身と全に対する永続的な貢献に感謝している

クラーク博士は、チュラヴィスタ・カリフォルニアで2009年9月3日に他界した。



第 19 章

法廷は、ライフのガン治療法の弾圧に手を貸した

この本で (1) どのように、ロイライフがウイルスを化学薬品の色で「染色する」ことの代わりに生きている状態でウイルスを見ることができるスーパー顕微鏡を発明したか

(2) どのように、ロイ・ライフが、電氣的波動の周波数を使用して人間と動物で、各々のウイルスの独特の振動率に合わせて照射し、それらを破壊する周波数装置 (FI) を発明したか;

(3) どのように、医学界と、製薬企業と、ガンの研究の権威と政治的権威は、その発見といろいろな技術を隠蔽するために共謀したかを見てきた。

この本でまだ書いていなかったことは、1950 年に、ジョン・クレーンはライフのパートナーになり、その結果、顕微鏡と周波数装置の性能を向上させただけでなく、さらに、努力と協力を通して発展させ、しかも、ジョン・クレーンの新しいデザインによって再発明したことである。

このジョンクレーンに起こったことは、このライフの悲劇的な話についての、さらなる傍証を提供する。

それは読者への警告ともなる。

この事件は、権力は弱い者への虐待を阻止するようにアメリカの法律制度が、運用されると信じている人々に衝撃を与える。

それこそ米国法曹協会の基本とすべきと考えるならば、アメリカ議会、そして、メディアはジョン・クレーンの話のなかに、誤審がないかどうか、調査すべきだ。

1950 年に、ジョン・クレーンはロイ・ライフに会った。

どのようにライフが 1930 年代にガン进行治疗したか学んだ後、彼の療法が AMA 全米医学協会によって隠蔽されるのを見た。

クレーンは、全力でコミットすることに決めた。

彼は公的に認められたガンの治療法の中に電子的な技術とメカニカルな知識を持って来ようとした。

30 年代にライフと働いたカナダのグラナー博士は最初にライフ光線放射管の回路設計の 1 つをクレーンに提供した。

クレーンも、新しい周波数装置を造るのを手伝うためにヴェルヌ・トムソン (サンディエゴ警察の電子工学専門家) を雇った。

1953 年 4 月に、最初の著作権で保護された癌ウイルスについての論文が、発表された。

1953 年 12 月に、クレーンが論旨を展開し、主張する中でライフのガン治療法の説明が完了した。

それは 1954 年著作権で保護された。



ジョン・クレーン

1954年に、クレーンはライフの診断法と、治療的装置に関して国立癌研究所と他の政府機関と話し合いを始めた。

1954年に、ガン診断委員会と国立治療研究会議はライフの発見を、「評価試験をし」彼らは、治療効果が出ないと結論を出した。

しかし治療を実際におこない、実証しているライフ、グラナー、Couche または他の者と話し合う努力もしなかった。(Coucheはその時も癌患者を治療していた。)

装置の物理的な検査も、しなかった。

電子的な治癒は、出来ないものとして、官僚的に確定した。

(1972年、国立癌研究所の所長カール G.ペーカー医学博士は、1954年のこの表面的な評価を使って、クレーンとライフの研究を否定している。

そのとき、サンディエゴの連邦議会議員ボブ・ウィルソンは、この情報について質問した。政府と医学的権威が客観的な証拠についてのフェアで正当な評価をしなかったために、数百万人が継続して死んでいった。

1954年から1957年まで周波数装置の改良に取り組んでいる間、ゆっくりとクレーンはこの改良による治療成果を得ていた。

1つ1つの改良によって、完璧なガンの除去という目標に次第に近づいていった：

ライフは給料を出していたが、本質的には、2人の男は、まさに一緒に働いて、一緒に発見した。

1930年代のライフには部品を入手できる手段がなかったため、高電力の光線ランプを造ることは、不可能であった。

しかしクレーンは非常に小さな周波数装置で、行うことができると考えた。

そしてそれは治療の間、身体に付けるようにした。

これは、正確に効果が出るよう改善された。

1957年に、クレーンはオハイオ州デイトンのロバート・スタッフォード博士に会った。

スタッフォードは、マウスの臨床治療と、新しい検査に、周波数装置を使うことに関心があった。

1957年11月までには、スタッフォードは彼の管理で6カ月の試験をした。

彼の初期評価は、良い結果であった。

4人はガンだったが、1人は「注目に値する予想外の改善」が得られた。他3人は、末期の段階だったが、改善がみられた。

すべては死んだが、全てで1度は治癒が開始されたことが鮮明に得られた。

2人の検死が行われた。

成績は、彼らが他の原因で死んだことを示していた。

「癌細胞の驚くべき消失が、そこにあった

.また、スタッフォードが観察する中で、いろいろな病気の33人の患者が治療されたが、何

も有害な効果はでなかった。

1958年に、クレーンはたいへん画期的な改良をした

彼は1960年にもう一度改良をした。そしてウイルスに、数百倍も多くエネルギーが致死的に集中することを可能にした。

これらの方法は、これまで発表されていないがこれはクレーンの法的に保護された特許の心臓部分である。

1958年2月には（オハイオ州デイトンのスタッフォード博士はクレーンの発見を A.M.A. 全米医学協会のモンゴメリー地域医学会の一般医療部門の常務会で発表した。

8人の医者は深い感銘を受けた。

スタッフォードは、デイトンで最大の影響力のある先生として研究委員会に席を置くことになった。

数年後にアンチ・ライフの力がクレーンを押しつぶしていなかったならば、装置の評価が提供されていたデイトンで、多くの治療施設が完成していたかもしれない。

1958年前半ユタ州ソルトレークシティの医者は、周波数装置を使うことを始めた。

しかし、1958年5月に、ソルトレークの医学会議は、彼らが電子治療装置を使うのを止めるよう強制した。

がん患者のうちの1人は治療の継続の可能性はないと医者が話さなければならなかったとき、絶望してひどく嘆き悲しんだ。

後で同じ医者は、ソルトレークシティで関連する人に「家族にガンがいるならば、すぐに機械を買って、自分の家族に使うだろうと話した。

これは、どれほどこの装置が売れるかを示している。

この手紙の筆者は、結論を出した。

「あまりに多くの人々が、この医学業界への怒りに、堪えられないと言っている。

これは30年代後期カリフォルニアで、突然医師仲間が自分達の権威と収入が脅されるのを見たときに起きた、古い話の再現であった。

1958年においても、カリフォルニア環境衛生部の使用許可の告示の前に、審査があった。

周波数装置はパロアルト探査研究室、Kalbfeld 研究室、UCLA医学研究室とサンディエゴ試験的研究室に提供されて、テストされた。

すべては、安全に使用可能であると報告していた。

それでも、マルコム Mccrill 環境衛生博士が責任者である AMA 会議は、安全でないと宣言し、市場に出すのを禁止した。

こうした逆流にもかかわらず、今まで通り、クレーンは、共有していたライフの目標の方へ向かうことを継続した。

2月までには、デイトンのスタッフォード博士は、東部米国で周波数装置を製造し、配布すると言っていた。

彼は資格のある電気技師と連絡をとって、特許弁護士を雇った。

そして、ベンチャーキャピタルの検討を開始した。

彼の病院と、実験的なマウスで彼が見てきた結果から、明らかに、治療効果を確認していた

クレーンは、医者による装置の変更を阻止するために機械にライセンスを与えることに決めた。

しかし、ライセンスを与えたことで、彼はライフと Yale と Hoyland 博士とともに行った実験結果が得られなくなった。

クレーンはカリフォルニア特許弁護士とすでに特許出願の準備を完成させたので、彼はその装置を陰査するためにオハイオの特許弁護士を、スタッフォード博士に送った。

2 人の特許弁護士は、「すべては適切であること」に同意した。しかし、発明の「有用性」を示すことが出来るまで、彼らは、政府特許庁に提出することはできない。

このように、他の医者がそれぞれ異なる周波数で、実験し重要な価値ある証拠を十分提供出来るまで、彼らは後方で作業をしていた。

組織化された医療機関と科学的研究所との、研究に必要な連絡がとれなかったので、『ライフと 30 歳代のクレーンは、本当に難しいハンディキャップの下で「有用性」を確立することを強いられた。

1939 年の AMA 全米医学協会からの攻撃は言うまでもなく、カリフォルニア環境衛生部からの反対とソルトレークシティで使用禁止にされた経験から、彼らが特許権をとるには「行き詰まった」状況であることを示していた

それで、クレーンは彼の実験的な基盤をつくり、彼の発明の「有用性」を証明するために、周波数装置の貸し出しを始めた。

治癒された人々の数は、山になり始めた。

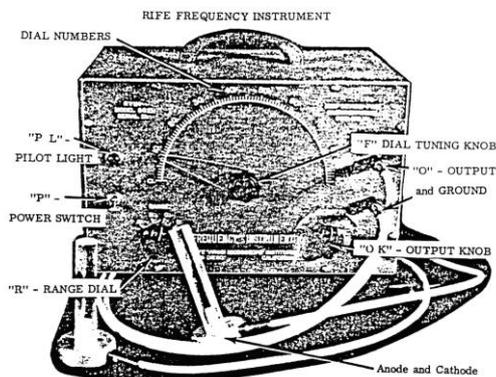
彼は、ゆっくりと証拠となるレポートと、証拠を集めた。

彼は、新しいオペレーターを訓練するための手順を精練させた。

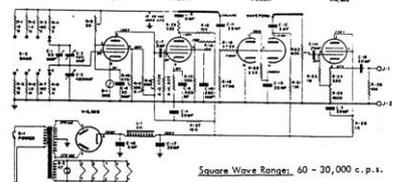
しかし再び 1938 年の場合のように、阻止し破壊される臨界ポイントが近づいてきた。

1960 年までに、クレーンは実験的にいろいろな病気の治療のため、周波数装置を身体の異なる部分で使うには、

APPENDIX Y



AUDIO SQUARE WAVE GENERATOR

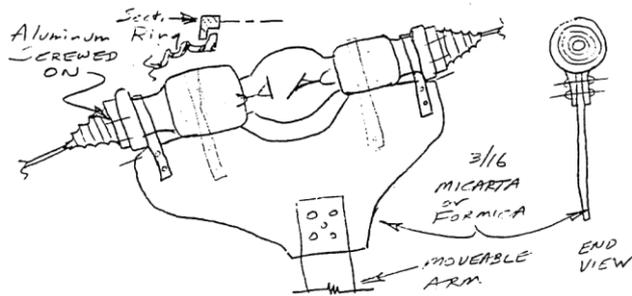


46

Rated Output Power: 100 milliwatts into rated load (10 volts across a 1000 ohm resistive load).

DIAGRAM OF INSTRUMENT FOR ELECTRON THERAPY Patent Pending

音響パルス波発生装



ライフの光線ランプの説明図

どのようにするか説明したマニュアルを書いて、著作権で保護した。

その年までに、公証された契約で、90 台の装置が、研究と確認のため配布された。

そうなる、医学的権威は、それをたたきに来た。

彼らは捜索令状もなくクレーンのオフィスに押し入って、40,000 ドルの機械とエンジニアリング・データ、研究記録とレポートに加えて、私信、請求書、テープ録音と電子部品のすべてを持ち去った。周波数装置と大きなライフ光線管チューブの 1 つが、壁から引き剥がされた写真がある。

彼らは、研究所で 10 年間かけて、完全にまとめあげた全ての研究資料を破壊した。

1939 年の場合のように、彼らは機械を実験していた医者を訪ねて、それらを廃棄することを強制した。

彼らはまた、個人的に実験に協力した普通の市民にも圧力をかけた。

これらの訪問は、調査チームの係員によってされた。

「その特殊な体験をしたある女性はとてもびっくりした。

完全に管理されたサナトリウムにいるように思えて心外だった

彼女の夫は怒って、調査チームの係員に自分の土地から出て行かないと皆殺しにするぞと脅迫した。

妻は、受けたショックのため 2 ヶ月入院した。そして、彼らに奪われた記録と資料はクレーンの裁判の間、調査チームの係員自身の防衛のために、クレーンが使用することは許されなかった。

ロイ・ライフはほぼ 73 歳になっており、その年齢では、もう一度裁判に臨む苦しみは耐えられないので、メキシコに隠れた。

彼の宣誓供述書は、裁判に持ち込むことを許されなかった。

そして、1930 年代と 1940 年代からの科学的な医学レポートは、なかった。

そして、オハイオのスタッフォード博士の医学レポートもなく Couche 博士のからの手紙も不採用と宣言された。

周波数装置が機能することを示した科学的レポートも医学レポートも、裁判で導入するのを許されなかった。

クレーンには、彼が治療し、最後まで助けた患者だけが残され、裸同然になった。

裁判は、1961 年前半に開かれた。

.24 日後、正統的な治療法で軽減する可能性がない病気の 14 人の患者をどのように周波数装置が治療したか、証拠とともに話したにもかかわらず、クレーンは有罪と判決された。

カリフォルニア州によって提供された唯一の医師の診断書は、裁判の 2 ヶ月前に環境衛生部から周波数装置を貸し与えられたポール・シー博士によって出された。

シーは、周波数装置を 1 度も操作していず、評価のためのテストもしてないと認めた。

彼はちょっと調べて、治癒的パワーがないと決めて、調査のための周波数装置の使用をしなかった。

また、当然最も騒々しい、審査員会の陪審員の長は、AMAの医者であった。

他の陪審員の全ては、医学知識がない事と（電子的知識についてではない）代替療法を支持する新聞を読んでいないことを慎重に検査されて決められていた。

評決は、必然的に否定的な結果になった。

クレーンは、10年の刑を宣告された。

訴えに続いて、特別の犯意が証明されなかったので、クレーンに対する3つの論告のうち2つはカリフォルニア最高裁判所で棄却された。

しかし、クレーンはそれでも刑務所で3年と1ヵ月を過ごした。

ガンの治療法は、再び効果的に抑えられた。

裁判で、ジェームズ・ハンニバル（76歳）は、証言した。

片方の目が見えないので、彼は周波数装置によって治療した。

何回かの治療の後、ミルバンクジョンソン博士の多数の患者で白内障が消滅したように、彼の白内障は消えた。

クレーンの裁判での他の目撃者は、慢性膀胱炎の硬化と、のどの卵大の大きさのかたまりが半分に消去したことを証言した。

また、痔、膿漏、関節炎、大腸潰瘍、拡張蛇行静脈、疲労トラブル、手の真菌生長物、目の腫瘍状成長物、大腸炎、背中痛みと心臓発作は完全に治った。

1人の男性は、17年間で成長した脊骨の卵大のものは治療の後、消えたと証言した。

クレーンが収監されたあと、オハイオのスタッフォード博士はプレッシャーから治療を断念して、セールスマンになった。

ソルトレークシティの周波数装置を使用したもう一人の医者は妨害され、保守的な医学権威によって彼が自殺するまで悩まされ、追いかけてまわされた。

このように、アンチ-ライフの勢力は、この画期的なテクノロジーをテストし使用するのを長期的に阻止するよう命令する気だった。

クレーンが刑務所から自由にされたとき、彼のガンの治療法は散乱し壊滅的な状態になっていた。

もっと弱い男性だったらあきらめたかもしれない。

しかしクレーンは、あきらめなかった。

彼は、はじめからもう一度戦い始めた。

資金も法的援助もほとんどなく、彼は、1930年代から迫害されて、社会に否定されてきた発見を保存し続ける、一見見込みのない運動を始めた。

1965年10月に、クレーンは治療の許可をカリフォルニアの環境衛生審議会に提出した。

そして、周波数装置の認可を求めた。

ライフはメキシコから戻っていたが、申請は、ジョン・クレーンが所有者であったライフ・ウイルス顕微鏡学会の名において出された。

1965年11月17日に、環境衛生部は再び、クレーンの装置が安全で「使用中に効果」があ

ることは見られないと答え、クレーンは周波数装置の「有用性」が事実あったと権威者に証明出来なかった。

1930年代からのレポートと1950年代後期の限られた研究は明らかに並外れた治癒結果が、起こったことを示したにもかかわらず、今生きている権威者は、彼らの専門知識によって、このタイプの医療許可を、州当局に、承認させようとしな

しかし、「有用性」の確認が近くなって、医者、研究者と普通の市民が要点に触れるたびに、医学権威は更なる研究がされないよう無効にしてきた。

有用性を証明されることができないのでクレーンと、ライフは特許権をとることができなかった。

「彼らの大きな医学発見は有用性の証明がないので、財政的援助をする人と研究者に興味を起こさせることができなかった。

「そして、医学権威者と役人との間で、文書が行ったり来たりする、致命的なゲームによって、純真な市民に毎年ほぼ何十万といった数の死亡者が、うまれていた。

クレーンは「保健省の有用性の証拠要請に答えようとした。そして、チャールズ W. バナー」博士（指圧療法師）は周波数装置の効果を提供することに同意した人のうちの1人であった。

彼がそうするとすぐに、保健省はバナー博士に

「クレーンからの証拠」の要請に応じないよう注意した。

彼らは、クレーンの周波数装置を使うことを禁じ、裁判所は「破壊すること」を命令した、それが1960年代中頃のカリフォルニアの裁判官のしたことであった。

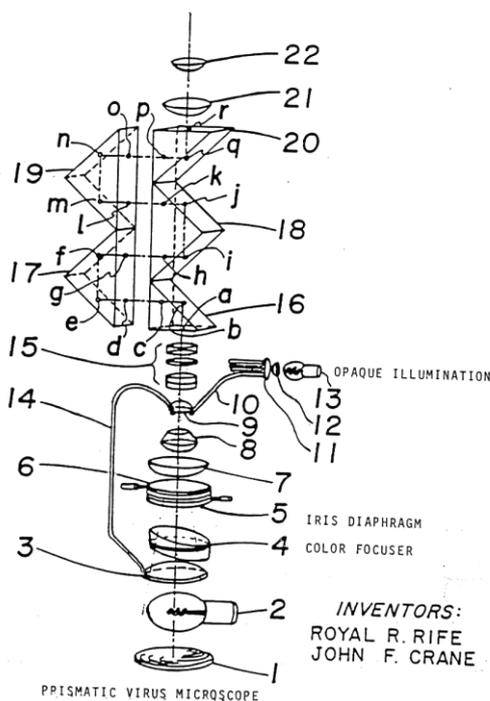
これが、装置の医学的評価というものの実態であった。

第2の男カイロプラクターのレス、ドラウン博士は評価意見をカリフォルニア保健省に提出した。

すると彼を罠にかけるためにすぐにアメリカ癌学会の従業員がドラウンズ博士のオフィスに送られた。

彼は周波数装置を使用しないことに「完全にサインする」か、あるいは、刑務所に行くかを、強要された。

ライフと、クレーンは1950年代後期に周波数装置と顕微鏡を結合させて、ともに特許権をとる予定になっていた。



ライフとクレーンの名前の入った顕微鏡の説明図

さ

目的の特許権をとるための顕微鏡の設計図は、発明者として両方の名前が記載されて下絵がかかれていた。

ライフはまた、彼のユニバーサル顕微鏡の特許権をとる予定であった。

1960年のガン療法に対する攻撃は、彼らの計画を中断させた。

ライフとクレーンは、「有用性」を示すことができないので、彼らの発見の特許権をとることが出来なかった。

オーソドックスな医学的権威を弁護する者たちによる行動は、ライフとクレーンの一般大衆にガンの治療法を持ってくるあらゆる試みを妨害した。

ライフは1929年に顕微鏡ランプに関する特許を得たが、それは、保守的な医学と、科学界のエスタブリッシュメントにとって彼が脅威であることが認知される以前のことであった。

60年代半ばから後半までに、ライフは次のような妨害とこれに類することに遭遇し、証言できるほど、こうしたことを学んだ：

(1)1939年に彼の発見を壊滅させたAMA 全米医学協会の奇妙な動きと、多数のガンの病気が直った記録を遺棄するように医者に強制したこと。

(2)ミルバンク・ジョンソン博士の1944年の不可解な死亡の件。

それは明らかに、彼がガンは治療可能であることについて発表を用意していたときのことだった。

(3) 奇妙なことに顕微鏡とガンの治療に関するスミソニアンインスティテュートの報告記事の後、ユニバーサル顕微鏡からプリズムが盗まれたこと。

(4) 1950年代、クレーンの改善方向で活性化し、希望にあふれたが、1960年、漫画のようなふざけた裁判が彼を押しつぶし、全研究が没収され、科学的なレポートも、裁判に導入するのが禁じられたこと。

(5)、そして1960年代中頃に合法化を試みると、医学権威が再び研究者と開業医に治療をやるように圧力をかけたこと。

1968年5月にライフは80才になった。

彼は、最後の戦争を戦った。

彼は、周波数装置または彼の顕微鏡がウイルスの原因となった病気を治療したことは理解されそうにないことを知った。

特に「有用性」の問題は絶対絶命に陥っており、袋小路の状況が前途に横たわっていた。

彼は特許庁との長引く「有用性」の問題のやりとりは常識では理解できなかった。

そのための明白な解決法はなかった。

治療は、医学界と科学的な権威の承認を得なければならないものだった。

医学的な権力はそれらを押しつぶし、ライフに関係する研究または治療を断念することを強制したが、そのたびにライフとクレーンに助けを提供する男性が出現した。

1968年3月4日、ロイヤル R.ライフはジョン F.クレーンを抑えて、彼の顕微鏡の所有権にサインした。

ライフは周波数装置は全てライフとクレーン両方のオリジナルな研究の結合による発明であると考えていたが、ジョン・クレーンは全権利を所有することを示す特許権をとる予定であった。

生きていたときのライフの研究へのジョン・クレーンの貢献は重要であった。

クレーンは、記録を維持しそして、他の多くの者が無法を行ったときも、決してやめなかった。

しかしそのクレーンも、様々な点で、彼がしようとした仕事には、不向きであったことを知ることも重要である。

彼には、管理が出来なかった。または先輩のミルバンク・ジョンソン医学博士が実演したように、政治的な技術を使って資格のある科学者、ビジネスマン、融資者と医学の歴史の道を変える事ができる検事を「とり込んで持ってくる」ことができなかった。

残念なことに、クレーンは手助けを申し出たプロの多くに敵対しつつ、合法化のための努力をしたが、1950年代のライフ装置は、彼らが思っていたほどにはプロフェッショナルな製品ではなかった。

そしてクレーンは、医学界と、政治的、法的な対立の矢面に立ったので、ライフの遺産を守る者にとって、クレーンは、逆に苦々しいものになった。

彼は、カリフォルニア州、ネルソン・ロックフェラー副大統領と他に約 52 人の人と組織に対する無分別な訴訟を起こして何年かを無駄にした。

彼自身の弁護士とクレーンは無分別な訴訟で攻撃を始めたが、その内容は告発と召喚状で混乱に満ちていた。

訴訟が長引く間、毎年何十万人もの人が死に続けた。

1959年、権威によってたたかれる1年前に、クレーンは関心がある投資家に当時では異常に高い総額1億5000万ドルを要求した。

明らかに関心がある投資家が、存在したが、しかし、彼らはクレーンを、明らかに元金を増やす人として、または利益をもたらすライフの科学的なすばらしい才能のようには、見なかった。

1971年のライフの死に続いて、クレーンは関心がある投資家を呼びこむ試みを継続した、しかし、同意を得ることはできなかった。

1984年から1988年まで、ライフのユニバーサル顕微鏡は、いくつかのグループと個人の手を通して復元させることが約束された、しかし、このゴールの方へは進展しなかった。

連邦の法的措置は、その目標から撤退しなければならないものであった。

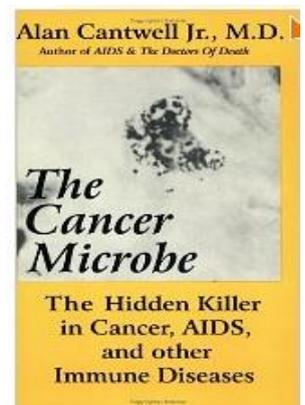
ただ最後に言うと、合法的なライフ研究室のオーナーは、ライフの研究を現代の科学的方法によって行い、会社を甦らせた。

ジョン・クレーンは、1995年の春に死んだ。

ライフの、発明と発見を無数の人々のため受理させ、利用し本流に持ってきて復活させる活動の多くの失敗は、クレーンの強欲な自我と妨害に起因している。

重要参考文献

- ニューヨーク科学アカデミーの年報（第 174 巻） 1970 年 10 月 30 日
Annals of the New York Academy of Sciences, Vol. 174,
ビール、モリス：素晴らしい薬の話
コロンビアパブリケーション.ワシントン D.C. 1949 年、
Beale, Morris: Super Drug Story.
Columbia Pub., Washington, D.C., 1949.
医学のムッソリーニ
コロンビアパブリケーション.ワシントン D.C.、1939 年
Medical Mussolini.
Columbia Pub., Washington, D.C., 1939.
ベニスン、トム：トム・リバー
医学と科学からみた生命についての考察
MIT 出版、ケンブリッジ、Ma.1967 年
Benison, Tom: Tom Rivers:
Reflection on a Life in Medicine and Science.
MIT Press, Cambridge, Ma., 1967.
バード、クリストファー：Bird, Christopher:
「ライフ顕微鏡に何が起こったか？」ニュー・エイジ・ジャーナルボストン、1976 年 5 月
"What Has Become of the Rife Micro-scope?" New Age Journal. Boston, March 1976.
ブラウン、レイモンド K. :
エイズ、ガンと医学的権威。ロサンゼルス、アライズライジングプレス、1986 年
Brown, Raymond K.
AIDS, Cancer and the Medical Establishment
Aries Rising Press, Los Angeles, 1986.
- カントウェル、アラン, Jr. :
エイズ：そのミステリーと解決方法
アライズライジングプレス、ロサンゼルス、
Cantwell, Alan, Jr.:
AIDS: The Mystery and the Solution.
1983 年 Aries Rising Press, Los Angeles, 1983.
コーナー、ジョージ：1901 年～1953 年のロックフェラー研究所の歴史
ロックフェラー研究所出版部、ニューヨーク、1964 年
Corner, George:



History of Rockefeller Institute 1901-1953.
Rockefeller Institute Press, New York, 1964.

クレーン、ジョン：電子的治療法の研究
ジョン F.クレーン社、サンディエゴ、1978 年
Crane, John:
A Study of Electron Therapy.
John F. Crane Corp., San Diego, 1978.

カレン、ベン、インタビューの筆記録、1959 年 10 月 15 日
Cullen, Ben, transcript of interview, October 15, 1959.

ドミンゴ、ジェラルド J.：細胞壁が不足しているバクテリア
Dominigue, Gerald J.:
Cell-Wall Deficient Bacteria.

アディソン - ウェズリー、マーの記録, 1982 年.
Addison-Wesley, Reading, Ma. , 1982.

「ライフ顕微鏡見られるろ過できる組織体」、サイエンスサプリメント、サイエンス、1931
年 12 月 11 日

"Filtrable Bodies Seen With The Rife Microscope,"
Science-Supplement, Science, December 11, 1931.

「巨大な顕微鏡は、バクテリア界の秘密を開く」、
ロサンゼルスタイムズ、1940 年 6 月 26 日

"Giant Microscope May Yield Secrets of Bacteria World,"

グラナー、O.C.：血液のガンの研究。
リヌーフ、モントリオール、1942 年
Renouf, Montreal, 1942.

「最大の強力な顕微鏡は、ここにある」、ロサンゼルスタイムズ、1931 年 11 月 27 日
"Here Is Most Powerful Microscope," Los Angeles Times, November 27, 1931.

Hoyland 対ビームレイ社、1939年6月12日、エドワード判事

Hoyland vs. Beam Ray Corp., June 12, 1939, Judge Edward

ケリー議長の筆記録、サンディエゴ

Kelly presiding, transcript, San Diego.

ヒューム、E.ダグラス :

ベシヤン 対 パスツール

C. W.ダニエル社、エセックス、1947年

Hume, E. Douglas:

Bechamp or Pasteur.

C. W. Daniel Co., Ltd., Essex, 1947.

ジョーンズ、ニウエル、「光線によって破壊される恐怖の病原体

Jones, Newell, "Dread Disease Germs Destroyed by Rays

サンディアゴの.科学者の主張」、サンディエゴ・トリビューン、1938年.5月6日、

Claim of S. D. Scientist," San Diego Tribune, May 6,1938.

ジョーンズ、ニウエル、「ライフが明かす驚くべき病原体の新しい概念」、

サンディエゴ・トリビューン、1938年5月11日

Jones, Newell, "Rife Bares Startling New Conceptions of Dis-ease Germs,"

San Diego Tribune, May 11, 1938.

ケラー、エヴリン F. :

有機体の感覚

W. H.フリーマン社、サンフランシスコ、1983年

Keller, Evelyn F.:

A Feeling For The Organism.

W. H. Freeman & Co., San Francisco, 1983.

ケンダル、アーサーと ロイヤル ライフによる「バシラスについての所見」

Kendall, Arthur & Rife, Royal, "Observations on Bacillus

ろ過できる状態の Typhosus」、カリフォルニアと西洋医学、1931年12月

Typhosus in its Filtrable State," California and Western Medicine, December 1931.

ケンダル、アーサー、「バクテリアの濾過」、科学、3月18日1932年.,

Kendall, Arthur, "The Filtration of Bacteria," Science, March1932.18

リヴィングストン-ホイラー、ヴァージニアと Addeo エドモンド G. :

ガンの克服

The Conquest of Cancer.

Livingston-Wheeler, Virginia and Addeo, Edmund G.:

フランクリン・ワッツ、1984年 Franklin Watts, 1984.

「細菌の生命の不思議 地方人バレシュ」、サンディエゴ・ユニオン

1929年11月3日

"Local Man Bares Wonders of Germ Life," San Diego Union.

November 3, 1929.

ロック、デイビッド：ウィルス-最も小さい敵

クラウンパブリケーション、ニューヨーク、1974年

Locke, David:

Viruses-The Smallest Enemy.

Crown Pub., New York, 1974.

Mattman, リダ H. : 細胞壁が不足している型式

CRC 出版、クリーブランド、オハイオ、1974年

Mattman, Lida H.:

Cell Wall Deficient Forms.

CRC Press, Cleveland, Ohio, 1974.

モス、ラルフ：ガン症候群

グローヴプレス、ニューヨーク、1980年

Moss, Ralph:

The Cancer Syndrome.

Grove Press, New York, 1980.

Natenberg、モーリス：ガンの報道管制

Regent House、シカゴ、1959年

Natenberg, Maurice:

The Cancer Blackout.

Regent House, Chicago, 1959.

アメリカの伝記、第49巻国家百科事典（ケンダル）

National Cyclopedia of American Biography, Vol. 49 (Ken-dall).

ジェームズT.ホワイトコーポレイション、ニューヨーク、1966年

James T. White and Co., New York, 1966.

ニコラス、ロビンとニコラス（デイビッド）：ウィルス学、情報プロフィール

マンセル・パブリケーション、ロンドン、1983年

Nicholas, Robin and Nicholas, David:

Virology, An Informa-tion Profile.

Mansell Pub. , London, 1983.

ランサム、「1931年のサイエンス-驚くべき新着情報」、ロサンゼルスタイムサンディーマガジン、1931年12月27日

Ransome, , "What's New In Science-The Wonder-work of 1931," Los Angeles Times Sunday Magazine,

December 27, 1931.

ライフ顕微鏡またはその事実、そして、彼らの結末

再版#47、栄養学のための研究リー財団、ミルウォーキー、Wi

Rife Microscope or Facts and their Fate.

Reprint #47, The Lee Foundation for Nutritional Research, Milwaukee, Wi.

ロイヤル R.ライフ：ガンと他のウイルスのための成功した治療の発展、バクテリアとキノコの歴史

Rife, Royal R.:

History of the Development of a Successful Treatment for Cancer and Other Virus, Bacteria and Fungi.

ライフウイルス顕微鏡協会、サンディエゴ、カルフォルニア, 1953年.

文書と連絡、1920~71年

Rife Virus Microscope Institute, San Diego, Ca. , 1953.

Documents and Correspondence, 1920-71.

Rosenow, E. C.、「ストレプトコッカス-肺炎球菌グループ内の変化」、感染症ジャーナル第14巻、1914年

、

Rosenow, E. C., "Transmutations Within the Streptococcus-Pneumococcus Group," Journal of Infectious Diseases, Vol. 14, 1914.

「ポリオ・メリティス小児まひからのストレプトコッカスのフィルタを通す型式についての所見」、スタッフ・ミーティングの出来事"メイヨー・クリニック、1932年7月13日

Observations on Filter-Passing Forms of Streptococcus from Poliomyelitis," Proceedings of the Staff Meetings of the Mayo Clinic, 13 July 1932.

「ライフ顕微鏡によるフィルタ通す微生物の型式の観察」、科学 1932年8月26日。

"Observations with the Rife Microscope of Filter-Passing Forms of Microorganisms," Science. August 26, 1932.

「病気に対する科学的戦争の最新の進歩が明らかにしたサンディエゴでの発展は医学研究にとって利益として認められる」、

"Science's latest strides in War on ills disclosed, development by San Diegan hailed as

boon to medical research,"

ロサンゼルスタイムズ、1931年11月22日

サイバート、フローレンス B.

Los Angeles Times, November 22, 1931.

: Seibert, Florence B.:

科学者の丘の上の小石サンクトペテルスブルグ、Fl, 1968年

サイデル、R. E とウィンター、M.エリザベス著

Pebbles on the Hill of a Scientist.

St. Petersburg, Fl., 1968.

、「新しい顕微鏡」、フランクリン研究所ジャーナル、1944年2月

Seidel, R. E. and Winter, M. Elizabeth, "The New Microscopes," Journal of the Franklin Institute, February 1944.

Sonea、ソリンと Panisset モーリス著：新しい細菌学

Sonea, Sorin & Panisset, Maurice:

: A New Bacteriology.

スター、ポール著

ジョーンズアンドバートレット、ボストン、1983年

アメリカの治療法の社会的変化 ベイシックブック、ニューヨーク、1982年

Starr, Paul: Jones & Bartlett, Boston, 1983.

The Social Transformation of American Medicine. Basic Books, New York, 1982.

「15年前 San Diegan のガン治療法の研究でウイルスは発見された、治療可能になるでしょう」、サンディエゴ・ユニオン、1949年7月31日

"Virus Found 15 Years Ago-San Diegan's Cancer Cure Work

May Make Cure Possible," San Diego Union, July 31, 1949.

Wuerthele-Caspe、ヴァージニアとアレン、ロイ、ニューヨーク・顕微鏡協会の雑誌、1948年8月

Wuerthele-Caspe, Virginia and Allen, Roy, New York Microscopical Society Bulletin, August 1948.

Wuerthele-Caspe、ヴァージニア、医学科学のアメリカのジャーナル、1950年12月

Wuerthele-Caspe, Virginia, American Journal of Medical Sciences, December 1950.

Wuerthele-Caspe-リビングストン、ヴァージニア：ガン、新しい突破ロナッシュ・パブリケーション、ロサンゼルス、1972年

Wuerthele-Caspe-Livingston, Virginia:

Cancer, A New Break-through. Nash Pub. , Los Angeles, 1972.

エール、アーサーW.、「ガン」、太平洋沿岸ホメオパシー・ジャーナル、1940年7月

Yale, Arthur W., "Cancer," Pacific Coast Journal of Homeopathy, July 1940.

付録のリスト

- A ジョンソンからライフへの手紙、1931年11月
- B. 医者の集会の写真（1931年11月）
- C. ライフのニュース記事の写真、1931年12月
- D. ライフのガンのノート 1932年11月
- E. ジョンソンからへの手紙 1933年9月（Foord）
- F. 1933年のライフの記事
- G. 1933年に造られたユニバーサル顕微鏡の写真、
- H. ライフのノート 1934年2月（Foord）
- I. ジョンソンから、ライフへのクリニックの計画についての手紙 1934年4月
- J ライフのクリニックの説明 1934年
- K. 癌ウイルスの特徴
- L. ケンダルの手紙、1934年9月（トムナイト）
- M ジョンソンからライフへの手紙 1935年3月（ガン財団）
- N. ジョンソンからライフへの手紙、1935年5月（ヤング夫人のTB）
- O. ジョンソン、からライフへの手紙 1935年9月（Foord と Dock）
- P. ジョンソンからライフへの手紙、1935年10月（委員会の法的提出書類）
- Q ジョンソンからライフへの手紙、1935年12月（委員会）
- R. ジョンソンからライフへの手紙（1937年1月）（ドックとマーティン）
- S. ライフと、彼の顕微鏡、1940年10月
- T. タリー博士の声明、1954年6月
- U. ライフの写真と彼の研究所 1960年
- V. Chromiak 博士の声明、1965年1月
- W 治療されたガンの被害者の宣誓供述書（1968年1月）
- X. バクテリア/ウイルスの特徴の研究概要

付録A

ミルバンク・ジョンソン医学博士
太平洋相互生命ビル
PACIFIC MUTUAL LIFE BLDG
ロサンジェルス カルフォルニア

親愛なるライフ様：

1931年11月9日

我々にあなたの素晴らしい顕微鏡を見る機会を承認くださったことを他の3人の紳士と私自身の名において、最大の敬意をもって感謝したい。

私は、あなたの研究所で人生で最大の、瞠目するような、興味深い午後を過ごしたと、あなたに言いたいのです。

サンディエゴにその日の夕方戻ると、即座に、私はシカゴの、アーサーI ケンダル博士に打電した。

そこで、我々が見たことについてのダイジェストと我々の意見を彼に報告した。

私が今朝パサデナに戻るとケンダル博士から、土曜日の夜、カリフォルニアのために出発したいと思っているという電報を受け取った。

そちらへの手紙を続けると

彼(ケンドール)がまっすぐくるならば、私は彼が必ずそうすると思っていますが、彼が11月17日火曜日にパサデナに到着したら、あなたの顕微鏡を最高責任者のために完全な状態に設定しておいていただければと思います。

私は、私の車でサンディエゴに彼を連れて行きます。

あなたとケンドール博士が会う時間はどの時間がよいのか、あなたが望むように決めたいと思います。

再びあなたの親切に感謝します。

私は心よりあなたを思っています。

ロイ・ライフ様

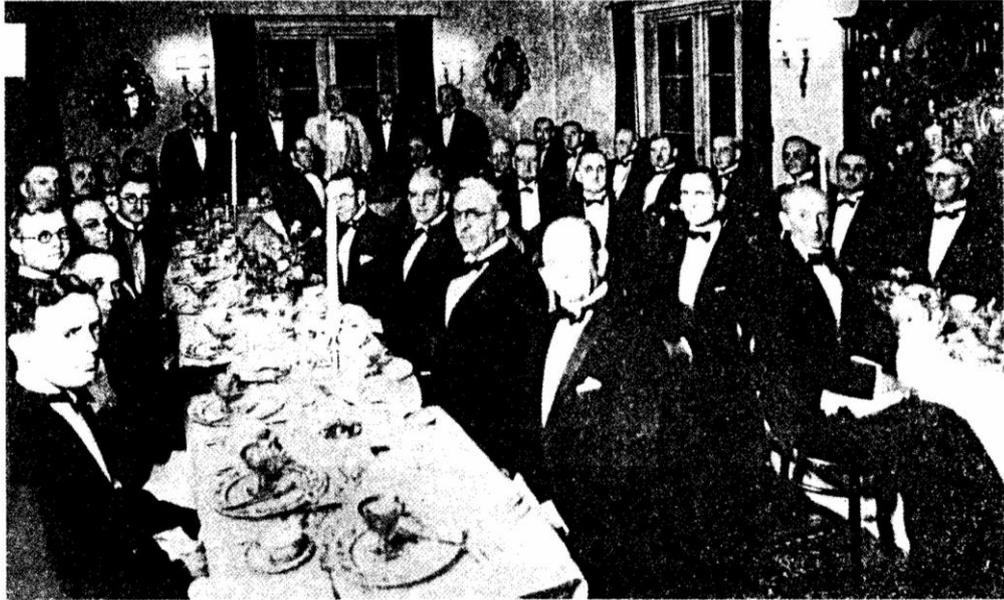
Chatsworth ビル 2500

サンディエゴ、カリフォルニア

600 BURLEIGH DRIVE SAN RAFAEL HEIGHTS PASADENA

付録 B

144



The Doctor's Gathering—Nov 1931

Appendix B

Kendall, Johnson & Rife are in front of the window

1931年11月の医師の会合

ケンダル・ジョンソンとライフは、窓の前にいる

付録 C



ロイヤルレイモンドライフは、パサデナの科学者によって世界で最も強力だと言われる顕微鏡を完成した。それは倍率 17,000 倍に拡大する。

付録 D

ライフ研究所の記録用紙に書かれたライフのメモ

Appendix D

RIFE RESEARCH LABORATORY
Bacillus X (Cancer) Carcinoma
 (Rife) 11-20-32

Filterable Virus: Passes W: K Medium

matte small oval granule
 highly plastic
 visible only with mono chromatic light
 angle of refraction 23°/10
 color by chemical refraction Purple-red
 length $\frac{1}{15}\mu$: breadth $\frac{1}{20}\mu$.

Parasitic
 Famide
 cathode X

bleach rate in milliamperes	175 D.C.
Influence of X rays	none
" Ultra Violet rays	slows motility
" Infra Red	none
thermal death point	42°C. 24 hrs.
filament voltage	10
" " "	56
plate voltage	928
Cy dec per second	14,780,000
Wave length of super regeneration of audion tube	17370 Met.

付録 E

ミルバンク・ジョンソン、医学博士
太平洋相互生命ビル
ロスアンジェルス カルフォルニア
1933年9月5日

親愛なるライフ博士、

私は今朝、パサデナから、あなたに手紙を書いている。
ちょうど今ケンダル博士から手紙を受け取った。
それが伝えることでは、セントルイスでは一般的だった「眠り病」が
シカゴでも現れたのは非常に明白である。
ケンダル博士は、この手紙で、言っている。
彼はあなたの顕微鏡で培養菌の調査をし、一緒に誰もが捜している微
生物を分離させるために、脊髄液、そして、血液を顕微鏡で視てみた
いと思っている。
あなた方二人は、素晴らしい組み合わせである。
そして、あなたの炯眼はどんな微生物でも見逃がすことなく小さいも
のでも確かに見つける。
私は、あなたにこの手紙を送っているが、直接彼から連絡があるかもしれない、そして、
彼はそれが何を意味するかすべてわかっているとおもう。

心からロイヤル R ライフ博士へ、
Chatsworth 大通り 2500
サンディエゴ、カリフォルニア
600 BURLEIGH DRIVE SAN RAFAEL HEIGHTS PASADENA

Appendix E

MILBANK JOHNSON, M.D.
PACIFIC MUTUAL LIFE BLDG.
LOS ANGELES, CALIFORNIA

September 5, 1935

My dear Dr. Rife,

I mailed you this morning from Pasadena a letter just received from Dr. Kendall which is self-explanatory.

It is very evident now that this sleeping sickness which has been so prevalent in St. Louis has appeared in Chicago. Dr. Kendall says in this letter that he wishes that he could have you and your microscope with him to make examinations of culture, spinal fluid, and blood with a view to isolating this germ for which everybody is seeking.

You two would make a wonderful combination and any germ that escapes your eagle eye would certainly be a small one. I am sending you this letter because you may hear from him direct and you will know what it is all about.

Yours sincerely,



Dr. Royal R. Rife
2500 Chatsworth Blvd.
San Diego, Calif.

P.S. At least he found the city of the bug - he writes a good report, to make matters worse he says that he will send you in a few days -

600 BURLEIGH DRIVE
SAN RAFAEL HEIGHTS
PASADENA

付録 F

病気の原因としてのウイルスとリケッチア

ロイヤル R ライフ著

今までファイルされたレポートの要点を伝え、研究所がウイルス実験をして確認し、確実に病気と関連する、重要な病因となるリケッチア（偏性細胞内寄生菌）のいる体の治療方法を発表することが、本論文の目的である。

ウイルスを尊重している既存の理論は、まったく不満足なもので、更なる説明が悲しいことに欠落している。

したがって、我々は他の研究者が我々の所見を確認しようとする起爆材となるために最低限基本的なものを提出するという願いから、我々の理論の概略を説明する。

動植物のウイルス性疾患は、多分、与えられた制約の下で、確実に形態が変化するライフサイクルを持ち、移行段階のある微生物有機体が原因で発生する。

彼らは珪藻土を通して確実に存在し、あるいは、磁器で濾過されたあとでも、ウイルスの全ては完全に有毒である。

これらの微生物組織体の濾過は、それらを分類する手段としては機能しない。

これらのウイルス組織体を、カテゴリーとして分類する前に、他の重要な特性を示さなければならない。

大部分の既知のウイルスは、宿主の生きた細胞との密接な関係の中でだけ存在する。

しかし人工の培養基以外では培養しないよう、限定された多くの試みは、ほとんど成功した。

筆者は、人工培養基でウイルスを培養することが可能であるという仮説を長く受け入れてきた。

私自身よる何回もの失敗の後、ノースウェスタン大学医科大学のアーサー・アイザック・ケンダル博士と一緒に仕事したことは私にとって特権的な幸運であった。

人工の状況でウイルスを培養する際、タンパク質が豊富でペプトンが貧弱な、ケンダルの「K」培養基を使用した。

我々の最初の実験で得られた良好な業績は、「カリフォルニアと西洋の医学」の第 XXXV 巻、No.6 にケンダル博士と私自身による共著で示し記録している。

その仕事の重要性は、後になってメイヨー・クリニックの職員会議において発表され、議事レポートで示された。

第 7 巻 (No.28)、の実験微生物部 E. C. Rosenow 医学博士によるレポートでは、シカゴの北西大学医科大学のケンダル博士の研究所で、1932 年、7 月 5 日、6 と 7 日の 3 日間にわ

たってされた実験の、とても重要な所見が、記録されている。

この実験は、ケンダル博士 Rosenow 博士と私自身でされた。

結論を短くまとめるためと、研究の重要な特性のために、我々の各々は、一步ごとに、得られた結果を確認して進めた。

上述のレポートは、2つの重要な事実を確立するためのものである。

まず最初は、人工的にウイルスを培養することが可能であることと、第 2 に、そのウイルスは、ライフのユニバーサル顕微鏡の下に明らかに見ることができることである。

我々の最初の実験で、我々はろ過できる状態でバクテリアを培養しようと努力した。

確かに、生物学のなかで理論的にろ過できる微生物有機体の存在は、理論的にも、実際的にも、重要性があることは、否定できない。

しかし、後の実験は、我々の確実な制約の下で培養するとき、バクテリアから移行した状態であるのに、ろ過できる型のものが存在することが確認できた。

確かに、この微生物有機体のライフサイクルの移行型式の中にウイルスの段階があることが判明した。

病原体の潜伏期間の間、宿主に、その存在が感受されるが、それは、重要なことである。

そして、それは病原菌によるのだが、それによって病気を再現することに成功した。

これらは、宿主の、特に、細胞のミネラルと塩の代謝バランスを滅茶苦茶にする。

これがある程度完了したとき、その段階で、病気の初期状態、またはウイルスに侵入された状態への移行準備が整う。

それは、ウイルスが細胞を片寄った成分になるように編成するということである。

病気と関連した病理変化をもたらす。

これは記憶されなければならない。

この話題から離れる前に、有機体のライフサイクルには幾つかの段階が、存在することを指摘しておこう。

ウイルスがバクテリアの原始の形であるとすれば、その時、リケッチア体は原生動物の原始の状態を表す。

染色されたリケッチアの反応は、確かにトレポネータ *treponemata* に類似している。そして、確かに虫のような寄生的な原生動物との類似関係を示唆する。

人工的な培養基での、これらの手に負えない性質は、細菌のウイルス型との、類似性を示す

我々は、確かな、病気の病因としてのリケッチャーの関係を次に考察する。

我々は、米国医師会ジャーナル (1910 年の (54 ページ)) に発表されたレポート「リケッチャーと生体の荒廃」にある調査結果を確かめた。

これらの研究者は、人間の発疹チフス *leisions* でリケッチャ *prowazeki* の発生を観察した。

シラミがリケッチャーとして組織体に群がったかどうかは食塩水の基底が上がっていることで明らかにされた。

これらの数が完全に発展し増えるとき、彼らは注射と同時に動物で発疹チフス熱が誘発される。

これらが完全に発展するとき体がリケッチアで荒らされると同時に、塩類の液の現象(食塩水の基盤が上がること)と相並んでシラミが発生しているならば、彼らが注射と同時に動物に発疹チフス熱が誘発されることが示されている。

リケッチアの組織体に似たものと、黄熱グループとの関係は、仰天させる。

このパラプラズマ **faliaglum** 有機体は、この組織体グループの全てに移行する親のような存在の型である

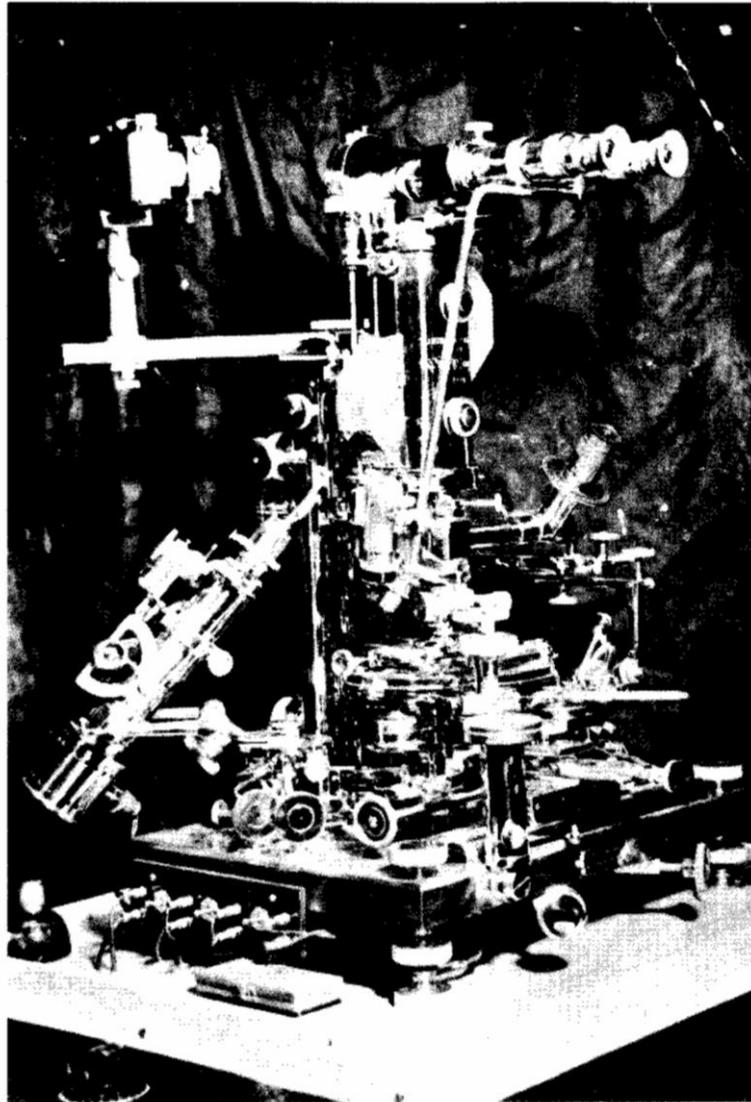
ホスト(宿主)の細胞のアンバランスの程度は、病原性による病的変化の質を決定する。強いアンバランスがあると本当に黄熱病になる。より穏やかなアンバランスはラング熱の徴候を与える。そして、もっとより穏やかなアンバランスは **phebotomus** を生じさせ、3日間、熱がでる(1932年にこのように分類した、)

このように、新しい分野が、科学的な研究者に公開された。

問題の解決は、無限に続く分類だけでは出来ない。

むしろ、生化学的要因の魅力的な研究によって、これらの病理現象を生じさせつつ移行してゆく各段階で、ウイルスとリケッチアのようなものを、我々が見つけ出すことだ。

付録 G



ユニバーサル顕微鏡(1933年)

付録 H

RIFE RESEARCH LABORATORY

Savanna 80 1934

Operation and Investigation of Tumors in White Rats (2/14/34)

The tumor was located beneath the epithelial tissue covering the left side of the chest.

The duration of the operation was 55 minutes, during which time the animal was under ether anesthesia.

The tumor weighed 60g. and was of the Lipoma type. It was removed under sterile conditions and placed in glycerine immediately after the operation.

Three portions of tissue were removed from the center of the tumor. A tube of sterile K₂ media was inoculated with one portion. Another was sent to Dr. Faard for histological examination, and the third was ground in a sterile mortar containing sterile normal saline solution. The contents of the mortar was next passed thru a Berkfeld "W" filter and examined under 1,000 X magnification.

The fresh filtrate under the microscope revealed numerous acid granules, purplish red in color, and resembling the B.X. in morphology. The organisms are non-motile.

付録 I

ミルバンク ジョンソン医学博士
太平洋相互生命ビル
ロサンゼルス、カリフォルニア

1934年4月30日

私の尊敬する先生

私は1934年の、「リーダーズダイジェスト」のコピーを、この手紙につけて送る。

「若く情熱的な医師」と表題をつけられた記事を、あなたが慎重に読んでくれることを願っている。

私は、この記事を読んだので、次の土曜日にあなたと話し合いたいとおもった。

あなたの光線が記事で言われたように、周波数の短い電磁気波であるか知りたい。

もちろん、有機体を対象にした、これらの正確な波長または振動数を知ることができない。(実際の細菌で効果を観察する方法がない)

この記事は、私が、今まで知らなかったたいへん大きなアイデアを与えてくれたが、それは、すべて克明に書かれた記事ではない、その意味であなたとよく話し合いたい。

次の土曜日ラ・ホーヤで11時30分、私と会うことができないだろうか：

私は、あなたに図書館を見せたい。

そして、私の人々に何か伝える前に、あなたの意見を聞きたい

今年の夏の我々のクリニックのための場所は、スクリップクリニックである。

私の生体検査に使用する鉗子は今朝来た。そして、私も進攻し挑戦するために、私の最近の手紙であなたに話したことを考えている。

土曜日の11:30頃にカーサ・デ Manans で私に会っていただきたい、そして、一緒に昼食をとってください。

急いで、心からの敬愛の想いをこめて。

ロイヤル R. ライフ博士へ
Chatsworth 大通り 2500
サンディエゴ、カリフォルニア

Appendix I

MILBANK JOHNSON, M.D.
PACIFIC MUTUAL LIFE BLDG.
LOS ANGELES, CALIFORNIA

April 30, 1934

My dear Doctor,

I am mailing you with this letter a copy of the "Readers Digest" for May 1934. There is an article entitled "Young Doctor Hunt" which I am very anxious to have you read carefully. I have gotten a real idea out of this which I want to discuss with you next Saturday.

I wonder if your Ray could be the short electro-magnetic wave referred to in this article. Of course these people, having no way to observe the effect on actual bacilli, could not know the exact wave length or oscillation on organisms.

This article seems to explain a great deal to me that I did not know before and has given me a great big idea which may be no good but I do want to discuss it with you fully.

Can't you meet me about 11:30 in La Jolla next Saturday. I want to show you the Library Building and get your opinion of it before I say anything to the people at the Scripps Clinic about it as a place for our Clinic this summer.

My biopsy forceps came this morning and I also hope to bring down with me the penetration gages which I think I told you about in my last letter.

Please try to meet me at the Casa de Manans about 11:30 Saturday and we will have lunch together.

In haste,

Yours very sincerely,



Dr. Royce R. Life
2500 Chatsworth Blvd.
San Diego, California

800 WILSON DRIVE
SAN DIEGO, CALIFORNIA
92104

付録 J

8. 1

「BX」接種の技術

我々のガンのウイルスがいる「BX」を実験動物へ接種する方法は、以下の通りである：最初動物は、剃られて、接種の直前にアルコールとヨード液で殺菌されて、部分麻酔をされておこなう。

これは、動物に衝撃を与えるのを防止する。

特別に長い、非常に細い針が使われる。針は無菌のワセリンで満たされる。そして、皮下注射器はその時、接種液で満たされる。そして、針が注射器につけられて、針は表皮の下の接種点から 30mm より浅く挿入される。

ほとんどの場合、必要な「BX」が、非潰瘍の人間の乳房にできた、かたまりからとられたものなので、接種する場所は、乳腺になる。

3~4 日で甲状腺の領域に大群が出現する。この原因は、知られていない。

しかし、大群はひいて、完全に回復する、そして、実験動物の乳腺で成長が始まる。

これらの生長物または腫瘍は、多くの場合実験動物の体重を上回った。

腫瘍は外科的に除去される、そして、「BX」が全ての症例で再び作られる。

重要な要素のチェックは、「BX」の最初の分離から少なくとも 10 回移植が繰り返えされてからである。

これらの移植は、原型の「K」培養基に 24 時間間隔でしていく。

これは毒性を増やし、腫瘍の成長を促進させる。

これらの実験は完全に 100 匹の実験動物の上で繰り返され、この方法で、確かに「BX」ウイルスのウイルス性と病理学的な証明を確認した。

この技法を続けて発展させることに関心がある研究者がいるならば、我々は本当に必要とされる基本的な原則と「K」培養基の公式を提供する。

しかし、これらの微小ウイルスは平均的顕微鏡の視覚化能力の範囲の外にある。

8. 2, 「BX」またはガンの治療

『実験動物でのガンの実際の治療は、我々の周波数装置を使ってされた。

これらによって仰天するほどの結果に到達する。

この周波数装置をウイルスの致命的な振動率に正確に設定し、決定するためには、長くて退屈なプロセスがある。

設定が見つげ出され特別の周波数として記録される前に、周波数装置を同じように設定して、10 回連続して繰り返した。

これらの結果は、強力なユニバーサル顕微鏡で観察され、致命的な振動数の波動が到達するとき、「BX」形態は「爆破される」ように、その場で崩壊していくのが見られる。

「BX」ウイルスを接種をされた動物は、その決定した同じ振動数の波動を受けたが、実験動物の組織からつくられた「BX」ウイルスへの波動の効果と同じかどうかみた。

結果は、正確に BX 純粋培養のスライドと、実験動物への効果とは同一であった。

癌の人間の症例に関してこの周波数を使う前に、これらの成功したテストは、実験動物で 400 回、完全に実施された。

ガンの最初の臨床研究は、ミルバンク・ジョンソン医学博士の管理下でおこなわれ、それは南カリフォルニア大学の特別医学研究委員会の下に置かれ、多様な悪性腫瘍の 16 人の症例がクリニックで治療された。

3 ヶ月後に、これらのいわゆる末期的症例のうちの 14 人は、5 人の医学博士のスタッフと医者と、アルヴィン G. Foord、医学博士の病理学者のグループによって、臨床的に治った事に同意するサインがされた。

治療は、「BX」またはガンの病原体の致命的な振動率に設定された周波数装置を使い、3 日間隔で 3 分間から成るものである。

毎日される症例より、治療の休止時間を経過させることは、優れた結果に到達することが判明した。「BX」ウイルスの無気力にされ死んだ粒子によって生み出される有毒なものを、リンパ管システムが吸収し、排出する機会を与える。

これらの「BX」ウイルスのどの治療ケースでも、周波数装置治療が行われている間、そしてその後も、標準より上の体温の上昇は、見られなかった。

特別食は、この臨床研究の中で少しも使われなかった、

しかし、我々は個人のために設計された正確な治療食は、利点があると心から思っている。

ガンの決定と診断

我々は、完全に、血液の汚れの検査によって癌となっている人の症例の 90%を 30 分で決定することができる。

これまでに獲得されたこの技術を説明すると、

我々は、癌組織が伝導率をもたらさないために *galvonometer* 微量な電流計で電流を計ると、検流計で揺れが出ず、それは多数の種類の上皮腫でも見つけられた。

この方法は X 線写真を使わずに、腫瘍の位置の輪郭を描き、決定することを可能にする。

X-線かラジウムまたは他の放射性物質が使用された悪性腫瘍の症例は、治療後の多くの月日のうちに、明確に放射能の有害な効果を組織が示すことが確定されている。

害され破壊された組織は、自然に寄生されるという意味で病原菌のごちそうとなる。我々は、この方法で扱われた腫瘍がすぐに我々の周波数装置の治療に反応しないことも見つけ出した。

付録 K

6 癌と化学物質との関係

化学成分の構成

(A) 発癌物質としての Dibenzanthracene.

1. 分岐したものか、二重化された誘導体
2. ベンツ — (ベンゼン C₆H₆) —

C₆H₆ の誘導体 C₆H₆nCH₂ のようなベンゾール

3. アントラセン—C₁₄H₁₀ = 3C₆H₆—藍色とアリザリンの準備で使われる C₄H₈ 白ソリッド炭化水素

(B) C₁₄H₁₀ (モスポール) と、ほとんど同じナフタレン (610H8)

Appendix K

6.	<u>CHEMICAL RELATIVITY TO CARCINOMA</u> <u>Coordinative Constituents</u>
(A)	Dibenzanthracene as a carcinogenic agent.
1.	Di-derivative of the meaning separated by or doubling up.
2.	Benz - (Benzene C ₆ H ₆) Benzol as a C ₆ H ₆ derivative C ₆ H ₆ nCH ₂
3.	Anthracene - C ₁₄ H ₁₀ = 3C ₆ H ₆ - C ₄ H ₈ white solid Hydrocarbon used in preparation of indigo and alizarin.
(B)	Naphthalene (610 H ₈) almost same as C ₁₄ H ₁₀ (moth balls).
	<u>Cancer Virus Characteristics</u>
1.	Not destroyed by X-Ray, ultra violet ray or infra red ray.
2.	Thermal death point in 24 hours is 42 deg. C or 107.6 deg. F.
3.	Sporogenous.
4.	Not liquefying (solid).
5.	Non chromogenic and non aerobic.
6.	- (Calabdo) politeridion.
7.	Length of ovoid micro-organism is 1/20 u.
8.	Width of ovoid micro-organism is 1/15 u.
9.	Flagellated and non parasitic.
10.	Highly motile and plastic.
11.	Highly pathogenic.
12.	Seen at 12 3/16° angle of refraction on universal microscope.
13.	Color of chemical refraction is purple red, which results from the coordinative constituents reacting upon the degree of light frequency applied.

ガン・ウイルスの特徴

1. X-光線、紫外光線または下方の赤い光線によっては破壊されない、
 2. 24 時間の間で死ぬ温度は、摂氏 42 度または 107、6 度 (F)
 - 3 胞子を形成
 4. 液化していない (培養基)
 5. 色なし酸素なし
 6. 分極化 (カソードあり)
 7. 卵形または微生物の幅は、1/20u である
 8. 卵形微生物の長さは、1/15u である、
 9. 鞭毛はなく寄生的である
 10. 非常に運動型で可塑性がある
 11. 非常に病原性のも
 12. ユニバーサル顕微鏡で 12 から 3/16 の屈折角で見られる
 13. 化学屈折の色は、紫の赤である、
- これは、調整された光の周波数への構成要素からの反応結果に、一致した。

付録 L

ノースウェスタン大学医学部

シカゴ 東アベニュー300

イリノイ シカゴ

9月20日,1939年

親愛なる Mrs. Bridges :

我々がカリフォルニアを去る前に家内と私は、不幸にもあなたへの挨拶ができなかった。

これはその謝罪と、あなたの非常に美しいパーティーに招かれて、気持ちが一新された楽しい思い出への感謝の表明です。

我々が再びカリフォルニアにいけるなら、我々があなたを訪ねることが出来るので、それを思うととても幸せな気持ちになります。

我々の帰りの旅に、トラブルはありませんでした。:

1日目は暑い日でした、しかし、我々はクーラーのある車を確保できたので、この後の旅行はずっと快適でした

我々は2日か1日を、半月過ごしたように感じました

妙にすべてがせわしく、そして、我々両方がひどく嫌っている

大都会の混乱がありました。

我々は、理想的な生活は年の10ヵ月、ラ・ホーヤに住むことだと思っています。

メキシコへの我々の訪問は、我々の人生で重要な出来事のうちの1つでした。

我々がこの国が、特にドゥランゴ州のPaciendaを本当に好きになりました、

我々は、そこに5週間いました。

会話し伝えるために、もう一年、十分スペイン語をおぼえたいと思っています。

現在の、我々の語彙は日常会話に限られています:

食べて、旅行して、人生できわめて普通の日常の事を行うことのための語彙のことです。

(我々の語彙にないことばが要求されるような非常事態は、そこにはないとしています)。

家内はこの冬、言葉を勉強すると約束した、そして、私は同じように3ヵ月基本を学んで、すでに使っています。

それでもう一年であれば、我々は、スペイン人と彼らの言葉遣いを魅力的に使って本当に話すことができるでしょう。

今日の午後私は Mr. Hardin と会います。

大学の理事会の理事長で、彼はロイには利害関係がある重要な人です。

私のカリフォルニアへの非常に短い訪問の間、見たことと、あなたの見事な研究について

Appendix L

NORTHWESTERN UNIVERSITY MEDICAL SCHOOL

300 EAST CHICAGO AVENUE

CHICAGO, ILLINOIS

September 20, 1939

Dear Mrs. Bridges:

My wife and I were unfortunately not able to pay our respects to you before we left California, and this is both an apology and also a renewed expression of our pleasure in being invited to your very beautiful party. We do hope we shall be fortunate enough to be in California again so we may call upon you.

Our trip home was without incident: it was not the first day, but we succeeded in getting a place in an air conditioned car, and the remainder of the journey was very comfortable. It was quite cool when we landed in Chicago, and it has been comfortable ever since. We have been away for two and one half months, so everything was strange, especially the bustle and confusion of a large city which we both detest. We believe the ideal arrangement would be to live in LaBolla ten months of the year, and in Old Chicago the remainder. Our visit to Mexico was one of the outstanding episodes of our lives, and we really became very fond of the country, especially of the Sierrita in the State of Durango where we spent five weeks. Another year we hope to meet enough Spanish to carry on a conversation; at present we are limited to bare necessities: reading, travelling (provided there are no emergencies which would call for words not in our vocabulary) and doing the very ordinary things of life. My wife has promised to study the language this winter, and I have already spent some three months learning the rudiments, so it may be that another year we may really converse with the Spanish people in their own tongue, a most desirable accomplishment.

This afternoon I have a meeting with Dr. Hardin, President of the Board of Trustees of the University; he is much interested in Roy and his splendid work, and I shall be asked to tell what I saw during my very brief visit to California. Dr. Hardin, unlike many persons, is very friendly, and will take the proper view point of the work that it is experimental in character with no rules of the game to go by, and with a machine that is designed for small output, and therefore, not capable of showing its full worth. I understand there is to be a new machine, embodying the facts learned from the old one, and built along more sturdy lines so its output will be more nearly equal to the demands which should be put upon it. I have written to Dr. Johnson telling him about the case I can talk intelligently about; Tom Knight-Joy (Piffo) will tell you about Tom; he seems to me to be the most important case of the entire series because his tumor was on the chest; there it could be seen, watched and measured from the start to the finish. This I have done, recording the actual measurements, and details of treatment and of pathological examination.

I do hope you will overlook the use of the typewriter; my handwriting is so very bad no one, including myself can read it. Hence I substitute duplications for illegibility.

My wife unites with me in warmest regards,

Dear sincerely yours,

私が話すよう頼まれました。

多くの人と違って **Mr.Hardin** は非常に親しみやすく、研究の正確な意味とその要点を把握しています。

ここまでは、小さな出力用に設計された、その完全な価値を見せていない装置で実験的に治療が行われてきたので、闇雲な挑戦の連続でした。

私は、古い機械で学んだ事実に基づいて、改善された新しい機械が出来るはずだということを理解しています。

そして、より丈夫に造られ、その出力も、もっと適切に、要求に答えられるようになります。

私は、ジョンソン博士に、詳しく記録をとってある症例、トム・ナイトのことを話した：

ロイ（ライフ）は、あなたにトムについて話すと思う：

全ての中でトムは、私には極めて重要なケースであると思う。

彼の腫瘍は頬にあり、そこは観察することができ、最初から終わりまで測定できています。

私は実際の測定値と治療、そして、病理学的エスカレーションの詳細を詳述できます。

私は、あなたがタイプ・ライターを使ってないことを許してほしいと思っています。

私の筆跡は、とても読みにくい。

私自身を含めて誰も、読むことができない。

それゆえに、私は悪筆の無礼を謝ります。

私の家内はともに、最も暖かい思いで、宜しくとの伝言です、

いつも心より

付録 M

ミルバンク・ジョンソン医学博士、
太平洋の相互生命ビル
カリフォルニアロサンジェルス

1935年3月11日

親愛なる R. R ライフ博士、

あなたがインターナショナル癌研究財団から私が受け取った手紙を見られるよう同封しました。彼らの要請に最も効果的に対応するために、私にあなたの研究所の内部で撮られた何枚かの写真と、大きな顕微鏡の写真を送ってもらうよう、頼みます。

それはまた、あなたの成就したものがそのまま自然に興味を起こさせ、写真を見るだけで多くの質問にそれが非常によく答えてくれるでしょう。

私ができるだけ早く、自分の目で確認したことの無いこれらの人々をそこへ、つれていきたいので、なるべく早くこうしてください。

同封した手紙は私の保存用ファイルにいきますので戻してください。

非常に心からあなたのもの、

ロイヤル R. Rife 博士へ

Chetsworth 大通り 2500

サンディエゴ、カリフォルニア

Appendix M

MILBANK JOHNSON, M.D.
PACIFIC MUTUAL LIFE BLDG.
LOS ANGELES, CALIFORNIA

March 11, 1935

My dear Dr. Rife,

Inclosed you will find a letter which I have just received from the International Cancer Research Foundation.

In order that I may most effectively comply with their request, will you send me some pictures taken of the interior of your laboratory, also a picture of the big microscope. Also, will you answer as many of their questions as you see fit as they are naturally interested in knowing as much as possible about your accomplishments.

Please do this as soon as you can because I want to get these people back there started as soon as possible. Will you return their letter for my files.

Yours very sincerely,



Dr. Royal R. Rife
2500 Chetsworth Blvd.
San Diego, Calif.

付録 N

ミルバンク JOHNSON 医学博士
太平洋相互の生命ビル
ロス ANOEVLES、カリフォルニア
1935 年 5 月 9 日
親愛なる先生

ジョンソン夫人と私は土曜日にサンディエゴに行くが、
私はチャールズと一緒にヤング夫人をつれていってもう一回彼女
に光線治療をすることを許可してほしいと思っている。
彼女は、とてもよくなっている
小さな種腺の全ては、首の側面の両方とも消えている、
今朝、私が彼女を検査したとき、右側の鎖骨のちょうど上に 1 つの
腺だけがあった。

(当初より非常に小さくなって痛くない)

左側の上の 3 つの腺は、明白に小さくなった。

4 月 29 日に調べたときは痛くなかった。

しかし私は二重に確認をするために、

我々は、もしも昼前に、あなたがよければ土曜日に彼女にもう一回
照射を与えたいと思っている。

否定の場合、私に打電してください

そしたら、私は彼女をつれていかない。

心から尊敬をこめて

ロイヤル R. Rife 博士へ

Chatsworth 大通り 2500

サンディエゴ、カリフォルニア

Appendix N

MILBANK JOHNSON, M.D.
MILBANK MUTUAL LIFE BLDG.
LOS ANGELES, CALIFORNIA

May 9, 1935

My dear Doctor,

As Mrs. Johnson and I are coming
down to San Diego Saturday, I would like,
with your permission, to have Charles bring
Mrs. Young along with him so that she may
have another Ray treatment.

She is very much improved. All
of the small neck glands in both sides of
the neck have disappeared. This morning
when I examined her there was only one
gland on the right side, just above the
clavicle, which smaller than originally and
less painful. The three parotid glands on
the left side were smaller than when
examined on April 29 and not painful. I
checked, however, to make sure there were
none that we will give her another short
delivered before noon if it is agreeable to
you. If not, please wire me and I will not
bring her down.

Yours very sincerely

Milbank Johnson

Dr. Royal R. Rife
2500 Chatsworth Bldg.
San Diego, Calif.

*P.S. Please I hear from you to the
contrary I will bring Mrs. Young down.*

付録 O

Rife 博士 #2

1935 年 9 月 12 日

それほど疑問を取り除きたいならば、あなたのペトログラフとタマネギの皮のスライドを、持ってくれば、可変モノクロビームの作動方法を理解させることができる。

2、3 日前、私は Foord 博士から、モルモットの検死についてのレポートを受け取った。

Foord 博士は、ヤング夫人（チャールズの妻）の最近の手術でとった腺から得たものを接種した。

モルモットの腺は、明確な結核の感染症を示した。（しかし、悪くはない）

（2、3 の生きた結核の細菌がみられた）

彼は、これらの菌はちょっと長いもので、そして、少数はビーズ状になっていると言った。

彼は結核菌が陽性であると診断した。

もし、モルモットの腺とヤング夫人の病域に、またはそこから得られたチーズ状の素材を塗ったスライドの中にも、生きている結核菌、またはそのように見える何かを見つけられなかったら、とふと思った。

しかし、私は、これらの古い結核の障害にも多分多量の顆粒があると思っている。それは、我々が知っているように、人工培養では発展しないし、風邪でも頻繁には膿瘍にはならない。しかし、今みた通り、モルモットに噴射されるならば、結核菌を生み出す：

多分、これらの多数の腺にあった多量の顆粒状のものは、我々のフィルタを通したものと同じタイプの、T.B.結核菌のもう一つの様態として存在するものだろう。これを見つけた同じ時に、我々は結核菌のロッド様態のものを破壊するための MOR 最適周波数を確認しなければならぬ。

私は、ライフ光線を放射することで結核の症例が緩和することに疑問がない。完全に納得している。

問題について Dock 博士と話し合う際、彼は試みたことを必ず教える、そして、我々が得た反応は多分前兆で、完全に治療することができるだろう。

これらの多数の顆粒のための MOR 最適周波数を見つけ出すため、多くの研究が要求される。あなたは、*gendalls Bacteriology*（第 2 版）の 224 ページに記述されているようにこれを見つけ出す。

これらのことは、多分全ての版に書かれているだろうが、多分同じページ数ではないだろ

Appendix O

Dr. Rife #2. September 12, 1935

If it would not be asking too much, you might bring your petrographs and that slide of the onion skin which would give them some idea of the action of the variable monochromatic beam.

A few days ago I received a report from Dr. Foord of the postmortem of a guinea pig which he inoculated from some of the glands taken in the last operation from Mrs. Young, Charles' wife. It showed a distinct, but not bad, tubercular infection in the glands of the guinea pig, a few living tubercular bacilli. He said they were rather long and a few of them were beaded. He pronounced the diagnosis positively tuberculosis.

Now, it has occurred to me, that if he found no living tubercular bacilli, or anything that looks like them, in the sections of the glands of Mrs. Young themselves, or in a stained slide made from a caseous material taken therefrom, I am inclined to believe that in these old tubercular lesions there probably were so "much" granules which, as we know, will not develop in artificial culture, nor do they show in cold abscesses very often, but, still, if injected into guinea pigs produce tubercle bacilli: maybe these Much glands are another form of the same ~~being~~ T.B. corresponding to our filter passing form and we will have to get an M. O. R. for them so as to destroy them at the same time that we do the rod form of tuberculosis.

I am quite satisfied that we will run no danger in redacting with the Rife Ray moderate cases of tuberculosis. In discussing the matter with Dr. Dock, he advised by all means to take a chance and any reaction that we might obtain can probably be handled symptomatically. It will require a great deal of work to find an M. O. R. for these Much granules. You will find them described on page 224 of Kendall's Bacteriology, 2nd Edition. They are probably described in all of his editions but may not on the same page.

う、

付録 P

ミルバンク ジョンソン医学博士
太平洋の相互の命ビル
ロスアンジェルス、カリフォルニア
1935年10月8日

親愛なるライフ博士、
大成功の新しいライフレイマシんで臨床研究を開始する準備について。

この夏使ったオリジナルのものよりこれは非常にたいへんなパワーと浸透力がある。

電子工学で得られた、大きな改良で、この機械の機能の可能性は、大きく広がった。

たとえば可動部分は、新しい機械にはないので、苛酷な使用をしても非常に長い寿命になることが期待される。

我々は、委員会と医者メンバーが損害賠償の訴訟から保護されることが可能な賢い人たちだと信じている。

したがってあなたの議長は、経験豊かな弁護士によって、2枚の用紙を提出する準備をしている。

私はあなたのアドバイスまたは許可をえるために、あなたにそれを送り、見てもらおうと思っている。

どうぞ、非常に慎重に、完全にそれを読んでください。

あなたが希望するならば、どこかの法律関係者に相談して見てください。

そして、私にそれを戻してください

可能なかぎり早急に行なってください。

我々は、開始する、準備をしています。

我々は動物で、そして、培養組織で、機械を完全にテストした。そして、それはこれまで、我々が見てきたように、申し分がない。

出来るだけ速くあなたのコメントをつけて私に送り返してください。

心からの尊敬をこめて

南カリフォルニア大学特別医学研究委員会議長
ロイヤル R. ライフ博士へ
Chataso 大通り 2500
サンディエゴ、カリフォルニア

Appendix P

MILBANK JOHNSON, M.D.
PACIFIC MUTUAL LIFE BLDG.
LOS ANGELES, CALIFORNIA

October 8, 1935

My dear Dr. Rife,

We are about ready to begin our clinical work with the new Rife Ray Machine which seems to be a great success. It has much greater power and penetration than the original which we used last summer.

There are many improvements in this machine which are possible through the great improvements made in radio technique. There is not a moving part, for example, in our new machine and hence we expect it to have a much longer life with harder usage.

We believe it wise to protect the members of the Committee and the physicians from suits for damages. Your Chairman, therefore, has had prepared by experienced lawyers two forms of release which I am submitting to you for your suggestions or approval. Kindly read them over very carefully. Consult any attorney you please if you so desire, and return them to me as promptly as possible as we are about ready to start.

We have tested the machine out very thoroughly both on animals and on cultures, and so far as we can see, it leaves nothing to be desired.

Hoping that you will examine and return the releases to me with your comments as quickly as possible, I am

Yours very sincerely,

Milbank Johnson Chairman

Special Medical Research Committee of
the University of Southern California

Dr. Royal Raymond Rife
2800 Chatsworth Boulevard
San Diego, California

FOR INFORMATION ONLY
SEE PAGES 154-155
REVERSE

付録 Q

ミルバンクジョンソン医学博士

太平洋相互生命ビル ロスアンジェルス、カリフォルニア

1935年12月19日

親愛なるライフ博士へ、

12月21日木曜日.M12:15、カリフォルニア・クラブ2号室での
南カリフォルニア大学の特別な医学研究委員会の会議について。

ジョージ Dock 博士（我々の委員会のメンバー）が世界一周旅行の
ための1月2日に去ろうとしている。数カ月後戻すが、考えるべき
重要な多くの事があるので、彼が去ろうとする前に、私は会えるこ
とを願っている。

我々には報告しなければならない多くのことがあって、いくつかの
研究に対する不可欠な重要な質問もふくめて、あなたのアドバイ
スを受けることを非常に願っている。

私は、あなたが特別な配慮のもと、会議に参加すべきだと思ってい
る。私は会議で可能なかぎり委員会のメンバーを煩わせないように
してきたが、現在不可欠ないくつかの重要事項を決定しなければな
らないので貴方と会わなければならない。

あなたがバーガー博士と一緒に来れないとしても、最近したように、あなたがバーガー博
士に呼びかけていただければ、一緒に来てくれるはずです。

また、バーガー博士が忘れないように、彼を待って、あなたがつれてくるならば、確実に
ここで会うことができます。

この会議にあなたが出席できるかどうか、ご返事をいただきたいのです

あなたと Rife 夫人に

心より

メリークリスマスと、新年のご挨拶をお送りします

心から敬愛をこめて

ミルバンク・ジョンソン会長

特別医学研究委員会

南カリフォルニア大学

R. R ライフ博士

Chatsworth 大通り 2500 サンディエゴ、カリフォルニア

Appendix Q

MILBANK JOHNSON, M.D.
PACIFIC MUTUAL LIFE BLDG.
LOS ANGELES, CALIFORNIA

December 19, 1935

My dear Dr. Rife,

A meeting of the Special Medical Research
Committee of the University of Southern California
will be held Thursday, December 26 at 12:15 P.M. in
Room 2 of the California Club.

As Dr. George Dock, a member of our
Committee, is leaving on January 2 for a trip around
the World and will not return for several months, I
am anxious to have this meeting before he leaves as
there are many things of importance to be considered.
We have much to report and are very anxious to
receive your advice on some questions of vital impor-
tance to the work.

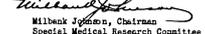
I trust you will make a special effort to
attend. I have tried to trouble the members of the
Committee as little as possible with meetings, but
it becomes absolutely necessary now that we should
meet and decide some vital points.

You might call Dr. Burger and see if you
can't arrange to come up together as you did last
time. Also, it will keep him from forgetting it and
insure his being here if you bring him.

Please let me hear from you as to whether
or not you can be present at this meeting.

Wishing you and Mrs. Rife a Merry
Christmas and a Happy New Year, I am

Yours very sincerely,


Milbank Johnson, Chairman
Special Medical Research Committee
University of Southern California

Dr. R. R. Rife
2500 Chatsworth Blvd.
San Diego, California

付録 R

ミルバンク・ジョンソン医学博士
ロサンゼルス、カリフォルニア
地下鉄ターミナルビル

1937年1月4日

私の親愛なるロイ：私は、いつか前、あなたに書いたが、私のところには、あなたのための p.H 機械がある、ぜひ現在なんらかの手段でサンディエゴへ輸送したいと思っている。

私には、完全な使用説明書がある。

私は、これを送ろうとしたが、今我々は、Belbank の住まいを処分しており、それゆえ、ここから逃げる事ができなかった。

我々の新しい住所は、ハンティングトン・ホテルの近くの Pinehurst 通り 710 (Pasadena.) である。

私はシャルル・マルタン博士 (モントリオールのマギル大学の前の学部長) と何回か話しをした。そして、その人は 2、3 日の間、ここへきていた。

私はマルタン博士を理解させるためにサンディエゴまで一緒に行こうとした。

しかし、彼は単に行く時間がつくれなかった。

しかし、私は彼とモンタギュー・アレン卿と Dock 博士と何回か、話をした。

我々の間で、グラナー博士にとって、もっとも良い方法は、マギル大学によってここへ送られて研究することだという考えを彼に伝えた。

マルタン博士は今まで通り大学の理事会に所属している、そして、彼はグラナー博士を我々に送るようマギルを説得するため、最善をつくすと約束した。マギル大学はグラナー博士の給料と経費を払っているのだ。

マルタン博士は 2 月の最初にモントリオールに戻ってくる。彼は言う、我々はこの話題の上で確かな発展を聞けるだろう。

モンタギュー卿は、グラナー博士がここに送られることはかなり確実だと感じている。あなたと話し合いたい多くの事がある。

そのうえ、あなたに研究所で p.H 機械を受けとって欲しいので、あなたがすぐにここへやって来ることができるよう願っている。

私にあなたがここに着くことを事前に知らせてほしい。

Appendix R

MILBANK JOHNSON, M.D.
LOS ANGELES, CALIFORNIA
Subway Terminal Building

January 4, 1937

My dear Roy:

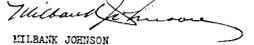
I wrote you sometime ago that I had the p.H. machine for you, and all it needs now is some means of transportation to San Diego. I also have the full instruction book that goes with it. I had hoped before this that we would be coming down, but we have moved, having disposed of Belbank, and hence have been unable to get away. Our new address is 710 Pinehurst Drive, Pasadena, near the Huntington Hotel.

I have had several conversations with Dr. Charles Martin, former Dean of McGill University in Montreal, who has been out here for a few days. I tried my best to get him down to San Diego, but he simply could not get the time to go. However, I had several interviews with him and Sir Montague Allen and Dr. Dock. Between us, we succeeded in selling him the idea that it would be a good thing for Dr. Gruner to be sent out here by McGill. Dr. Martin is still on the Board of Governors of the University and he has undertaken to do his very best to get McGill to send us Dr. Gruner, McGill paying Dr. Gruner's salary and expenses. Dr. Martin will arrive back in Montreal by the first of February when, he says, we may expect to hear definite developments on this subject. Sir Montague feels pretty certain that Dr. Gruner will be sent.

There are so many things that I would like to discuss with you, and also I want you to get the p.H. machine down to the laboratory, so I wish you could come up here some day soon. Let me know before you get here so we can start the new year pulling together for our common goal, namely, success.

Mrs. Johnson joins me in wishing you and Mrs. Rife a happy and prosperous New Year.

Yours very sincerely,


MILBANK JOHNSON

P. S. Please let me know when you can come up.

500 BULECH DRIVE
SAN RAFAEL HEIGHTS
PASADENA

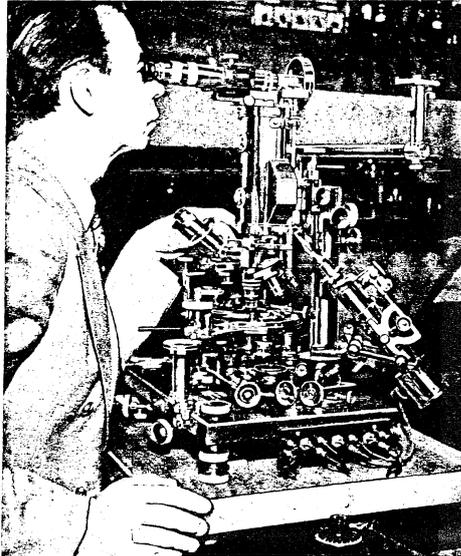
新年になると、我々庶民の目標のため、我々と一緒に成功に向かい始めることができる。
私と妻は、あなたと奥様の豊かで幸せな新年を共に願っております

心からあなたの、

ミルバンク・ジョンソン

P. S. どうか私にあなたがいつやって来るか知らせてください

付録 S



巨大な顕微鏡は、新しい世界を調査できる。

前に決して見られない病源体を明かすパワフルな能力について報告した。
上にあるのはロイヤル R. ライフ (サンディエゴの) によって、カリフォルニアで完成した巨大な顕微鏡の写真である。

その自家製の装置は、世界で最もすばらしいものと長く評価されてきた。
新しい高さ 2 フィートの装置で生み出される画像は、歪みを除くために、通常使用される空気で満たされたチューブでなく、クォーツ・ブロックとプリズムの光路に沿って通す。

重さ 200 ポンドで、顕微鏡には 5,682 個の部品がある。

1940 年 10 月

付録 T

RES4491 サンタクルース

チャールズ F、タリー、D. D. S

外科医で歯科医師

：カルフォルニアサンディエゴ Locan 通り 2064

1954 年 6 月 1 日

私は、周波数装置の治療に関するデータのあなたの要請に応じようとしているが、私が働いていて、非常に忙しいので、それは困難である。

多数の年月の治療経験で周波数装置についての私の知識は大幅に拡大した。

私には周波数装置の個人的な利用が過去 2、3 年間あったが、最初の確かな調査は私自身の proatititis の場合に使った時であった。私はそれで治療を試してみた。

資格のある泌尿器科医は私に gantrisin、ペニシリン、オーレオマイシン(葉緑素 chloromycitin テラマイシン terramycin)を与え、いろいろな結果をみたが 薬はきかなかった。

周波数装置は、私の症例を素早く治療した。

私はそこで、手術のため疲れ果てて病院に急送された私の友人に、周波数装置を使った。

彼は、手術または更なる医療扶助なしで今日、全く良い。

私には医者友人によって私に送られた蝶狼瘡の症例の患者がいた。そして、広範囲の、専門家によって扱われたが、制約は、大きく、そして、病状は進行中であった。

周波数装置による 3 ヶ月の治療の後、蝶狼瘡は消えた。

もう一つのガン(癌)患者の症例は、私の医学博士の友人によって、周波数装置の治療のために私に紹介された。

彼にはありえない制約があった。しかし、周波数装置は 6 週間で乾燥させた

私は、周波数装置が手術後に非常に効果的であるのを見た。

私は感染症の患者で抗生物質の使えない者に使った。

私には、周波数装置での 2、3 の治療においてとても悪い深い溝のある熱口内炎と pyorrea を治療したケースがある。

結論として

私は、述べなければならない。

私は、Frequency Instrument 周波数装置が更なる研究に値するのを感じる。

Appendix T

RE 1954 BULL CASE

CHARLES F. TULLY, D. D. S.
DENTIST
SURGERY AND DENTURES
1000 SAN CARLOS AVENUE
SAN DIEGO, CALIFORNIA

June 1, 1954

It is with difficulty that I attempt to respond to your request for data on the Frequency Instrument treatment since I'm traveling and am very busy.

My knowledge of the Frequency Instrument treatment extends over a number of years, although my personal use of the Frequency Instrument has been in the last few years. My first definite investigation was in that of my own case of prostatitis. I tried antibiotics. A qualified urologist gave me gentamicin, penicillin, neomycin, chlorotetracycline, with various results but the drugs did not do the job. The Frequency Instrument cured my case quickly. I then used the Frequency Instrument on a friend of mine who was being treated at the hospital for a prostatic operation. He is perfectly well today without any operation or further medical aid.

I had a case of butterfly lupus sent to me by a doctor friend, and though it had been treated extensively and by specialists, the condition was large and in progression. After three months treatment with the Frequency Instrument, the butterfly lupus disappeared. Another cancer (retroocular) case was submitted to me for treatment with the Frequency Instrument by an M.D. friend of mine. He had an impossible condition but the Frequency Instrument dried it up in six weeks.

I have found the Frequency Instrument very effective other surgery. I use it alone instead of antibiotics and have not had a case of infection. I have cured numerous bad cases of trench mouth and sprayed in a few treatments with the Frequency Instrument.

In conclusion I must state that I feel that the Frequency Instrument is worthy of further research and that subsequent investigation and use will be of great benefit to all mankind.

Most sincerely yours,

Charles F. Tully

Charles F. Tully

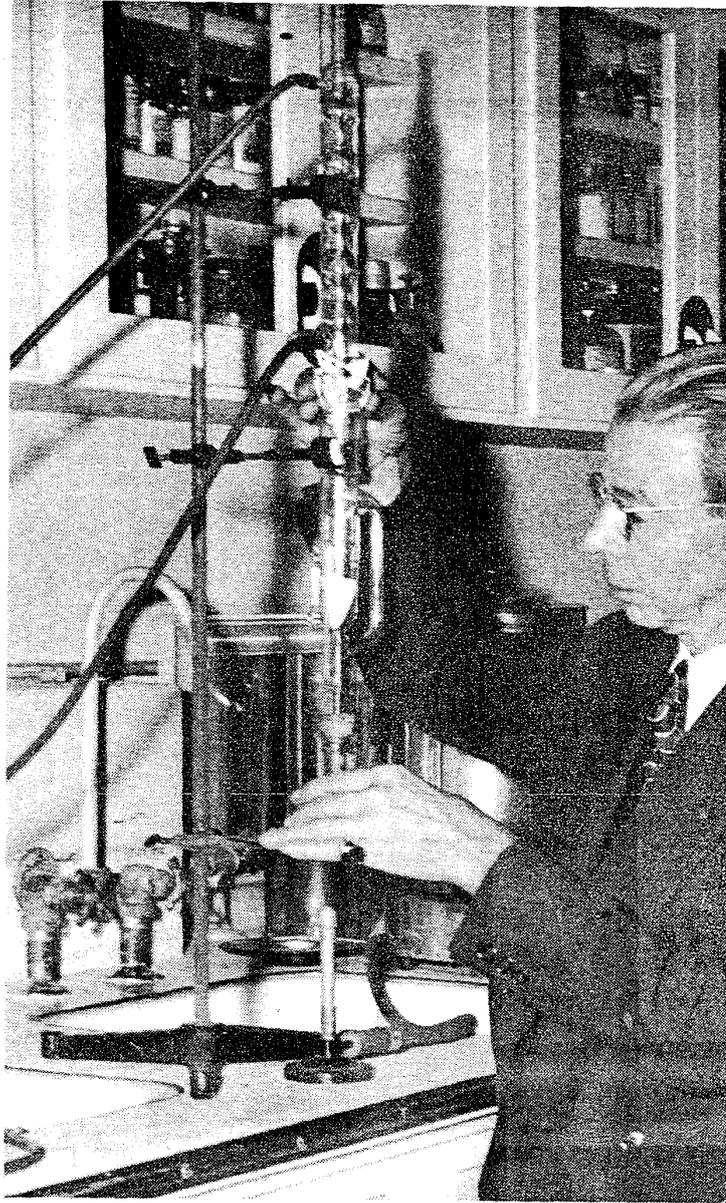
163

そして、以降の調査と使用は、全人類にたいへんな利点となる。

最も心からの尊敬をこめて

チャールズ F タリー、

付録 U



Rife in 1960

ライフ 1960 年

付録 V

Appendix V

宣誓供述書

S・Burlington 通り 677

1月7日に、1965・、ロサンゼルス（カリフォルニア）、90057

関係者各位に：

1960年の春に、私はブドウ状球菌に感染した。

クリーブランド、オハイオのセント・アレクシス病院で実習生の間、この病院でこのアウレウス感染症は、流行していた。

依然として一般的であるように、最大のアメリカの病院でもそれをコントロールするのが難しい。

それは抗生物質で抑えられた脅威培養組織から感染症が始まった。

そしてまもなく、他の6人と私は、全体的に強力な抵抗力のある菌の感染症の被害者になった。

私が周波数装置に出あうまで、その感染症によって、3年間苦しんだ。

それは、私を即時に救助し、菌に対する支配力を与え治療の過程に入ることが出来た。

私は、カリフォルニアサンディエゴの Rife ウイルス顕微鏡学会によって製造された、モデル SQ2、シリアル・ナンバー20、RVM12を使った。

この全身性感染症は、5日間の集中的な治療の後に消えた。

本当に、それはたいへんな救いであった。

足にできた浮腫、脚の左下に長く広範囲な蜂巣状の炎症、そして、足首の変色そして、再び現れた複数の吹出物とおでき、それらを治した。

それは、3年間で2回の入院と持続的な治療を要求されてきた。

本当に、私はあきらめていた。

倫理的に言っても、特に医学の新しい分野の研究と科学的関心を抑えてはいけない何度も、述べるがその人は職業的殉教者である。

私は、研究の冒険が、真実を見つけ出すためだと思っている。

新しい方法を見つけ出すために、多くの勇気、時間と、お金と苛酷な研究をしてきた。

AFFIDAVIT

677 S. Burlington Ave.
Los Angeles, Calif., 90057
January 7, 1965.

To Whom It May Concern:

In the spring of 1960 I contacted a staph. Aureus infection while an interne at St. Alexis Hospital in Cleveland, Ohio. This was a plague in this hospital as is still prevalent in most U.S. hospitals. difficult to control.

The infection started with a threat culture which was suppressed with anti-biotics. Soon after, I with about 6 others, became a victim of this anti-biotic resistant infection which became systemic and chronic.

It was three years of suffering until I came across the Frequency Instrument which gave me immediate relief and control so that I was then on the road for a "CURE." I used the Model SQ2, Serial No. 20, RVM 12 as manufactured by the Rife Virus Microscope Institute of San Diego, California.

This systemic infection disappeared after five days of intensive treatment. Indeed it was a great relief to get rid of the extensive cellulitis for the length of the left lower leg with edema of the foot and ankle with discoloration and multiple boils and carbuncles reappearing which required two hospitalizations and continuous treatment for three years. Indeed I just about gave up.

Logically no research or interest in any new field especially in the healing arts and science should be suppressed. It has been stated, again and again, that one is a martyr to his profession. Such I find true in any research adventure. It takes a lot of courage, time, money and hard work to find new methods. I am of the opinion and belief that if I had not had the treatment on the Frequency Instrument above that I would not be able to get rid of this incurable staph. aureus which anti-biotics could not suppress.

It left me with a deformed right hand and wrist along with the arm in which the distal end of the radial bone shows permanent distorted damage on x-ray study and observation which has reduced the efficiency of the use of this hand and arm about Fifty per-cent.

I am grateful to have had the privilege of the use of this instrument which appears as a specific for certain virus.

I am for any and all freedom of research where life, health and happiness can be improved.

Yours very truly,

George W. Chick, J.D.
George W. Chick, J.D.
Phone: Area Code 213, 485-7448

Affidavit

To Whom It May Concern:

Sworn and subscribed before me..... a Notary Public this 7th Day of January 1965 in Los Angeles, California.

David W. Lee, J.D.
Notary Public
My Commission Expires Nov. 23, 1966

それは私の、意見と信念である。

私に、周波数装置での治療がなければ、この不治の病をなんともすることができなかった。抗生物質で抑えることができないアウレウス菌による奇形の右手と手首によって、私の生きる力も一緒に消え去ろうとしていた。

そして、X線による研究では、放射状の骨の末端部に永久にゆがめられたダメージを示していた。

そして、所見は、この手の力の使用効率を 50 パーセント縮小させていた。

私は、ある種の特別なウイルスのためにこの装置の使用する特権を持ったことに感謝している。

私は、研究の自由が少しもなければ人の命と、健康と幸せは、どこで改善されるかと本当に思っている。

ジョージ Chromiak Jr 医学博士

電話番号 Area Code 213,483D7448

宣誓供述書

関係者各位：

1965 年 1 月 7 日

ロサンジェルス Californla Notary Publi

付録 W

ブランチH・ジョーンズ夫人による宣誓供述書

カルフォルニアサンディエゴ Apt 28 4番街 1840、ライフ周波数装置によって治療を受けた12年後に

私、ブランチH・ジョーンズは専門家の助言の下

1956年4月に、私はガンであると診断され、サンディエゴ病院で5人の医学博士によって確かに手術された、そして、1つの乳房は除去された。そして、ガンが今まで通り私の組織体にあると報告された。そして、膿の流出は厳しいものであった。

1956年5月に私は、ジェームズ B. Couche, M.D 博士によって Rife 周波数装置によって治療を与えられた。

それは、膿の流を止めた。

そして、Worthylake, 医学博士と他のものによって診断され生検によって私の肉腫は治癒したと確認された。

周波数装置は、そのような素晴らしい神の贈り物であった。

私の命を救った！

私のガンを治療した時から、今は12年目である。そして、私は正確で真実でなければ偽証罪の罰をうけるペナルティの下にこの声明を出す。

カリフォルニア州サンディエゴ

私の手で証明する

1968年1月16日

MRS. BLANCHE H. JONES

私は専門家とともに同意し、断言する

1968年1月16日

公立公証人ルシール GROTZ

Appendix W

AFFIDAVIT OF MRS. BLANCHE H. JONES OF 1840
4th Avenue, Apt. 28, SAN DIEGO, CALIFORNIA
CURE FROM CANCER BY THE RIFE
FREQUENCY INSTRUMENT AFTER 12 YEARS.

I, Blanche H. Jones, as Counsel in Pro Per, do hereby certify that in April 1956 I was diagnosed as having cancer and was operated on by five M.D.s at the San Diego County Hospital and one breast was removed and it was reported that the cancer was still in my body and pus drainage was severe. In May 1956 I was given treatments by the Rife Frequency Instrument by Dr. James S. Couche, M.D. which stopped the flow of pus and cured my sarcoma as diagnosed by Dr. Worthylake, M.D. and others by biopsy. The Frequency Instrument was such a wonderful Godsend. It saved my life! It has been twelve years now since it cured my cancer and I give this statement under penalty of perjury as being true and correct.

STATE OF CALIFORNIA)
COUNTY OF SAN DIEGO) ss
Subscribed and Sworn to
before me this 16th day
of January, 1968
Lucille Grotz
LUCILLE GROTZ
COUNTY OF SAN DIEGO
NOTARY PUBLIC

ATTEST my hand this 16th day of
January, 1968

Blanche Helen Jones
MRS. BLANCHE H. JONES in pro per

付録 X

表 バクテリアの研究概要とウイルス特徴 R.R、Rife
1920~1953 に考案され構成された微生物の分類

RESEARCH SUMMARY OF BACTERIA AND VIRUS CHARACTERISTICS

Devised & Compiled by R. R. Rife 1920 to 1953

Copyright 1953 - by Allied Industries

Micro-Organism	Motile	Flagel- lated	Polarity Anode +	Cathode -	Length μ	Width μ	Death Pt. Milliamps D.C.	Thermal Death Pt. (24 hrs.) °C.	Thermal Death Pt. (24 hrs.) °C.	Death by X-Ray	Death by infra-red	Death by Ultra- violet	Dye	Acrobic	Acid Resisting (no dye)	
Eyphilia	yes	no		X	3.5-15.5	33-5	80	39.5°C	103.1	Slight	no	no	Silver Nitrate	yes	no	
Tuberculeta	no	no	X		1.5-3.3	2-5	168	42.5	107.8	no	slight	no	Gentian Violet	yes	yes	
Gonorrhoea	no	no	X	X	1.6	8	39	102.2	no	brisk growth	slight	no	Carmine	yes	no	
Leprosy	no	no	X		1.4-3.3	2-3.5	58	42	105.8	slight	no	no	Carmine	yes	yes	
Actinomycosis	no	no	X	X	Long	3-5	12-2	40	104	slight	no	no	Bismark Brown	either	no	
Typhoid	yes	yes		X	1.3-2.4	5-8	28	39.5	103.1	no	no	no	Gentian Violet	either	no	
Catarhal Inflammation	no	no	X		2.0	1.0	78	47	115.8	no	no	no	Oichma	either	no	
Bacillus Coli	yes	yes	X		1.3	4-7	7	45	113	no	slight	no	Gentian Violet	either	no	
Rubonic Plague	no	no	X	X	1.5-2	5-7.5	140	48	118.4	no	no	increases	Silver Nitrate	either	no	
Tetanus	no	no	X	X	2.4	3-5	64	51.5	122.8	no	slight	no	Silver Nitrate	either	slight	
Diphtheria	no	no		X	1.5-5.8	3-8	175	46	113	slight	no	no	Hematoxyline	yes	no	
Synergistic Anthrax	yes	yes	X		3.5	5-5	71	49.5	120.4	no	slight	no	Gentian Violet	no	yes	
Anthrax	no	no	X	X	5.2	1-1.25	75	45	113	slight	no	no	Gentian Violet	either	no	
Pneumonia	no	no		X	2-3 Diam.		13	47	115.6	no	no	no	Hematoxyline	either	no	
Spinal Meningitis	no	no		X	2-6 Diam.		110	48	118.4	no	no	slight	Silver Nitrate	either	no	
Glanders	no	no	X		1.8-2	23-4	30	50.6	123.08	no	no	no	Bismark Brown	either	no	
Cholera	yes	yes	X	X	8-2.5	1-0.04	74	42	109.4	no	no	slight	Hematoxyline	either	no	
Typhus	yes	yes											Bismark Brown	yes	no	
Influenza	no	no		X	5	8	120	50	122	no	no	slight	Silver Nitrate	yes	no	
Contactus Conjectivitis	no	no	X	X	1-2	25	82	42	103.8	no	no	no	Silver Nitrate	either	no	
Streptococcus	no	no		X	1 Diam.		85	40°	104	no	brisk growth	no	Hematoxyline	either	no	
Streptococcus	no	no	X		4-1 Diam.		120	50	122	no	no	no	Hematoxyline	either	no	
													Universal Microscope Angle of color of refraction chemical refraction			
Cancer Virus	yes	yes		X	1/15	1/20	175	42°C	107.6	no	no	no	-12.3/10°	Purple Red	no	no
Typhoid Virus	yes	yes	X		1/2	1/11	128	41	105.8	no	no	no	+ 5.0°	purple	yes	no
B. Coll Virus	yes	yes	X	X	1/2	1/10	86	43	109.4	no	no	no	+ 7°	dark brown	yes	no
Polio Virus	no	no		X	1/10	1/14							+ 9.5°	reddish brown	no	no
Herpes Virus	no	no			1/11	1/15							+ 14°	yellow	no	no

167

Appendix X

詐欺師に注意しなさい！

この本が発表された時から、長年にわたって、何人かのガレージ・エンジニア、詐欺的商品の売り手と詐欺師が出てきた。善意ではあるが、まぎらわしい代替ガン治療擁護団体と共に、真実の「改善された」ライフ装置としていろいろな効能が「ブラックボックス」に入れられた、装置が売られている。

これらは、300 ドルから 3000 ドル以上までの価格で並んでいる。

私は、この本について関心がある読者がこうした製品を購入する際に注意するよう警告する。

そのような装置を購入し誰かの「治療」のため、手にとるとき、そしてまた、実際にガンと診断された人にとっては、この警告はさらに重要である。

多数のガン患者で本当に成功しているのを見、あなたが「ライフ」装置を与えて、得られた結果を調査しない限り、あなたは個人的に誰かに意見を述べたとしても、あなたの時間または金銭をそれに浪費してはいけない。

現時点では市場に出されている多くの「ライフ」装置より、優れた実績の優れた代替ガン療法が、得られる。

今まで通り、「響き治療」は加速度的なペースで身近にやって来ている。そして、ライフ装置は熱心な開業医と慎重に発展した治療法と結合して、衝撃的な治療を達成している；広範囲にわたるオープンな試験的な使用にとっての唯一の障害は、依然として優勢な政治的な力と法的環境が原因である！

こうした環境が変わるための活動に関心がある方は、下記の住所で私に連絡がとれる。

しかし、私は最後まで手伝いたいが、どんな具合に、動くか、わからない。

この誘いには、がん患者が特別の「ライフ」装置について個人的なアドバイスを求めることなどは含まない。

憶えておいてほしいが、たとえ宣伝広告がなめらかで完全に素晴らしいとしても、偽物がある。（詐欺師は商売が巧妙である）

あなたが答えを期待するならば、自分宛の、住所の書いた封筒を入れなさい。

（誰にも私は、約束をしないが）、

バリー・Lynes

P. O.ボックス 12183

パームデザート、CA

USA 92255

Barry Lynes

P. O. Box 12183

Palm Desert, CA

USA 92255

訳者のあとがき

この本は、医学史を 180 度ひっくり返す歴史的な本といえるだろう。パストールの医学から近現代の医学が始まるとすれば、その影に隠された、もうひとつの医学の本流があるとしたこの著者の提示は、医学会への爆弾とでもいえる衝撃性がある。

この本が提示した、疑問、そして状況証拠に、現在の医学会は、説明責任がそれこそ生まれてくる。それには反論があるであろう。それこそ否定的な嘲笑もこの本に向けられることもあるであろう。しかし、何年も何年も、癌の化学療法と放射線療法、手術という 3 種類が治療法の王道をしめ、それ以外の治療法を基本的には否定してきた癌学会は、この装置で治癒した実績と、それに対して癌センターの所長までもが癌で死ぬといった、おそまつな現象に、どのように反論してゆくのだろうか。まさに見ものである。

医学というものは、人の生死を扱う聖なる任務を帯びたものであるだけに、研ぎ澄まされた科学的精神の誠意が何十にも積み重ねられた作業の上に成り立つビルディングのようなものである。それだけに、医師の権威は尊重されなければならない。しかし、権威というものは、あくまでも実証的に検証されて、あくまでも成り立つもので、一度疑念が生まれたならば、再検証されて始めて成り立つ。その意味で、この本の貴重な警鐘と事実は、医師の真の権威を打ち立てるための、試金石である。この本の主張を否定するにせよ、明確な論旨をもって、新たな治療法を提示していつてもらいたい。

その意味で、この本には本来書かれていなかった、現在販売されている周波数治療器を 2 種類紹介のため掲載した。当然装置の宣伝でもないし、絶対的に、間違いがないと保障するものではないが、欧米で売られているこうした治療器はなかなか見る機会がないのでここに紹介する。

1 つはスイスで販売されている F スキャンである。ライフの治療法を基本的に継承した装置で、フルダ・クラーク博士の研究した成果、ザッパーという機能も付いている。この装置の 350 種類の周波数の分類表を同時に掲載した。1 つ 1 つ病名にあわせて、作動分数を選択して使用することも出来るし、装置が体をスキャンして、自動的に周波数を選んで治療する機能と 2 種類の機能が選択出来る。スイスからの個人輸入という形で為替送金して手に入れることが出来る。メールその他で販売店と英文でのやり取りが必要である。

もうひとつは、ギリシャの物理学者パップスの装置である。ライフの装置の流れそして、テスラの理論の流れ、ケルブランの生体内原子転換の実証と理論的に大変すばらしい考え方で、同時に、治療実績も豊かで、全世界で使われている。使ってみたわけではないので、完全にここで保障することはもちろん出来ないが、ライフ装置の新たな展開という意味で、ここに紹介してみた。

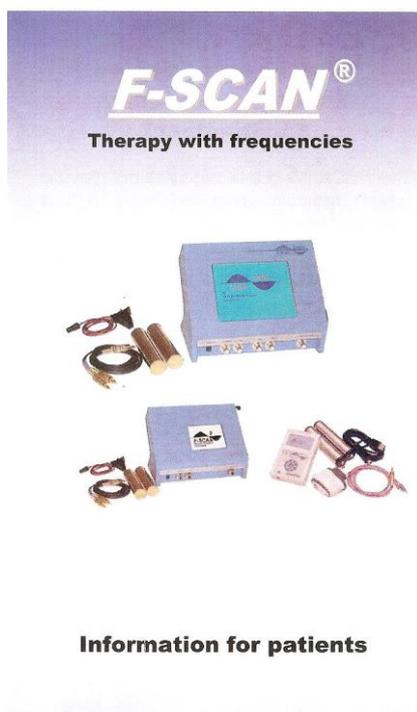
最後に、この本を訳している最中に、宮崎の口蹄疫ウイルスの発生で農家の大被害のニュースがとび込んできた。ライフの理論によれば口蹄疫ウイルスに合う周波数があつてその波動でしっかり駆除できる。ワクチンを打たなくても良いのだ。こうしたことが、70年以上前から分かっていたとしたら、本当に、ため息が出るほど、スリリングではないか。

また、抗生物質の多用によって起きてきた、院内感染についてこの本に触れている箇所がある。つまり、薬が効かなくなる菌に変化していく現象のことである。これから多発するこの恐ろしい現象にどのように対処するのか、このライフの業績と理論を否定して、今の医学会は、成り立つのか、説明責任が求められている。

Therapy with frequencies

周波数による治療

患者のための情報



TB-ELECTRONICS GmbH

TB 電子工学社

Bahnhofstr. 3

CH-9443 Widnau

Tel.:

電話 :

071 722'52 55

Fax:

071 722'52'05

F-スキャン周波数シンセサイザーは何を行うか

シンセサイザー？

F-スキャンは、組織体にパルス電気信号を供給するバイオ-電子装置です。

どんな具合に、F-走査の周波数による装置は、働くのか？

F-SCAN の特別の波状の形態の、非常に正確な周波数は、組織体の免疫系を強化するエンドルフィン、神経ペプチドと他のホルモンのエージェントを刺激します。

機能の低下した器官の機能も増進するでしょう。

これらの積極的な周波数は、バクテリア、ウイルスと寄生虫病原微生物を除くために、彼らの特別の共振周波数の型となって、最後まで手伝えることができます。

これは、健全性の一般的な状態を増進するために不可欠です。

この治療は、長年の有名な経験的なデータに基づきます。

R. R. ライフと H. R. クラーク博士は、装置の注目に値する拡大の一因となりました。

彼らは、他の病害-感染症、炎症、といった病気をうまく処置し治療をした。

F-スキャンは、どんな具合に機能しますか？

あなたのセラピストは、あなたの組織体がどの周波数を必要とするか、最初に分析します。

彼は、DIRP 機能を使うか自身の方法を使うかどうか決めます。

周波数使うのに手に持つか又は足に電極をつけるか粘着性のパッドを使うかまたは、そのほかのやり方もあります。低い振動のものが使われると、あなたは電流の流れを感じるでしょう。

装置が高圧を生み出さないで、これはあなたを傷つけることはありません。

セラピストは、信号レベルがあなたを快適な感じさせるように調整します。

基本的な分析と治療は、1時間かかります

しかし、あなたの状態によって、時間がかかるか短いかわります。

セラピストは、どれくらいの治療が要求されるか、を決めます

どんな徴候が、F-スキャンで一般に治療されますか？

たとえば次のような最大の病気を、治療します：

激痛・ はっきりしない健康障害、一般的な感染症と炎症 フグ感染症 寄生虫感染症
ペースメーカーを使用している患者と、妊婦と電気に敏感な人は、F-スキャンを使用する前に、医学専門家に意見を聞かなければならない。

F スキャン 適応病名

1	abdominal inflammation	腹部の炎症
2	abdominalgia	腹痛」
3	abortion	妊娠中絶
4	abscess	膿瘍
5	acne	にきび
6	actinomyces	アクチノミセス 嫌気性陽性桿菌
7	acupuncture blockade	鍼による神経ブロック効果
8	acute fatigue	強い疲労感
9	acute pain	激痛
10	addiction	中毒
11	adenoma	腺腫
12	adiposis	脂肪過多症
13	adrenal gland strengthening	副腎の強化
14	adrenalin increase	アドレナリン増加
15	allergy	アレルギー
16	amenorrhea	無月経
17	antibacterial	抗細菌性
18	anemia	貧血症
19	angina pectoris	狭心症
20	appendicitis	虫垂炎
21	appendix strengthening	虫垂を強くする
22	aneurysm	動脈瘤
23	Arterioscl erosis	動脈硬化
24	arthritis	関節炎
25	arthrosis deformans	変形性関節症
26	arythmia	不整脈
27	asthma	喘息
28	asthmatic bronchitis	喘息性気管支炎
29	ataxia	運動失調
30	autointoxication	自家中毒
31	back pain	背中の痛み
32	Bechterew's disease	ベヒテレフ病
33	bed wetting	夜尿症
34	blood cleaning	血液のクリーニング

35	bone fracture	骨骨折
36	bone injury	骨損傷
37	brain stimulation	脳刺激
38	brain wave ALPHA	脳α波
39	brain wave BETA	脳β波
40	brain wave DELTA	脳デルタ波
41	brain wave THETA	脳シータ波
42	breast cancer	乳癌
43	bronchitis	気管支炎
44	burn	火傷
45	burning	燃えるような感覚
46	bursitis	滑液囊炎
47	cancer	ガン
48	candidiasis	カンジダ症
49	carcinogen	発癌物質
50	Carcinoma Group 1	癌グループ 1
51	Carcinoma Group 2	癌グループ 2
52	Carcinoma Group 3	癌グループ 3
53	cardiac inflammation	心臓炎症
54	caries	カリエス
55	cataract	白内障
56	cataract non diabetic	白内障非糖尿病患者
57	cerebral dysfunction	脳機能障害
58	cerebral palsy	脳性麻痺
59	cervicobrachial syndrome	頸腕症候群
60	cervicitis	子宮頸管炎
61	chicken pox	水痘
62	chilblain	しもやけ
63	childrens disease	子ども特有の病気
64	cholecystitis	胆嚢炎
65	cholera	コレラ
66	choluria	choluria 黄疸尿.
67	chronic fatigue	慢性の疲労
68	circulatory dysfunction	循環機能障害
69	claudication	跛行

70	cold	かぜ
71	cold feet	腰の冷え
72	cold hands	手の冷え
73	cold upper body	上体の寒気
74	colic	疝痛
75	colitis	大腸炎
76	compensate anesthesia	麻酔の補償
77	conjunctivitis	結膜炎
78	constitutional diabetes	体質的な糖尿病
79	constriction	狭窄感
80	corn	うおの目
81	coryza	鼻風邪
82	cough	咳
83	toxins	毒素
84	cystitis	膀胱炎
85	dandruff	フケ
86	deafness	難聴
87	depression	鬱病
88	detox acceleration	解毒加速
89	detox of anesthesia	麻酔の依存症治療
90	diabetes	糖尿病
91	diarrhea	下痢
92	digestive trouble	消化トラブル
93	diphtheria	ジフテリア
94	down Syndrome	ダウン症候群
95	drug addiction	薬物中毒
96	duodenal ulcer	十二指腸潰瘍
97	dysmenorrhea	月経困難症
98	dyspepsia	消化不良
99	ear in general	耳の一般的問題
100	ear pain	耳の痛み
101	ear eustachitis	中耳炎
102	eczema atopic	アトピーの湿疹
103	edema	水腫
104	embolus	塞栓

105	enlarged epididymis	副睪丸の肥大
106	enlarged liver	肝臓肥大
107	enuconst char fesis	enuconst、fesis 焦げ
108	epicondylitis	上顆炎
109	epilepsy	癲癇
110	Epstein-earr	エプスタイン・バール・ウイルス
111	equilibrium dysfunctioning	平衡感覚の機能不全
112	erysipelas	丹毒
113	Escherichia Coli	大腸菌
114	esophagus disease	食道の病気
115	eye blurred view	目のぼやけ
116	eye inflammation	目の炎症
117	eye arteriosclerosis	眼の動脈硬化
118	facial paralysis	顔の麻痺
119	fainting	元気がなくなること
120	feet fungus (Athletes foot)	足真菌 (水虫)
121	fever	熱
122	fibromatosis	線維腫
123	fibrositis	線維症
124	finger contracture	手の痙縮
125	Fistula ulcer	気孔潰瘍
126	food poison	食中毒
127	furuncle	せつ毛包周囲結合組織の急性化膿性炎
128	gangrene	壊疽
129	gastric enhancement	胃強化
130	gastric trouble	胃トラブル
131	gastric ulcer	胃潰瘍
132	gastritis	胃炎
133	gastritis with gas	ガスのたまる胃炎
134	German measles	風疹
135	glaucoma	緑内障
136	glaucoma	緑内障
137	gonorrhoea	淋病
138	gout	痛風

139	hair loss	脱毛
140	hangover	二日酔い
141	head injury	頭部外傷
142	headache urogenital	尿生殖器による頭痛
143	headache vertebra	頭痛脊椎骨
144	headache parasites	寄生虫による頭痛
145	headache from toxin	毒素からの頭痛
146	headache general	一般的頭痛
147	heart	心臓
148	hematoma	血腫
149	hemorrhage	出血
150	hemorrhoid	痔核
151	hepatitis	肝炎
52	herpes zoster	帯状疱疹 ヘルペス
153	hiccup	しゃっくり
154	hoarse voice	嗄れ声
155	hordeolum	ものもらい
156	hyperacid	過酸症
157	hyperprostate benign	穏やかなハイパー前立腺
158	hyperprostate malignant	悪性腫瘍のハイパー前立腺
159	hypertension	高血圧
160	hypertrophied aden	肥大したアデノイド(aden)
161	hypoacid	低酸
162	hypomnesia	記憶減退
163	hypotension	低血圧
164	hypoxia	低酸素
165	hysteria	ヒステリー
166	immune stimulation	免疫への刺激
167	impotence	無力症
168	infection	感染
169	inflammation general	一般的炎症
170	influenza	インフルエンザ
171	inguinal hernia	鼠径ヘルニア
172	insect bite	昆虫の刺傷
173	insensibility	無感覚

174	insomnia	不眠症
175	intercostal neuralgia	肋間神経痛
176	intestinal ulcer	腸の潰瘍
177	ischia	坐骨
178	itching (anus)	かゆみ (肛門の)
179	itchy	かゆみ
180	joint pain	関節痛
181	kidney stone	キドニーストーン
182	knee joint pain	膝関節の痛み
183	laryngitis	喉頭炎
184	leper	ハンセン病患者
185	leukemia	白血病
186	leukocyte increase	白血球増加
187	leukoderma	白斑
188	leukoplakia	白斑症
189	liver gallbladder	肝臓胆嚢
190	loss of appetite	食欲不振
191	loss of motor sense	運動感覚の喪失
192	lumbago	腰痛
193	lung enhancement	肺強化
194	lung fibrosis	肺の線維症
195	lymph blockade	リンパ障害
196	lymph gland	リンパ腺
197	Malaria	マラリア
198	mammary tumor	乳房の腫瘍
199	measles	はしか
200	menier disease	メニエル氏病
201	menirgitis	menirgitis 髄膜炎
202	menopause feverish	熱病性の閉経
203	menopause general	一般的更年期障害
204	mental retardation	精神遅滞
205	meteorism	鼓腸
206	migraine headache	片頭痛
207	mold infection	カビ感染症
208	motor dysfunction	運動機能障害機能障害

209	mouth herpes	口ヘルペス
210	mucous membrane inflamm	粘膜の炎症
211	multiple sclerosis	多発性硬化症
212	mumps	耳下腺炎 おたふく
213	muscle atrophy	筋萎縮
214	muscle pain injury	筋肉痛 怪我
215	muscle rigidity	筋硬直性
216	muscle spasm	筋けいれん
217	myelitis	脊髄炎
218	nausea	吐き気
219	neck cramp	首の痛み
220	neck rigidity	首堅さ
221	nephritis	腎炎
222	nephrosis	ネフローゼ
223	nerve disease	神経病
224	nettle rash	蕁麻疹
225	neuralgia	神経痛
226	neurasthenia	神経衰弱症
227	neurosis	神経症 ノイローゼ
228	neurosis	neurosis 神経症的な
229	nightmare	悪夢
230	nose mucous hypersen	鼻水
231	obstruction	障害
232	orchids	ラン
233	ostitis	Ostitis 骨炎
234	Otitis	耳炎
235	otosclerosis	耳の硬化症
236	ovaritis	卵巣炎
237	overhydration	過度に水和
238	pain from cancer	ガンからの痛み
239	pain from convulsion	痙攣からの痛み
240	pain from infection	感染からの痛み
241	pain of intercostal muscle	肋間筋の痛み
242	pain psychogenic	心因性の痛み
243	pancreas weakening	すい臓の衰弱

244	paralysis	麻痺
245	paralysis convulsion	麻痺痙攣
246	paralysis rigidity	麻痺堅さ
247	parasites	寄生虫
248	parodontitis	歯周囲炎、歯周炎
249	pelvis inflammation	骨盤炎症
250	periosteum dysfunction	骨膜 機能障害
251	peritonitis	腹膜炎
252	pharyngitis	咽頭炎
253	pharynx	咽頭
254	phobia	恐怖症
255	pleurisy	肋膜炎
256	PMS	月経前症候群
257	pneumonia	肺炎
258	pock	ポック 1 膿疱(のうほう). 2 痘痕(とうこん), あばた.
259	polio	ポリオ
260	poliomyelitis	灰白髄炎
261	pollinosis	花粉症
262	polyp	ポリープ
263	prep or operation	予習または作動
264	prostatic hypertroph	前立腺 肥大
265	prostatitis	前立腺炎
266	psoriasis	乾癬
267	psychogenic delusion	心因性妄想
268	pustules leg/feet	膿疱足/足
269	rabies	狂犬病
270	rachitis, rickets	佝僂病、くる病
271	rapid heartbeat	急速な鼓動
272	rash	発疹
273	renal enhancement	腎臓強化
274	renal insufficiency	腎不全
275	renitis	網膜炎
276	respiratory organs	呼吸器
277	reynauds disease	reynauds 血管痙攣障害の病

278	rheumatoid arthritis	慢性関節リウマチ 1
279	rheumatoid arthritis	慢性関節リウマチ 2
280	rigidity	固縮 中枢神経障害時に起こる持続的な筋緊張が亢進した状態
281	sarcoma	肉腫
282	Sarcoma Group i	肉腫グループ i
283	Sarcoma Group 2	肉腫グループ 2
284	Sarcoma Group 3	肉腫グループ 3
285	scarlet fever	猩紅熱
286	senile ataxia	高齢の運動失調
287	senile dementia	老人性痴呆
288	sensitive mammilla	敏感な乳頭
289	sexual dysfunction	性的機能不全
290	shoulder pain	肩の痛み
291	simple herpes	単純なヘルペス
292	sinus	副鼻洞
293	skin bleeding	皮膚放出
294	skin eruption	皮膚の発疹
295	skin sensory	皮膚感覚 機能
296	slash	深い切り傷
297	sleeping sickness	眠り病
298	slow heartbeat	遅い鼓動
299	small infest ulcer	小さな潰瘍を荒らす
300	sneeze	くしゃみ
301	spleen enhancement	脾臓強化
302	sprain	捻挫
303	staphylococcus infection	ブドウ球菌感染症
304	sterility	無菌性
305	stiff shoulder	肩凝り
306	stomatitis aphthous	アフタ 口内炎
307	streptococcus infection	連鎖球菌感染症
308	streptomycin	ストレプトマイシン
309	stroke of apoplexy	脳卒中の打撃
310	stutter	どもり
311	sunlight allergy	日光アレルギー

312	sunstroke	日射病
313	swollen lymph gland	リンパ腺のはれ
314	syphilis	梅毒
315	teeth decay	歯の腐敗
316	teeth enhancement	歯強化
317	tendon sheath inflamm	腱鞘炎
318	tennis elbow	テニス肘
319	testitis	テスト炎
320	tetanus	破傷風
321	throat edema	のど水腫
322	throat inflammation	のど炎症血栓症
323	thrombosis thyroid dysfunction	甲状腺の機能障害
324	thyroid hypo funct	甲状腺機能の亢進
325	thyroid enhancement	甲状腺の強化
326	thyroid hyper funct	甲状腺のハイパー昂進
327	Tinnitus	耳鳴り
329	tissue edema	組織水腫
329	tissue rheumatism	組織リウマチ
330	tonsillitis	扁桃腺炎
331	toothache	歯痛
332	trauma	精神的外傷
333	traumatic pain	外傷となる痛み
334	trigeminus neuralgia	三叉神経痛
335	tuberculosis	結核
336	tumor CNS	腫瘍 CNS
337	typhus	発疹チフス
338	ulcer	潰瘍
339	ureter stone	尿管石
340	ureter stricture	尿管拘束物
341	ureteritis	尿管炎
342	vegataive dystonia	副交感神経の失調症
343	vehicle sicknosn	乗り物酔い
344	vertebral rigidity	椎骨堅さ
345	vertigo	めまい
346	wart	いぼ

347	warms	のぼせ
348	wound recovery delay	回復の遅れを無くす
349	yellow lever	黄疸黄色の肝臓
350	zapper	病原菌のマイクロ波駆除装置 zapper

Frequenzsynthesizer F-SCAN COMPACT

(SW Version FSC V1.1x)

取扱説明書

ギリシャのパッパス博士の治療器の解説

カナダでパッパス装置の普及版を販売している MagnaPulse による製品の分かりやすい説明の引用

MagnaPulse(使用法の練習とアドバイスのため全日フルサポートをいたします。)

YouTube を見るために、下記のビデオをクリックしてください。説明は簡潔で、驚異的で、人生の見方が変わるでしょう。

マニー・アルバレス博士のフォックスニュースビデオを見るには、下のリンクをクリックしてください。



<http://www.foxnews.com/video/index.html?playerId=videolandingspage&streamingFormat=FLASH&referralObject=41930&referralPlaylistId=search|Manny%20Gets%20Magnetized>

以下の論文を参照した：

我々の体が生きるには PEMF(パルス電磁波の振動数パルスイーエムフリークウンシー)が必要であるという確かな証拠がある：

<http://www.pemft.net/>

この事実を示すのにガガーリンのことは見てみよう。使命をもって、ロシアの最初の宇宙飛行士としてユリーガガーリンは多くの食物、水と酸素とともに健康な男性として宇宙にいった。彼は、1時間と48分の飛行の後、地球に戻って身体検査をうけた。

彼の体調低下の原因となった重要な要素は、パルス EMF が欠けていることであった。この時点で、すでに有名であったが、ファラデー箱で研究された動物と人間の両方がファラデーのおりのため、PEMF's にさらされないため、ほんの数時間で彼らが、骨の損失、力が弱まり、鬱状態となった、代謝の抑圧といった問題を示すことが研究室で証明されていた。

ファラデーのおりは、PEMF の成分を妨害する。

人には最初から持っている周波数がある。それは時間で分割したサイクル数である。

人は調整されたラジオ局とみなせる。

その時の特有の周波数の強度がある。

それはその人のラジオ局の周波数とみなすことができる。

人はラジオ局に特有の周波数があるのを知っていて、正しくその周波数にあわせて、適切なレベルで放送を聞く。

それは、PEMF でも同じ事である。

地球には 7.83Hz の周波数の電子磁場がある。

人の体はその周波数に調整されて、地球が出すものに合わせて快適になり、PEMF の必要性を満たしている。

しかし、そこには大きな問題がある。

体が生きるためには空気がなければならぬが、都市に住んでスモッグと汚染された空気を吸い、あるいは、空気は酸素が少なく、汚れていて、健康のためには良くない。

それは今日、PEMF でも同じように良くない。

最近までの千年間に地球磁場は 30 パーセント落ちた。

つまり、体は、通常より少ない PEMF を受けとっている。

しかし、もっと問題がある。

最近では、特に先進国の多くで、生活基盤に必要なテクノロジーが、我々の体になければならない PEMF を、阻害している。

たとえば、多くの人々は、ゴム底と鉄鋼で補強された摩天楼で働き、または、コンクリートによって囲まれて仕事をしている。

これらの建物と補強された家は、我々の体が必要とする良い周波数を遮る。

年に何度と無く長期間飛行機で飛ぶ多くの人々は、時差ボケについて不満を言う。

こうしたことも体にとって良い周波数が部分的にしか供給されない原因となる。そして、乗客が地上より 30,000 フィート上において、金属の機体に入っている。

その時、いわゆる“電子的スモッグ”を発する携帯電話塔、コンピュータ、PDA's といった多くの電子装置が、そこにある。

そして、このスモッグは、まるで大都会で見られるスモッグのような働きをする。

それは空気を汚染し、健全な酸素をかき消す。

電子スモッグは健全な PEMFs を遮って、細胞代謝に否定的な影響を及ぼす。

これは、十分に PEMF を受けとるためには良い事ではない
体が食物または水を奪われるとき体が困った状態を訴えるように、空腹の痛みと渴きを示す。

体に PEMF 不足があるとき、こうした信号は送らないが弱って、障害の認識と鬱的な落ち込みを感じ始める。

7,000 の研究報告と 1,000 の臨床研究は、体の最適な健全性のために十分な周波数がなければならぬことを証明している。

これはただの私の意見ではない、私が話していることは 7,000 の研究報告と 1,000 の臨床研究に基礎をおいている。

適切な周波数を受けると、切断された指先が再び成長しているのがリアルタイムに見れるよう、実際に録画されている！

我々の体が確かな周波数の強さと質で配線されていることを理解するとき、これらの体に必要な周波数が十分に満たされると、優れた事が起こる。

実際、ツィンマーマンという名前の科学者の研究は我々の体は PEMF を伝えるとその人々の場合は他の人より強くなることを証明した。

そしてたとえば、誰か病気の人の上に手を置くと、彼らの持つポジティブな PEMF は手を置かれた人を和らげる！

アジアでは、元気な気を持つ人は、PEMF 療法と同じように痛みと線維症で苦しむ人々を治癒することを実証した。

現在北アメリカでは、官僚主義のために、PEMF 療法は、たとえ 1,000 の臨床研究で完全に証明し、有効性を実証したとしても申請したとしても、直接に保証はしない。

しかし、証拠は実際ある。

あなたは PEMF が 400,000 人以上の人々によって使われていることを知ると驚くかもしれない。そして、ヨーロッパの 4,000 人のスポーツマン、そして、米国のシャキール O' Neal、テレル・オーエンズ、ランス・アームストロング、モハメッド・アリ、ロジャー・ムーアといった有名なスポーツマンや他の多くの人が使っている。

NASA とロシアの宇宙飛行士のプログラムには、PEMF 機械が導入されている。

それを、覚えておいてほしい。

私が伝えたい事は、体が 10 兆の細胞から成るということである。

そして、それらの細胞の各々はバッテリーのようなもので、それは地球と同じ周波数で動くバッテリーである。

そして、それらの周波数が弱まるか、崩壊するとき、あなたの細胞はより弱い振動になる。

それが弱いレベルになると、体の全ての点が弱まる、それで、よいか？

弱い細胞となると、長期の結果は、どうなるか？

その反対だとどうなるか？

体の電池が完全充電されて、最大出力で動くならば、細胞の機能がピークで稼働して、強く健全な人生を楽しめる。

弱くなればみんなが望む最高の役割を体が発揮できなくなる？

私はそう思う。

PEMF 治療はそれを回復させる。

悪い周波数で打撃を与えられるのが継続すると、弱められたポジティブな周波数が、本来持っている生命の可能性を弱める。

その質を変えて、ポジティブな周波数の性質を利用することによって健全なエネルギーを与えるようにする。

PEMF 装置は病気形成周波数を押し流し、8分でポジティブ周波数で細胞電池を再充電する。

私は PEMF 装置に投資するよりも優れたことを、知らない。

どのように、これらの装置は動くか？

ここで説明すると：

あなたが単にマットにすわるか、椅子を用意して座って、装置を、正しくセッティングしてダイヤルを回す。すると、8分で、体が非常に快適になる。

ほとんど全ての装置は、治療と痛み縮小を促進するため、その体の部位に集中して使うための特別な探子が付いている。

要するに、これらの PEMF 装置を使うと、体のエネルギー場をきれいにし、地球の周波数にリセットしポジティブな電子磁気シャワーを手にとる。

この時まで、わたしはいろいろなエネルギー医療装置をみてきた。

しかし、私が見つけ出した最高のものは、パルス EMFT 機械である。

しかし、全ての PEMFT 機械は同じでは、なかった

このメッセージの初めに、その位置で利用するためにラジオ局の正しい周波数にチューニングするたとえを書いた。

それに注意することは重要なことで、市場に出ているいくつかの PEMFT 装置は、いわばラジオ局の数が制限されている、そして、完全に必要とする正確な周波数に調子をあわせることができない。

場合によっては、あまりに大きすぎる出力ボリュームのものもある。

言い換えると地球の周波数が 7.8Hz なので、現在の機械の電流の強さが 30~60 マイクロテスラ (uT) にできる限り近いものを求めなければならない

そして、悲しむべき真実は、大部分のこれに類する機械はない、そして高い強度を求められるかもしれないが、実はあまりに高い強度のものは、医者や医学的管理の下では、望ましいものではなく、効果とは言えないものを与える。

機械が何を行うのか知らないと、PEMFT 機械を買う際に、悪い決定をし、高くつく間違い

を後悔するかもしれない。

グッドニュースは、私は困ったことが起きないように確認するのを手伝えるために常時いる。そして、PEMFT 機械を受けとったあと長年素晴らしい利点をえるよう手助けをしている。私が完璧にチェックした PEMFT 機械が健康を改善する項目が、ここにある。ベスト 1 から始まってほとんど役に立たないものまで続いている。

さあ見てみよう！

病気の原因となるナンバー1 が

細胞の故障と毒性を守る健全な習慣は、ビタミン、運動と優れた栄養分をとること。

これらの習慣はあなたに健全な免疫系を与えて、病気になることから、あなたを守る。

我々は産業の進んだ、豊かな国に住んでいるが、パーソナルなエネルギーの損失で苦しんでいる。ストレスと環境汚染は、不十分な運動と不適切な治療食と共に、エネルギー的にバランスのわるさを作り出して、我々からエネルギーを奪う。

もはや細胞は、正しく機能しない。

この状況は、循環機能の低下、機能の衰え、早老と変性疾患に導く。

本来の健全な体の状態を取り戻すために、細胞機能を回復させる必要がある。

Pulsed Magnetic Energy の通常の使用は、組織体のパワーが細胞を修復して、病気から回復するのを可能にする。

不健全な細胞が、健全な細胞になってゆくを見る。

細胞膜と細胞核の機能は、明確に分かっている

酸素と栄養分の十分な生命活性エネルギーの流れは、あなたの細胞代謝を改善する。

なぜパーソナル健康管理のため、パルス磁場が、最もよいか？

低いパルス磁場の、主作用は次のものである：

細胞代謝を刺激する

この効果は人体のプロセスの連鎖の原因となり、副作用なしで健康になるよう改善に導く。

細胞はそれ自身のエネルギーを生み出している。そして、それは ATP (アデノシン Triphosphate) と呼ばれる。

このエネルギーは、組織体を変化させるため、積み重なった阻害分子を打破して、細胞膜全体に必要な物質を輸送する。

酵素、ブドウ糖と栄養分を含むエネルギー、細胞の求める酸素と他の 90 の必要な栄養素を生み出す。エネルギーに加えて、細胞は二酸化炭素、水と廃棄物を生み出す。

きちんとこれらのプロセスを実行して、コントロールするために、優れた細胞代謝が要求される。したがって、細胞は 70 から 90mV (ミリボルト)、の膜電位を必要とする。

この電気能力が落ちるときはいつでも、積極的な代謝に障害が生まれ、機能の低下と慢性疾患の、結果となる。最後に、あらゆる病気は、障害のある細胞代謝の結果である。

Pulsed Magnetic Energy には疾患プロセスにどんな効果を生むか？

パルス磁場には、疾患プロセスに対して良好な影響がある。イオンに代わって、パルス磁

場は、膜の正常化に導く。

パルス磁場の主な効果は、以下の通りである

1. 血液循環に影響を及ぼし、それを正常化する

血流に含まれた粒子は、周波数のリズムで振動する。

これは、細い毛細管での摩擦と流れの妨害を縮小させる。

血流（血液循環）を増加させ、同時に、酸素と二酸化炭素の分配率を増やす

2. 酸素の配給を増やす

全ての研究は、血液で、最高 80%の酸素情報の劇的な増加を実証した

3. 細胞膜の電位が正常化される。

普通、体の消耗はストレスまたは慢性疾患の原因となり、細胞膜の電位を低下させる。（通常 70~90mV の間にある）この能力が 0 レベルに接近するならば、細胞は死ぬ、

細胞は、この能力を維持するために、そのエネルギーの 50%を使う。

MagnaPulse と PAP-IMI、の特許を受けたイオンの移動システムは陽子（H⁺イオン）の選択的な動きを可能にする。そしてそれは、細胞膜を活性化する。

このように、膜は過分極化され、膜電位を正常化する

4. 細胞にカルシウムを流入させる

細胞膜のエリアの H⁺イオンの濃度は増加させ、膜の近くの pH 値が、縮小する。

これは細胞膜の層の、タンパク質からカルシウムを放出させるようにする。

束縛を解かれたカルシウムは細胞の中心に流入して、多数の代謝反応の起爆装置となる。

マクロファージ細胞（感染症の予防として機能している組織細胞）が起動し、免疫系が強くなる。

代謝活動が起動する、そして、一酸化窒素（有力な血管拡張要素）が生み出される。

そのうえ、細胞形成（細胞の構造の形成とその役割と増殖機能）が刺激される。

これらの 4 つの結果は、パルス磁場の基本的な効果である。

酸素は、不老不死の霊薬である（それなしで、我々が存在することができない）

パルス磁気の手品のような働きは次のようである

1.

原子を励起させ、電子のスピンを刺激し 3 日間エネルギーを蓄え続けるようにする)

2.

分子は各々の磁気パルスにわずかに同調する傾向がある。そして特に励起状態のとき、結合するのが簡単になる。

3.

pH は 100 倍アルカリ性に進む。そして、それは酸素の取り込みを豊かにし、いくつかの有害な実体を抑える。

4.

粘性が、16 オーダー動いて、細胞ゲートへの流動体の流れを増やす、またはリンパの粘性を薄め流れるようにする。

5.赤血球は数分で、分離する（おそらく、すべては正電荷を帯びて、互いをはね返す）。そして、より多くの表面積に酸素を輸送する。

6.

見た目でも1分以内に血管系をリラックスさせ、治療で20~30パーセント血圧を低下させる。

7.

まるで体の役割が微調整されるように、治療によって全身の反応が活性化する、あるいは、体のタービンが充電される。

多くの異なる問題も、良くなる（しばしば目標とされた問題だけでなく、期待されない事も優れたものにする）傷は、通常の3分の1で癒える

8.

通常の3分の1の時間で骨のカルシウムの質がよくなる、そして骨の多くの細胞のDNAが、活性化する。

9.

エレクトロポレーション(電磁消散作用)は、細胞のゲートが開く現象である。

毒素を解消させ多くの溶媒(H₂O)の通過を許す、

または、医薬品またはハーブの優れた効能が働くようになる。

10.

最も重要なものとして受け入れるべきものは、細胞内のナトリウムがカリウムに変化することが可能である、これは数分でしばしば痛みを弱め、痛みを縮小する（それは米軍が研究し文書化されている）

11.

電磁パルスは人体にマイクロの電流を発生させる原因となる、そのエネルギーは神経路の中を走る。これは、脳に痛みの信号を流れるのを許可する神経のゲイトにアクセスが集中することで神経繊維が痛みの信号を送れなくさせる。痛みの信号が少なくなることで、痛みの認識が少なくなる

12.

パルスの速度は、博士のおかげで、とても速い（100万分の1秒未満！）パッパス発明は、原子を熱する時間なしに、ものすごいエネルギーの総量を使うことが可能で、以下のことが可能となる

体に深刻な問題が起きている場合でも、特別な作動をさせるために必要十分なエネルギーを体内にいれられる。

ほとんどの場合、対抗反応なしにパルスエネルギーを1時間ほど、対象となっている病気の部分にいれることが可能である

MagnaPulse

(Full training and 24/7 support also offered with purchase)

(購入すると完全な訓練と全日のサポートが、提供される)

この注目に値する装置は電源スイッチと、1分から5分までのタイマー、毎分のパルス速度と（強さ）を変化させるノブ、の3つのスイッチだけに単純化されている

すべての装置は車輪と取っ手がついた美しいデザインケースに入っている、（寿命の保証がされている）。そして、旅行荷物として運ぶことも出来る。

2つのケーブルがある。

最初の1つは Papimi を使っている人にはなじみがあるループである。

他のケーブルは、ひざ、肘と肩のまわりに巻いて使用するため小さなループが2つ取付けられている

他の一連のデザインも、入手できる

PEMF のセラピストは言う：

力強いパルス磁気治療パワーに感激し、北・アメリカの先端技術に助けられた、非常に経験豊かな電気技師は、21世紀に新たな MagnaPulse を我々に持ってきた。

私は最近6年間 Papimi の治療技師であった。そして、私自身非常に深い感銘を受けた。

Pappas 教授の Papimi よりそれは非常に強力なエネルギーを入れる。

ことばでは、私がどんな具合に深い感銘を受けたか表現できない？

これは、究極の選択である？コストがヨーロッパのモデルより 75%少なく、重さもほんの 49 ポンドである。

車輪がついている

そして気軽に外に運べるハンドルが、ついている。

飛行機に載せられる、荷物である。

そして、このケースには、寿命保証がある。

4年間の保証がある。

（新しい Papimi を購入するのに、北アメリカで1年、他の世界で2年間かかる

しかも、あえて言わないが北アメリカで新しいものは入手できない）

しかし、私が入手できないと言ってはいけないと、私の患者がいう。その人は例外なく Papimi の代わりに MagnaPulse で処置されるほうを選ぶ。

（もしこれを読んで、これらの患者のコンタクトしたいとおもったら magnapulse@telus.net に電子メールを送るなどして成果を知ってください）

人は、これらの意見に納得するでしょう：

ギリシャの Papimi と比較して、Magna Pulse の製品は、重さの 1/4 で、はるかにより強力な磁場を生み出し、荷物にしても、メンテナンスも含めてユーザーに使いやすく、2年間より長い保証と、一番は定価が 75%も安く、コンパクトで旅行用になっている

私は、最も高く推薦する。

このサイトの所有者として、私は付け加えると、上記の意見にパップスから完全に同意を受けていることは喜びである。

ギリシャの Papimi より、MagnaPulse はより新しい強力なテクノロジーである。

しかし、我々の確かな研究のサイトとして、また、パノス・パップス博士の才能を失いたくない。

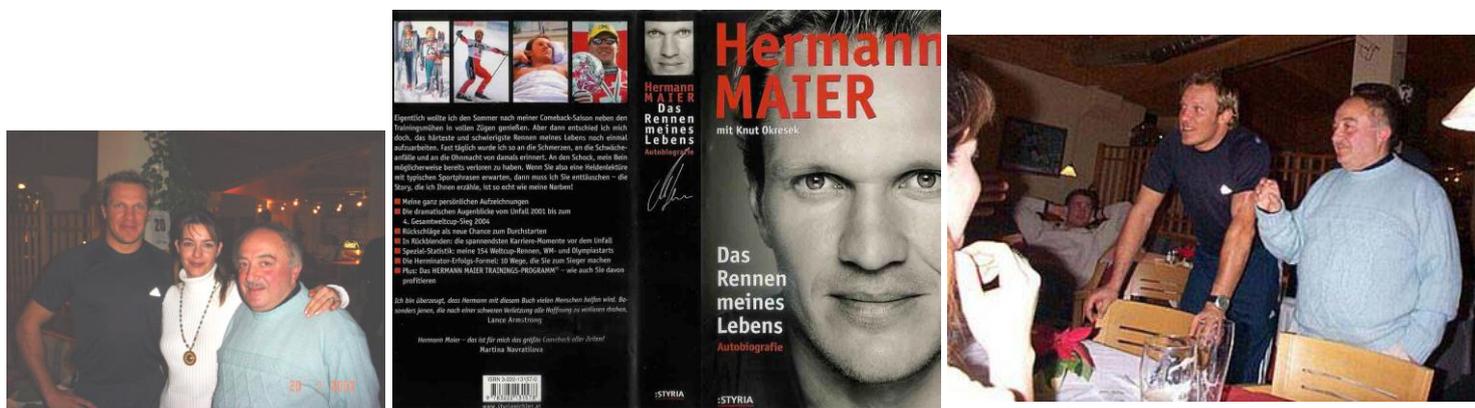
MagnaPulse のような装置を可能にするには彼の疲れを知らない献身があった。

パップス博士の独りの手で作られた、パルス磁気学による Papimi の名前入りの製品がある。このことは覚えておいてほしい。

彼は、パルス磁気事例研究で世界最大のデータベースを作った。

感謝したい。

Kesh ゴードン--Kesh Gordon



パップス博士とヘルマンマイヤー選手

ヘルマン・マイヤー(あだ名「Herminator」)は、前のスキー世界大会で3回挑戦し、オリンピス山の2回の挑戦と、現在の彼の最近の勝利で、彼は、オーストリアの無敵の英雄になった。

彼は、18カ月前、ほとんど彼の脚の自由を失う自動車事故にあった。

彼は、2年間出ていなかった。

Georges Alexander Von Breunig's の、チャック・ヴァラツハとパノス・パップスから推薦され、彼は2003年1月にPAPIMI治療を始めた。

その2週間後、彼は再びスキー競技を始めた。

彼の復帰は、ヨーロッパのセンセーショナルな話題になった。

先週のチャンピオンシップでは、彼は第10位になった、そして、第6位に、それから誰にとっても予想外なことに、彼は2003年1月27日月曜日に国際的なスラロームレースで第1位になった。これは、オーストリアと西ヨーロッパで最大のセンセーショナルな事件の一つであった。

ライフ装置が発展した PAPIMI 装置について

このパップスの作った PAPIMI 装置は特斯拉と D'Arsonval の電子治療装置と同じ範疇に属している。特斯拉と D'Arsonval の電子治療装置は、この 20 世紀が始まって以来、成し遂げた驚くべき結果のため、ほぼ半世紀の間あらゆる病院と医療センターで非常に人気があった。

その後、これらの装置は、外科的要求を意図した“外科的電磁気ジアテルミー装置”または一深部加温を意図した（短波）ジアテルミー治療装置と呼ばれた。

これらの装置の現代の科学用語は、パルス電子磁場（PEMF）発生器である。

また、パルス凝固装置とパルスレーザー（それは、今は物理療法医学の分野に入り始めている）と、同じカテゴリーに入るかもしれない。

正式には、PAPIMI 装置は、短波“ジアテルミー”装置として言われるだろう。

標準的で古典的な（スパーク）ジアテルミー療法のオリジナルな装置は短いパルスでからの深部を温めることを意図していた。

しかし、この PAPIMI 装置は、最新の関連したテクノロジーと科学的な知識と最新の経験を比較研究し、技術的努力を重ね、これら全てを結合した結果作られたものである。

PAPIMI は健康回復センター（全国痛み学会）、

国際痛みリサーチセンターとロサンゼルス、サンディエゴ、北メキシコ、カナダとヨーロッパのエリアの他の多数の研究センターにおいて対応するすべての最新の装置と比較された。

PAPIMI はすべての他の対応する装置より 100~1000 倍速いのが見られ、より効率的だった。

PAPIMI の優勢は、他の PEMF 装置より速い独特の高いパルスにある。（10,000~100,000 と速くピーク値が高い）、

しかし、パルスが供給する熱エネルギーは、対応する装置の供給する熱エネルギーと比較して非常に少ない。

PAPIMI パルスは、ずっと短い間隔で脈動する。

1900 年-1940 年間の D'Arsonval と特斯拉（ジアテルミー療法）装置は体に与える少ない熱エネルギーの結果、熱破壊と熱損傷は分散され、避けられる。

一方、分子の内部自由度にバイオ・エネルギーを与えることによって、破壊ではなく、生物学的合成の現象が、起こる。

対応する装置と比較して PAPIMI の効果の違いは、理論的に最先端のパルスを出すという特徴による。（その速度の速さと同様に）

これらの優れた特徴は、Pt パップス教授の以下の仮説に基づく：

「電磁パルスが高く、より短い期間であるほど、分子の内部自由度の効果が、より起こる。

これらは、生合成を起こす要因になる：

無秩序状態は起こらず（それは、生命の破壊の要因である）熱の発生がなければいけないだけ、生物学的に有益な効果も大きい。

分子の自由度の発現は外へ熱として表れる。そしてそれは従来の温度計で、温度として記入される。これは、破壊的な化学活動を活性化させる。

それは、巨大分子の破壊に導く。極端な加熱（核分裂の熱）の現象のように、熱による物質破壊、熱分解、燃焼、融解、蒸発、他の形の破壊につながる。

我々は、高温が例外なく物質の結合を破壊するという事実によって、熱破壊の可能性を十分認識している。

しかし、内部自由度の発現が見られても、従来の温度計では変化が見られない。それどころか、分子の内部自由度として分配される生体エネルギーは、分子の成分を長く結合させる化学活動を速める。

すなわち、葉緑素の成分と生きている生体の物質または生細胞の生物学的機能に、ミューラー現象といわれるものを引き起こす。

一般に、外部自由度を与えるエネルギーは、熱エネルギーと考えられる。それを破壊または死亡に導くエネルギーと述べてもよいかもしれない。

分子の内部自由度を増加させる、生体エネルギーは、一般に生命システムを維持し造りあげる生体エネルギーと考えられる。

PAPIMI 装置の働き

磁場は、電場または電磁場に反して、ほとんど至る所で自由に浸透する。

装置の磁気放出端子がティッシュにあてられるとき、その磁場は組織に拡散して、これに浸透する。それは少しの抵抗も受けない。（地球の自然な磁場のように）

パルス方式で、浸透した磁場は、急激に変化する。

それは発展して、急に消える。

ファラディの電磁誘導の法則で、消失した磁場はその位置に周期的に電界を残すことが知られている。

パルス方式で、磁場が侵入し、磁場が消滅すると、組織深くに電界が発生する。

ガウスの法則によるとティッシュの表面は非伝導のシールドを構成し、よく知られているようにファラディのゲイジになるので、従来のどのような方法で誘発された電界でも、外側から組織に深く浸透するのは不可能だった。

さらに、表皮効果で電界フィールドはティッシュに深く浸透しない。

したがって、ティッシュへ電磁生体エネルギーを侵入させる唯一可能な方法は、PAP-IMI. 装置の使用と特許を受けた仕組みだけである。

一般のジアテルミー療法のパルスと比較して PAP-IMI. Device のパルスの特殊性は、何か？

特異なパルスは、こういった種類のどんな装置のパルスよりもかなり長い休止期と、かなり短い放出期がある。

このように一般のジアテルミー療法に反して、供給されるエネルギーはごくわずかなもので低く、したがって、暴露された組織の熱上昇はごくわずかなもので低い。

各々のパルスの強さとパワーとは、大いに増大することができ同時に、各々のパルスの放射時間を、短いものにすることが出来た。

PAP-IMI.パルスは、短くそして強いものにされたので、分子の内部自由度を起動させるので、核バイオ共鳴とバイオ励起を生じさせるのかもしれない。

強く短いパルスの、限られた時間の、限られたエネルギーは、分子分解に導くエネルギー、すなわち熱エネルギーの増加に関与しない。

このように、パルスは分子合成と形成を速めるのに理想的波動である。そのために、物質の内部自由度と、特に、核成分が生物的に励起する効果が発現する。

フランスの研究者ルイス C.ケルブランの発見した生物学的原子転換の説明での：

$11\text{Na}23 + \text{電気エネルギー} + 8\text{O}16 = 19\text{K}39$ の式は、このナトリウムが酸素とエネルギー（磁気）をプラスされて、原子核の段階で、カリウムに変わったことを意味している。

これは細胞のナトリウムとカリウムポンプのプロセスとして、生物学で知られているが、そのやりとりは原子転換といったものではないと仮定されているが、誤っている。

カリウムは、細胞に連続的に中に入り、そして、ナトリウムは細胞から連続的に出ていくという仮定は、誤っている。

これらは2つは、明らかに不可能なプロセスである！

この核過程は、熱分解率なしに熱モードなしで成就している。

これは最も重要であると同時に、最も一般的に見られる生体による原子転換の現象である。

したがって、PAP-IMI.装置は、科学的な仕組みに基づいて生体エネルギーを物質の内部自由度に提供する能力を持ち、生命現象で基本的に重要な核生体エネルギーを供給するのを可能にする装置である、

詳細はパップスの“生命の方程式“をクリックし見てほしい。

PAPIMI の装置を植物に使う

PAPIMI.装置は、装置は種の成長で、信じ難いほどの効果がある。

これらの結果は再現可能で、重要なので、アテネ大学農業委員会によって研究された。

そのうえ、装置による照射で、少しの遺伝子の異常も、毒性または危害の発生は、示されなかった。それとともに、植物の成長が少しも期待されないような不利な条件下で、装置は成長の速度を上げるのに効果的であることを証明した。

また3年間連続して、セイント Savva Papanikolau 病院研究所は、関連した結果を小動物でも発見した。小動物も成長した。

そして、遺伝子とか他の異常なしに連続的に子どもが生まれ増殖した。

アテネ大学農業委員会は、PAPIMI.装置で、実際的に植物と、種の成長の研究を続けている。

最も緻密な協力は、ピレウス教育、技術学会に関連した論文である。

我々は PAPIMI.デバイスを用いて曝露し育てている種と植物の実験写真を見せる。

各々の実験は、ほとんど 5 分から 1 時間まで続けた。

ラベルをつけられたポットは、PAPIMI で暴露されたものである..

暴露された植物と、非暴露の対をなす植物を比較してみる。

PAPIMI.装置で植物と種に暴露する。

最終的に、暴露されたものと非暴露のものとの、対をなす植物の違いはあまりないように見え、一見したところ、ほとんど同じに見える。

しかし、PAPIMI.装置で暴露された植物から育て始めた雑種第二代の新しい植物を比較した。写真は、2 本の育てられたトウモロコシ苗、非暴露のものと暴露された種とを示す。

非暴露された苗と暴露された苗の対を比較して、暴露されたものはかなり分厚い体と 3 つの新葉に気がつく。そして、非暴露のものは 2 枚の葉がある。

PAPIMI.装置で水を処置すること。

トウモロコシの苗で実験した。

残り半分が処置せず、トウモロコシの種の半分は栽植の前に PAPIMI.装置で 40 分間暴露された。

注意：

これは何年も前 1990-97 年に書かれた序論である、そして、原子転換の現象には詳しくは触れていない。しかし、すべての結論は今もなお有効である。

電子治療装置の簡単な歴史

目次

初期の電子治療装置 テスラと D'Arsonval タイプの装置

ライフの装置、

クレーンの装置、

Lakhovsky の装置、

ブリオレの装置、

ドットの装置

Rapsomanikis の装置、

初期の電子治療装置

D'Arsonval タイプとテスラのタイプの 2 種類の電子治療装置

(以下の情報は、「Noble M.エーバーハート医学博士 (DCL) によって 1919 年に書かれた「高周波の電流 High Frequency Currents」という本からのものである、

第 5 版、新しい医療出版株式会社 (シカゴ 1919 年))。

初期の電子治療装置は、ライデン瓶コンデンサー放電に基づいた。

これらは、主に D'Arsonval タイプとテスラのタイプの 2 種類であった。

これら両方の種類は既知の高電圧の、減衰波 (DW) のテスラと同じ仕組みに基づいており、周波数生成器に無線で繋がれていて、出力回路が異なっている。

テスラのタイプは、昇圧トランスを - 可能なだけ高電圧を出力出来るテスラコイルだが、- 非常に低い値で、作動するよう制限して使用した。

他方 D'Arsonval のタイプは、より高い電圧の作動を提供する (異なる出力回路と結合する)。

D'Arsonval タイプは、一番人気があった。

両方の装置の種類はいわゆる「Oudin 共鳴器」を使用することが、標準になった。

Oudin 共鳴器は、真空のガラス管または低い圧力管であった。

これらの出力装置にこの発光管をつないだ。そして、コロナ放電、または静的放出をもたらした - ガラスの蛍光管を通して、患者の体に届く「冷えた光」の高周波療法として知られていた。

初期の電子治療装置は、トンプソン・プラスター X 線社、ヴァージニアの Leesburg、ような大きな会社によって作られた。

これらは、ほぼあらゆる病院で非常に人気があった。

これらの装置はエーバーハート教授のマニュアルでは 120 ページ以上の数が記載されて、いる。

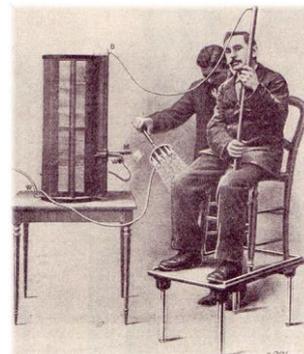
装置の使用例を、アルファベット順に示す：

膿瘍、にきび、二日酔い、放線菌病、腺炎、静脈瘤性潰瘍、いぼ、書瘻、首のねじれ。

これらの装置は、振動が減衰する性質のために、脈動性であると思われる。そして、これらはピーク値でも、電力が低い平均的エネルギー装置である。

これらの装置は細胞間の活動を興奮させ、細胞の物質の出入のやりとりを強化し、結局代謝を強化し、細胞の電子多孔性を増大させる、といった考えと同じ原理で作動するはずだ。

Oudin の低圧の発光管の機能は、主要な DW 振動(パルス波)に興奮して Oudin 発光管で起こる独立したコロナ振動で、振動のピーク値の、瞬間的な電力の激烈さを強化すると、推



テスラ



D'Arsonval

理される。

ライフの装置

ロイヤル R ライフは、Elkhorn ネブラスカで生まれた。

1913 年の 25 才で、彼はサンディエゴに到着した。

7 年間、彼はアメリカのために外国の研究所を調査するために、ヨーロッパに旅行した。

大きなドイツの光学会社のツァイスは、その一つだった。そこでライフ顕微鏡をつくる技術を学習した。(彼は、C・ツァイスによって個人的に養成された)

彼が後の装置を構築するのに必要な機械技術を学習したのは、この期間であった。

彼は、細菌学と顕微鏡に魅了された。

彼の専門は、本当は電子工学ではなかった。

ライフ顕微鏡は有名で、この装置の倍率の大きさは驚異的である。

しかし R ライフ周波数装置については、あまり知られていない。

彼が最初の顕微鏡を作って、彼の最初の周波数装置を得て使用したのは 1920 年で、それは実は D'Arsonval タイプの Oudin オーディン真空ガラス管を備えたトンプソン-プラスター電子治療装置の一種であった。

(この情報は、J.クレーンのアシスタントから著者は個人的に情報をやりとりし、それ以後、もう一人の、アシスタントの 1 人、J.フロレスからも確かめた)。

ライフの成果としてガンの治療、微生物とウイルス、その他を消去することが、記載された。

1912 年に、偉大な発明家 L・デ・フォレストは、連続した波動振動 (CW) を拡大し、作動可能にするため、有名な三極管真空管を発見した。

現在連続波法 (CW) で、人間の声、音楽、響きまたは情報を送ることが可能なことが知られているが、減衰波 (パルス波) はこれらには不向きである。

減衰波の性質は逆に、伝えようとしている響き、または情報のじゃまとなって騒音となる。

1920 年の、8 年後、テレコミュニケーションとラジオのために、連続的波動であるヘルツ波-連続波 CW を使って最初に、放送された

音響、音楽と絵は、結局 CW-ヘルツ波で放送されるようになった。

しかし、CW 連続波は最適なのはラジオとテレビで、電子治療装置に使用するのには不向きであった

結局、残念なことに、CW-連続波のニューテクノロジーはライデン瓶、三極管による火花ギャップ、四極管真空管振動子に代わって、初期の電子治療的な装置に入れられ、パルス波ではなく連続する振動が使われた。

誰も、DW(パルス波)を望まなかった。

DW(パルス波)は原始的と思われた。そして、音響と、音楽と絵を伝えるためにはパルス波は不適切だった。

減衰振動の波（DW パルス波）は、もはや過去の歴史であった。

誰もが、ニューウェーブの可能性とテレコミュニケーションに魅了され、誰も（ライフ以外は）古い DW パルス波の波の生物学的重要性を知らなかった。

減衰しない波または連続波法 CW は新しい現実を作り出し、ニューテクノロジーで、ラジオ・テレコミュニケーション、ラジオとテレビの時代が始まった。

そして、結局、電子治療装置の時代は終了した。

テレコミュニケーションは、今日、大部分の電子工学技師が非常によく知っている CW 連続波の搬送波に基づいたものだ。

ライフは明らかに、この傾向に続いた。

彼は、なんとかラジオ真空管技術を使った CW 発生器を得ようとした。

彼は現在のライフ発光管である、新しい Oudin 真空管を作り、接続した。

しかし、連続的な機能による CW 電子治療装置のニューテクノロジーは、明らかに、医学効果がなく、刺激的な熱をもたらした。

新しい名称ジアテルミー療法（ジアテルミー療法）の新しい効果の特徴は「深部加温」であったので、古い名前が表していた電気による治療を意味する-エレクトロセラピー は明らかに不適切だった。

ライフは彼の時代の前の顕微鏡ではある種の微生物は見られないことを知っていたが、同じように、古い電子治療的な DW 装置と、CW 連続波発生器でも質の違いがあった。

ライフはす速く理解した。

効果がない理由は、非中断の CW 連続波にあった。

彼は、CW 連続波を使わず、古い電子治療的な装置の減衰波（DW パルス波）でシミュレーションするべきだと判断した。

ライフの時代に（生物学と医療のために最初に DW パルス波の重要性を認識したことは、彼の時代では頭抜けていた。

ライフの発生機は現代のラジオ真空管技術を使用し、CW ラジオ周波数生成器を使うか、または、何種類もの DW パルス波を患者ごとに、組み合わせて使うため、もう一つのアンプでオーディオ周波数をパルス化して調整して使った。

ライフは調査して、このパルス化したオーディオ周波数が多数の治療効果の原因であり、CW 無線周波数では出来ないと主張した。

（「ガン治療はされた」バリーLynes、マーカスブックス、オンタリオ、1989 年を見る）。

古いパルス波の電子治療的な装置から、新技術を使った連続波の電子治療的な装置、または CW ジアテルミー療法（彼らの新しい名称を使用する）の使用に変化することで何が生じたか。

明らかに、エーバーハート教授がシカゴ医療大学の電気治療法で教えた結果にはならなかった。病院は現代の CW ジアテルミー療法を使用しないようになり始め、古い DW パルス波の電子治療装置を改良して、使用しようとしている。

ライフの新たに調整された装置は、古いパルス波を使った電子治療装置の機能を改良した最初の現代的な装置であった

クレーンの装置 The Crane Device

ジョン・クレーンは、ライフのアシスタントとして動き、おそらくあまりに前に踏み出した。

彼は、可聴周波数が生物学的、医学効果をもたらすと仮定した。

彼は、CW 連続波の搬送波の存在は必要でないと考えた。

彼は、オーディオ周波数生成器「モデル CFR-1000」を作り出した。

(ライフテクノロジーを普及させる目的で作られた彼のクレーン財団から売り出された)

それは、CW 連続波発生器を調整して使用したライフのタイプのもので、しっかりとした段階的・プログラムが可能なアンプであった。

彼の可聴周波数によってバクテリアを爆破させるビデオをクレーンは記録する。

クレーン発生機はライフ発生機の代名詞となり、非常に人気があった。

クレーンらは、オーディオ発生機の1つをラジオシャックから買って改良

しそれに拡張段階を加えた。著者（パップス）はクレーン装置を厳重に検査し、ライフ発生機と、この装置はすなわち試験管内で、微生物を破裂させることが可能な現代の **electroporator** エレクトロポーレーターであると仮定した

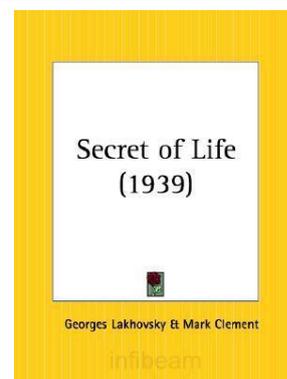
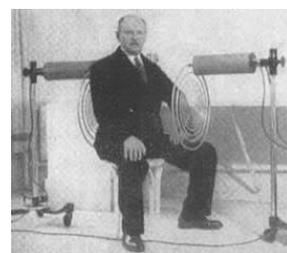
顕微鏡の下のガラスの下 **1mm**（ミリメートル）の非常に小距離でもクレーンの出力は、**60** ボルト未満で（人体に触れても、危険でなく余裕がある最大の電圧である）わずか **1mm** の距離にいる、微生物を破裂させるだけなのかもしれない。

クレーンの装置は人体または動物の生体内では効果がないとも推理される。

(クレーンによって著者に示された) クレーンの装置は、**1992** 年、「エレクトロポーレーションと電気的融合のガイド」アカデミック・プレス、**12** ページにある **electroporator** エレクトロポーレーター装置とよりふたつだった。

彼の研究活動のために **3** 年投獄された男であるクレーンは、試験管内のエレクトロポーレーションを果たした最初の男と思われるべきで、その時、科学界は、生物学と医療で最も将来性のある来たるべき基礎の一つを無視したといえる。

クレーンの物語は、現代の科学によって再演された古いギリシア悲劇のドラマである。



ジョージ Lakhovsky とその著書「シークレットオブライフ」

エレクトロポレーション Electroporation の説明 :

これは新しく発見された現象で、細胞とその膜に関係がある。

それは、非熱性の穏やかな化学的現象としてはっきり示され、細胞が $1,000\text{V/cm}$ ~ $10,000\text{V/cm}$ の間の電気パルスに暴露されるとき、細胞膜の多孔性に影響することが知られている、

エレクトロポレーションの最も傑出した現れは細胞膜の上に外から中につくられるクレーターのよう孔を形成することである。

エレクトロポレーションの現象が細胞膜での孔の形成だけではないと仮定することは合理的である。これらの孔以外に、膜を通過する質料の過剰な流れの結果、細胞活動が増大する。

拍動性の電界の低い値では、増大された細胞活動はかなりの小孔をつくる場所までは、届いていないことが予想される。

$1,000\text{V/cm}$ より少ない数値の低いエネルギーのパルスでは、細胞活動を刺激しても孔を編成することないだろう

他方、 $1,000\text{V/cm}$ を超える拍動性の電界のより高い数値では、弱い膜細胞または微生物は、分離して爆発し破壊されるかもしれない。

エレクトロポレーションが、パルス波ではない連続した波動 CW フィールド、または適切に拍動性の電界を管理していない静的フィールドでは効果が形成されないことに、注意することは重要である。

Lakhovsky の装置

ジョージ Lakhovsky (ロシアのエンジニア) は、フランスで自を確立し、フランスの市民になり、第一次世界大戦の技術的な貢献のためにレジオンドヌール勲位の赤リボンを与えられた。

彼は、73 才で 1942 年にニューヨークで死んだ。

最初に電子治療装置を発展させた D'Arsonval 教授に Lakhovsky は、関係しており、最初の Arsonval のものより効果が上に見られる装置を作った。

D'Arsonval は、ジョージ Lakhovsky とパリの科学アカデミーとの通信で示されるように我々の時代で最も偉大な科学者の一人で、1935 年にハイネマン医学書社から発表された Lakhovsky の偉大な仕事「生命の秘密」を支援した。

ジョージ Lakhovsky 装置は、いくつかの DW パルス波振動子がある複雑なマルチ波動電子治療装置である。

それを、Lakhovsky の 1941 年の、USA 特許 2,351,055 で説明している :

「この発明は、一般に、電磁インパルスと特にマルチプル波長を励起させて使用する電気装置に関するものである」。

Lakhovsky は、彼の著作「生命の秘密」で彼の装置を連続する波動の振動を使うと、言ったが、それは誤っており、この彼の装置をその通りに考えるべきではない。

明らかに、彼の特許で説明した Lakhovsky 装置は非連続波動法マルチプル・ラジオ周波数生成器と説明書に書いてあり、なんらかの電気パルスまたはインパルスを受けて、反響が予想される DW(パルス波)モードのアンテナがパルス波 DW 発電機に付属していた。

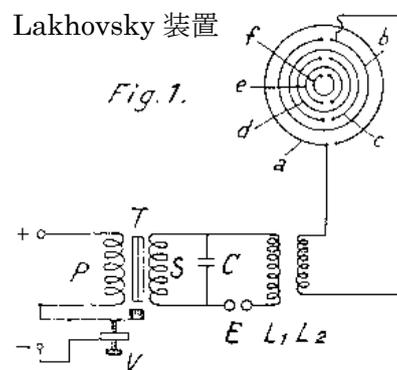
明らかに、ライフと同じように Lakhovsky は、連続波を使うリー・デフォレストのラジオ真空管のようなニューテクノロジーを決して使わなかった。

ただ Lakhovsky は、DW パルス波と CW 連続波の非効率性を比較するのには失敗した。

Lakhovsky の装置では彼は正しく、パルス波動を使用している。連続波法と減衰波パルス波の重要な違いに関すること以外は彼の仕事はすべて正しくてすばらしかった。残念なことに、減衰波パルス波の優勢については気づかなかったようだ。

人はそのパルス化された DW 振動から、古い電子治療装置のように、Lakhovsky 装置のメリットを期待する。

しかし、Lakhovsky 装置の期待された電力は Priore とドットの装置と比較すると



技術的に弱いと思われる。

この装置は、細胞の電子多孔性を少し増大させ、細胞間の活動を刺激し、細胞の物質の出入りのやりとりを増大し、結局若干の代謝を強化するだけと推理されるかもしれない。

Lakhovsky の装置と回路図

発明者は、ガンと多数の他の変性疾患を治療すると主張した。

プリオレ(Priore)の装置

アントワン・プリオレ Priore は、トリエステの電気の学校を卒業し、イタリア、そして、イタリア海軍のレーダーのオペレーターになった。



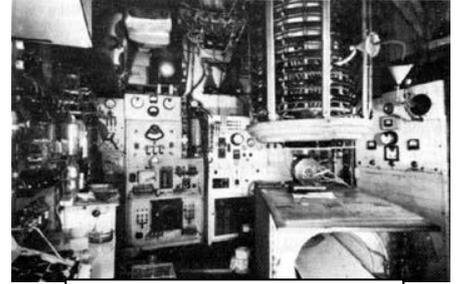
プリオレ

「この期間、彼は刺激的な特異な現象を注意して観察していた：

電気部品の骨董品でいっぱい部屋にオレンジが、たくさん落ちていたが、残されたいくつかは、フルーツ・スタンドで買って来たときと、同じ新鮮な状態で保存されていた。

同時に買った部屋の他のオレンジは、腐っていて、腐敗していた。

この観察にびっくりしたプリオレは戦争のある日、まったく不可解な、新しい仕組みに基づいて新鮮な状態で食糧を保存し節約する電氣的装置を考えることを夢見た。



プリオレの中間的な装置の一つ
この装置で末期がん、そして、
研究所の何千もの白血病の動物
もを治療した。(ボブ・ホイット
ニー提供)

ニュートンのリンゴは、プリオレのオレンジだった」。

我々はレーダーが非常に調整されたマイクロ波の放出で出来ている
点に注意すべきである。あるいは、よく知られているように、レー
ダー・マイクロ波はパルス化できる。

しかし、大部分の人々は、ニュートンのリンゴを知っているが、誰
も、Priore オレンジを知らない。

食糧を保存する会社である Foodco はカリフォルニアサンディエゴのマクスウェル研究所の
子会社であるが、このプリオレのオレンジの秘密をよく知っているようである。

彼らは、強い電気パルスまたはエレクトロポーレーションに基づいて、食糧を保存する物
理的処置を発展させた。

プリオレの発展させた装置は、3 種類の振動数に調整された強力
なレーダーパルスによって処置した。

1つは 0.5~2Hz 音速以下のもの、もう1つは 300 から 900Hz に
あるオーディオ

そしてもうひとつは 16 MHz から、300MHz の VHF 無線周波数
の高さのものであった。

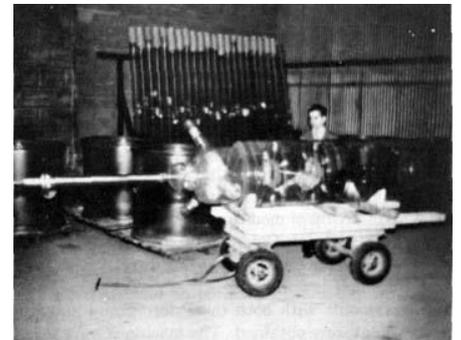
プリオレ装置は細胞間の活動を興奮させたと推理できる。そして、
細胞の、物質の出入りを強化し細胞の電子多孔性を増大して、結
局代謝を増大させた。

おそらく、強烈な曝露は、エレクトロポーレーションの明白な効
果を生じさせたかもしれない。すなわち、細胞膜に大きい孔をつ
くり、さらに弱い細胞膜または弱い微生物の膜を破裂させる、す
なわち、弱いガン細胞膜を破裂させることによって、癌細胞を壊
死させたかもしれない。また、科学のアカデミー・フランセーズ
に多数の文書で伝えたように、微生物を殺害した。

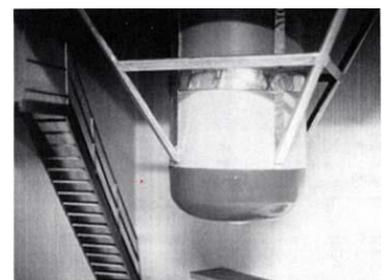
これについての情報：

プリオレのフランスの特許 1,342,772;

T.E ビアーデン著「エイズ、生物戦争」テスラブックカンパニー、
テキサス、グリーンヴィル、1988 年。



プリオレの巨大な装置のための大きな、特
別な、相結合させたプラズマ・チューブ、
最終段階で機械は、人間の「全身」治療す
る (写真提供ボブ・ホイットニー)



プリオレの巨大なプラズマ・チュー
ブ装置の上部をおおうためのもの。
装置は最終的に、人間の患者「全身
を治療する (写真提供ボブ・ホイッ
トニー)

ドットの装置

ジャンニ A. ドットは、ベニスで生まれた。(アメリカとカナダの側のナイアガラ滝の 2 つの水力発電所を設計した傑出したエンジニアの息子であった)

彼の父は、イタリアのマルキスに生まれたガリレオから出た直系の家族であった。

ドットは落下傘部隊員として養成され、アメリカ人の戦闘機パイロット、そして、彼はアルファロメオのレース用のレーシングカーのデザイナーで、ミラノ大学の教授になる。

彼は、2 つの博士号があった。そして 1 つが、機械工学、もう 1 つは、ミラノ大学からの原子核物理学である、デトロイトウェイン州立大学からの電気工学の資格、そして、多数のイタリアとアメリカの特許がある多産な発明家となった。

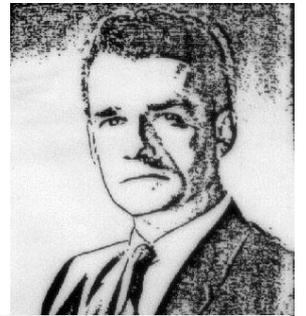
物理学の教科書でわかっていない方法で、ドット・リングは、独特な金属接合部におこる熱電気を作動させ搬送波の振動に変調をもたらすようにした。

ドットによって入れられた 30,000 アンペアというかなり高い電流でも、彼のリングの特別な大きさのために穏やかで強烈な磁場をもたらすようになるという彼の主張は、著者 (パップス) の計算によっても確認され一致した。

また、彼の言うように、特定の振動数に調整することが出来、装置のすべてと関連して、可動域が高エネルギーで形づくられることにも著者 (パップス) は同意した。

伝えられるような不可解で奇跡的なドット・リングの効果の根底にあるところの、電磁波の調整は、プリオレ装置の仕組みと偶然に一致しており、真実、科学的な説得力をもっている。

ドットリングの効果的メカニズムと効果は、多分プリオレ装置と同じだと理論化すべきだろう。



ドットとその装置

Rapsomanikis の装置

エヴァンズ Rapsomanikis は、電気技師としてアテネ技術大学を卒業した。

彼はほぼ 30 年間、ロッキードで、戦争で使用される、誘導装置と対潜水艦のような、多くの最高機密のプロジェクトの研究にあっていた上位の責任ある科学者であった。

彼は衛星誘導装置 L1011 を発展させた。そして、現在それは民間機航空会社にも使用されている。

彼はロッキードを引退した後、彼の装置を彼自身のプロジェクトと結合させた。

Rapsomanikis は、彼のテクノロジーの詳細を説明しなかった。

しかし、**Rapsomanikis** 装置で治療されたいろいろな患者の説明で、著者が理解することは皮膚の上に触れる十個の電極装置を使用し、そのうえ、彼の天才的アイデアは垂直な磁場を使用したということにある。

忘れてはいけないことは、早い電流パルスが皮膚に触れても、表皮効果は皮膚にとどまる。同様に、電気パルスは皮膚を通過しない。ガウスの原理による物理学によれば、— 皮膚 — の中には確かな伝導物質がない。または中が空洞で、電界はゼロであることを教える。(実質的に、皮膚はファラデーケージである)

Rapsomanikis の革新的才能は磁場または電気パルスを浸透させるために、誘導装置を使用したことにある。

発明者は、ガン、エイズと変性疾患が治療可能であると主張した。

インターネットで見つけ出したすばらしい記事をここに引用する。翻訳していただいた方に改めて感謝申し上げたい。

現代医学は大きな嘘に基づいている」——パスツールの臨終の言葉が秘匿された理由(わけ)

猫まんまのホームページより

現代医学は大きな嘘に基づいてる。

この嘘は少なくとも150年前に遡る。ルイ・パスツールが死の床にあった、1895年あたりまで歴史を遡ってみよう。

彼の死に立ち会った人々は、パスツールの最後の言葉を詳しく語った。

「私の細菌理論は間違っていた。細菌を取り巻く環境が病気を左右するのだ」と。

もし巨大な権力を持つものがこの嘘を利用して巨万の富を築く可能性を見いださなければ、このとき世界観がかわっていたかもしれない。

現実には製薬産業の医療に対する強い締め付けによって、この嘘は現在に至るまで膨らみ続けた。

それはすべて ルイ・パスツールと アントワーヌ・ベシヤン から始まった。

一方は有名で称賛を浴びた偽物、他方は変わり者扱いされた、真実を追求する科学者であった。

彼らの周りに起こった論争は医学者を2つの陣営に分割することになった。一つは monomorphists(モノモルフィズム) 他方は pleomorphists(多形態性)である。

Pleomorphism は <http://www.euroamericanhealth.com/cause.html> に説明されているように、1800年代初頭に発見された概念である。多形性の微生物は形を変える(多形、変形)微生物のことである。

ウイルスは細菌、そして菌類へと形状を変え、またその逆にも戻る。

すべての細菌は形を変える。病院の研究室などで、条件を全く変えずに微生物を培養した場合、その微生物の形状は変わらないが、例えば成長を媒介する pH などを変えた場合、細菌は別のもの、別の微生物に変化する。

Whalen James が monomorphism(モノモルフィズム) pleomorphism(プレオモルフィズム)の違いを以下のように述べている。

細菌理論 (パスツール)

1. 病気は身体の外にある微生物に起因する。(それは外から来る)
2. 一般的に微生物に対しては、防御をしなければならない。(ワクチンや抗生物質)
3. 微生物の働きは一定している。(誰に対しても同じことをする)
4. 微生物の形と色は一定している。(微生物は周りの環境によって形を変えない)
5. 全ての病気はそれぞれ特定の微生物に関連づけられる。(あらゆる病気の原因となるそれぞれの菌がある=(モノモルフィズム) Monomorphism)
6. 微生物が病の第一の原因である。(細菌が病気の原因である)
7. 病は誰でもおかすことができる。(どれだけ健康であっても、病にかかる)
8. 病から身を守るために、防御態勢を築かねばならない。(ワクチンをうける)

細胞理論 (ベシヤン)

1. 病気は体内細胞の中にある微生物に起因する。
 2. これら細胞内にある微生物は通常は新陳代謝を助ける働きをする。
 3. 微生物の宿主(人の体)が死んだり、けがをしたりした場合は、体を分解する働きを促す役割を微生物は果たす。
 4. 微生物は溶媒を反映して形や色を変化させる。(Pleomorphism)
 5. 全ての病は特定の体の状態に関連づけられる。
 6. 微生物は宿主の健康状態が衰えた場合に「病的」になる。従って、宿主の健康状態が 病の第一の原因である。
 7. 病は不健康な状態の上に築かれる。(体の免疫システムの状態が病気になるかどうかを決める)
 8. 病気にならないためには、健康な状態を作らなければならない(健康であることが、防御である)
- 上記の2つの理論の違いは、次のことを意味する。

(モノモルフィズム) monomorphism は儲けは多いが、事実上、役に立たない製薬会社の薬の消費につながり、より高価なハイテク医療をうみ、殺人的なワクチン、伝染病のデマを招き、病気を売り、医療科学を崩壊させ、医者が引き起こした死を隠蔽することにつながる。

それとは対照的(プレオモルフィズム)に pleomorphism は安価であり、有害な物質が身体に過剰に蓄積された状態とか、身体が酸性になりすぎているなどといった、病気の本当の原因に基づいた治療を意味する。

パスツール自身が最後に自らの誤りを認めたあとも、企業の利益はパスツールの理論に固執していた。

それゆえ、(モノモルフィズム) monomorphists たちが 議論に勝った。彼らの理論が正しいからではなく、企業が大声をあげて、他のグループをいじめたからである。

今日、微生物の生態は(プレオモルフィズム) pleomorphism に基いていると何度も何度も証明されてきたにもかかわらず、細菌学者の大半が、(モノモルフィズム) monomorphism にいまだ固執している。

現代医学の誤りの全てはこの偽りの医学の範例の結果である。

医療は何年にもわたって無意味な大勢の人々の死を招いた欺瞞を認めようとは決してしないだろう。医学が過去において間違った方向に進み、(モノモルフィズム) monomorphism を擁護した時点まで引き戻さない限り、医学に進歩はないだろう。

引用:

「過去を支配する者が未来を支配する」—— ジョージ・オーウェル

「病の主たる原因は細菌ではない。病は細胞が損なわれ、壊れたことによっておきる毒血症に起因する。これによって、細菌が増殖し、攻撃する道が敷かれるのである」—— 医学博士 アンリ・ビーラー

★★★「病は浄化、解毒を求める叫び声である」—— ヒポクラテス

「病気の原因はひとえに周辺に浮遊している細菌やウイルスから来ると信じて、有害な薬を投与する治療を受けることは、もっとも愚鈍な迷信の犯罪であることがわかった」—— 医師 D. フィリップス i

「もし、もう一度人生がやり直せるなら、細菌は病気の原因になるのではなく、むしろ自らが生息できる病気の生体組織という場所を求めろのだ、ということを実証するのに献身したい」—— R. Virchow (★細菌理論の父★として有名)

文献:

* "Pasteur Exposed: The False Foundations of Modern Medicine"

「パスツールの罪は暴かれた: 現代医学の誤りの基礎」

著者: Ethel Douglas Hume. Bookreal. 1989. 260 pages

内容: パスツールが天才ペシヤンを剽窃し、細菌理論を誤って解釈し、現代医学を誤った方向に導いたことを暴露する。

* "Confessions of a Medical Heretic" 「医学の異端者の告白」

著者: Dr Robert S. Mendelsohn. Warner Books, New York. 1980. 304 pages

内容: 現在の医療が効果的であった試しが希にしかないこと、医療が治療中の病気そのものよりも危険である場合が多いことを例証する。

* "Corporate Crime in the Pharmaceutical Industry" 「製薬業界の犯罪」

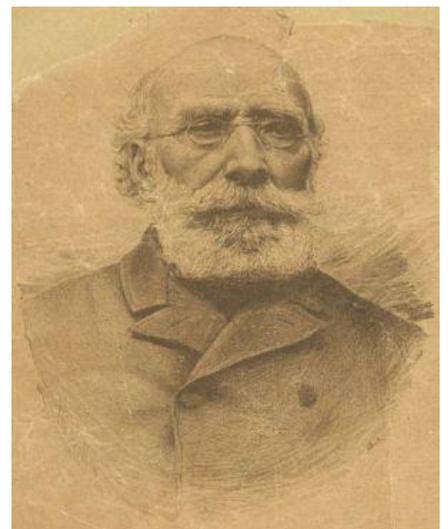
著者: Dr John Braithwaite. Routledge & Kegan Paul - 9 Park St, Boston, Massachusetts 02108, United States. 1984. 440 pages

内容: 大規模な国際的調査に基づき、製薬多国籍企業が薬の安全性を守る法律をいかにして無視してきたかを語る。それは 賄賂、偽りの広告、薬の安全性テストでの不正、安全でない製造過程、密輸入、国際法への介入などである。

不健康と病の性質を理解する

今日の医療のアプローチと基礎はすべてレイ・パスツールの細菌理論という欠陥のある概念に基づいている。病状は、隔離された出来事としてみなされ、症状が現れる部位に限られる。(例えば、耳の感染症、目の感染症、歯茎の感染症、肺がん、皮膚病など。)この理論においては、微生物や腫瘍が理由はわからないが無作為に患者の体に広がり、手術で切り取ったり、レーザーで焼いたり、薬で毒を投与したりして、体から追い出さなければならない。

現在主流のモデルでは、解決方法は機械的、化学的なやり方で模索される。そもそも、感染や病状がなぜ現れたのかについては真剣に問われない。病状を和らげる薬を処方して即座に直すことが典型的な今日の解決法である。



フランス Bassing, Moselle, 10月16日生まれ

フランスパリ1908年4月15日没91歳

国籍フランス

生物学

カイコ疾患の寄生虫の特定で有名

同時代人 レイ・パスツール

影響を与えた人

ウィリアム・ライヒ Wilhelm Reich ガストン・ネ

サン Gaston Naessens, アラン・キアントウエ

ル

パスツールと同時代の人物、アントワーヌ・ベシヤーンは 病状が何故現れるのかについて異なる見解を持っていた。彼は、血液の環境、あるいは生態学が病状が現れるかどうかについて、重要な役割を果たすと感じていた。

代替治療は特定のエネルギーの場を弱め、弱まった体の部位に病状がを発生させる 患者の生活上のストレス(環境、生物学的、化学的、心理学的、情緒的なもの)について調べた。

健康な状態を保つためには、体内のエネルギーシステムがすべてバランスのとれた均衡な状態になければならない。バランスが崩れると不快な状態になり修正されなければ 不健康な状態になる。中国人とインド人(?)は何千年もの昔からこのやり方を用いてきた。

正統主義的、対処療法的医療は有毒なもの(薬)を使い、病状を抑えるために死なない程度の量を処方する。このアプローチでは、病状の原因を特定することもしなければ、患者を治す責任すら果たしていない。薬を使えば、病気の表面的な部分は短期的に抑えられるが、同時に病を体内のより深いところまで沈めておいて、それが後により重篤な慢性的な形で再発するのである。正統主義的なアプローチの欠陥のひとつは患者ではなく、病状にだけ「焦点をあてることである。患者の物理的、情緒的、精神的エネルギーをすべて考慮に入れて診断をする内科医のことを区別するために、ホーリスティックという言葉ができた。

病気の原因についての見解や哲学的なものだけが、対処療法と代替医療の違いだと考えないで頂きたい。国際的な製薬会社や医療組織にがたくらむ一致強調した組織的な計画がある。それは薬を使わないが「効く」治療法をすべて抹殺しようというものである。何故か？

それは患者が薬とさらなる治療を受けるために病院に通い続けてほしいからである。患者が治れば収入源が減るわけである。やや回復傾向にある病気の患者はコントロールしやすい患者である。患者をコントロールするとは、毎日診療所にいって、処方箋を更新することである。コントロール可能な患者は永続する収入源なのだ。これを数億倍の患者数で掛け算してみればなぜこうした欺瞞がのさばっているか、察しがつくだろう。いわゆる「ヘルスケア」業界がよろめいているのだ。

正統主義的なやり方、対処療法は 一時的に苦痛を和らげることである。病状の原因を特定することは決してしない。このやり方で、患者を定期的に来院させ、薬局で薬をもらわせる。諸君、これがゲームの正体である。簡単にして明白だ。これを拒否するか加担するか、それにしがみつつか、逃げ出すか、あなた次第だ。

<http://educate-yourself.org>

ワクチン (予防接種) :

真の天才であるアントワン・ベシヤーンが化学者 ルイ・パスツール狡猾なショーマンシップと偽科学によって影をひそめたように、これらになぞらえることのできる もうひとつの科学上の対立がある。エドワード・ジェナーとチャールズ・クライトンの対立である。

ジェナーは無名の田舎の医者で、まずロイヤル・ソサエティ・フェロー(M.D.,F.R.S.) という資格を買

い、一冊の本を書いた。ヴァリオラエ・ワクチンという言葉が使われているのは、その本のタイトルページだけである。ヴァリオラエ・ワクチンとは中世のラテン語で「牛の天然痘」を意味し、人間の病気が牛の病気に関連づけられている。「牛の天然痘」などという病気は ジェナー'医師'が本に使うまで存在しなかった。ジェナーは 牛の疱瘡で、人間の天然痘を防ぐことができるという空想を押し通そうとした。このことは、科学的事実と全く基づいていないにもかかわらず 医学の教科書で「現代医学の最も偉大な発見のひとつ」と称された。

チャールズ・クライトン博士はジェナーのペてんを詳細にわたって、暴くために多くの本と記事を書いた。しかし、ジェナーを賞賛して、クライトンを排斥する医学界の傾向は止まらなかった。クライトンの本はボイコットされ、隠された索引の中に追いやられた。この時から おそらく人類に対する最もひどい欺瞞、「ワクチン予防接種」が始まった。

引用:

「その人の意志に反して ワクチンの予防注射をすることはできないので、保健機関の最も大きな仕事は 常に無防備な人々にワクチン予防接種を受けるよう、説得することである。我々は「教育」、「恐怖感」、「圧力」という3つのやり方で説得を試みた。「恐怖感」と「圧力」のことはあまり言及したくないが、これらは、「教育」よりも早く効果が現れる。「教育」は概して、時間がかかる。3月から4月にかけて、「教育」によって説得を試みたが、62,000人しかワクチンを投与できなかった。5月に「恐怖感」と「圧力」によって説得を試みたところ、223,000人に予防接種を受けさせることに成功した。」ー ドクター ジョン・ケラー

「安全でない 水銀が含まれたワクチンが、自閉症や ADHD、ぜんそく、アレルギー、糖尿病に関与していることが否定できなくなったとき、医学の主流は 自業自得であるが多大な打撃を被るだろう。激怒した陪審員が 子供や家族のために莫大な額の保証金を請求するだろう。そのときが来るのが待ち遠しい。」ー ドクター リムランド

「私はかつてジェナーやパスツール、ワクチンの効果を信じていた。しかし熟考の末、見解を変えた。」ー ドクター ハドウェン

「これまでに開発されたインフルエンザのワクチンがインフルエンザの攻撃を阻止したり、苦痛を和らげることに効力があるという証拠は何もない。ワクチンの製造業者はワクチンが無駄なことを知っているが、とにかく売り続けているのだ。」ー ドクター J アンソニー・モリス(元 合衆国薬剤管理科 ワクチン管理部門の主任)

「よく見れば、”健康であること”がすべてだと気づく。しかし WHOによれば、医療とワクチン接種がすべてだ。それはいわば 病気がすべてということになる」ー Guylaine Lanctot

「乳児突然死亡症候群は ワクチン接種が始まる以前の時代には非常に稀であり、統計にすら出ていなかった。しかし子供の死亡に備えるはずのワクチン予防接種が大衆に広がるにつれて、乳児の突然死の数が上昇し始めた。」ー ハリス・クールター

「毎日のように新たな親たちが電話をしてくる。健康だった赤ちゃん、子供、10代の大半は男の子が、DTP(ジフテリア(diphtheria)、破傷風(tetanus)、百日ぜき(pertussis)の3種混合予防接種)、DT(ジフテリア、破傷風)予防接種、MMR(はしか、おたふく風邪、風疹 予防接種)あるいは

MMR booster の予防接種を受けたあと、いきなり、もしくはじわじわと、自閉症あるいは他の思考障害に陥るといった同様の悲劇を親たちは語る」ー 希望プロジェクト(アイルランド)

「医療上の権威はウソをつき続けている。ワクチン接種は免疫システムに大きな損傷を与えてきた。実際ワクチンは多くの病気を招いてきた。われわれの遺伝子コードはワクチン接種によって変化を生じている。」ーGuylaine Lanctot M.D.

「ワクチン接種による免疫化は害があるだけで効果は全くないということを示す証拠はたくさんある。」ードクター J アンソニー・モリス

文献:

- *"Murder By Injection: The Story of the Medical Conspiracy Against America"*
「注射による殺人：合衆国に対する医療上の陰謀の話」
著者： Eustace Mullins, National Council for Medical Research - P.O. Box 1105, Staunton, Virginia 24401, United States. 1988. 348 pages
内容：この本は、アメリカ人の健康が確実に悪化しつつあることに責任がある、ロックロックフェラー シンジケートが、いかに様々なやり方で私腹を肥やし、危険な手段を講じているかについて語る。
- *"A Shot in the Dark"* 「闇の注射」
著者： Harris L. Coulter, Ph.D and Barbara Loe Fisher. Avery Publishing Group. 1991. 246 pages
内容：この本は百日咳の全細胞ワクチンがいかに危険か、というぞっとする記事を、また、このワクチンによる若い犠牲者の悲劇をのせている。FDAと製薬会社が行った罪業を暴露している。
- *"Vaccination, Social Violence, and Criminality: The Medical Assault on the American Brain"*
「ワクチン予防接種、社会的暴挙と犯罪：アメリカ人の脳への医療攻撃」
著者： Harris L. Coulter, Ph.D. North Atlantic Books. 1990. 300 pages
内容：この本では、赤ん坊の頃にワクチン予防接種を受けることの危険性について語っている。ワクチン投与と自閉症、多動症、アレルギー、自動免疫の病気、学習障害の関係について述べる。さらに 神経系へダメージとアメリカ社会の犯罪率の高さの関係について、説得力のある議論を展開する。
- *"Vaccination: The Medical Assault on the Immune System"*
「ワクチン予防接種：免疫システムへの医療攻撃」
著者： Viera Scheibner, Ph.D. 1993. 264 pages
内容：この本はワクチンとその効果についての伝統的医療による研究がもたらした結果を簡明に要約している。ワクチン予防接種が、短期的、長期的にもたらす危険な副作用についてのべ、感染症予防には全く効果がないことを明らかにする。また、

三種混合（DPT）の予防接種とポリオワクチンが、赤ん坊の死がうわべだけの関係であることを詳細に語る。

- *"Poisonous Prescriptions"* 「有毒な処方箋」

著者：Dr Lisa Landymore-Lim. PODD. 1994. 174 pages

内容：製薬会社の薬の 毒性と逆の効果（悪い効果）について述べ、ぜんそくや糖尿病と抗生物質、その他の薬剤との関係を詳説する。

リンク:

- 危ないぞ予防接種 <http://www4.airnet.ne.jp/abe/vaccine/tocmatigai.html>

ワクチン予防接種は効いた試しがない！

ジェナーの非科学的な迷信が医学の専門家たちの間で受け入れられてきたのはひとえに 金銭と対処療法の独占の権力が原因であった。合衆国ではワクチン投与グループとワクチンを投与しないグループに分けて違いをみるというような研究はなされたことがなかった。医療組織が、ワクチンがその全歴史にわたって効いた試しがないという事実が明るみに出ることを恐れたからである。ワクチン投与グループとワクチンを投与しないグループに分けて生じた違いは、病気根絶を目的に作られたワクチンが病気そのものを招いているという事実だ。

ハリス・コルターは次のように述べている。「ワクチンは薬を使う対処療法派というグループの医者が用いる療法である。薬を使わない 代替療法派の医者は ワクチン投与に反対している。対処療法が医療を独占しているという事実から多くの「謎」について説明がつく。アルツハイマーや 乳幼児突然死症候群、自閉症の原因がわからない理由、そして エイズや癌、関節炎、心臓病などが 何故、不治の病なのかということなどの説明がつく。

「謎」が明らかになるばかりでなく、上記の病は治すことができるのである。（別の記事にそのことが記されている）対処療法派は、病の本当の原因がなにか、そして何が本当の治療なのかについて人々に気づいてほしくない。さもなければ 患者が選べる選択肢を高額の治療に限定して利益をうむ治療ゲームを完全に支配し続けることができないからである。

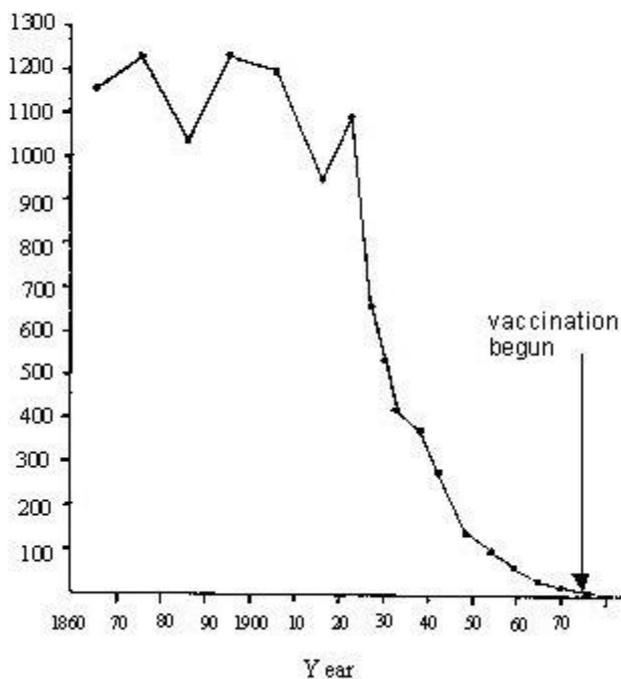
「今日の社会は病気、死において、1920 年代に独占を認められた医療専門家に多大な金額を支払っている。この状況の特異性は、1830 年代に 医者達が放血、水銀の薬、キニーネなどが本質的に有害であることを知りつつ、用い続けてきたことに類似している。そして、「有益性がリスクにまさる」という弁明がその当時と同様、今もなされている。実際には 有益性は医者にだけあって、リスクを負うのは患者なのである。」—— ハリス・コルター

医療団体のトップが大衆に決して知ってほしくないのは、ワクチン予防接種が導入される前にはやっていた症状や死をもたらす病気は、すでに大衆予防接種が始まるずっと以前に激減していたという事実である。感染症の減少は公衆衛生や下水設備の改善によるもので、これらはワクチン投与が始まるより以前に実践されてきた。もし、ジェナー' 医師' が「牛の天然痘」という病気と「人間の血

管に動物の疱瘡を直接注射する」という治療を発明して医療シーンに登場しなければ、医療団体は別のジェナーを作り出していただろう。最初にワクチン予防接種が導入された際、裕福な家庭しかワクチン接種を受けることができず、ワクチンの攻撃にさらされて死に至ったのは裕福な家庭の子供であった。

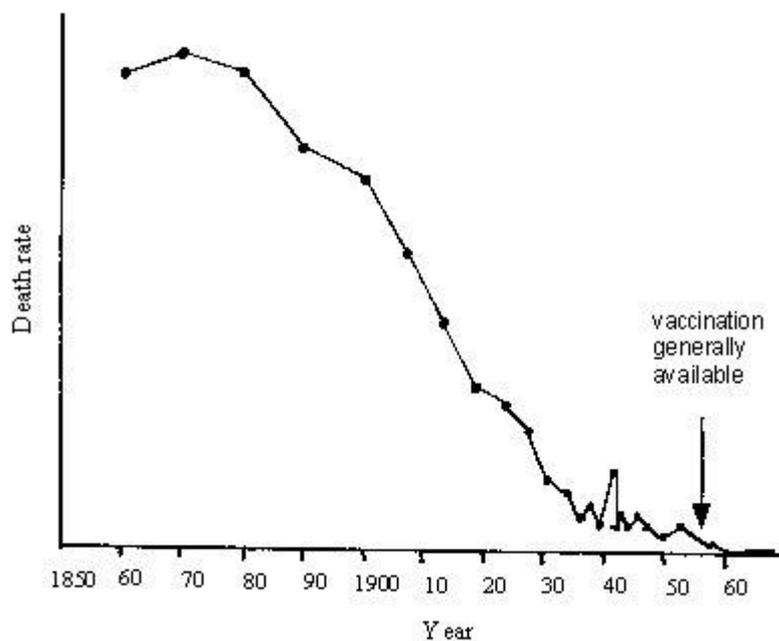
イングランド、ウェールズにおけるはしかによる子供の死亡率

Measles: death rate of children England and Wales ¹²



イングランド、ウェールズにおける百日咳による 15 歳未満の子供の死亡率

Whooping Cough death rates in England and Wales children under 15 ¹²



<http://www.truthcampaign.ukf.net/articles/health/vaccination.html>

関連リンク :

Do They Even Work?--- Ingri Cassel 「果たして効果があるの？」

<http://www.whale.to/vaccines/cassel.html>

Do Vaccines Protect Against Diseases At All? --- Bronwyn Hancock

<http://www.whale.to/vaccines/hancock.html>

Response to W.H.O. Evidence for Vaccine Safety and Effectiveness--- Trevor Gunn

「WHO がワクチンの安全性と有効性について出した証拠への返答」

<http://www.whale.to/m/gunn.html>

Whooping Cough Outbreak in Highly Vaccinated Hunter Valley Raises Questions.---

Bronwyn Hancock

「ワクチン投与を行ったハンターバレーで百日咳がはやったことは疑問をなげかけている」 <http://www.whale.to/v/hancock2.html>

Why You Should Avoid Taking Vaccines. --- Dr. James Howenstine. 「何故ワクチン予防接種を避けるべきなのか」

http://www.whale.to/a/howenstine.html#Do_Vaccines_Actually_Prevent_Disease_

Inoculation: Weapons of Mass Destruction. --- Rebecca Carley, M.D.「ワクチン接種：大量破壊兵器」

<http://www.whale.to/a/carley.html>

Are Vaccines Causing More Disease Than They Are Curing? --- Alan Cantwell, Jr., M.D. 「ワクチン接種は病気を治すよりも病気の原因になることの方が多い？」

<http://www.whale.to/v/cantwell.html>

Vaccination: The Shot That Keeps on Shooting. --- Thomas Levy, M.D. 「ワクチン接種: 注射は攻撃し続ける」

<http://www.whale.to/m/levy1.html>

Are We Kidding Ourselves? --- Lendon H. Smith, M.D. 「私たちは自分達を騙しているのか？」

<http://www.whale.to/vaccines/smith.html>

Medical Men and Vaccination. --- Dr. Allinson 「医療従事者とワクチン接種」

<http://www.whale.to/vaccines/smallpox20.html>

The Case Against Vaccination. --- Walter Hadwen, M.D. 「ワクチン接種に反対のケース」

<http://www.whale.to/v/hadwen.html>

The Fraud of Vaccination. --- Walter Hadwen, M.D. 「ワクチン接種の欺瞞」

<http://www.whale.to/v/hadwen1.html>

Vaccination Liberation. --- Vaclib.org

<http://www.vaclib.org.html>

元ワクチン研究者へのインタビュー

Jon Rappoport interviews an ex-vaccine researcher:

Q: あなたは以前、ワクチンは正しい医療だと確信していましたね。

A: はい。私はいくつかのワクチン開発に携わりました。その名前は言いませんが。

Q: 何故言えないのですか？

A: プライバシーを守りたいのです。

Q: もし、表沙汰にすれば何か不都合なことがあると思われるのですか？

A: きっと年金をもらえなくなるでしょう。

Q: どういう理由で？

A: 理由はどうでもいいことです。かつてクラブに属していた人間に不利益を齎す方法はいくらでもあるのです。監視下におかれ、虐められた人々がいることを知っています。

Q: 誰にいじめられたのですか？

A: FBI です。

Q: 本当に？

A: ええ勿論。FBI は他の口実を使うのです。税務局もやってきます。

Q: 言論の自由があるのに？

A: 私はかつては「内部の人間」でした。もし今、個々の研究者の名前を挙げて非難をすれ

ば、私は窮地に立たされます。

Q: こうしたハラスメントの根底には何があるのですか？

A: ワクチン投与は現代医療の最後の砦なのです。ワクチンは"輝かしい"現代医療すべての究極の正当化なのです。

Q: 人々はワクチンを受けるかどうかを選択することができるべきだと思いますか？

A: 政治的なレベルではそのように思います。科学的なレベルから言えば、人々が正しい選択をできるように情報を与えられる必要があります。選択できることがよいとはいえるでしょう。しかし、偽りだらけの情報のなかで、どうやって選択することができるでしょうか？ もし、FDA が立派な人々によって運営されていたなら、これらワクチンは認可されなかったでしょう。ワクチンは徹底的に調査されていたことでしょう。

Q: 病気の減少はワクチンのおかげではないと発言する医療歴史家がいますよね。

A: 知っています。私は長い間、彼らの言うことを無視していました。

Q: 何故？

A: 私は私なりの調査をしたのです。

Q: それでどういう結論に至りましたか？

A: 病気の減少は生活条件の改善のおかげだと言う結論です。

Q: どういう条件ですか？

A: より浄化された水、汚水処理の進歩、栄養改善、新鮮な食べ物、貧困の減少です。細菌はどこにでもいるのです。でも健康な状態であればそう簡単に病気にかかることはありません。

Q: あなたなりの調査を終えて、今どういうお気持ちですか？

A: 絶望です。私は嘘偽りの寄せ集めに基づいた分野で仕事をしてきたのだと気付きました。

Q: 他のにくらべてより危険なワクチンがありますか？

A: はい。例えば DPT (ジフテリア・百日咳・破傷風) の注射です。MMR (はしか・おたふくかぜ・風疹混合ワクチン) もそう。これよりもさらに危険なワクチンもあります。私が知る限り、ワクチンは全て危険です。

Q: どうしてですか？

A: いくつかの理由があります。ワクチンはヒトの免疫システムに影響を与えるからです。ワクチンは予防しようとしている病気を引き起こす原因にもなり、それ以外の病気を引き起こす原因にもなり得ます。

Q: ワクチンが病気撲滅のために大変有効であることを 証明するような統計ばかりが提示されるのは何故ですか？

A: 何故って？ それはワクチンが有効だという幻想をあたえるためです。例えば はしかのような病気の目に見える症状をワクチンがおさえれば、誰だってワクチンは良く効くと思うでしょう。しかし表面下で、ワクチンは免疫システムそのものを傷つけるのです。そして、その結果、別の病気—例えば 髄膜炎—などにかかったとしても、事実は伏せられたま

まです。ワクチンのせいだとは誰も思わないからです。因果関係が見過ごされるのです。

Q: イギリスで天然痘ワクチンが天然痘撲滅に効いたと言われてますね。

A: はい。しかし統計をよく調べてみると、別のことが分ります。

Q: といいますと？

A: ワクチン接種をうけなくても天然痘にかからなかった町が英国でいくつもありますし、住人がワクチン接種を受けているにも関わらず天然痘が蔓延した町もあります。しかも天然痘はワクチンが導入される以前にすでに減少の途をたどっていたのです。

Q: 我々は偽りの歴史を辿ってきたとおっしゃられるのですか？

A: そう、それこそ正に私が言おうとしていることです。これは ワクチンは常に安全で効果的だということを人々に信じ込ませるように作られた歴史なのです。

Q: 清潔さが重要とされる研究室であなたは仕事をしていました。

A: ワクチン製造設備のある研究室は世界中で最も 清潔な場所だと人々は信じています。しかしそれは誤りです。汚染が発生する機会は常にありますし、あらゆる種類の破片がワクチンに混入する可能性はあります。

Q: 例えば SV40 猿ウイルスがポリオのワクチンに混入してしまうとか。

A: ええ、そういうことがありました。でも私が言おうとしていることとは違います。SV40 菌がポリオのワクチンに混入したのは ワクチンが猿の腎臓を用いて作られたからです。私が言おうとしているのは、別のことです。手違いとか、ケアレスミスなど、研究室の実際の状態です。後にガンの腫瘍の赤に発見された SV40 は、構造的な問題と私が呼んでいるものです。それは製造過程で認められていたものでした。猿の腎臓を使えば猿の腎臓に含まれる未知の細菌への道を開くことになるのです。

Q: OK. 今は異なるタイプの汚染を区別することはおいておきましょう。長い間ワクチンに関わる仕事をしてきて、どのような汚染を目撃されましたか？

A: では、私が体験したこと、私の同僚が目撃したことのいくつかをお話しましょう。これが部分的なリストです。Rimavex はしかワクチンの中に、様々な鶏のウイルスが含まれているを見つけました。ポリオワクチンの中に、アカントアメーバ、いわゆる"脳を食う"アメーバを見つけました。サイアミン サイトメガロウィルスをポリオワクチンの中に見つけましたし、サル泡沫状ウイルスをロタウイルス ワクチンの中に見つけました。MMR ワクチンのなかに鳥の癌ウイルスを見つけました。様々な微生物を炭疽菌のワクチンの中に見つけました。いくつかのワクチンの中に 危険なエンザイム反応抑制剤を見つけました。風疹のワクチンの中にアヒルや犬、ウサギのウイルスを見つけました。風邪のワクチンの中に鳥の白血病ウイルスを、MMR ワクチンの中に ペスチウイルスを見つけました。

Q: ちょっとはっきりさせたいのですが、これらはワクチンにあってはならない汚染ですよ？

A: その通りです。これらの汚染がもたらすダメージを計算してみてください。今までテスト少しのテストもなされたことがないので全く想像が付きませんが。ルーレットゲームそ

のもので。アデノウイルスワクチン、風疹、A型肝炎、はしかなどのワクチンは中絶された人間の胎児の組織を用いて作られるのです。こうしたワクチンの中に、細菌の断片やポリオウイルスを時々見つけることができました。それは胎児の組織から来たものかもしれませんが。ワクチンの汚染を調査すると、謎の物質に出くわします。それはワクチンに含まれていてはならないものはずなのですが、どんな汚染物質が含まれているか予測もつきません。私は非常に細かい人間の髪や人間の粘液を見つけました。異質なたんぱく質（これは何でだって有り得るもの）を見つけました。ウイルスのたんぱく質だって有り得るわけです。

Q: 警報ベルが至るところで鳴っているわけですね。

A: 私がどう感じたとお思いですか？ こうしたワクチンは通常の免疫防御を通過することなく、直接血管に注射されるということを思い出してください。

Q: あなたが見つけたことはどのように受け取られましたか？

A: 基本的に、何の役にもたちません。ワクチンを作るには、いろんな動物の組織を用いますし、そこからこうした類いの汚染が起きるのです。もちろん、私はホルムアルデヒド、水銀、アルミニウムといった、標準的な化学物質のことはまだ述べていません。

Q: この情報には非常に動揺させられます。

A: はい。私はまだいくつかの生物学的な汚染についてしか言及していないのです。他に一体どんな汚染物質が含まれているか誰にも想像が付きません。それを見つけようとは思わないわけですから見つからないのです。もしワクチンを作るのに鳥の組織が使われたら、どれだけ多くの細菌が含まれることになるか、想像もつきません。どのような細菌かも分らないし、人体にどのような影響があるのかも分かりません。

Q: 清潔さ以外の問題についてはどうでしょう？

A: ワクチンは複雑なやりかたで免疫システムを刺激して病気にかからない免疫状態をつくるという 誤った前提に惑わされてはいけません。これは悪い前提です。そのように免疫はつくられません。ワクチンは抗体を作ることによって間接的に病気に対して防御するものと考えられています。しかし、免疫システムはもっと広範囲に渡っていて、抗体とそのキラー細胞よりもずっと複雑です。

Q: 免疫システムとは？

A: 身体全体です。それに心です。これが全て免疫システムです。だからこそインフルエンザ流行の時に健康で居続けられる個人がいるわけです。

Q: 一般的な健康レベルが重要というわけですね。

A: 重要どころかそれこそが核心なのです。

Q: どのようにして、ワクチンの統計が偽って提示されているのですが？

A: 様々なやり方です。例えば、B型肝炎のワクチンを投与された25人の人が肝炎にかかったとします。B型肝炎は肝臓の病気ですが、肝臓の病気にはいろいろあります。診断をかえることができるのです。こうやって、本当の原因を隠蔽するわけです。

Q: それはよくあることですか？

A: いつだって。誤診はおこるべくして起ります。もし、ワクチンを受けた患者はそのワクチンが効くべき病気にはかかるはずがないと思い込んでいたらどうでしょう。そして正に医者達はそのように思い込んでいるのです。ほら、循環論法ですよ。閉じた世界なのです。誤りを認めようとしません。誤りの可能性すらない。もし肝炎のワクチンをうけた人が肝炎、もしくは別の病気にかかったら、ワクチンはその病気とは何ら関係がないと思いつくのです。

Q: ワクチン施設で長年働いていて、ワクチンは問題だと認める医者には何人会いましたか？

A: 一人もです。自分のやっていることに内側で疑問を持つ人は何人かいましたが、表には出ようとしませんでした。仲間内の間でさえです。

Q: あなたにとって何が転換のきっかけになったのですか？

A: 私の友達の赤ちゃんが DPT 注射をうけて亡くなったのです。

Q: あなたは調査しましたか？

A: はい、非公式に。友人の赤ちゃんはワクチンを受ける前はまったく健康でした。ワクチン以外に死んだ原因が考えられないのです。こうして私の疑念は始まりました。私はその赤ちゃんがたまたま 運が悪く質の悪い注射を投与されたのだと思いたかったのです。しかし、さらに調査を進めると、運がわるかったわけではないことが判明したのです。私は疑念の渦に引き寄せられ、その疑念は時がたつにつれて膨らんでいきました。私は調査を続け、ワクチンは私たちが思っているのとは逆に、科学的な方法でテストされていないということに気付きました。

Q: どういう意味ですか？

A: 例えば、長期間にわたる研究が、どんなワクチンに対してもなされたことがないのです。長期間にわたる観察が注意深くなされたことがないのです。何故でしょう？ 何故なら ワクチンは問題をおこすはずがないという思い込みです。そう思い込んでいたら誰がチェックするでしょう。まず最初に、ワクチンによる副反応はワクチンを投与された直後に起ると定義されているのです。これは意味をなしません。

Q: 何故意味をなさないのですか？

A: ワクチンは明らかに、長期間にわたって体内で作用します。副反応はゆっくと現れる可能性もあります。悪影響が次第に現れることもあります。神経障害が時を経て発現することもあります。保守的な分析ですら、ワクチンの作用は様々であると言っています。だったら、病気の原因がワクチンでないとどうして言えるのですか？ 化学物質による有毒な作用がゆっくと起るなら、水銀を含むワクチンだってそうでしょう。

Q: それがあなたが気付いたことですか？

A: そうです。これは相関的なものです。これまではずっと、相関は完全なものではありませんでした。しかし、ワクチンを投与されてから 1 年以内に神経系統に障害を来した子供が 500 人いるなら、詳細な調査を開始するのに十分です。

Q: かつて十分だったことはありますか？

A: いいえ一度も。このことからすぐに気づくことがあります。

Q: 何でしょう？

A: 調査を担当している人々は事実を知ることに興味がないのです。ワクチンは安全だと信じ込んでいるので、調査しても、常にワクチンには責任がないという結果に達するのです。「ワクチンは安全です」と彼らは言います。でもどういう根拠に基づいて、そういう判断を下しているのでしょうか？ ワクチンの罪を自動的に認めないような考え方と定義に基づいているのです。

Q: ワクチンキャンペーンがうまくいかなかった場合がいくつもありますね。ワクチンを接種していたのに、ワクチンが効くはずの病気に人々がかかってしまったケースです。

A: はい。そういう例はたくさんあります。そういう場合、証拠はただ無視されるのです。専門家は何か発言するとするなら、「それは例外的なケースで、大体においてワクチンは安全です。」という。ダメージや病気感染がおこるとすべてのワクチンキャンペーンを見ると、これらが例外的なケースではないことがわかります。

Q: あなたは今私たちが話しているようなことを、あなたがまだワクチン研究所で働いていた時に同僚の人と話したことがありますか？

A: はい。

Q: どうでした？

A: 何度か、私は口を閉ざしているようにと言われました。疑念を忘れて仕事に戻るべきだとはっきり言われました。時には怖い目にもあいました。同僚らが私を避けようとしたのです。一緒にいると同罪だとみなされることを恐れたのでしょうか。大体において、私は一人で行動しました。私は自分自身に害が及ばないよう、注意もしました。

Q: もしワクチンが実際に有害なら、なぜ投与されるのでしょうか？

A: 前提として、「もし」というのはありません。ワクチンは有害なのです。ワクチン禍の兆候を示していない人々についてワクチンが有害であるとするのは困難かもしれません。なされなければならない調査研究があるのにそれがなされていないのです。研究者らは、ワクチンが体内に注入された瞬間からのマップ、あるいはフローチャートを作るべく調査すべきなのです。それがなされていません。ワクチンがなぜ投与され続けるかについては、この2日間座り続けて話してきました。あなたが何度も言ったように、様々な段階において、人々は動機をもっています。お金、職を失いたくない、人の信頼を得たいという願望、威信、賞与、昇進、謝った理想主義、軽率さ等々です。医療カルテルの最上位では、ワクチンは人々の免疫システムを弱めるという理由で、最優先のものなのです。受け入れることが難しいことは分かりますが、本当なのです。医療カルテルの上位の人間は大衆を助けるのではなく、大衆の健康を損ない、殺そうとしているのです。私はこの仕事をしているある時点で、アフリカの国の政府高官とじっくり話す機会がありました。彼は医療カルテルのたくらみのことをよく知っていると言いました。彼は WHO が先頭に立って、人口

を削減しようとしていると言いました。アフリカには貧困層の状況を改善しようと真摯に活動している様々な公職につく人からなる、地下組織があります。こうした人々のネットワークは何がおきているかを知っています。彼らはワクチンが彼らの国を潰し、グローバルリストの権力者達に指導権を譲るためにワクチンは使われ続けていると知っています。私はこうしたネットワークに属する何人かと話す機会がありました。

Q: 南アフリカ大統領のタボ・ムベキはこの状況を把握していますか？

A: 部分的には気づいているでしょうが、完全には信じていないのだと思います。でも本当のことに気付きつつあります。HIV がでたらめだということを彼は既に知っています。AIDS の薬が免疫システムを破壊する毒物なのだという事も知っています。もしワクチンのことを公に語れば、頭がおかしいと思われるということも知っています。彼はエイズ問題に関わってすでに十分すぎるトラブルを抱えているのです。

Q: あなたがいうネットワークとは？

A: ネットワークは既にワクチンに関する膨大な情報を蓄積しています。問題はどのようにして効果的な戦略をスタートさせるかです。それが難しいのです。

Q: 先進国の状況は？

A: 医療カルテルが締め付けていますがそれも弱まっています。人々が医療について疑問を持つ自由をもっているからです。しかし、医療を受けるか拒否するかという選択の問題意識が大きくならなければ、生物 **warefare**???? バイ菌に対するワクチンが義務づけられてしまうかもしれない。今が非常に重要な時期です。

Q: B型肝炎のワクチン騒ぎはいきっかけにみえますが。

A: 私もそう思います。赤ん坊は予防接種を受けなくてはいけないと言った尻から、性交渉や同じ注射針を使うことで B型肝炎にかかると認めることはばかげた並置です。医療の権威は、毎年米国では2万かそこらの子供が「よくわからない理由から」B型肝炎にかかっていると言って取り繕うとしています。そして、だからこそすべての赤ん坊がワクチン予防接種を受けるべきだということです。私は2万人という勘定はおかしいし、その勘定を根拠になった研究もおかしいと思います。

Q: アンドリュー・ウェイクフィールドは MMR ワクチンと自閉症の関連を暴いたイギリスの医学博士ですが、ロンドンの病院から今解雇されたそうです。

A: ええ。ウェイクフィールドの活躍は偉大です。彼がワクチンと自閉症の関係を証明したことは素晴らしいです。トニー・ブレアの妻は代替医療に関わっているということをおそらくあなたはご存じでしょう。ブレア夫妻の子供が MMR ワクチンを投与されていない可能性はあります。ブレアは最近、記者会見で質問に対して、「個人的、家族の生活」の侵害だとして質問をかわしました。ブレアの奥さんはあらゆるイベントで口止めされてきたと思います。もし口を開く機会が与えられたら、少なくとも彼女は MMR によって自分の子供が著しく健康を害したと述べる家族に同情の念を示すでしょう。

Q: イギリスのリポーターは彼女とコンタクトとるべきですね。

A: コンタクトをとろうとはしているようです。でも彼女は夫との約束で沈黙しているのだと思います。もし約束を破ったら、彼女は非常に善良なことに貢献できるのですが。彼女は夫以外からも圧力をかけられていると聞いています。MI6（英国の情報機関）やイギリスの保健当局が活動してるのです。国家の危機の問題だと考えられているのです。

Q: 医療カルテルのことを知ればそれこそ国家の危機でしょう。

A: 世界的危機の問題です。医療カルテルはあらゆる国で活動しているのです。ワクチンの神聖さを熱心に守ろうとしているのです。ワクチンに対して疑問を投げかけることは、バチカンの司教がカトリック教会の聖体の神聖さに対して疑念を持つと同じレベルなのです。

Q: ハリウッドの有名人がワクチンを接種はしないと公言することは、キャリア上の自殺だそうですね。

A: ハリウッドは医療カルテルと非常に協力に結びついています。それにはいくつかの理由がありますが、一つには有名な俳優が何か言えば、非常に注目を集めるからです。1992年に私はロサンゼルスであなたが組織したFDAに対する抗議デモの場にいました。約1-2名の俳優がFDAに抗議の意見を述べました。それ以来医療カルテルに抗議する俳優をあなたが見つめることが非常に難しくなったと思います。

Q: 国立衛生研究所での雰囲気はどうなんですか？ 基本的な考え方は？

Q: いいアイデアですね。

A: スーツを着た人々が国立衛生局の建物に警察が許す限り近づいてたつのです。ビジネススーツを着た人や、ジョギングウェアを着た意図、母親や子供達、裕福な人、貧しい人、あらゆる人々です。

Q: 今日赤ん坊に投与される複数のワクチンを同時に受けることによっておこる弊害は？

A: それは滑稽でもあるし、犯罪でもあります。それについては今までつっこんだ研究がなされたことはありません。ワクチンは安全だという思いこみがここでもきいていて、ワクチンなら複数種類同時に接種したって安全だとされるのです。しかし本当はワクチンは安全ではないのですから、短期間に複数種類のワクチンを投与されればダメージの可能性は増えます。

Q: インフルエンザの季節、秋をもう迎えますね。

A: はい。でもこのインタビューの後では少し気持ちが楽になります。このワクチンの本当の情報を語って、あなたが役立ててくれるからです。

Q: あなたが大衆に理解してほしいことは何ですか？

A: ワクチンが安全で効果があるということを立証する責任がワクチン製造メーカーやワクチンを認可する機関にあるということです。それだけです。立証責任は私やあなたにはありません。そして証明するには、長期間にわたる、よく計画された研究が必要で、広汎な追跡調査も必要です。母親にインタビューをし、子供達がワクチンを投与された後どうなったかを聞く必要があります。これらすべてが立証には必要です。今はまったくなされて

ないですが。

医療の独占

非常によく効き、(型どおりの治療法に比べて)非常に安価な代替治療は数多く存在している。医療組織、食料と薬管理機構、そして、それらの大君主である製薬会社(ビッグスリー)は代替治療のことをむしろ公にしないようにしている。その理由は明らかである。薬を使わない代替治療法は薬を使う対処療法と製薬会社が巨額の富を失う可能性があることを示しているからである。

70年代、ビッグスリーは一緒になって 州レベル国家レベルの両方で薬を使う医療を推進するような法律を作るように立法機関に働きかけ、同時に 薬を使わない代替治療を制限し、息の根をとめるような支配的制限的な構造(ライセンスを与えたり、政府の認可を与える等)を作るという、陰謀に加担した。

薬を使わない治療法を制限し、排除するという陰謀は1910年の フレクスナー報告に始まる。エイブラハム・フレクスナーはジョン・D・ロックフェラーに雇われて、国中を回って医療学校やその他の治療施設で教えられている治療法の効果を評価した。ロックフェラーは原油、石油化学薬品、コールタールや原油から作られる薬品の業界を支配したかったのだ。彼はニュージャージーにある彼の石油会社が、ドイツの製薬会社カルテル I.G.Farben の利益を支配的に得られるようにした。彼はアンドリュウ・カーネギーやJPモルガンといった強力な競争相手はパートナーとして引き入れ、比較的弱い相手は自分の石油会社の株主にした。彼のいいなりにならないものは、潰された。こうしたことはロックフェラーの伝記作家によって著されている。(デビッド・W・ホフマン ニューヨーク、ライル スチュアート 1971. page24)

フレクスナーがカーネギー財団に出した報告書のタイトルは「アメリカとカナダにおける医療教育」という。この報告書の22ページには次のように記されている。「医学校の特権はもはや偶然の風来坊に与えてはならない。まずは受験者の適正を確かめるために厳しく調査しなければならない。そして、時間と才能のある種の使命感でもって仕えるものでなければならない。次に、もし、受験者がこれに不適格であれば、???

よくあることだが、政治家は憲法上の自由を人々から奪うような法律を「治安」というお題目で制定する傾向がある。言うまでもないが、国会はこの報告を鵜呑みにした。アメリカ医療協会(AMA)が検査官になることが決まった。AMAは国中のあらゆる医学校がAMAの言うところの認可された医療基準にあうかどうかによって、資格を与えたり剥奪したりする権限を持つようになった。

1847年に結成されたAMAは対処療法の内科医のメンバーの利益のための私的な集まりで、特に、メンバーにとって都合のいい規制を制定するにはよく機能した。文字通りの労働組合であった。ただしメンバーはブルーカラーではなくホワイトカラーであったが…。 AMAに医学校を認可する資格を与えるこ

とは、排他的特権を与えるのと同じようなものであった。

合衆国の医学校の数はフレクスナー報告以前の1906年には160だったのが、1920年には85になり、1944年には69までに減少したことに不思議はないだろう。鶏小屋の見張り番として狐をおくようなものである。フレクスナーは薬を使わずに患者の治癒を促す治療法をいんちき療法とみなした。生物電気医療、ホームセラピー、東洋医学などのコースを設置する学校はこうしたコースをカリキュラムからはずすように命令され、従わなければ、認可と援助をうけられなくなると言われた。当初は少数の学校がこれに抵抗したが、最後には大半の医学校が従うことになった。(もしくは閉校になった)同じことがカナダでも行われた。英国でもホームセラピーに対して試みられたが、19世紀にはホームセラピーによって安らぎと「いやし」を得ていた皇室が介入したので、これは失敗に終わった。1987年に連邦判事がAMAの指圧師の陰謀を見つけ、数百万ドルの罰金を課している。ここアメリカでは今世紀の初めから、代替治療の情報隠蔽、ごまかし、抑圧のための飽くなきキャンペーンが続いており、非常に効果のある代替治療が存在することに一般の人々が気づくのを妨げている。

新聞を通して抑制がかかり、AMAやアメリカ癌協会、糖尿病協会などの既存の団体や、地元の医療掲示板、FDA、国立衛生機関、国立癌センター、国立科学アカデミーといった政府機関によって、主要なメディアの全面協力をえて宣伝された。

過去10年以上にわたって、熱心で良心的な代替治療のヒーラーは投獄され、命にかかわる病を認可されない方法で治したという罪のものと虐げられた。銃をもった麻ジャケットの政府の役人がクリニックにやってきて、ゲシュタポのように彼らをしょつ引いていった。一方でこれらの役人はテレビカメラの前では自分たちは公僕であって、公序を守るために働いているという見せ掛けのポーズをとっている。

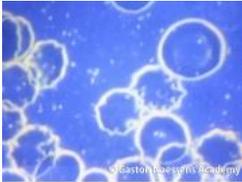
NYナイアガラの滝の医学博士、J.W.Hodge は医療製薬カルテルのことを次のように表現している。「医療トラスト、(遠回しでAMAのことを指しているのだが)による独占はかつて組織された中でもっとも卑劣であるだけでなく、現在、過去にわたって自由な人々を支配したもっとも傲慢で危険で横暴な組織である。安全で容易な自然なやり方で病を治す方法は、必ずAMAの医者によって偽、とか詐欺だとか言われて、非難攻撃された。医療トラストの側につかない、治療技術の実践家は、患者から高額の治療費を取るトラストの医者によって「危険ないんちき療法」と非難された。メスや有毒の薬、あるいは血清、大変危険なワクチンなどを使わずに自然な療法で病の状態から健康を取り戻そうと試みる衛生学者は医療独裁者や狂信者に責めたてられ、弾劾、中傷うけ可能な限り迫害された。」(AMAやロックフェラー家、製薬業界のさらなる罪業についてはドラッグストーリーを参照されたい)

しかしながら、ついに、大衆の意識が臨界点に至り、今ある治療法や対処療法的な医療の有効性と適切さを真剣に疑い始めている。こうした時がくるのは遅すぎたほどだ。

参考：<http://www.educate-yourself.org>

ネサーンのソマチッドの発見またはライフの言った多形態性の

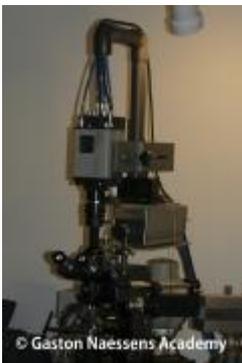
確認



ソマトスコープで覗いたソマチッド



ソマトスコープ



ソマトスコープは、電子顕微鏡とは全く違うものです。

電子顕微鏡は拡大率や分解能において確かに素晴らしいものですが、しかしそれは死んだ血液や細胞しか観ることができません。

これに対してソマトスコープの優れた点は、生きた新鮮な血液や細胞などのディテールが、とてもリアルに観察できることです。また分解能でも従来の光学顕微鏡に比べ非常に優れていて、その分解能は150オングストローム。普通の光学顕微鏡では一般に2000倍くらい、つまりナノ単位までしか観ることができませんが、ソマトスコープの解像度は3万倍で、オングストローム

のレベルのものを生きたまま観察することができるのです。

ネサーンが、画期的なこのソマトスコープの開発に着手したのは若干 21 歳のとき。フランスのリール大学で物理と化学と生物学を学び、その後疎開先の南フランスで「フランス国民科学協会」の教授たちから集中的な教育を受けたネサンは、顕微鏡で観る生命の神秘の宇宙にたちまち引き込まれました。しかしネサーンが不思議なものを見つけて先生に質問しても、「そんなものは何でもない」と実にそっけない。そう突き放されればされるほど、ネサーンは顕微鏡で観たものを知りたくなりました。そして、独力でもっと良く観える顕微鏡を開発してみようと思立ったのです。

分解能に優れた顕微鏡を開発したいと思ったネサーンが、その開発に本格的に着手したのは 21 歳のときのこと。そしてその開発に側面から手を貸してくれたのは、ドイツの有名な光学機械メーカー「ライツ社」でかつて腕を鳴らしたことのある熟練工たちでした。その結果、やがて画期的な顕微鏡が開発されました。その顕微鏡ではソマチッドがはっきりと見えることから、後に「ソマトスコープ」と命名されました。

ソマトスコープを覗いてみると、ソマチッドの動きがはっきりと見えます。赤血球や白血球が動いたりくっついたり、どんなふうに活動しているかもよく分かります。生きた粒子や生体の活動の様子、すなわち「いのちの営み」を非常にリアルに観察することができるのです。

ソマチッドの発見とソマチッドサイクル

研究に着手してから五、六年後のこと。天才的なネサーンは若干 20 歳代にして、ソマトスコープの開発とソマチッドの発見という二つの快挙を成し遂げました。

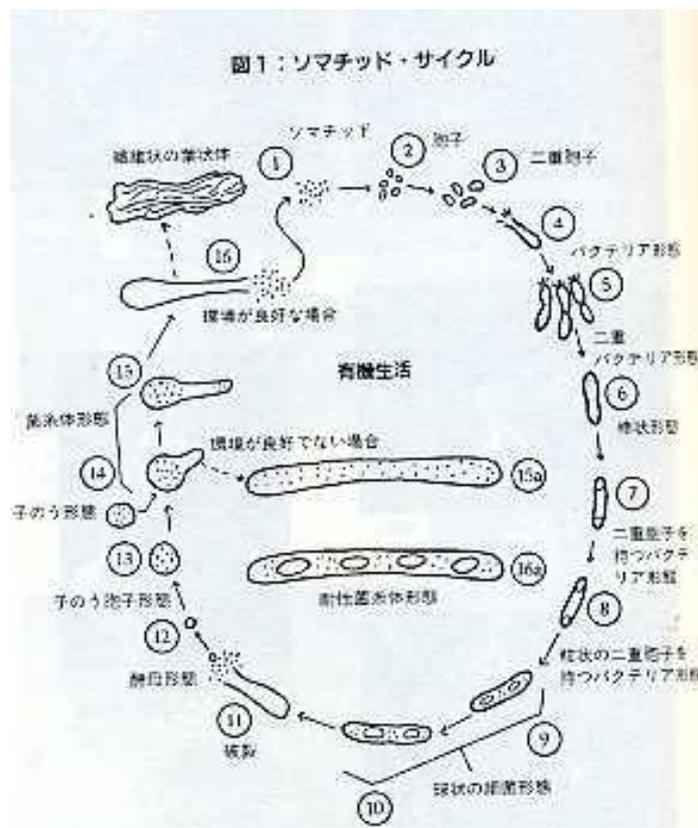
ルに進んでいく。ソマチッドを変化・成長させていく原因は「免疫力の低下」にあるのです。

ソマチッドは免疫力のバロメーター

ソマチッドサイクルとプロテクションバリア ソマチッドは、免疫力の状態を知ることができる大切なバロメーター。というのも、それは免疫機構の状態をそのまま正直に映し出してくれる鏡のようなものだからです。異常化したソマチッドがガンの原因なのではなく、それは免疫機構の状態を示しているにすぎないのです。

そして、そのことを明快に示しているのが、先に紹介した図です。

この図で右斜め上に伸びた黒くて太い矢印は、ソマチッドがそこ以上に変化・成長していかないようしっかりとガードしている免疫機構であり、この矢印をガストン・ネサーンは「プロテクション・バリア」と名付けました。それは文字通り「人体の健康を保護・防衛するためのバリア」であり、ガンなどの病気になるのはこのバリアが壊れたり弱まったりするからと言えます。それゆえ病気の治癒を図ろうとするならば、再びこのバリアを強化すればよいことになるのです。



■ 異常化ソマチッドは病気の証人

このことは、実は非常に重要な問題である。というのも、ネサーンと同じように顕微鏡で「ソマチッドとその成長形態」を観察していながら、ネサーンとは全く違った結論を下している医師や研究者が多々いるからだ。

ちなみにカリフォルニアのサンディエゴでクリニックを開業していたウィーラー医師は、ソマチッドが変形したもの(微生物?)がガンを引き起こす原因だと考えた。またフロリダの病理学者マコンベ博士も、血液中の異常な微生物がガンなどの変性疾患の原因であるとして、イギリスの一流医学雑誌『メディカル・ハイポセシス』の1990年1月号に論文を発表した。

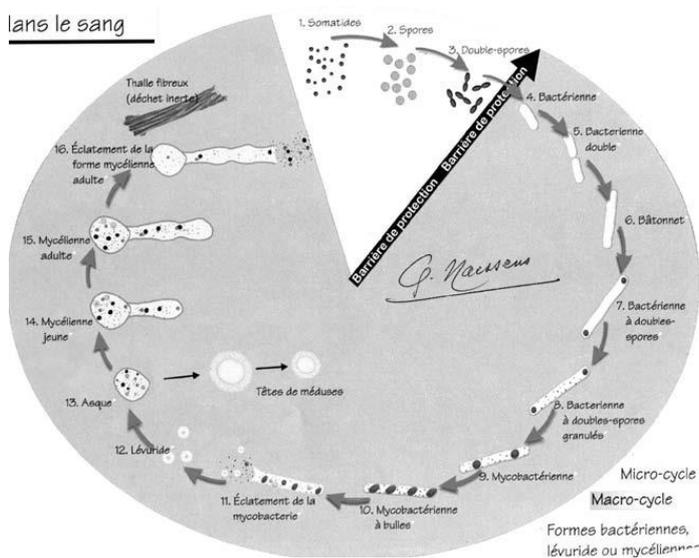
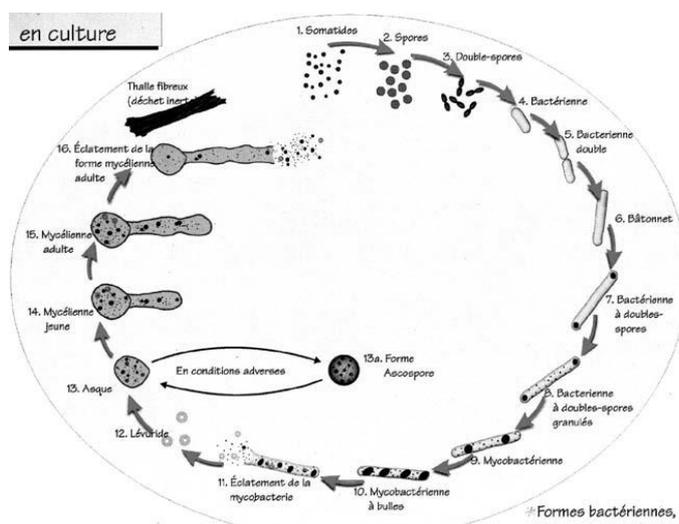
ガン患者の血液の中に、例外なく異常な微生物様のものが見えた



としたら、それがガンの原因に違いないと考えてもおかしくはない。しかしネサーンは、それは決してガンなどの病気の原因ではなく、免疫機構が弱体化した結果だとする。

ネサーンはなぜ、このようにはっきりと言い切ることができるのだろうか。

それはネサーンが、生体をそのまま観察できるソマトスコープを持っているからであり、かつソマチッドサイクルを発見し、人体内でのソマチッドの生態を丹念に実験観察してきたからだ。健康体である限りソマチッドはサイクルの最初の3段階までしか姿を見せず、免疫機構が壊れ出したときにソマチッドがバクテリア形態に変化する。因果律を調べれば両者の関係は明らかであり、免疫機構の状態がおかしくなったときのみ、突如ソマチッドがバクテリア様のものに変化していくのだ。



健康状態でのソマチッド

病的状態でのソマチッド

プロテクションバリア崩壊

2 孢子

3 二重孢子

4 バクテリア形態

5 二重バクテリア形態

6 棒状形態

7 二重孢子を持つバクテリア形態

8 粒状の二重孢子を持つバクテリア形態

9 球状の細菌形態A

10 球状の細菌形態B

11 破裂

12 酵母形態

13 子嚢孢子形態

14 子嚢形態

15 菌糸体形態

16 葉状体（繊維状）

TO BE OR NOT TO BE?

あるか、ないか？ 150 年間隠されてきた知識

クリストファー・バード著 1991 年

ネキサスマガジン 1992 年 4 月

多形態の微生物有機体の神秘

最初の道：

ウィルヘルム・ライヒのバイオン

2 番目の道：

ロイヤル・レイモンドライフと「ユニバーサル」顕微鏡

3 番目の道

ガストン・ネサンとソマチッド

4 番目の道：

ビーチャブと MICROZYMAS

5 番目の道：

ガンサー-ENDERLEIN と細菌のライフサイクル

結論の代わりに：

道は、前に進む

「科学的なうその中心を発見することは世界観の変化に関係する。

科学的発見は、社会の中でだけ可能で、市民に真実を追求する自由を与えることは、どこに向かうかわからないが、真実への異なる経路の追及へ者の、尊敬がうまれる」、ジョン・ボラーニ、カナダのノーベル賞

受賞者（化学）；

卒業歴、カナダ、モントリオールのマギル大学、1990年6月

多形態の微生物有機体の神秘

ここから書くことは、一群の勇敢で異端的な知的探求者の仰天するほどの研究結果の概要を伝える試みである。

それは、生命で最も小さな形を報告している。

1世紀以上前にされたこれらの調査結果をそのまま信じるのは困難である。

その時代の主な微生物学の保守的な（R1）全ての思想家と「オピニオン・メーカー」によって一貫して無視され、沈黙の中で検閲されるか、ずっと抑圧されてきた。

友人または恋人のように、歓迎の興奮と手を開いて歓呼で迎えられる代わりに、驚くべき発見は、敵意で迎えられた。

彼らは異常な違反者または詐称師と言われただけである。

多次元の広大なパノラマを提示しようとするれば、郵便切手を多数張るほど、分厚い原稿を書なければいけない。

または、ドラマの上演を一幕2、3分の時間にして、一時間に減らすことは出来る。

得られた資料はその部分だけで、他の情報には関係しない。全体は見渡せない。

しかも、問題に関する本を得るのは難しい。

簡単にアクセスできず、普通の文献情報源でも参照文に引用されることはまれである。

他方、興味を引く物語の主人公はたいてい、完全に、空間も、時間もお互い、分離されている。

彼らと彼らは平行に研究しており、従ってその研究は彼らの潜在的同僚と自然な協力者にしばしば知られてはいなかった。

彼らが冒険家であったので、彼ら自身が未知の領域で、たった一人の探検家と思っていた。

実は同じ未知の分野のいろいろな部分をこれら全員が切り開こうとしていた。

さらに、すでに言ったように、これらの多くの知的「コロンブス」による「新しい世界」の発見の報告は歓迎されなかった。「旧世界」の地図製作者がすでに彼らの地図を作っており、それで納得していた。

したがって、この領域の地図はおおまかで、最悪の場合、存在せず、進入した部外者は仏教徒の言ったことだとして記憶されるほどだった。

「唯一の道は、歩くことによってやっと切り開かれたものだった」、そして、偶然見つけたとしても、彼らが足を踏み入れて見たものは故意に無視された。

そんな理由で、今日私がどのようにこの問題を書くか思ったとき、私は、私自身の探求の話を書くことをただ表面的に賛成して、所詮無視することを考えて、アカデミックなアプローチの形式を避けることにした。

実際、生体の多形態の土地はほとんど知られていず、やっと問題が見えてきたところだ。

この課題を研究している他の者と違って、私は、科学者、研究者または医者でもない、約 20 年の間、科学の「最前線」をさまよっていた作家である。

あなたのうち誰かが運命のいたずらで同じように意外な展開に駆り立てられたならば、同じように 9 つの異なる道を探求のために歩くことが必要なことを私は、確かめた。

それでも、昔から言われているように「全ての道はローマに通じている」のだ。

最初の道への歩み：

ウィルヘルム・ライヒとバイオン

私はその時にはそうと思わなかったが、それは生体の多形態の世界に、最初に目を開かせた。

1969 年にそれは来た。

海外記者としての任務からアメリカ合衆国に戻った後に、私は、作家として認められていた、ピーター・トムプキンズによって、「異端」の科学者（故ウィルヘルム・ライヒ博士。）の人生と研究に関して伝記を書くのを助けるよう求められた。

新しい考えと発明を発展させることを恐れない革新者の性質によって「異端的」と考えられたとするならば、正規の教育と権威ある者達の研究内容の手垢がついていない、その専門用語「T」はライヒにはかえって使い勝手がよかった。

精神分析のフロイドの被保護者となり、その指導的協力者としての刻印を最初に受けた後に、彼は、独立した経歴を再開するために、国際的な精神分析運動と急に決別し、今日では、生物物理学と呼ばれている研究に入った。

彼が 1930'年代半ばにフロイトの「群れ」から脱退したとき、大部分の彼の同僚は彼の恨み重なる敵になった。

中央ヨーロッパからノルウェーに追放され、彼は特別なレンズを備えた変わった顕微鏡で研究し始めた。

それによって、生きている生体を拡大して研究することができた。

その顕微鏡は彼の時代の普通の顕微鏡で達成できる倍率の 2 倍以上、通常の大さきの、2-3000 倍まで拡大した。

「小胞」は、彼の驚異的な発見の一つだった。

浮囊のような囊を含んでいる非常に小さい流体が、干し草と他の物質（例えば動物組織、地球と石炭）の輸液に表示された。

かなりの回数実験したあと、その間に、彼は小胞の総数が著しく増加したことに注目した。それは培養されることができた

それらを含む標本を沸騰させると、彼はその、奇妙な形態が「移行性」であるということを見つけた。それは「生命があるもの」と、「生命のない不活性なもの」との中間のものと結論を出した。

これはこれまで認められていない生命の基本的段階で、彼は Bions.(1)という名前を与えた：

他の生命科学者は言うまでもないが、大部分の微生物学者も、ライヒの見つけた新しい生物を、まるで彼らの前にウォルト・ディズニーの映画「ファンタジア」の登場人物がまっすぐに出て来たように見た。

もし本当ならば、彼らは突然のショックに卒倒しそうだった。

ライヒが栄養を含む培養基の上に彼のボイルした標本のいくつかを注いだ時、培養菌は独特な形態のバクテリアとアメーバを生み出し始めた。少なくともよく知られたバクテリアとアメーバと同類の生命の形態をつくった。

もちろん新しく発生した「微小生物」の可能性があった。

—Leuwenhock のような、顕微鏡の発明者は、最初にそれらを見たとき—培養基の殺菌が不完全だったか、または周囲の大気から培養菌が侵入したんだと言った。

しかしライヒは彼の生物個体培養菌を過熱しこれらの理由を排除し、表面上「死んでいる」混合物が前より高い量の微生物の形態を発生させるのを確認した。

更にこれは、バイオンが、命の前段階にあるもので、死によって破壊できないエランビタルの具体例だという結論に導いた。これはライヒが「オルゴン」と言った生命エネルギーである。

この新しい「生命エネルギー」の確認は、以前からエレンビタルを仮定していた、フランスの哲学者アンリ・ベルクソン、またはアリストテレスから専門語を借用して、エンテレヒーと言ったドイツの生物学者、H・ドリーシュのような、「生氣論の理論」を抹殺しようとしていた生物学者を怒らせる、明らかに異様な発見であった。

生物学は、ますます冷徹な物理的特性の理論で支配されつつあった。

いずれも、「第一の創造者」または「生命の力」のような「神秘的な」概念を、断固として拒絶していた。

したがって、研究方針を決めるには「科学アカデミーの仲間内での、最初の許可に忠実であることが必要だった。」彼のすべての発表は、正統派が驚くような、または科学の原理を訂正する」ような、すでにそれほど異端的で、ひとりよがりのもではなかった。

ライヒは更に微生物の中にバイオン組織を見つけることもでき、人の血液から培養することもできていた。今でもそうだが、人の血液は無菌であると考えられている。（これは医学部で今もなお教えられていて、変わらない教義である）

彼は次々に、ガンに苦しんでいる人から血液サンプルを得て調べた。

彼はその死に至らしめる病気のプロセスに関係したとても小さな細菌の形を見た。

彼は、それらに T-細菌と名前をつけた。トッドの頭文字 T をとって名づけられた。

その言葉はドイツ人のライヒの国では、「死を意味していた。」

それは、ライヒにはそのように思えた。

癌に侵された体には説明のできない何かが、あった。

豊かな生命力を放散している生物個体に退化が生じると、致死的な T-bacilli が発展する。

彼はこれらの「死のバクテリア」を健康な人々の排出物にも発見したので、彼は、そう仮

定した。これらは、ガンを生じる原因にもなる粒子であった。

ガンにかかる可能性のある性質は、腐敗に対する生物学的抵抗のレベルで測定された。

この事は、私の心にひっかかって、このたった一つの疑問の答えを求めて長い年月をかけた、旅に導いた。

私は、ライヒを通して、ガンと他の変性疾患と多形態の細菌学との関係を調べ始めた。

私は、それを求め、この分野で働いているパイオニア的な研究者が、ガンの状態に関連する微生物を発見したことを後で見つけた。

—各々の研究者は、これについて何種類もの「バベルの塔」をつくって、自分の特別な命名法で名前をつけた。それを宇宙人の形態として見る代わりに、「警告のサイン」または「警告灯」として、つまり、初期の疾病状態の指標として、病気の原因として、それらを認識した。

この議論の中心的な問題は、したがって、以下の通りである。

「常時存在するものでないならば、しばしば、組織体中出现する細菌は、少なくとも病気の原因というより、むしろ病気の結果出てきたとは言えないか？」

これらの細菌は病気の原因にもなり、病気の結果出てくることもあるわけで、両方であるだろう。

ライヒの人生は、悲劇的に終わった。

彼の発見は権益を持つものに衝撃と痛みを与え、特に一般的な病気と癌の病理学における医科の神聖なドグマを疑ったために、彼は意地悪な、強烈な攻撃を受けた。

このそびえ立つ（時にはつむじまがりの）科学者の物語は、終わった。

彼は法廷で審理され、刑を宣告され、1964年にアメリカ連邦政府の刑務所で死んだ。

これを我々の自由なアメリカ人の共和国は命令した。

買うことができたライヒの出版物のすべては、—個人的に印刷された雑誌（*Orgonomy* ジャーナル）を含めて—ニューヨーク市の焼却炉で燃やされた。

ドイツのナチ国家が、ライヒの既存の出版物の全てをベルリン中心部（R3）で、巨大な薪の上に積んで点火するよう命令したその20年未満の後に、そのアメリカの命令は、出された。



2 番目の道の歩み：

ロイヤル・レイモンドライフと「ユニバーサル」顕微鏡

多くの原因のため、我々が予定していたライヒの伝記は書かれることはなかった（R4）。

それでも、研究のために使用した2年間は、無駄にならなかった。ライヒを詮索する機会

を通して最初に、不思議の国のアリスが落ちたような穴、あるいは、鏡を通して、様々なスリルに富んだ、問題の経験をし、研究に魅了された。

(科学的な判断からみて「絶対ありえないような」白が黒になるような経験であった) 科学教育を受け、それを長く受け入れるための訓練をし、一体となっていたので、異端であるといわれた彼らが「逆に正統的だった」ので、当惑した。

研究された世界を身近に見ることで、私は実際にそれらが、「ある」ことを確信した。

私は私の道に沿って進み、また他の多くの「メモ」を見つけ出し、それでもそれは「否定的なもの」とされたが、それは確かに存在した！

ただ特に1つの疑問が、くすぶっていた：

何んで彼らは認めず、新しい発見を阻止したのか？

これらの研究者、正統的な科学的意見に固執する権威ある者達は「一般に認められた知識」を「確認し」、彼らの小さな世界に閉じこもり変えることは何故できないのか？(ドクター・ジョン Polanyi のことばで言えば、彼らは革新的な考え、または「先端知識」を彼らの「世界観」に組み入れるよう調整している)

「知識の最高権威」が、決定する領域で、「未知の」事は、なぜ興奮で受け入れられる代わりに、しばしば非難され「幻影的である」とか、「ファンタジー」としてタブーにされるのか？

1965年に、私はある論文に出くわした

それは、私の興味を十二分に引きつけた。1944年に、出版されたものであった。

それは1冊でなく、2冊の評判の高い雑誌でワシントン D.C.のシミソニアン学会のものとフィラデルフィアのフランクリン研究所のものであった。

その3分の1は、アメリカのラジオ社によって売り出された新しい電子顕微鏡についての記事であった。

他の3分の2は同じ偉大な成果として「ユニバーサル顕微鏡」を紹介していた。

それは、カリフォルニアの独学者(ロイヤルレイモンドライフ)によって設計され、1920年から発展し改良されてきた。

電子顕微鏡は優れた解像法で500,000倍を上回る倍率を達成することができるが、その放射線が対象となる生命を殺したので、生物を調べることができないということを私は知った。しかし、この論文が心から断言したように、ライフの方法は生きた物質を視ることが可能だった。

優れた解像方法(R5)で少なくとも60,000倍に到達するという、聞いたことがないような倍率であった。この驚異的な装置で、ライフは病人の血液の微生物を簡単に視ることが出来た。微生物はいろいろな状況の下で、他の形態へと一見奇跡的に、変形した。

それは多数の蝶に変形していく毛虫のようであり、その数はガストン・ネサン'のソマチッドサイクルと同じ全部で16の変化の過程があった。

彼は、1人でその、結論に達した。両者は互いに離れて、時間も前後して、独立して研究し

ていた。体の内部の状態に従い、微生物は現れた。

それは、ライフの意見では、疾病の原因ではなく、疾病状態の結果であった。

その結論は、私がハーヴァードで一般生物学で 4 年間のコースの間、細菌学と病気について得た情報をすべて完全に、ひっくり返した。

私は、ライヒのバイオンの研究の間に、私が読み、そして得た情報を思い出すことで、ライフの情報をそのまま、信じることができた。

私は、著作をやめ (R6 クリストファーバード著「神の手 ダウジングの 500 年の歴史」のこと) 私は、すべてを追跡しようとして国立医学図書館で 2 ヶ月を使って、探し続けた。

私は、ライフと、彼のスーパー顕微鏡の存在を確かめた。

この問題はだれも注目しないだけでなく、ライフの顕微鏡自体が地球の表面から消えたかのようにだった。

私のこの実を結ばなかった調査の物語はどこかほかに書くことにする。(3)

ここでは、私は簡単に言う。

私の図書館での研究は、1930 年から今までの数十年間に、すべて忘れられただけでなく、学校の微生物学者はまったく認識が無いとまでは言えないとしても、ほぼ永久的に、その形態を認識するにはほど遠い状態で、それを正論として主張してきたことを示していた。

培養菌の正しい発生条件の下で、このバクテリアは生じることが可能だった。

そして微生物をブロックするのが可能なフィルタでも通り過ぎることができるような、ウイルスより十分小さな形にこれは変化する。

バクテリアはフィルターを絶対通過できないと考える「濾過不可能主義者」として知られる保守的な細菌学者の陣営への鋭い反対のため、これらの反乱軍は、バクテリアはフィルターを通過できると考える濾過可能主義者として知られていた。

この学説の支持者で最も初期の 1 人は、スウェーデンのエルンスト・ベルンハルト Almquist であった。北極探検家でもあった彼は離れた島に住み、シベリアの北の海岸は、彼の名をとって名づけられた。

Almquist は、フランス、イタリア、ドイツ、ロシアと米国や、おそらく他の国の研究者と同じように、彼の研究所で何百もの多様態のバクテリアについての所見を得ていた。

1922 年に、Almquist は、20 年間の長い研究の結果、「一つの細菌の、完璧なライフサイクルとさらに種の種類を、誰も全て知ることができない。そう思うことはたんに仮説である」という結論に達した。

微生物学の世界でライフの顕微鏡の発見が放った騒動は、彼のその後の電磁気を基礎にしたガンと、他の病気に対する治療法と同様に、ライヒのように、米国の医者当局によって法廷で審理される。

法廷は、非常に敏感な発明者にひどい外傷となったことが証明される。

それは最初ライフを神経衰弱にさせ、そしてアルコール中毒にさせた。(R7)

2 つの顕微鏡 (電子と「ユニバーサル顕微鏡」) の対立の結末は私の心を苦しませ、それ以

来ずっとその疑問は継続した。そして、哲学的問いは、絶え間なく私の心に穴をあけた：
その疑問は、どのようなものであったか、
最初の電子顕微鏡の装置は不活性な生命のない物質だけを見ることができ、それは、世界の研究所で一般的に採用された。
2 番目のライフの装置は、不確定な状態で動き、息をしている、生命のある生体を見ることが出来るのか？
一人の科学者の成功と勝利と、その嘆かわしい終り方の問題は、生命を解明しようとしている 20 世紀の生命科学の基本的な問題に関係すると、言わなければならないのではないか？
疑問を反芻している間に、その疑問はもう 2、3 の事実をつけ加わえてくれた。
これは 2 人—または 3 人の科学的な巨人を陥しいれた「科学の政策」のことで、それに基づいて類推するならば、法廷につれ出された、顕微鏡検査の自己訓練をへた癌学者として専門家であったガストン・ネサンも含まれるのではないか？
どうして全て 3 人の発見が偽で役に立たないものとして「インデックス」をつけられたのか？
それらの全て 3 人がアメリカ合衆国、フランスと多くの他の国で詐欺師とくわせ者として非難される理由を共通のことから説明可能になるのではないか？
これらの疑問に対する答えを考えるために、沈黙の時間をとることにしよう。(R8)

3 番目の道への歩み：

ガストン・ネサンとソマチッド

ライヒに最初に案内されたところから、ライフにいき、次の驚くべき私の足跡は、アメリカのヴァーモント州の北にある、カナダのフランス語圏のケベック州のロックフォレストの小さな村 L'Estrie 英語では東部居住区と呼ばれるところに、私を連れて行った。
私は、ウィルヘルムライヒ博士の娘エヴァ・ライヒによってガストン・ネサンの情報を得た。
私の最初の出会いと、12 年間の協力の話はネサンと私の本の最初の章で話したので、私はここで繰り返さない。
私がここで、言うべきことは、次のことである。
私にライヒは多形態の微生物学の世界の研究について最初にそのドアを開け、ライヒの研究は、大いにそれを広げたと言うならば、ネサンとの遭遇の結果はそれを越えて私に全ての地平線の視界を与えた。
ピーター・トムプキンズから研究のために、ライヒの資料のはいった小型トランクを手渡された時から 10 年後の 1979 年に、私は最初にガストン・ネサン会うため訪問した。
その次の 10 年間で、私自身の経験を通して、友人そして、特にガストン・ネサンと彼の妻と過ごした数百時間の援助を通して私は様々な情報を得た。

彼の魅力的な生命の研究で発見した多くのことは、私の本で伝えた。(1991年2月に「完全なる治癒」を出版)

ネサンはその研究の結果多くの波乱を経験したことを学んだ。

時間が経ったが、肝心な1つのことは、私にとって予想もできない衝撃的なことだった。

それは多数の科学的に訓練された人々はネサンの顕微鏡によって見ていたものを受け入れるか、信じるには、無能だったことだった。

刺激的で真新しい、ソマチックの形態を認める代わりに、彼らは単にそれらを人工の加工品として受け入れなかった。

そして、自然に存在せず、何か誤って持ち出されたものとした。」(R9)。

そのような信条が生れる一番の源泉を数秒で全て言い尽くすことができる。

最も権威主義的ないわゆる「有能な」研究者の心には、彼らの地位を支持してくれる者の「確実性」の基準から見て、認めるにはほど遠い問題だとして通り過ぎる。

そのような全ての研究者が—それは膨大な数の大衆でもあるが—一度はかつて聞いたことがあるとしても忘れられた、ライヒが科学的研究のために言った言葉を書いておこう：

「特に確定的に話されたことを自動的に信じないでください、あなた自身の目で観察することによって、何かを納得してください。ある新しい事実を察知したあと、完全に説明されるまで、その点を疎かにしないでください」(強調を加えた)

この点で、警句(「百聞は一見にしかず」)は必ずしも正しいわけではなく、逆の場合もある：

「一見は百聞にしかず」である。

1980年代中頃ネサン'に関係していたその間に、私はにヨーロッパにとんだ。

我々は、スウェーデンの医者(エリク・エンビィ博士)に会わせてもらった。

彼はこの分野で、最も早く、そして、最も優秀な、多形態の微生物研究の分野の先駆的研究者の1人と研究した経験があった。

この先駆的研究者はドイツの動物学者 Enderlein だった。

我々は、2、3時間は、話した。

Enby の話す英語は言葉の障壁が、あったため会話は止まった。そして、先駆的研究者 Enderlein の本は、ドイツ語だった。

私が伝えられず、読めもしない言語だった。そのため私はドイツの科学者が苦労した少なくとも1990年までには知られていなかった未知の分野の部分に入り込むことができなかった。

ネサンによって得られ、発見された山脈の頂点は、私のネサンについての本の第1部で書いた。

振り返ってみれば、この分野の、「パッチワーク・キルト」の全ての図柄、または1つ1つの部分の発見は孤独な探求者の熱意によって得られている。

彼がソマチッドと呼ぶこの上ない発見は、それを形をなして見えるようにしただけでなく、

このほとんど破壊できない、この小さな形の生命の起源といえるものが、変化してゆくサイクルを、全てたどって明らかにしたことだったと言える。しかも、何と、実験を通して、それは「DNA 前駆」物質のようなまねをすることを確かめた。(R10)

ネサンがした他の全てのことに加えて、このようなことも含めて、多くの疑問が出てくる。変性疾患の緩和のための、将来性あるアプローチの発展を含めて、生命の起原については、ミステリーで隠され嘘で覆われており、混乱を解決するために誰も、間近までいけなかった。

今もなおそれは混乱し続け、それは長い間、科学を混乱させ続けた。

私は、「近く」にいくための資格を得た。

私の次の足跡は、ねじれた評価がなければこの 1 世紀の間に、このもつれを解決していたかもしれないもう一人の稀有の天才であるフランスの科学者に、敢然と立ち向かうことになった。

4 番目の道への歩み：

ベシヤンとマイクロジマス (MICROZYMAS)

酸性化は、現代特有の環境劣化、病根の温床であるにも関わらず、あまりにも理解が薄いのが現状です。

自然環境の基本デザインは、電気的中性。水素イオン指数=ph が中性に保たれるように設計されています。人間で言えば、重碳酸ソーダサイクルのような、身体の中性を保つ役割です。それが十分に機能していれば酸性化由来の疾病は起こり得ないのですが、それを上回る酸性化がすすんでいる事実。この事実が示しているのは、人生の 6 割以上を過ごす居住空間の空気環境の重要性です。

化学兵器サリン、有機リン酸を基材にした多様な農薬は、神経細胞のイオンチャンネルに入り込み、イオン電流=活動電位の伝達経路を塞ぎます。細胞が持つプラス、マイナスのイオンの通り道は高精度な識別センサーを持っています。電気的中性を保つために、特定のイオンだけを通過させ、活動電位を起生したあとに、興奮を沈静する特定のイオンを細胞内に流入させます。サリンや農薬が瞬時に生命を抹殺できるのは、イオンチャンネルのセンサーを狂わせる能力があるからです。本来侵入できないイオンチャンネルに飛び込んだ毒素は、電気的中性を保とうとするイオンの流入を塞ぎます。プラスイオンを排出し、マイナスイオンを取込むことで中性を保つ細胞の機能が損なわれ

ば、数秒で細胞、細胞群は崩壊します。

サリンは極端な例かも知れません。しかし、一酸化炭素中毒、揮発性の建材から発生するガス、ごくごく微量の放射能、曝露の時間差の問題とは言え、同じことが起こっています。酸性化の問題は毒素だけでは限りません。

体内に残留する特定の酸化物質＝タンパク質に嫌気性発酵を促す酵素が、生命体と非生命体の中間に位置するマイクロジマス、あるいはソマトィスを生成します。一般にタンパク質が特化した、ニューロペプチドと言われる物質です。この物質の特徴は、感情＝心の有り様に反応し、色やカタチ、幾何学的配列が変化することです。心因性由来の酸性化も疾病の原因となることは明らかです。

たとえ、緩慢であっても、電気的中性条件が偏るリスクは、心理的にも影響を及ぼし、病変発症の端緒となり、代謝毒、生物化学兵器を浴びたに等しい結果を招くことに変わりありません。生命の居住する環境が酸性化するリスク。空気環境は分子レベルで還元促進しなければ、根本的な解決にはつながりません。

私が薬剤師、マリーNonclercq、に会ったのは1984年のフランスであった。

彼女は専門職を遂行した後、

「科学者アントワン・ベシャン、1816年-1908年—その研究の独創性と生産性」(4)という題の、受賞した博士論文を書くため、拍車をかけていた：

微生物学の歴史でライフの大部分の研究記録と一緒に顕微鏡の消失は失われた1章を構成していたが、Nonclercqが資料から再構成した事実も、微生物学の歴史で、失われた1章であった。

再び偶然の出来事によって、私は失われていた情報を見つけ出した。

2人の科学的な巨人の間の論争に関係するその過程は、長い間かかって記憶によって掃き集められた。

同時代の科学者は、それについてはほとんど何も知らなかった。

敵の1人は、ベシャンであった。

彼の強敵は、世界的に有名なL・パスツールであった。

その名前は、世界中で、研究所の楯に刻まれている。

論争は、微生物が介在する病気の起源についての、対立した見方であった。

Nonclercq はブルターニュの医者を通して、医療の歴史についての、分厚い本に出合った(5) 彼女はその本で、L・パスツールは、彼の臨終の床の上で、クロード・ベルナールの戦い方は正しい..「微生物ではない、その土地の勢いがすべてである」と告白したと書いてあるのを読んだ。

—今でも依然として絶対的真理として祭られている理論の父である彼は、多くの疾患の原因は、細菌によって組織体が侵略されることを、証拠を示して提示したその理論を死ぬ前に撤回していた。

実際には、その役割は、体の内部環境によってしばしば行われる。

いわゆる体内の「土壌」の趨勢がそうさせたとするならば、いろいろな原因の性質が変わり、細菌の成長が内部から助成されたことになる。

パスツールが省略したものは、それであった。

彼の告白は、フランスの指導的生理学者バーナードの、洞察に満ちた声明に関してではなく、何十年もはっきり態度を表明して彼と闘った男 Antoine ベシヤンに対してのものであった。

Nonclercq は、史料を念入りに掘り起こして、パスツールがこの論争を科学的な事実に基づかず勝利していたことをみごとに証明した。

しかも、非常に高度な科学的技術をもつプロフェッショナルな研究者だが今日「広報」と呼ばれている自分を売込むセンスのない退職した、ベシヤンに、強敵パスツールは、打ち勝つことができた。

歴史の裁判官が判定するならば、パスツールの勝利は、ある日、完全にピュロスの勝利であったことが証明される。(「古代ギリシアのエペイロス王で、戦術の天才と謳われたピュロスの故事に由来し、損害が大きく、得るものが少ない勝利」、つまり「割に合わない」勝利であるという意味。)

医学がパスツールの道筋に続くように長い間強制し、少なくとも医学という名目でされた驚異的な損失に関かわったことで、自ら苦しむこととなる。

ベシヤン自身の発見の道筋を、たどると、発酵—錯化合物を比較的単純な物質に分裂させる化学反応—の問題を研究し、彼は生きている人の有機体から、チマーゼと言う一連の「酵素」を分離した

(R11).

それは生体の中で働くカビと呼ばれ、有機物質を崩壊させる真菌様の生長物であった。

ベシヤンは、それらが小さい「粒状化」の堆積によって形をなすのを見た。

チマーゼとの関係のため、彼はそれを、ミクロジマス *microzymas* または「小さい酵素」と呼んだ。ネサンの語彙であるソマチッドの前身である(「小さな組織体」)

(6)

この物語の目的にとって非常に重要なことは、ベシヤンも、ある種の状況の下でこの果粒ソマチッドを見つけていたことだ(それは細胞化したバクテリアに単独で発展する)

したがって、「細胞は、生命の基本的な単位としては、もはや認識することはできず、全くより小さな何かに、それは取り替えられるべきだった。

細胞よりも、多くの数の、マイクロジマス **microzymas** があった。

ベシヤンが最初の哺乳類が地球上に存在していた 6000 万年前の地質学的日付がある石灰岩で確認できたように、それは破壊することができない。

それらを殺害する彼のすべての努力が、実を結ばないことが証明されたので彼は驚いた。

彼は、第 3 の傑作「血液」を書いた、そこで

「私は、マイクロジマス **microzyma** がすべての組織の始まりだと主張することができる。

そして、死んだバクテリアにもマイクロジマス **microzymas** は生きている、したがってこれらは、全組織で最高のものであり、類似物のない特別な始原的な、生きた存在である。

."(7).

マイクロジマス **Microzymas** は命プロセスの初めに出現した。たとえば胚珠にあるそれは、卵になったー

そして腐敗している生物形態でもそれは存在しており、ラヴォアジェの不生不滅の化学的法則と同じものが、ベシヤンの生物学的な法則にも完全に、見つけ出された。:

「何も失われず、何も創られず、すべてが、変化するだけ」の状態である:「何も死の餌食にはならず、すべては命の餌食となる」

これは、灰から灰へ、塵から塵」にという古い聖書のフレーズを思い出させる:

血液の最後のページで、ビーチャプはさらに露骨に言う:

「死んだ後、物質がその最初の状態に戻ることは、重要なことである。

それは、生きていた人々の組織にしばし、貸されたただけだった。

生物はマイクロジマス **microzymas** でいっぱい、生命の構築に、または病気のために、破壊のために、そして、死のために、これら自身が重要なものを、もたらず。

この多様な結果は同じプロセスによっていることに驚く必要はない。

我々の細胞は「死への過程」に非常に似た「発酵」によって、連続的に破壊されているのが絶えず観察されることができる。ーそしてそれは連続して起こっている。

我々がこれらの現象の核心に深く入りこむならば、我々は、この現象を、本当につまらない活動と言うことはできない。我々は、絶えず腐敗している！」(強調を加えた)

5 番目の道への歩み:

ギュンターENDERLEIN と細菌のライフサイクル

植物の秘密の命」の我々の続編「**Secrets of the Soil 土壌の秘密**」(R12) が出版された 22 年後、

1990 年にそれは、あった。その年、私は、ライヒとバイオンの研究を始め、ついにもう一人の研究者の研究結果を手に入れた。

それは微生物の多形態の研究の地平線上にある、山頂の連なりのなかの、ピークの1つで、ディテールを明確する研究を確立したことで歴史に残っている。

この問題に関する最初の英語の本によってこの情報を手に入れることが出来た。

第一次世界大戦の間にドイツの動物学者によってこの研究は開始されたと述べている。

ガンサー **Enderlein** の発見は本の著者によって「かつて得た最高に重要なもの」として、その研究の価値が書かれている。

Enderlein (1917年) はバルト海の陸軍病院の細菌学者として働き、「微生物界の全く新しい所見を開き原稿を書き終え、同僚によってそれは歓迎された。

バクテリアの多くの異なる多形態の発達段階を明かにして、示した。

病気とそれらが治癒されてゆくプロセスは、正確に周期的な多形態の変化の法則に拘束されている。

原稿は、1925年に、「バクテリア サイクロジーナ」(バクテリアのライフサイクル)

という本にされて発表された。直後にその作者はベルリンの動物学博物館の管理者が約束された。

Enderlein の研究は、ドイツの研究者と同じようにアントワン・ベシヤンにたいへんな信用を与えたことを示唆している。

寄生虫学の創始者で動物学者ロバート・ロイカルト、そしてはるか昔の、1901年に戻ってがん患者の血液に寄生虫がいることを最初に報告したオットー・シュミットを含め、何人かのドイツ人と同様に **Enderlein** はベシヤンがやり残した所を、取り上げた。

この出会いによって、暗視野顕微鏡の装置で研究することによってのみ、これらを見るのが可能であるという点が、興味の焦点となった。

さらに **Enderlein** を学んだために、微生物は、形態の変化のサイクルを通して変化が進むことに、たいへん興味を持ったことをここに付け加えよう。

彼の考えでは、無数のバリエーションが可能である。

彼は微生物現象の分類表を見せて「1000の頭をもつ怪物」とした。

彼は相互に有益な共生関係の中で、異なる種類の微生物が組織体の中で通常生きていると明解に断言し、体内環境の厳しい悪化で、これらが疾患を生み出すと言う。(!!)

そして **Enderlein** は、病気を引き起こすこれらの活動について生命の異常、または「生命のプロセスの欠陥」と言った。

病気を引き起こすという進行中の邪悪な目的が、微生物の部分が原因で達成されるとするだけでは充分ではない。

これらの微生物が生き残るための衝動が、その効果(病気)を引き起こす。微生物が生き残ろうとする衝動が、病気の原因をつくるのに充分必要なものだった!

これらの初期の発達段階では、健全に有益な役割を実行しつつ血液の中で生きている。後になって、彼らは自らを維持するためにその役割を見捨てる。

今日、「バクテリアサイクロロジーBakterien Cyclogenie」という本はほとんど知られてなかったが、強い関心をもたれている。

それは第二次世界大戦の前に、研究者によってささやかに国際的に承認された。

ピッツバーグ（1930年のペンシルバニア）で行われた国際的な生物学的議会で明らかに好評で1939年にニューヨーク市で開催された3回目の微生物学的な議会で、Enderleinの貢献は、栄誉を与えられ認められた。

正統的なドイツの医学コミュニティの強力な部分から、彼のパーソナルな生活を襲撃されたにもかかわらず、Enderleinは医者と微生物研究者（ウィルヘルム Brehmer 博士）のような2、3の勇敢な同僚に強く支えられた。そして、その人はガン細胞の抑制されない悪性の成長の原因のエージェントを確認した」

Enbyの本はこれ以外に多形態理論が隠蔽されていくのと対照的に、微生物は単一形であるとする教義がどんな具合に優勢になったか、歴史的見地を私に教えてくれた

（これはロイヤル・レイモンド・ライフについて私が論文を研究している間、私が見落とした見方である）。

これを強くなった理由を、パスツール（1822～1895）の影響だけで考えることができず、ローベルト・コッホ（1843～1910）についても考えないといけなかった。

コッホの「原則」は、微生物研究の「10戒」のうちの1つになっている。

そして、彼の同胞は、自然主義者で植物学者のF・コーン（1828～1898）である。

コーンは、微生物の組織と形態に基づいて、細菌の恒久的タイプを種として厳しく区分し、これらをグループに分類することを主張した。

そして20世紀への変わり目を過ぎて、医薬品を研究するためにドイツに進んだ多くのアメリカ人にドグマとしてこの考えが根強く教えられ、次々にコーン・コッホの見方は、アメリカに持ってこられて、決定的なものなり、反対は許されなかった。

結論の代わりに：

道は、前に続いていく

私がここまで書いてきたものは、多形態の有機体が住むミステリアスな国への個人的な旅の報告である。

この報告では普通に起きる、不確かなこと、思いもかけないことを、それぞれの道に沿って、問題を共有できるように、「小刻みに」要点となる情報を書いてきた。

調査した国は、平面的な地図が作成されただけである。

しかし、私の調査の結果、私のナップサックは、スケッチの山で満たされている。

仕事を達成するには時間が必要である。

ある日、私がこの領域の詳細な全ての地図の準備をすることが許されれば本は、形をなし、この地図は最高のミステリースリラー小説の中で話されるのと同じほど刺激的な物語を簡

単に提供することができる。

すべてにおいて、まだ不足しているものは、その目標への思いである。

そして、思いを高く目標を持ちつづけようとおもう。

多形態の微生物の研究の場は、多くの頑強な研究者の作業で、調査結果が受理され、彼らの成果が見つげ出された。

—そして、これらは至る所で苦しんでいる病人を治療する物理療法に適用するように案内した。

Enby's 本博士の最初の章は、「医学的な革命の起源と名付けられた;

その革命は、依然として完全に進行していない。

Enderlein の、本は 65 年前出版され、その結論は、彼の前のベジャンのように、全体が科学界によって認知されずにいる。

これは、そうあってはならない。

多くの他の研究者の真実を持って来るすべての努力が曲げられたわけではないので、革命を、起してほしい。

たとえば、1927 年の、アメリカの微生物学者、フィリップ・ハドリー博士に戻って考えるべきである。

彼は伝染病ジャーナル 312 ページに発表された記事「微生物の崩壊」で、**Enderlein** の研究を非常に賞賛した。

これはミシガン大学の衛生学研究所で実施した研究で、基礎が形成された。

この論文でハドリーは先見の明をもって注意した：

Enderlein'の貢献の本当の評価が得られるまで、多分長年かかるでしょう。

一方、我々は、混沌とした状態の細菌の細胞に研究のために秩序を作ろうとした慎重な彼の試みを手放しで賞賛する。

私は、**Enderlein** が道を切り開いたと思っているが、少なくとも、前進のラインに、多くの他の細菌学者が遅かれ早かれ、続くことは確実である」

このことばは 64 年前書かれたが、少数しかハドリーの挑戦に応じる細菌学者はなかった。

その挑戦に応じた 1 人は、ハドリーがこれを書いたわずか 3 年前に生まれた。

我々には、今日、ネサンの存在がある。

研究に献身した人生、そして、隔離された彼は、フランス人として生れ半生を過ごし、残りの半生は、ケベックで生きた。

彼の選んだ土地で、彼は燃えて、前進した。そして彼より前に、ベジャン、**Enderlein**、ライフ、ライヒといった他の多くの研究者によってもたらされた戦いのたいまつを点灯しつづけた。

彼は、今まで大事にしてきた匿名性を脱ぎ捨てて、明らかにした。

多数の人に遠くから、あなたがだれであるか、来てほしいと要請されて、彼はシンポジウムのスポットライトに呼び出された。彼は、証明するために、それを言わなければならな

かった。そこで、彼が示したものが何であるかあなたは見たはずだ。

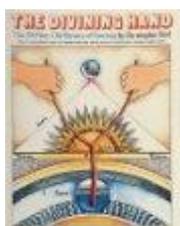
多分、科学的な舞台の中心に、ついに微生物多形態性の研究の場が現れるかどうかに関係なく、彼の発見は、成就している。

すぐにそれは科学界が認めるのだろうか？「あるかないか？」はハムレットの劇中の、問いである。

だが、われわれは、ガストン・ネサンの研究の成就と彼の勝利をたたえようではないか。

Secrets of the Soil 土壌の秘密 : New Solutions for Restoring Our Planet

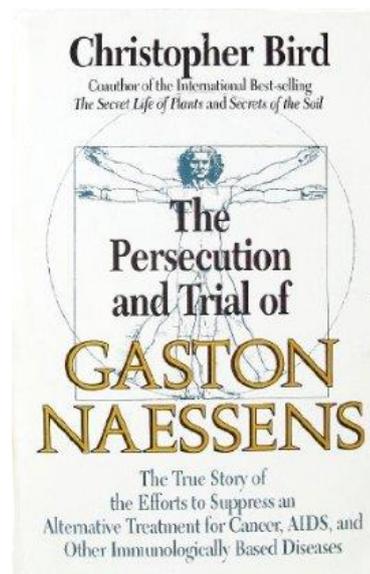
The Secret Life of Plants 植物の神秘



神の手---ダウジングの 500 年の神秘 **The Divining Hand:: The 500 year-old Mystery of Dowsing**

January 1, 2000

The Persecution and Trial of Gaston Naessens:完全なる治癒 The True Story of the Efforts to Suppress an Alternative Treatment for Cancer, AIDS, and Other Immunologically Based Diseases



参照 :

RI

orthodox' ということばは ‘、ギリシア語のオルト ort という茎を意味する言葉に由来する (正確なこと、または正しいことまたはさらにまっすぐなものを意味する)

後の doxa ドクサは (意見) を意味している

後者は動詞 (dokein) から来ている、

(考えられるとか、みられるを意味する)

その語源に由来して、このように、正しい説に思われるか、正しいことになっている意見を暗示しています

R2

他のどの言葉にも翻訳できず、一匹狼の人を意味する

彼のグループ命ずることを拒絶する者、(他のことばでは、) 反対する者

その語源は、一直線に古い西側のカウボーイの文化に由来するというを多くの人は、知りません

このことばはブランド名のないものにあてられた、
または、孤児、子牛の類または子馬、伝統的に、一人だけの特性の持ち主と烙印を押された者と考えられていた

英語の話しことばは、初期のテキサス牧畜業者に恩恵を受けている、

Samuel a Maverick (1809-1810)

サミュエルマーヴァリック一匹狼 (1809~1810) がいます

その人は、仕方なしに彼の名前がこの語源に由来するため、彼はブランド品を作りませんでした。

R3

ライヒの **bion** 研究の世界の、おそらく唯一の専門家は、バーナード・グラ博士 (生物学的科学の教授) です

最近、モントリオールのマギル大学から引退した。

彼の学生時代に、メインの **Rangely** の、ライヒの建てた家と研究所である「オルガノン」でライヒと多くの時間一緒に研究活動をした。

グラには研究があります。そして、依然として、命の起源に関連する彼自身の **bion** 研究に関する本は、出版を待っています。

R4 ライヒのプライベートな資料は、彼の財産の理事によって独占的に封をされた。

彼の娘 (エヴァ) は、裁判所の活動を通してそれらの封を切ろうとしましたが出来ませんでした。

R5

ライフの才能は、1 マイル離れたところからナンバープレートの文字および数字を自動的に明らかにすることができるカメラを発明しました！

R6

The Diving Hand:

神の手 :

The 500 Year Old Mystery of Dowsing (E.P.

500 年前のダウジングミステリー (E.P.Dutton, New York, 1979; New Age Publications, North Carolina, 1985.)

ダットン、ニューヨーク、1979;ニュー・エイジ出版物、ノースカロライナ、1985 年)

R7

それはカンザスシティの偶然の会合を通してでした

私は、サンディエゴのライフの研究室アシスタントのうちの 1 人のガレージについて訪問しました

私は荒廃した状態の「ユニバーサル顕微鏡」を見つけ出した

私の記事が出版された結果、長い間、顕微鏡を探していた人々からの多くの電話をもらいました

最高に面白くて熱心な1人は、メリーランド（(バッファロー) ニューヨーク州立大学のジョン・ハバード博士でした

その人は、わたしがカリフォルニアから持ってきた Rife の資料を見るためワシントン D.C. の私の家に来ました。

私は Rife の人生に関する本を書くことを計画しました、しかし、他のプロジェクトが介入しました。

その本（ガンの治療法は完成した）(Marcus Books, Queensville, Ontario, 1987)は、バリー Lynes によって書かれた。

R8

これらの疑問に対する答えは「ガン産業——医療における政治活動を解明する The Cancer Industry Unravelling the Politics,」Ralph W. Moss 著 (Paragon House, New York, 1989). を読んでください

R9

ことば「artifact 人工品」は、技術という言葉から生れている、

（動詞 *facere* の中性過去分詞（「つくる」）、または「何かつくられた」

生物学において、「通常存在しない組織または物体を意味している

しかし、いくつかの外面的な作用によってまたは活動によって生み出されている

我々の多くはことばの基本的に意味することを忘れていきます

「技術」は、「自然の動きを補うか、模倣するか、変えるか、偽造する人間の努力です

ことば（人工品 artifact）の安易な使用によって不当に新しい微細な発見を廃棄させることができることに加えて、これに「含まれた意味」にはある種の策略を暗示しています

偽る、ごまかす、または外へ偽装する、または、詐欺的な動きを約束する、

全て正しいことを知っていたのに、それらの事を行ったネサンの起訴には、この言葉はよく似合います。

R10

ネサンは、ウサギからウサギにソマチッドが移動することを実験しました

それは生きている人と動物の遺伝子の特徴のある変化にあてはまっていた。

そして、特に臓器移植で潜在的におこる、拒否症候群にかかることはなかった。

「私の書いた本の第1部にあります

R11

酵素複合体はイーストと、バクテリアと高等植物で見つけ出される

その発見のため、Bechamp ではなく、ドイツの科学者の信用が、増しました

その人はそのことのための1907年に、ノーベル賞を与えられた。

ビーチャブの優先順位を正当化する決定的論文は、1897年に発表された

チマーゼ *zymase* ということばは、Bechamp のその問題の最初の研究に関連して、

フランスのリトレ辞書の 1873 年版で見つけ出される

R12

土の神秘「Secrets of the Soil」

, Harpercollins, New York, 1980.

1.これに関するドイツ語で書かれた、ライヒ最初の本、Bione (バイオン Die Bione) が、1939 年ノルウェーで出版された

この問題の英語版は「ガン Biopathy」で見つけ出される、
(最初のもは 1950'年に出版された)

「The Cancer Biopathy 癌の生物学」1973 年;と、「命の起源と、バイオン実験 The Bion Experiments」は 1979 年に、ファーラー、シュトラウス、ジルーによって両方とも出版されました

2. 「新しい顕微鏡」

3.

「ライフ顕微鏡で何が起こったのか？

" New Age Journal, Boston, Massachusetts, 197

((また、迫害の中で再版される)

そして、

ガストン・ネサンの裁判、NJ Kramer inc,Tiburon, California, 1991 年, の付録「A」として

4. 「Antoine Bechamp,1816-1908」L'Homme et le Savant が

本として出版された :

, Originalite et Fecondite de Son Oeuvre, Maloigne, Paris, 1982.

5.Delhoume, Leon, De Claude Bernard a d'Arsonval.

Lib Bailliere et fils, Paris,

1939 年, 595pp

6.

ビーチャプには 2 つの主なる研究がある

seer Les Microzymas, Blilliere, Paris, 1883, 992pages;

and Microzymas et Microbes, Editions Dentu, Paris, 1893, 346 pages.

7. From Le Sang et son deme element anatomique, Paris

1899 年に英訳された

「The Blood and the Third Anatomical Element 血液と第 3 の解剖学的要素」

by Montague R. Levenson MD., J

モンタギュー R. Levenson 博士著訳 (J) ohn Ouseley Limited, London 1912.

1980年において、アラン・カントウェル博士は、ワシントン D.C.の米国議会図書館の本のコレクションでも、米国の図書館でも見つけられないと知らせてきたと報告した

Veritas Press によってその後再版された、

GPO Box 1653, Bundaberg, QId 1988.

8. :

「隠れた殺人者 ガンサー Enderlein 教授の医学の革命 Hidden Killers: The Revolutionary Medical Discoveries of Professor Gunther Enderlein,」 (Erik Enby 博士著、Sheehan Communications, 1990年)

本は、raum&zeit (私書箱 1508) から得られるでしょう

Mount Vernon, Washington D.C. 98273;

Pb : 2064246025.

9. Bechamp のように Enderlein は、96才まで生きた

(彼は、1968年に死にました)、

1955年に最初に彼が出た雑誌 Akmon で彼の結論の多くは発表された？

10.

1947年、

von Brehmer の本「Siphonospira polymorpha」で、

この研究者は、注意しました

ガンは、血液の pH 数値を測ることによって

その最も初期の形で事前に診断することができる

そして、暗視野顕微鏡の下で大量の桿菌形の siphonospira が現れるのが、見える

raum&zeit, VolZ No.6, 1991.

52 ページから 59 で

(raum&zeit は、優れた隔月の雑誌です

published in the USA.

米国で発表された。

会費は、6冊で US\$75-です :

Dept. S.O., PO Box 1508, Mount Vernon, Washington 98273.

(206)424 6034 - Editor's Office

史上最も偉大な医療上の発見は隠蔽されてきたのか？

ロイヤル・レイモンド・ライフ・ジュニア

1888年 5月 16日 から- 1971年8月11日まで

1920年代に開発された画期的な顕微鏡が、細菌によるあらゆる病気を治す方法を明らかにするのだろうか？ 無線周波数を用いるこの技術が癌を阻止し、実際に治すことができるのだろうか？ この技術は恐れられているエイズウイルスを阻止し、ライム病、蝶形狼瘡、その他いわゆる「不治の病」が広がるのを押さえることが出来るだろうか？

天才的な科学者であるライフの物語は、魅力的なミステリーに例えることができる。彼はドイツのカール・ザイス光学会社で6年間訓練を受けた。彼はまたアメリカ政府のシークレットサービスでも働いている。彼は強力な顕微鏡を開発し、ウイルスを扱う有益な現象の発見をもたらした。

ライフはティムケン・ローラー・ベアリング会社のティムケン氏から経済的なサポートを得、サンディエゴに研究所をたてて、研究を行った。

ライフは癌のような病の治療法を見つけるためには、病の原因となっているウイルスを生きのまま見ることが重要だと考えた。1920年、ライフは非常に先進的な顕微鏡をいくつか設計した。これらは世界で最も強力な顕微鏡で、ウイルスを生きのまま観察することが出来る唯一のものであった。

ライフの顕微鏡は当時の他の顕微鏡を遥かにしのぐ解像度と拡大率を有していた。(今日の顕微鏡でさえしのぐかもしれない)ライフの「ユニバーサル・マイクロスコープ」(1930)の拡大率は31,000倍で、当

時の他の顕微鏡の拡大率は 3,000倍にすぎなかった。

ライフの「ユニバーサル・マイクロスコープ」

しかしライフは抜群の拡大率を持つ顕微鏡を作るだけでは 無色のウイルスを見るには不十分であることに気付いた。既存のアニリン染料で 無色のウイルスを着色することはうまく行かなかった。ウイルスはコロイド粒子を吸収するには小さすぎたからである。

ライフは光の異なる周波数によって特定の微生物が自身の共鳴する色で発光することに気付いた。そこで、彼は標本を光によって着色するのに必要な光の周波数(色)を特定する、プリズムを回転させるシステムを開発した。

この光の共鳴効果から推定し、彼は電磁波を用いて実験を行って、それぞれのウイルスにたいしてウイルスが分解・破壊される特定の共鳴周波数があることを発見した。彼は実験室で致死量の病原菌を実験動物に投与し、的確な周波数の電磁エネルギーをその動物に数分間あてることによって、一定数の命を救うことが出来た。したがって1930年より以前に、彼は最初の顕微鏡を作り、病原菌を電氣的に殺すことが出来ることを証明したのである。

この成功は あらゆる細菌による病は人間のであれ 動物のであれ、植物のであれ、即座に苦痛を伴うことなく根絶することができることを実証したのである。これは電気治療であり、次世紀のヘルステクノロジーである。人類史上これ以上重要な発見があるだろうか。病が直ることが実質上保証されたのである。(しかも非常に安価で)

この技術の原始的なやり方がある種の白血病の治療に使われている。患者の血液を体内から送り出し、紫外線にあてるのだ。残念なことこの AMA(American Medical Association)認可治療は血液細胞が作られる骨髄の治療は行わない。さらに苦痛を伴い、且つ高価な治療法である。ライフのやり方は体全体に内外からアクセスするものであった。ウイルスを感電死させ、不治の病を治すものであった。ライフの方法は全く体に無害で大変安かったのである。

ライフの成功は多くの医者や科学者の注目を集めた。バクテリア学者として有名なアーサー・ケンダル博士は「濾過性ウイルス」バクテリアの一部が隔離されても再生し続けるという「Kミディアム」を作るのに貢献した。

ミルバンク・ジョンソン博士はライフの仕事の強力な支持者であり、ライフとケンダルの栄誉を評して医療分野における30人以上もの著名な人々を集めて夕食会を開いた。

ジョンソン博士はクリニックを設立し、そこでライフは16人の末期ガン患者を周波数装置で治療した。3ヶ月後、5人の医者と アルビン・フォード博士(そのチームの病理学者)は 14名の患者が治癒したと発表した。

ジェームス・クッシュ博士はライフの周波数装置を22年間使い続けた。彼は脚の骨髄炎に悩まされたメキシコ人の少年のケースを報告している。彼は毎週骨を削る作業をしなければならず、しかもそれは多大な痛みを伴ったのだが、周波数装置の治療を開始して2週間後、その少年は完治し、再発することもなか

った。

ライフの発見は革命的であった。細菌による病の根絶を約束したのだ。そしてそこにこそ、彼の偉大な発見発明の隠蔽の理由がある。科学者としてのライバル意識や組織の傲慢、AMA(American Medical Association アメリカ医療協会)のワンマンなやり方、製薬会社の利益などが隠蔽に加担した。

しかしながら、1934-1939の間に、ライフの周波数装置を使って多くの医者が癌や他の病を治療した。が最後にはこうした医者達にライフの周波数装置による治療をやめるよう非常に強い圧力がかかり、装置は没収されてしまった。

1939年、ビーム・レイという新しくできた会社で、ライフの装置を商業ベースで売り出そうと 装置の改良するためにライフとともに働いていた一人の技術者が、会社を相手取って訴訟をおこした。この技術者はAMAから多大なバックアップを得ており、引き続く訴訟がライフを衰弱させ結果的にアルコール依存症と鬱症状においやった。こうした功利的な目的のために、ライフの意欲的な研究は終りを告げるのである。

2社の有名なジャーナルがライフの革命的な顕微鏡のことを記事にしている。一つはフランクリン・インスティテュート誌で、1944年2月に「新しい顕微鏡」という記事を発表している。もう一つはスミソニアン・インスティテュートで同じ記事を年間誌に出している。1944年 6月30日である。そして、1945年再販し、その記事はジョン・クレインの本で読むことができる。

1950年、ジョン・クレインはライフのパートナーとなり、ライフの周波数装置を改良するため、及びライフの業績を文書化するために働いた。1958年、彼は体にじかに装着できる小さな周波数装置を作った。医者達はこの低価格で小型の周波数装置を使い出して成果をあげた。またしても医学界の権力者が圧力や脅しをかけ、小型周波数装置を使うことをやめさせた。クレインの事務所は突然警察の捜索にあい、全ての装置とドキュメント、研究記録などは破棄された。まったくの令状なしの捜索であった。ライフの技術を調査するのに今日のこされている唯一の方法は個人的な研究や実験を通じてのみである。

-----引用終わり-----

ライフは画期的なその顕微鏡を使って血液などを観察した結果、次のような結論を得た。

▼細菌は病気を起こす原因ではなく、病気になった結果生じるものである。

- ▼細菌は、体の状態に応じて無害なものから致死性の病原菌に変化する。
- ▼その病原菌は、特定の周波数の光で即座に殺すことができる。
- ▼細菌は生命の基礎単位と考えられているが、実は細胞の中にもっと小さな細胞があり、その小さな細胞の中にさらに小さな細胞がある。このプロセスは顕微鏡の倍率を高くして見ると 16 段階まであり、マイクロ以下の大きさまで一段階ずつ続いている。

こうして小さな細胞が 16 段階に変化することを発見したライフはさらに研究を続け、ついにガンに関する全く新しい理論を打ち出した。それは「ガン細胞にある周波数を持つ光を当てると死滅する」というもので、数々の実験の結果それはガン、結核、腸チフス、ハンセン病、口蹄疫などで効果を示した。ちなみにそれを知ったサンディゴのアーサー・W・エール医学博士がライフの周波数装置を入手してガン患者の治療をしたところ、腫瘍が約十分の一にまで縮小し、再発することはなかった。このように 1920 年代には早くもライフがネサンと同じような成果をあげていた。